

# 無職転移 一魔王も一緒に転移しちゃった件一 第二部

かまぼこポテト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

以前投降した『無職転移 ー魔王も一緒に転移しちゃった件ー』の続きになります。

ある程度ストックが出来たので投稿していこうと思います。

仕事の都合上。数日おきの投稿になります。

前回同様拙い文章で大変恐縮ですが、温かい目で読んでいただければ幸いです。

前回を読んでいない方は、読んでからお読みいただければと思います。

### 登場作品

『転生したらスライムだった件』

『魔王学院の不適合者』

『無職転生』

『86ーエイティシックスー』

『ナイツ&マジック』

『落第騎士の英雄譚』

『プランダラ』

『真剣で私に恋しなさい!』

『グリザイア：ファントムトリガー』

『リコリス・リコイル』

『オーバーロード』

『幼女戦記』

『二度目の人生を異世界で』

少しだけ『異世界かるてつと』ネタがあります。

# 目次

新たな脅威	1
世界を超えて	10
合流	20
新たな仲間	31
足止め	42
ガジーエー大陸へ	55
適応者VS適応者	65
合流	77
衝突	90
六面世界へ	99
アスラ王国防衛戦	108
六面世界から異世界へ	116
死神の世界へ	126
会合	134
異なる次元の日本へ	144
魔国連邦防衛線	153
魔国連邦防衛線②	162
魔国連邦防衛線③	173
魔国連邦防衛線④	181
魔国連邦防衛線⑤	189
次の舞台へ	199
彼岸花	208
傲慢なる敵	217
怠惰の具現	225

敗走	389
ギアード連邦防衛戦⑫	383
ギアード連邦防衛戦⑪	376
ギアード連邦防衛戦⑩	369
ギアード連邦防衛戦⑨	364
ギアード連邦防衛戦⑧	357
ギアード連邦防衛戦⑦	349
ギアード連邦防衛戦⑥	343
ギアード連邦防衛戦⑤	337
ギアード連邦防衛戦④	329
ギアード連邦防衛戦③	322
ギアード連邦防衛戦②	315
ギアード連邦防衛戦	306
川神学園防衛戦④	298
川神学園防衛戦③	289
川神学園防衛戦②	281
川神学園防衛戦	273
捕縛	264
破剛	255
迎撃戦	246
混戦	237

## 新たな脅威

ルーデウス・グレイラットの戦いは、ひとまず終わった。  
ビヘイリル王国での決戦からしばらく。  
ヒトガミからの接触は今のところ無い。平和そのものである。  
しかし、休んでばかりではない。  
いずれ復活する魔神ラプラスを倒し、ヒトガミの世界へオルステッドを行かせる為の準備に奔走していた。  
多くの仲間を得て、ルーデウスは今日も任務に励む。

---

魔法都市シャリーア郊外

オルステッドコーポレーション事務所、社長室

そこでルーデウスとオルステッドは打ち合わせをしていた。

内容は今後の方針。他の七大列強を仲間に引き入れ、各国にコネクションを作る。

そうすることで、ラプラスが復活した時、迅速に行動を起こすことが出来る。

「では、今後もそのように進めます」

「ああ、任せる」

打ち合わせを終えてルーデウスは立ち上がる。

「俺はこの後、ザノバと魔導鎧の調整をして帰ります」

「ああ。ご苦労だった」

「では、失礼します」

一礼して社長室を後にした。

事務所を通り抜けて外に出る。

事務所から出ると、1人の少年が座っていた。

北神カールマン三世、アレクサンダー・ライバック。

黒髪にやや幼さを残した少年だ。

元七大列強の七位。ビヘイリル王国での決戦でルーデウスに破れ、その後、オルステッドと戦うが惨敗し軍門に下った。

現在、七大列強の七位はルーデウスである。が、アレクサンダーの強さは圧倒的だ。

「おや、ルーデウス様。打ち合わせは終わったのですか？」

「うん、これから魔導鎧の調整をして帰るよ」

「分かりました。お気をつけて」

そう言うのとペコリとアレクは頭を下げる。

「それじゃあ、また明日」

「はい、また明日！」

そうしてルーデウスは事務所を後にした。

---

シヤリーア住宅区の端、グレイラット邸

シルフィエット・グレイラットは厨房でリーリヤと夕食の準備をしていた。

「ルーシー、もうすぐご飯だからみんなを呼んできて」

「はい」

シルフィエットは料理をしながら、リビングにいる長女のルーシー・グレイラットを呼んだ。

ルーシーはシルフィエットとルーデウスの子供だ。

子供たちの中では一番年上のお姉さんだ。

「みんなに手を洗うように言うんだよ」

「わかった」

ルーシーは玄関へと走っていった。

庭ではエリス・グレイラットが長男のアルス・グレイラットに剣技を教えていた。

アルスはエリスとルーデウスの子供だ。

母親であるエリスゆずりの赤髪を揺らしながら、石剣を振っている。

「腰が引けてるわ。もっと腰を落として、重心を意識しなさい！」

「はいー」

エリスに指摘されながら特訓に励むアルス。

それを遠巻きに見ている1人と1匹。

ララ・グレイラットと聖獣レオだ。

ララはロキシシー・?・グレイラットとルーデウスの子供だ。

ロキシシーと同じ青髪で、普段は何を考えているのか分からない表情をしている。目元は母親ゆずりである。

そのララが跨っているのは聖獣レオ。

ルーデウスが家族を守るために召喚した守護魔獣である。大きさは2メートル程で、銀の毛並みを持つ犬のような姿をしている。

パートナー兼救世主のララによく懐いている。

「あらルーシー、どうしたの?」

エリスが玄関先に出てきたルーシーに気付く。

「白ママがもうすぐご飯だって」

「そう、分かったわ。アルス、今日はここまで。手を洗ってきなさい」  
「はい!」

アルスは姿勢を正すと一礼して石剣を片付けに行った。

「ララも、もうすぐご飯だよ。手を洗ってきて」

「んっ」

ルーシーに言われ、小さく頷くララ。レオに跨ったまま家の中に入ると、洗面所に向かった。

「ルーデウス、遅いわね」

エリスは腕を組んで仁王立ちをして、家の外の道の先を見ていた。

「ルデイでしたら、魔導鎧の調整をして帰るそうですよ。遅くなると行っていました」

帰宅したロキシシーがエリスに声をかける。

「それにしても遅いわね。…もしかして」

「なんです?」

「前みたいに、異世界に行ったとか?」

「でしたら、私たちも行くのでは?」

「必ずしも一緒に行くとは限らないわ」

「考えすぎですよ。そのうち『疲れた』なんて言いながら帰ってきてますよ」



「…そうね、嫌なことばかり考えても仕方ないわ！」  
そう言うのとエリスは踵を返し、ロキシシーと共に家の中に入っていた。

それから数分後、無事にルーデウスは帰ってきた。  
その日も、何事もなく平和な食卓を囲むのだった。

---

翌日、オルステッドコーポレーション事務所。

ルーデウスはその日、ルード傭兵団の規模拡大の相談の為、妹のアイシャ・グレイラットと共に来ていた。

ルード傭兵団はルーデウスを会長とした傭兵組織だ、護衛任務などを主としている。立ち上げて間もないが、王国騎士団や魔術ギルドといった大組織からも依頼が来るまでに成長した。

アイシャはそこで『顧問』の役職に身を置いており、傭兵団の舵取りなどを行っている。

ルード傭兵団は未来において、魔神ラプラスと戦う為の戦力として拡大している。

それには目的がある。

オルステッドは魔力が回復しない。

いや、厳密に言えば回復はする。しかし、常人の1,000倍遅い為、回復しないのと大差ないのだ。

魔神ラプラスとの戦いでオルステッドを消耗させることなくヒトガミの元へ行かせるには、魔神ラプラス及びその軍勢をオルステッド以外で倒す必要がある。

その為にルーデウスはオルステッドの名代として各国を巡り、協力者を増やしていた。

今後の方針が決まり、ルーデウスとアイシャは帰路に就いていた。  
「お兄ちゃん、私は傭兵団に顔を出してから帰るね」

並んで歩いていたアイシャがクルリとルーデウスの前にでて振り返る。  
向く。

「ああ。夕飯までには帰ってくるんだよ」

「わかった」

そう言うアイシヤは手を振りながら傭兵団の事務所へ向かっていった。

「さて、俺も帰るか」

アイシヤの姿が見えなくなると、ルーデウスは再び帰路に就いた。

「また忙しくなるな」

そう独り言を言いながら、家路を進むのだった。

---

その日、アイシヤは帰ってこなかった。

翌日、早朝。

ルーデウスはルード傭兵団の事務所に来ていた。

目的はアイシヤの行方だ。

事務所に入ると団員達が頭を下げて迎えた。

その中に良く知る2人がいた。

「あ、ボスニヤー！」

「ボス、おはようなの」

語尾に『ニヤ』と付くのは獣族のリニアーナ・デドルディア。かつて魔法大学でルーデウスの先輩だった女性だ。

ネコミミをピコピコさせている。

その隣には同じく獣族のプルセナ・アドルディア。垂れた犬耳の女性だ。リニアの幼馴染であり、同じく魔法大学でルーデウスの先輩だった。

現在2人はそれぞれ役職に就いている。ちなみにリニアはルード傭兵団の代表取締役。プルセナは副所長だ。

ルーデウスは2人の元へ歩いていく。

ルーデウスの様子から何かを察した2人は身構える。

「ボス、どうしたのニヤ？」

「昨日からアイシヤが帰ってないんだ。2人は何か知らないか？」

「顧問が帰ってニヤい？」

「本当なの？」

「ロキシールとエリスも探してるけど見つからないんだ」

「おーい、お前ら。昨日顧問を見たかニヤ？」

リニアが事務所内の団員に聞こえるように大声で訊く。

「いえ、昨日は見ていません」

「自分もです」

「私も」

その場にいる団員はアイシヤの所在を知らなかった。

「ボス。昨日、顧問は事務所に来てないと思うニヤ」

「私とリニアは昨日、昼から晩まで事務所にいたの。でも顧問は昨日は来なかったの」

「昨日、オルステッド様の事務所からの帰宅途中で分かれてそれつきりなんだ」

「傭兵団全員で搜索するニヤ」

「私たちも探すの」

「いや、2人は事務所に居てくれ。もしアイシヤが来たら家まで送ってほしい」

「分かったニヤ」

「了解なの」

ルーデウスはルード傭兵団の事務所を後にした。

---

エリスは町の裏通りを搜索していた。

この町で人攫い。ましてやルード傭兵団顧問のアイシヤを攫うということが何を意味するか、分からない裏の者はいない。

だからこそ、エリスは不思議でならなかった。

アイシヤは賢い、何の痕跡も残さず失踪するとは思えなかった。

ちなみにシルフィは入れ違いでアイシヤが帰ってきた時の為に家で待機している。

しばらく裏通りを進んでいくと、異様な光景が広がっていた。

人が数名倒れていた。

しかもルード傭兵団の団員だった。

腕を、足を、頭を消し飛ばされたような殺され方だ。もはや原形を留めているとは言えない状態だった。

唯一分かるのは、ルード傭兵団の制服を着用しているということだ。

その場に、あるモノが落ちていた。

髪留めだ、かつてルーデウスがエリス達と魔大陸を旅していた時にアイシャにあげた鉢金を加工して作られたものだ。

無論、持ち主はアイシャ。

「ここで攫われたのね…」

エリスは髪留めを拾い上げると、周囲を見渡す。

アイシャの髪留めが落ちているところにルード傭兵団の団員の死体。

「もしかして…」

既に死体の団員達は、攫われそうなアイシャを助けようとして返り討ちにあつたのではないか？

エリスはそう結論を出した。

(この団員の殺され方、普通じゃないわね)

改めて死体を見ると、それこそ疑問が尽きない。

体を抉り取られるように殺されている。どの流派の剣技でもない、まして魔法とも思えない。

そこで気が付く。

静かだ、異様に。

おかしいとエリスは直感する。狂剣王の異名で呼ばれるエリスに喧嘩を売るバカは少ない。しかし、今エリスのいる場所はそもそも人の気配が無いのだ。

「二度、ルーデウスに相談し——」

「だあれだ、女あ？」

突如背後に気配を感じて飛び退く。

しかし誰もいない。いや、背後に気配を感じる。

「逃げえるなよお、オイラと遊ぼうぜえ」

また背後から気配を感じる。エリスは剣を抜き放ち背後を振り向きざまに一閃した。

しかし、剣は折られた。

いや、正確に言えば“抉り取られた”のだ。

(どうやって!?)

影が架かって姿がよく見えないが、確かにいる。

「——もういいいかなあ」

次の瞬間、エリスの腹部に穴が空いていた。

「…え、…うそ?」

手から剣が滑り落ち、カシヤンと音を立てて地面で跳ねた。

そしてエリスも、膝から崩れ落ちる。

口から鮮血が吹き出し。眼光が光を失っていく。両腕はダラリと垂れ下がった。

「もおお死ぬなああ、まあずは1人めえ」

声の主は、エリスがもう立ち上がれないと判断して姿を現した。

エリスの眼前の空間が歪み、ボロボロな布を縫い合わせたコートを羽織った骸骨が現れた。

「こおいつの剣はあ置いておおこうう。いいい餌あになあるだろおう」

地面に落ちているエリスの剣を一瞥し、エリスに向き直る。

「おおまえはあ、オイラの“世界”につれてえいくぜえ」

骸骨の腕がエリスの髪に伸ばされる。エリスに抵抗する体力も気力も残されていない。

薄汚れた白骨の手が、エリスの深紅の髪を掴んだ。

「——そこまでにしておけ」

声がして骸骨は振り返る。

振り返った先に1人の少年が立っていた。

黒髪に純白の制服を靡かせている。

「その手をどけろ」

「なあんだおまあえ。だあれだあ？」

「たかが骨に名乗る名はないな」

「なあんだとお!？」

「そいつは知り合いでな、手出しはせぬことだ」

「うるさあい！ 名乗らあないなあああ、死いねええ！」

そう言うのと骸骨はエリスから手を離し、少年へ襲い掛かった。

「ふむ、そこまで名乗ってほしいならしてやろう」

少年は指先を漆黒に染めると、地を蹴って迎え撃つ。

「暴虐の魔王、アノス・ヴォルデイゴードだ」

アノスの右手が、骸骨の頭蓋を掴んでいた。

## 世界を超えて

「なああにいい!？」

骸骨は、頭蓋を掴まれた事実を理解できずにいた。

「ようやく離れたか。どうする、このまま続けるか?」

「暴虐の魔王ってえ言ったかあ?」

「ああ」

「なあぜ、おまあえがあこの世え界にい?」

「お前たちの仲間を追って来たら辿り着いたのだ」

「ああいつらあ、無う能うめええ」

「お前たちには聞きたい事がある。このまま来てもらおうぞ」

アノスは頭蓋を持ち上げると『魔黒雷帝―ジラスド―』を骸骨に浴びせる。

黒き雷撃が骸骨を包む。

「ぐう、ぐうおお!」

骸骨は苦悶の表情を浮かべながらも耐える。

「おまあええのお、思いい通りにいはあさせえん!」

骸骨の体が歪み、消えていった。

「別の次元に住む異形、といったところか」

アノスはエリスに向き直る、既にエリスの体力は限界に近い。

「効くかは分からぬが」

アノスはエリスに掌を向けて魔法陣を展開する。

『『治癒―エント―』』

エリスに治癒魔法を掛けると、みるみる傷が治っていく。空いた腹部も塞がって元通りになった。

傷が回復すると、エリスが立ち上がる。

「ありがとう、アノス」

「なに、礼には及ばぬ。それより、あの骸骨はなんだ?」

「わからないわ。あんな種族はこの世界にはいないし」

「この世界の者でないとするなら、異世界の敵と見るべきだろう」

「一度、家に来て。ルーデウス達も交えて話しましょう」

「そうだな。案内してくれ」

エリスに案内され、アノスはグレイラット邸へ向かった。

ルーデウス邸、リビング。

「アノスさん、エリスを助けてくれてありがとうございます」

食卓に手をつけてルーデウスが頭を下げる。向かいにはアノスが座っている。

「共に戦った仲だ、礼には及ばぬ。それに俺も奴らには少々因縁があつたからな」

「アノスは連中を知ってる様子だったけど、何かあつたの？」

エリスがアノスに訊ねる。アノスを出されたお茶を一口飲むとエリスに向き直る。

「こちらの世界にも来てな。追いついて来た」

「アノスさん。敵はもしかして…」

「ああ。おそらく『異世界』の者で間違いないだろう」

「魔王ローズバルト、ですか？」

「間違いないだろうな。奴は前の戦いで『決着の時はいずれ来る』と言っていた。その時が来たのだろう」

「今度は攻めてきた、つてことでしょうか？」

「まだ偵察の段階だろうが、今後大軍で来る可能性はあるだろうな」

アノスの言葉を聞き、ルーデウスの表情が曇る。

前回の戦いでは『魔力が無限』という恩恵がある状況での戦いだつた。

故にルーデウスも、オルステッドも魔力切れを気にせず戦うことが出来た。

しかしルーデウスの世界に侵攻して来るとなれば、こちらが不利になる。

ビハイリル王国での決戦でオルステッドは魔力を消耗した。

ヒトガミとの最終決戦の為に魔力を温存しなければいけない状況では、オルステッドを戦力としてカウント出来ない。オルステッドを



戦闘に参加させる訳にはいかないからだ。

それと、攫われたアイシャの安否も気になる。

「アノスさん。明日、オルステッド様も交えて話し合しましょう」  
「かまわんぞ」

「明日の早朝に出ますので、今夜は我が家で休んでください」

「世話をかけるな」

「気にしないでください」

そう言うルーデウスの表情は曇ったままだった。

---

翌日、ルーデウスとアノスはオルステッドコーポレーション事務所に向かっていった。

エリス達はアイシャの捜索を続けている。

『アイシャのことは心配いらないわ』と言ってルーデウスを送り出した。

「アノスさん、もう少しです」

「ああ」

しばらく歩いていると事務所に着いた。

事務所の入口前にアレクサンダーが座っているが、ルーデウスの姿を見て立ち上がる。

「おはようございます、ルーデウス様」

「おはよう、アレク」

「そちらの方は？」

アレクサンダーはルーデウスの隣のアノスを見る。

「味方だよ。オルステッド様も知っている人だ。別の世界の魔王様だな」

「異世界で共に戦ったという方ですか？」

「そうだ」

「わかりました。オルステッド様は社長室におられます」

「わかった」

そう言うのと2人は事務所に入っていった。

「オルステッド様、入ります」

「ああ」

社長室の扉の向こうから返事を受け、ルーデウスは扉を開ける。室内には机に向かつて書類を整理しているオルステッドがいた。

室内に入ると、オルステッドが顔を上げる。相変わらず眼光は鋭いが、アノスに気づくと驚きに変わる。

「久しぶりだな、オルステッド」

「どうやってこつちに来た？」

「まず、現状の報告からさせてください」

ルーデウスが割って入り、昨日あったことの説明をはじめた。

「——異世界からの刺客か」

「はい、アイシャもその刺客に攫われたとみて間違いないかと」

「遂に来たか…」

「と、言いますと。オルステッド様は敵の侵攻を予見していたということですか？」

ルーデウスが昨日の事を書類にまとめながら訊ねる。オルステッドは少し考える素振りを見せてから口を開いた。

「…前の戦いで決着がついていない以上、その可能性も考えていた。今回のループはイレギュラーばかりだからな」

そう、オルステッドは世界をループしている。ヒトガミを倒すまで終わらないループ、それがオルステッドに掛けられた龍神の秘術なのだ。

しかし、今回のループではルーデウスがいる。本来の歴史では存在しないはずのルーデウスの存在によって多くのイレギュラーが発生している。

故に、可能性として、魔王ローズバルト軍が侵攻して来る可能性も考えていた。

「しかし、オルステッド様はビヘイリル王国での戦いで魔力を消耗しています。前回のような異世界での戦いなら、問題無いでしょうが。」

こちらの世界での戦闘となると、今以上の消耗は抑えるべきです」  
「だが、こちらから異世界に行く手段が無いとなると、迎え撃つしか無いだろう」

その言葉でルーデウスは黙る。前は偶然拾った石が原因で異世界に飛ばされた。

今回も同じ状況が起こると思えない。

すると、それまで黙っていたアノスが口を開いた。

「敵はこちらの世界に来ることが出来る。なら、こちらが行けない道理は無いのではないか？」

「しかし、方法が思いつきません。移動手段が無いとなると、こちらも打つ手はありません」

「方法が無いのなら、作り出せばいい」

「どうやって？」

オルステッドが問う。

「昨日エリスと戦った敵は、存在が歪むように撤退していった。俺たちの世界に来た刺客も同じように撤退した。おそらく、何かしらの別世界、別次元から来ているのであろう」

アノスは説明しながら、ルーデウスから紙を1枚貰って書き記していく。  
いく。

「なら、こちらも敵と同じ次元に行けばいいだけだ。その手段だが、1つ心当たりがある」

「なんです？」

「俺たちの世界に、『転移—ガトム—』という魔法がある。それを応用する」

「敵の懐に飛び込む、ということですか？」

「そうだ、しかし3人だけという訳にもいくまい。一度、俺たちの世界にも寄る必要があるな」

「その魔法は、いつ使えるようになる？」

オルステッドが立ち上がり、アノスの魔眼を真つすぐ見据える。

「大体は完成している。3日もあれば完成するだろう」

「では、3日後に出発する方向で。俺は各国に万が一の為の準備をす

るように伝えます」

「では3日後の早朝、この場所に集合だ」

「分かりました」

「ああ」

ルーデウスとアノスは頷くと、社長室を後にした。

3日後、早朝

オルステッドコーポレーション事務所、入口前。

そこにルーデウスとアノス、それとエリスが到着する。

エリスは刺客に敗けたことが悔しく、今回の遠征に同行すると言いつ張って聞かなかった。

ルーデウスは悩んだが、『自分の命を最優先にする』という約束で同行を許可したのだ。

ロキシーとシルフィは家に残った。

ローズバルト軍が侵攻して来る可能性がある以上、家を空ける訳にはいかなかった。

知り合いにも家族を任せて来たので、問題は無いだろうと自分に言い聞かせた。

事務所には既に、オルステッドとアレクサンダーがいた。

アレクサンダーを連れて行くべきか悩んだが、先日の3人の会話をコツソリ聞いていたアレクサンダーは断固として『行く』と言って聞かなかったのだ。

他にも連れて行こうか悩んだ人物はいたが、敵の侵攻に備えてなるべく戦力は残す方向になった。

各国に戦闘準備と警戒態勢を敷くように話し済みだ

ルーデウス、オルステッド、エリス、アレクサンダー。

ルーデウスの世界からは4人が行くことになった。

「では、出発だ」

アノスが魔法陣を展開する。

地面に円状の魔法陣が出現し、5人がその枠内に入る。

「まずは俺たちの世界に行く」

「わかりました」

ルーデウスは頷くと、エリスの手を強く握った。

そして魔法陣が光を放ち、5人の姿が掻き消えた。

魔族の国デイルヘイド

首都ミッドヘイズ、魔王学院デルゾゲード。

魔王学園の正門付近に魔法陣が展開し、そこからアノス達が現れた。

「さて、まずは教室に行くでしょう。サーシャたちもいるだろうからな」

「アノスさん、俺たち部外者が入って大丈夫なんですか?」

「別に構わぬ、『短期留学生』とでも名乗ればいい」

「はあ…、わかりました」

アノスを戦闘に一行は魔王学院に入ってしまった。

教室に入ると、クラスメートがざわついた。

それもそのはずだ、見慣れない服装の人物が4人も入ってきたのだから。

クラスメート達の中に、『別の意味で』驚いている者が数人いた。

サーシャ、ミーシャ、レイ、ミサ。

4人は『なんで!?!』みたいな驚愕の表情をしている。

空いた席にルーデウス達を座らせると、アノスも自分の席に着く。

すかさずサーシャが食い気味に訊いてくる。

「なんでルーデウス達がいるのよ!?! とうか、どこ行ってたのよ!?!」

「先日、襲撃してきた敵を追っていたらルーデウス達の世界に辿り着いてな。今度はルーデウス達を連れて戻ってきた」

「別の世界に行ったって事かい? 世界同士が繋がったってこと?」

元勇者のレイ・グランズドリイが振り返って問う。

「敵はルーデウス達の世界にも侵攻してきた。恐らくはリムル達の世

界も襲撃されているだろう」

「どうするんですか？」

レイの隣に座っている偽の魔王であるミサ・レグリアはルーデウス達を見ながら訊ねる。

「行くしかあるまい、その為の魔法は完成した」

「いつ行く？」

左隣のミーシャが覗き込んでくる。

「各方面に警戒態勢を伝える。出発は明日だな」

「そんな急で大丈夫ですか？」

振り返るとルーデウス達が立っていた。話を聞いていたのだ。

「問題あるまい。それに、急いだ方が良さそうだ」

その後、エールドメードが来てからルーデウス達の自己紹介をする  
と、いつも通りに授業を受けた。

---

翌日、アノスは両親に見送られて家を出発した。

今回のメンバーはアノス、ミーシャ、サーシャ、レイ、ミサ、シンの6人だ。

前回の戦いを経験しているエールドメードは残って警戒に任たることとなった。

魔王学園正門前。

早朝の為、生徒はまだ登校していない。

『創造建築―アイビス―』

アノスが魔法陣を展開する。瞬く間に横長の家のような城艦が現れる。

「これで行くの？」

サーシャが見渡しながら問う。

「ああ、全員乗っても余裕があるぞ」

乗り込みながらアノスは振り返って言う。

「家、ですよね？」

「家だね」

ミサとレイも苦笑しながら乗り込む。それにシン、サーシャとミーシャも続き、ルーデウス達も乗り込もうとする。

「――俺、邪魔、する。行かせない」

声が響き、ルーデウスは声の方に顔を向ける。そこには、2メートルはあろう巨体の男が立っていた。

頬はパンパンに膨れ、腹ははち切れんばかりに出っ張っている。しかし、服装は異様だった。上半身は裸だが、下半身は。

「――ブーメラン、パンツ？」

ルーデウスは意味が分からず疑問形で声を出した。そう、漆黒のブーメランパンツだった。

「ふむ、何者だ？」

アノスが城艦から出てくる。

男はアノスを見ると、思いつきり鼻から息を出す。

「俺、ブギョル。お前たち、邪魔、する」

「ローズバルトの手の者か？」

今度はオルステッドが問う。眼光鋭いオルステッドに睨まれても、ブギョルは怯まない。

「そうだ。魔王様、お前たち、殺す、命令した」

「なら敵つてことですよね？」

アレクサンダーが両手剣を構えて前に出る。

エリスもルーデウスの前のように剣を抜刀姿勢で構える。

「俺、斬れない。俺、硬い、強い」

「なら試してあげるわ！」

エリスが斬りかかる。

しかし、ブギョルは両掌を自身の顔の前でパンツと音が出るように合わせる。

お構いなしにエリスは斬撃を繰り出すが、その剣先は弾かれる。

――まるで、〃見えない壁〃に阻まれるように。

エリスは飛び退いて距離を離す。

入れ替わるようにアレクサンダーが斬りかかったが、先程と同じよ

うに弾かれた。

「——何を、してえいるう?」

また声が響く。

エリスが眼光を光らせて身構える。

ブギョルの横に骸骨が現れた。ルーデウス達の世界でエリスを襲撃した敵だ。

「俺、こいつら、殺す」

「まあ待てえ、一時撤退だあ」

骸骨がブギョルの肩をポンポンと叩く。

「何故だ。まだ、殺す、出来てない」

「イレエギユウラーがあ発生いいしたあ。帰えるぞおお。命い令だあ!」

「:俺、分かった」

そう言いブギョルと骸骨は踵を返し、異次元に消えようとする。

「させると思ったか?」

アノスが右手を蒼白く輝かせて空を掴んでいる。

いや、正確には骸骨の頭蓋を掴んでいる。『森羅万掌—イ・グネアス—』によって空間を超えて骸骨を掴んでいる。

骸骨はブギョルと供に異次元に逃げようとするが、アノスは逃がすまいと右手に力を込める。

骸骨はそのまま異次元に入っていった。アノス達を乗せた城艦と供に。



## 合流

リムル達は魔国連邦を出発して異次元を進んでいた。アノス達の世界と同様にリムルの世界も襲撃を受けた。幸いなことに死傷者は出なかったが、リムルは反撃を決意した。

リムルのアルティメットスキル『智慧之王―ラファエル―』が敵が撤退する時の移動手段を解析し、少数精鋭で乗り込もうというのだ。ちなみにリムルの他に、シオンとランガも来ている。

魔国連邦の軍事を統括するベニマルや最高戦力の1人であるディアブロ達は防衛の為に残っている。

青く、白く輝く空間を飛ぶように移動していく。

周囲に目をやると、白濁としたシャボン玉が無数に浮いている。

そのシャボン玉1つ1つに、その世界のものと思われる風景が映っている。

1つには、転生前の日本のような街。そこを駆ける銃を持った少女。

1つには、荒廃した戦場で銀色の機械を駆逐する白き四足の機械。

1つには、戦場で、閃光の如き速度で敵を惨殺する仮面の男。

1つには、拳1つで挑戦者を倒す女子高生の登校風景。

それ以外にも、いろいろな風景を内包したシャボン玉がリムル達をすり抜けていく。

「リムル様、あれは何でしょう?」

シオンが前方を指さす。前方には長い家のような物体があった。

「家、だよな?」

「家、ですね」

リムル達は静かに近づく。

家のような物体には窓があった。その窓から中を覗くと、見知った顔ぶれがあった。

すると側面のドアらしきものが開き、1人の男が顔を出す。

「リムルさん? リムルさんですよね!」

鼠色のローブを羽織った青年、ルーデウス・グレイラットだった。

「やっぱりルーデウスか!? なんでここにいるんだ?」

「多分リムルさん達と同じですよ。まずは入ってください、みんないますよ」

ルーデウスに導かれ、リムル達は城艦に乗り込む。

「久しぶりだな、リムル」

「よおアノス。久しぶり〜」

ハイタッチを交わし、リムル達は握手をする。

「どうやってこの次元に入ったんだ?」

「俺の世界に来た敵に『案内』してもらった。まあ、先程はぐれたがな」

「アノス達の世界にも来たのか?」

「ああ、はつきりローズバルトの名を出していた。そちらもか?」

「ああ、敵の移動手段を解析して異次元に飛び込んだ。だけど、敵には逃げられてしまった」

「おそらく敵がいるのは前回と同じ世界だろう。周りに浮かぶ世界から、その世界を見つけ出せばよいだけだ」

「そうだな。ところでルーデウス」

リムルがルーデウスとアレクサンダーを交互に見る。

「何でしょう?」

「前回いなかった人もいるけど、ルーデウスの仲間か?」

「ああ、アレクのことですか? ええ、俺たちの仲間です」

「アレクっていうのか、よろしく。俺はリムルⅡテンペスト」

リムルが右手をアレクサンダーに差し出すが、アレクサンダーの右手を見て、左手に変える。

「北神カールマン三世、アレクサンダー・ライバックです。お話はオルステッド様とルーデウス様からお聞きしています、こちらこそよろしくお願いします」

そう言うときアレクサンダーはリムルの手を両手でしっかりと握った。

「北神ってことは、七大列強なのか?」

握手を解きながらリムルが訊ねる。するとアレクサンダーは苦笑しながら口を開く。

「いえ、元です。僕は戦いでルーデウス様に敗れました。現在はルーデウス様が七大列強の第七位です」

「そうなのか？」

リムルがルーデウスを見る。ルーデウスも苦笑している。

「いろいろありまして」

「でも強いんだよな？ 頼りにさせてもらおうよ！」

「はい！ よろしくお願いします」

アレクサンダーの表情が明るく晴れたのだった。

「あれじゃない？」

窓の外を見ていたエリスがシャボン玉の1つを指さす。

そのシャボン玉には、以前と同じように荒廃した大陸『魔道』が映っていた。

「間違いあるまい」

アノスも確認して、城艦を操作する。

アノスはイ・グネアスで異世界を引き寄せ、無理やり城艦ごと侵入するのだった。

---

異世界、未踏大陸。

真・魔王城、魔王の間。

魔王ローズバルトは玉座に座り、頬杖を突いて目の前の配下を見下ろしていた。

眼下には骸骨とブギョル、それと漆黒のローブとヘルメットを身に着けた女性が跪いている。

「…偵察の報告は分かった。それで、敵の可能性の奔流への侵入を許したと？」

「…申し訳ありません」

女性が頭を下げる。それに合わせて骸骨とブギョルも頭を下げた。

ローズバルトは視線を鋭くして3人を見る。

「奴らは必ず、無数の可能世界の中から我等の世界を見つけ出す。そうならば、侵攻どころでは無くなるぞ？」

「だから、俺、殺す、する」

「ブギョル、お前は強い。それは間違いない。だが奴らをこのままにしておけば、戦力を削られることは必至」

そう言うのとローズバルトは立ち上がり、3人を見渡しして命じる。

「こちらに呼び寄せた『適応者』もろとも奴らを殺せ！」

「『必ずや』」

3人は跪いたまま、各々の能力で退室した。

「——ここまで来たのだ。ようやく、ここまで」

ローズバルトは右手を天にかざす。すると、頭上に無数の色とりどりの水晶玉が現れた。

「ここは取った、ここも取った。ここと、ここも——」

ローズバルトは水晶玉を一つずつ指さしていく。

そう、その水晶玉はローズバルトが征服してきた世界のなれの果てだった。

「すべて手に入れる！」

ローズバルトは右手を天に翳し、強く握った。

「ここは、どこでしょうか？」

ルーデウス達は港にいた。

といっても、何処かさっぱりわからない。

「ここはおそらく『クーマン港』だ」

オルステッドが周囲を見渡しながら言う。

「私も前回ここに来ています。間違いないでしょう」

シンも同意する。

「じゃあ、他の大陸に行く船に乗ろうぜ」

リムルが船着き場に向けて歩き出す。一行もそれに続く。

「ここから出る船に乗りたいたんだけど、どうやったら乗れるんだ？」

リムルが船着き場で、受付の女性に渡航方法を確認している間に、一同は地図や食料といった物資を準備していた。

自分たちの世界の通貨が使用できることは前回で分かっている。その為にルーデウスはオルステッドに相談して多めにアスラ金貨を持ってきていた。

それはアノス達も同様であった。

「行先はどちらまで？」

受付嬢が訊いてくる。

「未踏大陸に行きたいんだけど、船って出てるの？」

「未踏大陸までは行けません。この先の『ヨクゼン大陸』と、さらに先の『ガジーエー大陸』までは渡航船が出ています」

「わかった。じゃあ、ガジーエー大陸まで乗せてほしい」

「では1人30パシルです」

「これで足りるかな？」

そう言ってリムルは自分の世界の金貨を1枚出す。

「…何人分、必要でしょうか？」

「俺を入れて12人かな」

「か、かしこまりました…」

受付嬢は金貨を受け取るとこの世界の通貨を数枚お釣りとして返してきた。

ちなみにリムルが出した金貨は10万円の価値がある。

この世界の1ピシルはリムルの世界での1000円に相当する。つまり30ピシルは3,000円、12人でも36,000円なのだ。

渡航費用に大金を出されて受付嬢は引きつった表情を浮かべてしまった。

「ではこちらが12人分の渡航札です」

そうして12枚を2種類。合計24枚の札を渡された。

「こちらの赤い札はヨクゼン大陸までの渡航札となります。青い札はガジーエー大陸までの渡航札です。間違えないようお願いします」

「これは乗るときに見せるのか？」

「そうです」

「わかった、ありがとう」

「渡航戦は30分後から搭乗出来ます。それまでお待ちください」

「わかった。ゆっくり待たせてもらうよ」

「よい旅を」

受付嬢に見送られて、リムルはアノス達の元へ戻っていった。

「どうでした?」

食料をバックパックに詰め込みながらルーデウスが訊ねる。

「30分後から搭乗出来るつてき。赤いのがヨクゼン大陸まで、青いのがガジーエー大陸まで行くチケットだそうだ」

「まだ戻ってない方達もいますから、しばらくゆっくりしましょうか?」

「そうだな」

現在この場にいるのはリムル、シオン、ルーデウス、オルステッド、アノスの5人だった。

他の者たちは、それぞれ買出しに出ている。

「多めに金貨を持ってきてよかったな、シオン」

「仰る通りですね、前回の経験が役に立ちました」

「敵は、俺たちが来ていることを把握しているだろうな」

アノスが地図を見ながら口を開く。

「ああ、間違いないだろうな。前回は居なかった敵ばかりだし、各大陸で情報収集をすべきじゃないか?」

リムルは近くの売店でルーデウスが買ってきた飲み物を飲みながら言う。

「俺たちが来ている隙に侵攻してくる可能性もありますよね?」

ルーデウスがスクロールを確認しながら訊く。

「今のところは大丈夫だろう」

口を開いたのはオルステッドだ。

「こちらの世界すべてを侵攻する余裕は無いだろう。前回の戦いで戦力は削っている、こちらが来た以上は戦力を外に向ける余裕は無いだろう」

「オルステッドさんの言う通りだと思う」

リムルが同意する。アノスは何も言わず、姿勢で同意を示す。

「それにしてもエリス達遅いですね、探して来ましょうか」

「そのうち戻って来るって。入れ違いになってもいけないし、おとなしく待つてようぜ」

立ち上がるうとするルーデウスをリムルが止める。

それからしばらくして全員が戻ってきて、無事に渡航船に乗ることが出来た。

「うう、ぎもちわるい…」

船の甲板でグロッキーになっているのはエリスだ。渡航船は思いのほか揺れた。

ルーデウスが介抱したおかげで、なんとかエリスは吐くことなくヨクゼン大陸の土を踏むことが出来た。

---

ヨクゼン大陸、カラワヤ港。

渡航船から降り立ったルーデウス達の視界に入ったのは金の装飾で彩られた建物が並ぶ街だった。

「綺麗な建物ばかりですねー」

ミサが街並みを見ながら感嘆の声を漏らす。

「では、情報収集をしましょう。2時間後にココに集合で」

ルーデウスとエリス、オルステッドとアレクサンダー、アノスとサーシャとミーシャ、シンとミサとレイ、リムルとシオンとランガの5チームに分かれて解散した。

ルーデウスとエリスは街の市場に向かった、多くの人が入り出す市場でなら情報が得られると思ったからだ。

「ねえルーデウス。あれ美味しそうよ、食べましょう！」

エリスが屋台を指さす。その屋台では、一口サイズの肉を油で揚げで、カップに数個入れて販売されていた。

(青いコンビニで売られているヤツに似てるような…?)

「ね、ね！ 食べましょう！」

「そうだね。あの、1つください」

「あいよ！」

気前よく返事をする、店主は揚げ肉が数個入ったカップの1つを

手渡してきた。

見れば見るほど青いコンビニのアレに見える。

「いただきます!」

エリスが待ちきれず1つ食べる。

「おいしい!」

「嬢ちゃん、ありがとよ。品物を変えてみて良かったぜ!」

「以前は違う料理だったんですか?」

1つ口に頬張りながらルーデウスが訊ねる。やはり青いコンビニのアレだった。

「この前、変わった服装の嬢ちゃんが教えてくれたんだ。なんでも、その嬢ちゃんの仲間の好物とかだよ。試しに作ってみたら美味しいのなの、そんで売ってみたら売れるのなのってな!」

「その方達は今どちらに?」

「南東の『カトルツ共和国』に行くって言ってたな、情報が欲しいからって」

「わかりました、ありがとうございます」

「いいってことよ!」

「ところで」

「ん?」

「もう3個、いただけますか?」

そう言ったルーデウスの手にあるカップはとうに空だった。

---

路地裏でアノス達は情報収集をしていた。

ローズバルトの軍勢に関しての情報で特に新しい情報は無かった。

『魔王ローズバルトが南の未踏大陸を征服した』とか。

『魔王ローズバルトは軍勢をもつて各国に圧力を掛けている』など、既に判明している情報ばかりだった。

だが1つ、気になる情報があった。

「――拳1つで敵を薙ぎ倒す少女?」

サーシャが路地裏で座り込んでいる浮浪者から話を聞いていた。



なんでもこの浮浪者は、その少女に戦いを挑んだが瞬殺されて、金を根こそぎ持っていかれたそうだ。

哀れでならなかった。

「変わった服装の少女だった。オレは力には多少自身があったが、全く歯が立たなかった…」

「変わった服装ってのが気になるわね…」

「俺たちと同じ境遇の者が他にもいるのかもしれない」

アノスは金貨を1枚、浮浪者の足元に置いた。

「情報料だ」

「い、いいのかい!」

「構わぬ」

そう言うとアノスは立ち上がり、その場を離れた。

「その少女を探す?」

横からサーシャが覗き込んでくる。

「情報収集を続けていれば会えるだろう」

「このまま?」

ミーシャが首を傾げる。アノスは口元に笑みを浮かべて答える。

「会えぬなら、そういう運命なのだろう。その時がくれば自然と会えるだろう」

「——ちよつといいか?」

声を掛けられてアノスは振り向く。

視線の先には1人の少女が立っていた。長い黒髪を靡かせ、前髪は×の字にクロスしている。

「何の用だ?」

『『魔王』を探してるんだが、知らないか?』

「どの魔王を指すかによると思うが、魔王という括りで見ると俺は魔王だ」

「お前、強いよな?」

「少なくとも弱くはないぞ?」

「ならお前かもな、覚悟しろよ!」

そう言う少女は拳を振りかぶり突撃してきた。

アノスは繰り出された拳を躲すが、2撃目、3撃目と拳が繰り出される。

「初対面で随分な挨拶だな」

「おとなしく私達を元の世界に戻せ！」

「ほう、お前たちも飛ばされて来たクチか」

その一言で少女が攻撃を止める。

「…どういうことだ？」

「なに、こちらも似たような境遇だというだけだ」

「魔王は別にいるのか？」

「先程言っただろう。俺達もその魔王に用がある。どうだ、一緒に来るか？」

アノスの言葉を受け、少女は少し思案する。

「いや、遠慮するよ。私達の軍司に確認しないといけないし」

「軍司？」

「ああ。もし供に戦うなら、また会えるだろう。じゃあな！」

そう言う少女は地面を蹴って飛び立った。

「騒がしい奴だったな」

「でも、わたし達以外にもこの世界に転移してる人がいるってことよね？」

「一度戻る？」

アノスは思案すると口を開いた。

「そうだな。そろそろ時間だ、一度合流しよう」

アノス達は来た道に戻っていった。

全員合流して今後の会議をすることになった。

アノスからは謎の少女に襲撃されたが、誤解だったという話。

ルーデウスからは異世界人と思われる一団が、南東のカトルツ共和国に向かったという情報が発表された。

他の者達からも情報が上がった。

魔王ローズバルトは復活しており、軍備を増強しているとのこと。

「まずは、カトルツ共和国に向かおうと思う。俺達と同じ境遇の者がいるなら、味方にした方がいいと思う」

リムルが全員を見渡して言う。それに真つ先に賛同したのはルーデウスだ。

「賛成です。戦力は大いに越したことはないと思います」

「ルーデウスの言う通り、カトルツ共和国に向かうべきじゃないかな？」

新たにレイが賛同し、反対意見は出なかった。

「決まりだ。明日の早朝、出発しよう」

一行の行先は、カトルツ共和国に決まった。

## 新たな仲間

ヨクゼン大陸で唯一の国家、カトルツ共和国。

一行はそこに向かっていった。目的はカトルツ共和国に向かった異世界人を追う為である。

森林を切り拓いて出来た街道を歩いている。

「僕たちと同じ境遇の人達がどれだけ転移しているのでしょうか」

ルーデウスは地図でカトルツ共和国までの道のりを調べながら言う。

「アノスを襲撃した少女が別の人物だとすれば。2つの世界が他にあらってことだな」

リムルが頭の後ろで手を組みながら歩いている。

「ここまでできたら、ガ○ダムみたいな巨大ロボットとかがある世界から来ないかな」

「夢がありますが、難しいと思いますよ?」

「だよな。…ところでルーデウス」

「何でしょう?」

「エリスは何を食べてるんだ?」

リムルはエリスが食べている揚げ肉を見ていた。エリスはこの揚げ肉が気に入って、カラワヤ港を出発する直前に大量に買ってきたのだ。

「なんでも、異世界人が伝えた食べ物だそうですよ?」

「ご満悦のエリスが答える気が無い為、代わりにルーデウスが答える。」

「でも、これって…」

リムルはエリスが笑顔で頬張る揚げ肉を見る。そう、どう考えても青いコンビニで売られているアレだ。『くん』付けの、親しみやすい名称のあれだ。

(今度シユナに作って貰おう)

「リムルさん」

魔国連邦で、その料理が味わえる日を想像していると、ルーデウス

が耳打ちしてきた。

「この料理を伝えた人物が味方になるかは分かりません。カトルツ共和国に入ったら、警戒が必要だと思います」

「だな、敵意までは行かないまでも、警戒は必要だな」

そうしている内にカトルツ共和国の入国審査ゲートに着いた。

入国審査は問題なく終わり、全員が入国を許された。

国内はカラワヤ港以上に煌びやかだった。気取らず、かといって地味ではない、フランスの取れた煌びやかを演出する各建物の壁面などの装飾品が目を引き国だった。

「ふむ、どうやら見られているな」

アノスは息を吐き、言った。

アノスが視線を斜め先の建物へ向ける。視線の先は一際高い建物の屋上だった。しかし、ルーデウスやエリスは何のことかと首を傾げている。

それもそのはず、アノスから建物までは700メートルある。肉眼での視認は困難だ。

「こちらを狙っているようだな」

そう言うとアノスは、建物の方角に体を向けた。

「ウソでしょ!? 気付かれた?」

声の主はアノスの視線の先の建物の屋上にうつ伏せで寝転がり、ライフル、417Dを構えている。見えない距離のはずだが、スコープ越しに見ている黒髪の男はこちらの存在を看破した。

それでも尚、余裕の笑みを崩さずこちらを見ている。

『何やってんのさ、竿師』

耳にはめたインカムから気だるげな声が聞こえる。

「狙撃手よ! 竿師って呼ばないで!」

インカムに向かって鬼の剣幕で叫ぶ狙撃手の少女。すると、そこに別の声が入る。

『しつかり見張っていてください、味方かどうか分かりませんから』  
「わかってる、このまま警戒を——」

「——やはり、族でしたか」

声とともに殺気を背中に受けて、少女は身を起こす。建物の屋上、少女の背後にはシンが立っていた。

シンは剣呑な表情で少女を睨む。その右手には『略奪剣ギリオノジエス』が握られている。

「我が君を狙う不届き者は、この場で斬らねばなりません」

シンがジリジリと距離を詰める。

少女はその殺気に怯み、その場を動けないでいた。

シンは間合いに入ると、ギリオノジエスを構える。

「何か、言い残すことはありますか？」

「：アンタ達は魔王軍？」

「我が君は魔王ですが、この世界の魔王ではありません」

「えっ？ ……そうなの？」

「あなたはこの世界の者ではありませんね？」

「そうよ」

「我々はこの世界の魔王と戦う為の準備をしています。もし供に戦ってくれる者がいれば、歓迎しましょう」

「……………」

「しかし、我が君を狙う輩は。ここで斬ります」

シンはギリオノジエスで斬りかかった。

少女は目を瞑った。自分の最後を悟るように。

しかし、少女は斬殺されなかった。

少女とシンの間割って入った者がギリオノジエスを受け止めたからだ。

「…何者です？」

ギリオノジエスを斬り下ろす力を緩めることなくシンは訊ねる。

少女との間に割って入った者はシンを見る。

「こんにちは。SWORDです」

蒼い長髪を靡かせて、蒼井ハルトは笑みを崩さず言った。

「ほう、シンの一撃を止めるか」

「剣技の心得があるみたいだね」

アノスとレイは、シンと対峙する蒼い髪の男——ハルトを見ていた。

「大丈夫でしょうか？ 相手は2人ですし、加勢に行つた方がいいんじゃないか？」

「心配は無用だルーデウス。シンは俺の右腕。敗けることは無い」

「奴等はこの世界はおろか、我々の世界の服装でも武器でもない。異世界人だろうな」

オルステッドもハルトを見ていた。

「誤解を解いて、協力してもらえばいいんじゃないか？」

リムルがアノスに問う。アノスは数秒思索してガトムの魔法陣を展開する。

「——動かないで」

横から声がする。アノスは魔法陣を解くと振り向く、そこには紫色の長髪で長身の少女が拳銃を構えていた。

「拳銃!？」

ルーデウスがアクアハーティアを構える。

「——動かないでって言ったじゃん」

反対側からも声がする。そこにはピンク色の髪の小柄な少女がいた。気だるげな目をして、首には変なマフラーを巻いている。

「あの剣士の仲間だよな？」

「そうだが、お前は？」

答えたのはアノスだ。拳銃を突きつけられても変わらない態度を貫いている。

「私達は『SWORD―ソード―』だよ」

ピンク色の少女が答える。

「SWORDとはなんだ？」

「まあ、有体に言えば裏稼業かな」

「人には言えぬ仕事、といったところか。こちらは元々、敵対する気はなかったのだが、俺が狙われているとなれば、シンが動かぬはずがない」

「そちらを狙った事が発端なのは理解してるよ。でも未知の存在は警戒するのは当たり前なんじゃないかい？」

「それには同感だ。それで、1つ聞きたい」

「なんだい？」

「お前たちはこの世界の住人ではないな？」

「そうだね」

「俺達もこの世界の住人ではない。ならば、元の世界に帰るために共に戦わぬか？」

「え？」

「こちらは魔王ローズバルトに用がある。お前たちも同じ境遇なら、奴に用があるはずだ」

「生憎と、私達に決定権はないんだ」

「決定権を持っているのは、あの蒼い髪の男か？」

「そうだね」

「ならば、直接確認して来よう」

今度こそアノスは、ガトムで転移して行った。

---

シンはハルトと一進一退の攻防をしていた。

「ここまで私と斬り合えた者は多くはいません。世界は広いということが分かりました」

「コレばっかりしてきたからね」

「シン、剣を収めろ」

ガトムで転移してきたアノスがシンを制す。

「御意」

シンはおとなしく剣を収め、アノスより一歩下がる。

「そこのお前。俺たちは同じ境遇だ、ここは協力せぬか？」

「やはり、あなた達も同じでしたか。狙ったことは謝ります」



「よい。下にいるのはお前の仲間か？」

「そうですね」

「その者から、決定件はお前にあると聞いた。で、どうする？」

「…その申し出を受けます」

ハルトは両手の刀を鞘に収めた。

一行は酒場に入り、テーブルを囲んで話し合いをしていた。

一番端のテーブルにはルーデウス、アノス、リムル、オルステッド、ハルトの5人。

他のメンバーは、ハルトの仲間達を交えて、それぞれテーブルに分かれて話している。

「では、あなた方は再び、その魔王を倒すために来たのですか？」

前回の戦いの結末を聞き終えたハルトは訊ねる。

「そうだ。だが魔王ローズバルトは南の未踏大陸にいるから、この大陸から2つ海を超えないといけない」

リムルが串焼きのようなナニかを食べながら答える。

「敵の戦力が分からないこの状況で、無策に突撃する訳にはいきません。そこで、一緒に戦ってくれる仲間を探していたんです」

「なるほど、俺たちも元の世界に戻る方法が分からず立往生していました。敵魔王を倒すことに協力します」

「助かります。これから、よろしくお願いします」

そう言うルーデウスは右手を差し出す。ハルトはその右手を握るのだった。

## 未踏大陸

真・魔王城、円卓の間。

真・魔王軍幹部が円卓を囲み、話し合いをしていた。

その中にはアノスの世界を偵察していたブギョルもいた。

それに、ルーデウスの世界でエリスを襲撃した骸骨と、リムルの世

界を偵察した漆黒のローブの女もいた。

3人の他に9人、合計で12人が円卓を囲んでいる。

「適応者の行方はどうなっている?」

ローブの女が切り出す。他全員の視線が集中する。

「部下からの報告では、ヨクゼン大陸まで来たようですね。他の適応者と接触したそうです」

眼鏡を掛けた白髪の女性幹部が答える。

「適応者どもを合流させる訳にはいかないぜ、どうする?」

隻眼の男性幹部が身を乗り出す。ローブの幹部は考え込んでいる。

「未踏う大陸うにい現れたあ適応者にいも、対い策が必要じゃあないかあ?」

骸骨が何も無いはずの目を光らせる。

ブギョルはムスツとしながら口を開いた。

「敵、速い。見える、出来ない」

「報告にあった『撃墜王』とかいう適応者か? それこそ、囲んでしまえば、いくら速くても逃げられないだろうが?」

隻眼の幹部が肩を竦める。

「俺とガモツサの機工隊は他の適応者の対策で手一杯だ、そっちはブギョルとガイコツでどうかしてくれよ! なあ、ガモツサ?」

「ロンゴドルの言うとおりだ。敵は数人の生身の人間なんだ、どうにか出来るはずだ」

ガモツサと呼ばれた男の背中には機械式の腕が4本付いている。

ガモツサの言葉を受けて、ブギョルとガイコツは口を閉ざす。

「合流される前に各個撃破する。もつと密に攻撃しろ」

ローブの女幹部の言葉に他全員が頷く。

「それと、大陸北部の船着き場に巨人が現れるという報告があったぜ。撤退してきた部下が目撃した」

隻眼の幹部——ロンゴドルが一枚の巻物を取り出す。巻物は意思を持つかのように宙に浮くと、ひとりでに開いた。

その中には一体の蒼い巨人が映っていた。

「俺とガモツサの空戦機工隊を圧倒する性能、間違いなく適応者だろ

うな。最悪、こちらの『ジョーカー』を出す必要が出そうだぜ」

「構わんな？ ミニッサ、ロマール」

ガモツサが『ローブ』と『眼鏡』を見る

「私は構いません。ロマールはどうですか？」

眼鏡の女幹部——ミニッサがローブの女幹部のロマールを見る。

「私も構わない。『適応者を殺せ』というローズバルト様の命令を果たせるならな」

「もちろんだぜ。任せときな！」

「ところで、グワツツエの方はどうなっている？」

ロマールは1人の幹部に視線を移す。それまで一切話し合いに参加していなかった者だ。

グワツツエと呼ばれた筋骨隆々でスキンヘッドの男幹部は顔を上げると、静かに口を開いた。

「ガジーエー大陸にいる適応者の件なら、問題は無い」

「それは何故だ？」

ロマールが鋭い視線でグワツツエを睨む。

「弱い訳ではない。だが、あまり好戦的ではなさそうだ。こちらに取り込むことが出来れば、いい駒になるだろう」

「出来るのか？」

「シユトライドの『洗脳』を使えば容易いだろう」

「わかった、やってみろ」

「いい報せを待っているといい」

グワツツエの不敵な笑みに吐き気を覚えながらもロマールは全員を見渡す。

「では、各員持ち場に就け」

その号令に全幹部が立ち上がった。

---

翌朝。

カトルツ共和国。宿屋

一行はハルト達5人を仲間に加え、宿屋で休んでいた。

宿屋、食事処。

「ハルトの仲間たちが使ってるのって、銃だよな？」

「食事を取りながらリムルが訊ねる。」

「ええ。各人で使用火器は変わりますが、銃という認識で間違いありません」

「アノスを狙ってたトーカーが使ってたのがスナイパーライフルで、俺たちと対峙してたレナとムラサキが使ってたのがハンドガン？」

「ええ。それと、後から合流したクリスが使うのもハンドガンです」

「ミサイルランチャーとかは無いのか？」

「うちの子達は使いませんね。基本は対人の仕事がメインなので」

「弾切れとかしないの？」

「それが、この世界に来てからというものの弾薬が減らないんです」

「減らない？ 撃つてもか？」

「そうです、同じく俺が使う刀なんかも一切刃こぼれがしないんですよ」

「魔法を使う者は『魔力が無限』で。弾薬などを使う者は『弾薬が無限』ってことか…」

リムルは思案しながら朝食を平らげた。

「見られているね」

ミサと並んで食事を摂っていたレイが離れた席で食事をしている2人の女性を観察する。

「敵、でしょうか？」

ミサもおそろおそろ見る。長い黒髪の少女と青紫の短髪の少女がチラチラとこちらを伺っている。

黒髪の少女は本開き、顔を隠しながら、時折チラツとこちらを見る。青紫の少女は激辛料理と思われる真っ赤な料理を食べながらこちらを観察しているようだった。

「カラワヤ港で遭遇した女と似た気配がするわね」

「根源、魂が似てる」

サーシャとミーシャも彼女らを見ている。

「なに、直接聞けばよいことだ」

レイの向かいに座っていたアノスが立ち上がり、少女達の元へ歩いて行った。

「あれ？ こっちにくる？」

「葉桜先輩、分かりやす過ぎたんじゃ？」

「ど、どうしよう。モモちゃんに連絡する？」

「まず話し合いをしましょう。もしもの時はお願いします」

「少し、いいか？」

「なにか？」

アノスに声を掛けられ、青紫の少女が顔を上げる。

「お前たちの『軍司』はどこだ？」

「さあ。何のこと？」

「黒髪で、前髪をクロスした女が言っていた」

「し、知らないかな」

黒髪少女の本を持つ手が震えている。

「俺達と目的は同じだと思うが、協力する気は無いか？」

「目的？」

「単刀直入に訊く。お前達はこの世界の者ではない、そうだな？」

「……………」

「椎名さん。話していいんじゃないかな？」

黒髪少女が本を閉じる。机に置いて一息吐くと、口を開いた。

「私達は別の世界から来ました。突然光りだして、気が付いたらこの世界に来ていました」

「前髪をクロスした女は、お前たちの仲間か？」

「モモちゃんのことかな？ だとしたら合ってるよ」

「俺達も別の世界から来たクチだ。共に戦ってくれる仲間を探している」

「元の世界に戻る方法は分かってるの？」

「魔王ローズバルト。奴を倒せば元の世界に帰ることができる」  
「なんで分かるの？」

椎名と呼ばれた青紫の少女があ訊ねる。

「以前にも、この世界に来たことがあってな。その際、魔王ローズバルトを倒したら戻ることが出来たのだ」

「その魔王はまだ生きてるんでしょ？」

「ああ、どうやら復活したらしい。しかも戦力は以前より多いという情報もある。そこで、供に戦う仲間を探している、ということだ」

「なら、私達の軍司に訊いてくる」

「——その必要は無いぞ、京」

入口から声がする。アノス達の視線が声の主に集中する。

そこには、カラワヤ港でアノスと交戦した前髪クロスの少女が立っていた。

その横や背後にも人影があった。

「モモちゃん、必要はないって、どういうこと？」

「私達も一緒に戦うってことだ」

モモちゃんと呼ばれた少女はアノスへと歩み寄る。

「この間は悪かったな」

「構わん。あの程度のこと、気にする俺ではないぞ」

「私たちも目的は同じだ、供に戦うよ」

「そうか、よろしく頼む」

そう言うとアノスは右手を差し出す。少女——川神百代はその手を強く握った。

「こちらこそ」

## 足止め

未踏大陸

真・魔王城、機工隊格納庫。

真・魔王軍幹部のガモツサは自身の愛機である巨神外骨格『ロンゴダイナ』を見ていた。

魔族の身体能力を向上させる『闘技』。

魔族の「覚悟」の強さによってその効果は異なる。故に、発動出来ても、効果が安定しないことが有り、使いこなせる者が少なかった。

ローズバルトが率いていた旧魔王軍でも、使いこなせる者は幹部相当か、一部の兵士のみだった。

その欠点を解決する方法として立案されたのが、この『巨神外骨格』である。

闘技の基礎技である『金剛』を疑似的に再現した装備である。

鎧の延長線上でもあるが。鎧よりも頑丈で、装着者の生存率も高いのだ。

巨神外骨格は魔族が1人スツポリ収まる人型の外骨格である。サイズは魔族1人の身長約1.5倍に相当する。

故に、魔族1人1人に合わせて作られている巨神外骨格は基本オーダーメイドなのだ。一般隊員達には汎用型の巨神外骨格が与えられる。

だが、幹部クラスはそうはいかない。機工隊を預かるガモツサとロンゴドルの2人は勿論のこと、それぞれの隊を預かる隊長達には専用の巨神外骨格が与えられている。

武装や外見など、細かく調整された特別製だ。

ガモツサの専用巨神外骨格『ロンゴダイナ』は汎用型よりも防御力を強化したものだ。

汎用型の標準装備である『鉄剣』ではかすり傷すら付けることが出来ないほどの強度を持ち。腕や脚などの各部に魔法無力化用の魔法石を埋め込んでいる。

装備は鉄剣よりも頑丈で斬れ味も良い『高硬度鋼剣』を装備してい

る。

「行くのか？」

愛機を見つめている親友にロンゴドルが声を掛ける。

「ああ。敵は四足歩行の敵が5機、数ではこちらが有利だ。敗けはしない」

「そうか」

「お前は どうする？」

「帰還した部下の報告を聞く。連中、ヨクゼン大陸で仲間を増やしたそうだからな」

「未踏大陸に上陸した適応者の対処をしている内に、敵の戦力が整いそうだな」

「だから、上陸した適応者を早く片付ける必要があるな」

「ガイコツとブギョルも出撃した。そろそろ片が付く頃だろう」

「だといいがな」

「それより、ガイコツが攫ってきた少女はどうした？」

「ああ、地下牢でおとなしくしてるぜ」

「奴も趣味の悪いことだ」

「まったくだな」

嘆息し、ロンゴドルは踵を返すと、そのまま城内に戻って行った。

---

ヨクゼン大陸、カラワヤ港。

ルーデウス達は渡航船の出航時間を待ちながら、物資の調達をしていた。

食料をメインに調達していく。怪我の治療などは、ルーデウスやアノス達の魔法で可能である為、医薬品は少量で済む。

物資を調達後、船着き場に集合の予定となっている。

ルーデウスとエリスが買出しから戻ると、なにやら船着き場が騒がしかった。

渡航受付の窓口到人だかりが出来ていた。数人ではなく、30人はいる。



「なにかあったのかしら？」

「訊いてくるよ、エリスはここでみんなを待ってて」

ルーデウスはエリスを残して受付窓口へ向かった。

「おい、ふさけんじやねえぞ！」

「船が出ないってどういう事だ!?!」

「商売があるんだ。困るんだよ！」

三者三様の声が飛び交う。受付嬢は捌ききれずにアタフタしている。

「ですから！ ガジーエー大陸に魔王軍が上陸した為、渡航船を一時、運航停止しています！」

受付嬢の前に上司らしき人物が現れて状況を説明する。

「それでも船を出すのがお前たちの仕事だろうが！」

「この損失、どうしてくれるんだ！」

(言いたい放題だな…)

自分たちの言い分や望みだけを通そうとしている。ルーデウスは踵を返して、エリスのもとへ戻った。

待ち合わせ場所にはエリスと、戻ってきたアノス、サーシャとミーシャと百代達がいた。

「どうだったの？」

エリスが訊ねる。なぜか右手に串焼きのようなモノを持っている。百代が同じものを持っているため、おすそ分けしてくれたのだろう。

「この先のガジーエー大陸に魔王軍が上陸して船が出せないみたいだ」

「敵は未踏大陸への移動手段を潰しにきた、ということか」

アノスがルーデウスを見る。サーシャとミーシャもどうすべきか思案している。

「戻りました〜」

少女が2人戻ってきた。カトルツ共和国でアノス達と対峙した紫色の長髪の拳銃使い、深見レナ。もう一人はカトルツ共和国で合流したSORDの鯨瀬・クリステイナ・桜子（通称クリス）。2人ともハルトの仲間だ。

「あれえ？ マスターは戻ってませんか？」

レナが周囲を見渡す。

「蒼井さんはまだ戻ってませんよ」

ルーデウスが答える。それを聞いてレナはガツカリするのだった。

ハルトは屋台が並ぶ通りから裏路地を抜けて隣の通りに来ていた。  
(敵がこちらの動向を探っているかもしれない。そういう連中が居そうな場所を探してみよう)

通りを抜けて、別の裏路地に入る。

しばらく歩いていると声が聞こえた。足音を殺して近づくと曲がり角の向こうから男の話し声が聞こえる。

曲がり角に身を寄せて会話を聞く。

「だから、ここでやっちまった方がいいって言ってるんだ！」

「声が大きいぞ。落ち着け」

「落ち着いてるよ！ 連中をガジーエー大陸に渡れないようにした。あとは連中をこの大陸ごと海に沈めればいいだろうが」

「エンリクス様からの指示を待て。どうやっても適応者がこの大陸から渡る術は無い、時を待つんだ」

「——なら、あなた達はどうかやって来たんですか？」

曲がり角からハルトが姿を現す。男たちはハルトの姿を視認すると戦闘態勢になる。

1対6。ハルトは腰の刀に手をかける。

「お前は、適応者か!？」

「リムルさん達の話では、そうみたいですわね。で、あなた達はどうかやって来たんですか？」

「死ねえええええ！」

男の1人が得物を構えて襲い掛かる。

「いや、答えになってないし」

ハルトは腰を落とす、刀を振り抜く。

「バジルシユ！」

先頭の男の首を斬り落とし、その首を掴んで別の敵に投げつける。生首は真つすぐ敵の顔面に激突する。

「ぐえっ!？」

「オッケーイ、ワンダウン」

生首をぶつけた程度では、怯みはするが倒れはしない。

生首をぶつけられて怯んだ敵に肉薄し、左胸、つまり心臓に刀を突き刺す。突き刺した刀を少し捻ることで内臓を複雑に損傷させる。

敵は苦悶の表情で死に絶える。

ハルトは別の敵を視界に捉え、足を一閃。

3人目の敵の脚にパカツと斬り傷が開くと鮮血が飛び散る。

「ぐうおー!」

足を斬られた敵はその場に膝から崩れ落ちる。

すかさずハルトは首を刎ねて4人目の敵へ向く。

「ひ、ひいいい!」

「逃げろお!」

残りの3人はハルトに背を向けて逃げ出す。

「敵に背を向けて逃げちやダメじゃない?」

ハルトは追撃する。刀を最後尾の男の背に突き刺し、その勢いのままその前を走っていた敵も串刺しにする。

刀を抜くと、敵2人は苦悶の表情で蹲る。ハルトは2人の首を刎ねると6人目を追撃する。

「く、来るなああ!」

敵は振り向きざまに火球を放ってくる。しかし、そこはハルト。持ち前の眼の良さで軌道を読み、難無く躲すと脚へと斬りかかる。

火球を放つ為に振り向いたことで、僅かに逃げ足が減速した敵は躲せず脚を斬られて転倒する。

「く、くそう!」

「仲間達の所に連行するから、知ってることを話してね」

ハルトは男の動かない右足を持つと、引きずりながらアノス達の待つ集合場所へ戻るのだった。

集合場所にはハルトとオルステッド、アレクの3人以外が集合していた。

変わらず、渡航船の運航は停止のままだ。

「先に進めないんじゃない、どうすることも出来ないな」

リムルは屋台で買ってきた揚げ芋を頬張りながら受付を見やる。変わらさず、人で溢れている。

「アノスさんのアイビスで船を作って渡りますか？」

「オルステッド達が戻ったら、そうするとしよう」

「マスター、遅いな」

レナは机に突っ伏して項垂れていた。

オルステッドとアレクはハルトが居た路地とは別の路地にいた。

屋台の商人達が『裏路地で『変な奴』を見た』と言っていたためだ。適応者なら仲間に勧誘し、敵なら情報を得るために捕縛する必要がある。

「……………オルステッド様」

「お前も気付いたか」

「はい、います。1人ですが」

2人は同じ方向に視線を向ける。

路地の曲がり角。住居の角に不釣り合いな剣先が曲がり角から覗いている。

「姿を現せ」

オルステッドが静かに威嚇する。曲がり角の向こうから感じるのは、殺気だ。

アレクも戦闘態勢をとる。

「さすがは適応者、旧魔王軍のザコ四天王が敵わなかったのも納得だ」  
声の主が姿を現す。

男は1メートル程の黄金の剣を手に、左手で長髪をクルクルと弄っている。

「お前は、敵か？」

「その通りだ、龍神オルステッド。私は真・魔王軍幹部12柱の1人、『雷鳴のエンリクス』。貴様たちをこの先に行かせぬよう、足止めするのが私の役目だ」

「オルステッド様、僕が」

「任せる」

アレクは両手剣を構えて突撃する。エンリクスは雷撃を放ち応戦する。雷撃がアレクを翳め、皮膚を僅かに焦がす。しかし、アレクは気にも留めずに突撃する。エンリクスは持っていた剣をアレク目掛けて投擲する。

アレクは両手剣でそれを弾き飛ばすとさらに加速する。

間合いに入ると両手剣を振り下ろす、しかしエンリクスは雷撃を体に纏わせて両手剣の斬撃を弾く。両手剣は床に刺さり、路地のレンガ床が粉々に飛び散らせる。エンリクスはお返しとばかりに手刀を繰り出す、無論、雷撃を纏わせた、だ。

アレクは両手剣を振り上げ、手刀と斬り結ぶ。

両手剣が手刀に抑え込まれる。エンリクスは空いた左手で雷撃をアレクの顔面目掛けて放つ。

アレクは避けるが態勢を崩し、その隙をエンリクスに突かれて蹴り飛ばされる。

空中で態勢を立て直して再び斬りかかる。

エンリクスは両手の手刀に雷撃を纏わせると頭上でクロスさせる、そのままアレクの一撃を受け止めるため構える。

しかしアレクは両手剣を投げ飛ばす、剣を投げ飛ばす北神流の技だ。エンリクスは意表を突かれて初動が遅れた、その隙を逃す北神三世アレクサンダー・ライバックではない。

がら空きの腹部に蹴りをくらわせる。エンリクスは苦痛の声を上げながら吹き飛ぶ、壁に激突して吐血する。

「な、なかなか、やりますね……」

エンリクスは立ち上がり、再び手刀を構える。

「まだやりますか？」

アレクが両手剣を拾い上げて構える。エンリクスは口元を歪めると手刀を解く。

「いえ、この辺にしておきますよ。目的も果たせましたしね」

そう言うとエンリクスは背後に次元の裂け目を出現させ、その場から姿を消した。

カラワヤ港。

「お待ちせしました」

運航停止で足止めをくらい、手持無沙汰になってきた一行の元にハルトが戻ってきた。男を一人、引きずりながら。

「マスター！」

戻ってきたハルトにレナが電光石火で抱きつく。

「レナ、離れろ。鬱陶しい！」

「えへへ、嫌だね、お断りだね。絶対に離さないもんね」

ハルトはレナを振り解こうと身を振るが、両手足でガツチリとホルドされている為に振り解けない。

「その男はなんだ？」

リムルはハルトが引きづってきた男を見る。ハルトはレナを投げ飛ばしてから説明を始めた。

「裏路地にいた敵兵です。俺達を『この大陸ごと海に沈める』と話していましたので、連行しました」

「なるほどなく。……おい、お前達は魔王軍か？」

リムルはハルトの説明に頷くと、目線を男と同じ高さまで落として睨みつける。

「違う、と言っても信じないんだろう？」

「そうだな。じゃあ、質問を変える。お前達の目的はなんだ？」

「答える訳ないだろう。いいから殺せよ」

男は答える気が無さそうだ。

するとアノスが男に掌を翳す。

『隷属―イージェー』

アノスが使用した魔法は、対象を支配することができる魔法。主に動物などの知性の低い対象に使用するものだが、男には効いたようだ。

男の眼から光が消える。

口は半開きとなり、脱力したように覇気がない。

「こちらの魔族に使うところなるか。…さて、もう一度訊く。お前達の目的はなんだ？」

半開きの口が動き、言葉を紡ぐ。

「適応者をヨクゼン大陸ごと海に沈めることだ、エンリクス様が作戦を立案された」

「エンリクスとは誰だ？」

「真・魔王軍の幹部、雷鳴のエンリクス様だ」

「どうやってこの大陸を海に沈める？」

「大陸の外周に次元式魔法を仕掛けてある。時間になれば魔法が発動し、この大陸は海に沈む」

「魔法の無効化は可能か？」

「魔法の解除に必要なキーオブジェクトはエンリクス様が持っている。キーオブジェクトを破壊すれば魔法は解除される」

「エンリクスとやらはどこにいる」

「分からない。エンリクス様は異次元に隠れていることが多い。用が無ければ姿を見せないだろう」

「要するに、エンリクスって幹部の持つオブジェクトを破壊すればいいってことだな？」

「そのようだ。そのエンリクスとやらを見つけねばならんな」

「異次元に隠れているなら、探し方が無いな」

「俺達の世界を襲った敵と同じ原理の異次元ならば、見つけることは出来るかも知れんな」

リムルとアノスが話しているところにオルステッドとアレクも帰ってきた。

「エンリクスとやらとは、先程アレクサンダーが交戦した」

オルステッドがリムルとアノスを見て言う。

「オルステッドさん、エンリクスはどんな奴だった？」

「雷撃を手刀に纏わせた戦闘方法をする男だ。アレクサンダーが撃退した」

「その時、どんな風に逃げた？」

「異次元に逃げ込むようにして撤退した」

そう言うオルステッドは剣をリムルに差し出した。先程の戦いでエンリクスが回収しなかった剣だ。

「これは？」

「ヤツが落としていった剣だ。何かの手掛かりになるかもと回収してきた」

「おお！ 早速解析してみるよ」

リムルは剣を受け取ると、究極能力〈智慧之王―ラファエル―〉が解析する。

《どうだ？》

《解。この剣は、ここではない次元と引かれています。敵の現在地を常に示すコンパスになります》

《敵の居場所は分かるか？》

《解析。……………完了しました》

《どこだ？》

《北東の海岸の岩場です》

「北東の海岸だ。そこにいる！」

「では、行くとするか」

リムルとアノスは天に上昇すると、北東へと向かった。

「手痛い損害ですね。同行させた部下も全滅、私も無傷とはいかない状況…。異次元に滞在する体力も無いとききました」

エンリクスはカラワヤ港から北東の海岸の岩場の陰に隠れていた。

まだアレクにくらわされたダメージが回復しておらず、こうして隠れて時を待っていたのだ。



(あと10分ですか、このままここに隠れてやり過ごすことにしましょう)

「——やっぱりここにいたか」

背後から声を掛けられ、エンリクスは振り返る。

そこにはリムルとアノスが立っていた。

(気付かなかった。何故この場所が分かった!?)

エンリクスはそこでリムルの手に握られている剣に気付く。アレクとの戦いで落としたままだった自身の剣だ。

リムルは剣を地面に放り捨てる。

(私の剣は無くしても私の元に戻ってくる、そういう剣だ。しかし今回はその特性を逆手に取られたか)

「魔法解除の為のキーオブジェクトを出してもらおうか」

アノスがエンリクスに手を伸ばす。伸ばした手に魔法陣が展開される。

「……渡すのを断ったら?」

「力づくで奪うだけだ」

「抵抗しましょう。魔法発動まで、もう間もなくですから、時間を稼ぐだけですしね」

「そうか、なら奪い取るとしよう」

アノスは〈獄炎殲滅砲—ジオ・グレイズ—〉をエンリクス目掛けて放つ。

漆黒の太陽がエンリクスに迫るが、全身を雷撃で包みそれを防ぐ。

「器用なものだ」

「馬鹿にしないでもらいたい。私は魔王軍の幹部、手加減して勝てると思わないことだ!」

「そうか、それは失礼した。なら少々本気で行くぞ!」

アノスは〈極獄界滅灰燼魔砲—エギル・グローネ・アングドロア—〉を放つ。

終末の火が七重の螺旋を描いてエンリクスに迫る。

「ロドア・ギオ・グネエル・デロウイン!」

エンリクスは突如、魔法を詠唱した。エンリクスの体を包んでいた

雷撃の威力が強まり、天へと昇っていく。

腕を眼前でクロスすると、天へと昇った雷撃が降り注ぐ。

雷撃はエギル・グローネ・アングドロアへと降り注ぎ、エギル・グローネ・アングドロアの威力を弱体化させる。

しかしエギル・グローネ・アングドロアは消えず、エンリクスへ直撃する。しかし弱体化されたその威力ではエンリクスを倒すことは出来なかった。

「そのような魔法があるとはな」

「私からキーオブジェクトを奪いたければもつと本気を出せ。これで終わりでは無いだろう!」

「今度は俺が相手をするよ」

リムルがアノスの前に出る。

「貴様は私からキーオブジェクトを奪うことが出来ますかね?」

「奪ってやるよ」

「ならば、本気で来ることです。私から奪ってみ——」

「——キーオブジェクトとは、これなのではないか?」

アノスがほ放り捨てられていた剣を拾い上げる。

「何の、ことでしょうか?」

エンリクスはアノスを見ている。その頬には少し汗が浮かんでいる。

「お前は俺達の意識を自身に向けようとしていた。言動からしてそうだが、不自然なほどにな」

アノスはエンリクスに向き直ると、指を漆黒に染めて刀身を掴む。

「それはキーオブジェクトがこの剣だからではないか?」

アノスは刀身を掴む力を強くする。刀身がミシミシと音を上げる。

「ま、待て。それはただの剣だ。キーオブジェクトは私が——」

パキンツと音を立てて剣は真つ二つに折れた。

「あ、ああ。ああああ!」

エンリクスは頭を抱えてうずくまる。

「どうやら当たりのようだな」

「解除成功だな」

アノスとリムルは顔を合わせると頷き、エンリクスに向き直る。  
「これで、勝った気にならないでいただきたい！」  
エンリクスは立ち上がると、次元の裂け目を開き、撤退していった。

## ガジーエー大陸へ

アノスとリムルは飛行してカラワヤ港に戻ってきた。

先程までの喧騒は無く、渡航船は運航を再開していた。

「速かったわね、片付いたの?」

着地するとサーシャが声を掛けてきた。その横にはミーシャ、シン、レイとミサもいる。

「異次元に逃げたが、魔法は解除した」

「なら、これでガジーエー大陸に渡れるわね」

「ああ。…シン、準備はどうだ?」

「滞りなく、我が君」

「なら、これからガジーエー大陸に渡る。アノス、オルステッドさん、ハルト、百代も問題ないな?」

リムルが点呼を取り、全員が頷く。

「リムル様、追加の渡航札の準備も完了しています」

シオンが自信満々で青い札を差し出す。

「おお、シオン。気が利くじゃないか!」

「秘書ですから!」

そう言ってシオンは胸を張る。しかしリムルは気付いていた、シオンがお金を持っていないことに。

(多分ルーデウスあたりが指示してくれたんだろうな、後でお礼を言っておこう)

異世界に來ても残念秘書のシオンであった。

未踏大陸

真・魔王城、正門。

エンリクスは失意の中、帰還した。

消耗した体に鞭打って異次元を渡り帰還した為、焦燥しきっている。

「——無様じゃねえか。エンリクス」

正門通路の壁に背を預け、ロンゴドルがエンリクスに声をかける。  
「悔り過ぎていた。次はこうはいかない」

「はたして次があるかな？ 失敗したお前は幹部に相応しいのかよ？」

ロンゴドルはエンリクスを笑う。嘲笑するロンゴドルを睨み、エンリクスは口を開いた。

「黙れ！ 貴様とガモツサの機工隊も、適応者の排除が進んでいない  
そうではないか！」

「……………なに？」

「しかも、補給路を襲撃されて兵站拠点を奪われたと聞いたぞ。貴様  
とガモツサこそ、幹部に相応しくないのではないか？」

「てめえ、言わせておけば！」

ロンゴドルは懐から得物を取り出す。掌サイズの銃だ。

銃をエンリクスに向けて睨む。エンリクスも手刀を構える。一触  
即発の空気が流れる。

「……………2人とも、落ち着いてください」

一陣の風が吹くと、2人の間にミニツサが割って入っていた。

両手に持った剣が2人の喉元に突きつけられる。2人の頬を一筋  
の汗が流れた。

「……………分かったよ。分かったから剣を下ろせよミニツサ」

先に得物を収めたのはロンゴドルだった。続いてエンリクスも手  
刀を解く。

「こんなことで内輪もめをしている場合ではありません。ロマールが  
呼んでいます」

「……………わかった」

2人はミニツサに連れられ、円卓の間へと向かった。

「グワツツエの作戦が成功した。適応者が4人、こちらについた」

円卓の間に入った3人に告げられたのは朗報だった。

既にロマールの他にグワツツエとシュトライドがいて、得意げな表

情を浮かべている。

(なんか腹立つな。唇を削ぎ落してやろうか…)

心の中で毒つくロンゴドルだった。

「それで、シュトライド。洗脳が成功したのですか？」

「その通りだミニツサ。このシュトライドの洗脳によって、適応者は我が手中にある」

「使い物になるのですか？」

「洗脳する際、好戦的になる暗示魔法と、能力向上の魔法をかけておいた。ガジーエー大陸に渡った適応者の迎撃をさせる」

「分かりました。ではその内に、上陸している適応者を始末する必要がありますね」

「無論だ、それはロンゴドル達が進めているのだろうか？」

「ガモツサが四足兵器の討伐に向かった。今頃は適応者の首を振り回しながら帰ってきている途中だろうよ」

「順調に進んでいるなら、問題ない」

ロマールがローブのフードを捲る。

フードの中から現れた顔は、*“普通”*ではなかった。頬と額は焼け爛れ、血が滲んでいいる。右目は光を失い、唯一見える左目も、腫れた瞼で半分埋もれて、ひどいクマが不気味さを助長していた。

「容姿の良い女は無傷で捕らえて、私の前に連れてこい」

「なんでお前の頼みをきかな——」

ロマールに詰め寄ったロンゴドルは次の瞬間、天井にめり込んでいた。

「うるさい、言うとおりにしろ」

「わ、わか、ったよ…」

途切れ途切れにロンゴドルは言葉を紡いだ。

それ以上、ロマールに意見する者はいなかった。

---

カラワヤ港を出航した渡航船は、ガジーエー大陸へ向かっていた。  
渡航船、船上。

「マスター、マスター！ 見て見て！ でっかい鳥だよ！」

「こおら、レナ。落ちたら危ないから身を乗りだしちゃダメだよ」

SORDの面々は慣れない異世界に驚きの連続だった。

「親子丼…、焼き鳥…、フライドチキン。美味しそう…！」

レナは元の世界で食べ慣れた料理を思い出しながら、涎を垂らしていた。

「アレはさすがに食べられないんじゃないかな？」

SORDのニンジャ、ムラサキはため息交じりに言う。

レナは人一倍食べる、故に食には貪欲だ。しかし、いくら食べても太らない。そう育てられてきたからだ。

「ハルトさん、そろそろ会議の時間では？」

「そうだった、ありがとうクリス。俺は席を外すから、みんなを見ててくれる？」

「はい、お任せください」

クリスは頷いて、ハルトを送り出した。

#### 船内、個室

リムル、アノス、ルーデウス、オルステッド、ハルト、百代の6人は地図を囲って今後の方針を話し合っていた。

「これからの事だが。ガジーエー大陸でも仲間探しをしようと思う」

リムルが切り出す。それにルーデウスとハルトが頷く。

「ガジーエー大陸には魔王軍が上陸している。戦闘は避けられないだろうな…」

「大丈夫だってオルステッドさん。敵と戦闘になっても敗けないさ」

「……………そうだな」

「では、ガジーエー大陸に着き次第、情報収集を始めましょう」

ルーデウスが締め括り、話し合いはひとまずの決着を迎えた。

ガジーエー大陸、ギロン港

一行は港に降り立った。

ガジーエー大陸はこれまで行ってきた、どの大陸とも違った。

まず、熱いのだ。ギロン港からでも見える巨大な火山、これの影響でガジーエー大陸では作物が十分に育たず、この地で生活する者は貧困に苦しんでいた。それ故に、渡航船に乗ってやってくる商人が持つてくる農作物などの食料が、この大陸で暮らす生命線だった。

そして、もう一つ。これは最近になってのことだが、未踏大陸を魔王軍が征服したことでガジーエー大陸に魔王軍の手が届くようになったのだ。

魔王軍はかつてアノス達に壊滅させられた後、身を潜めていた。しかし、魔王ローズバルトの復活を機に再起し、征服した未踏大陸に拠点を移したのだ。

かつての戦いの地、ウロナ大陸では、魔王軍の力が及んでいるのは大陸北部のみだったが、ガジーエー大陸では魔王軍と思われる魔族の兵士が一般人に武器を向けて脅していた。

ギロン港に到着する前、港に魔王軍兵士がいることに気付いた一行に、アノスがへ幻影擬態―ライネル―を使用して全員の姿を擬態して行動していた。

ルーデウスは港に降り立つと、魔王軍兵士に声をかけられた。

「おい、そこのお前。訊きたいことがある」

「なんででしょうか？」

「渡航船で来たのか？」

「そうですが、…何か？」

「海上を飛行する蒼い巨人を見なかったか？」

「蒼い巨人？ いえ、見てませんが」

「ここ一帯の海上を飛行している。こちらにも少なからず被害が出ている、何か分かったら我が軍の兵士に知らせてくれ」

「そう言い残して兵士は立ち去って行った。」

「蒼い巨人か…」

「海上を飛行するって、ロボットか何かなのか？」



会話を聞いていたリムルも何のことかさっぱり様子だった。

「魔王軍が探しているということは、適応者かもしれない。俺達も情報を集めましょう」

「なら、ムラサキを情報収集の任に充てますよ。ムラサキはニンジャですし変装も得意ですから、この手の仕事には適任です」

ハルトがムラサキを指して提案する。

「分かった。じゃあ、情報収集は任せるよ。俺達は宿を探して荷物を下ろそう、ついでに物資の調達もしておかないとな」

リムルはそう言うと、カラワヤ港で購入したガジーエー大陸の地図を広げる。

「俺達が今、ここで。最寄りで大きい宿は…、少し遠いけど、この『宿木のほこら』にしよう」

リムルが地図をなぞりながら話す。その後、各員は移動を開始した。

ギロン港より南の海上。

真・魔王軍の空戦機工隊が警備巡回をしていた。

背に翼を装着した巨神外骨格が空を切り、飛行していた。

「この所、この辺りに出沒する蒼い巨人。今日は姿を見ないな」

先頭を飛行する隊長機が周囲を警戒しながら進む。隊長機の後方には5機の空戦型巨神外骨格が続く。

「さすがにエネルギー切れを起こしたのではありませんか？」

右後ろを飛行する副隊長機が訊ねる。それに隊員たちが意見を交わす。

「搭乗員が隊長を崩したのでは？」

「ドジ踏んで墜落したとか？」

「いやいや、ギロン港でメシ食ってんですよ！」

各々が好き勝手に意見を述べている。そんな部下たちを見て呆れた表情をする隊長。

「お前達。任務中だぞ、気を引き締めろ。この先に蒼い巨人がいる

「かもしれ——」

突然、隊長機が爆発する。いや、「撃たれた」のだ。  
煙を上げ、隊長機が墜落する。

「た、隊長——」

副隊長が落下する隊長機を追う。しかし間に合わず、隊長機は海面に突き刺さり、しばらくするとプカリと浮かんできた。

「ふ、副隊長。どうすれば!？」

隊員達が狼狽している。副隊長は部下達を振り向くと喝を入れる。

「狼狽えるな、警戒を厳にしろ! 敵を見つけ出すんだ」

副隊長は周囲を見渡し、敵の存在を探す。

しかし、敵を捕捉することは出来なかった。

「やはり先頭が隊長機でしたか」

機体のコンソールに映る敵空戦部隊を見ながら少年は独り言つ。

「パワードスーツ、いいですね、ロマンがあります。ロボットが出て来てくれると、もっとテンションが上がりますが、パワードスーツまでが精一杯なのかもしれません」

そう言うと少年は自身が搭乗する機体の武装の照準を定める。

剣と銃を一体化させたような武装で、剣先がハサミのように展開することで銃形態となる。

銃口を敵部隊に向ける。敵部隊は密集陣形で周囲を警戒している。

「これまで散々攻撃されましたし、正当防衛ということまで」

そして、少年の駆る蒼い巨人の武装が火を噴いた。

空戦機工隊全滅の報は、直ちにロンゴドルの耳に入った。

「全滅だ?! どういうことだ!」

自身の書齋でその報せを聞いたロンゴドルは、手に持っていたペンを報告員に投擲した。

報告員はすんでのところで躲すと、再びロンゴドルに向き直った。

「どうか落ち着きください、ロンゴドル様。私は事実を簡潔に申し上げたに過ぎません」

そう、報告員の説明は簡潔だった。

内容はギロン港と未踏大陸の間の海道を巡回していた空戦機工隊一個小隊が全滅したというものだ。

敵はこちらの索敵範囲外からの狙撃をもって隊長機を撃墜。こちらが密集陣形で周囲を警戒しているところに、第2射が放たれたというのだ。

「…敵は。蒼い巨人で、いいんだな？」

ロンゴドルは顔を伏せ、絞り出すように問うた。

「……………間違いないかと」

「ローズバルト様が言っていた『鬼神』か…。ことごとく、こちらの邪魔をする」

「それと、ガモツサ様が帰還されました」

「ガモツサが!？」

「はい…。『撤退』ではありませんが…」

「は？ 撤退だと、ガモツサが？」

「はい……………」

返事を受けて、ロンゴドルは勢いよく立ち上がると、書齋を出て格納倉庫へ向かった。

「ガモツサ！」

格納倉庫にはガモツサがいた。特に怪我は無かったが、その表情は曇っていた。

「……………ロンゴドルか」

「何があった。お前が撤退など、これまで無かったじゃねえか!？」

ガモツサの隣に立ち、真意を問う。

「敵は強大だ。戦力を侮っていた…。こちらも本気でいかねば」

「……………巡回していた空戦機工隊が全滅した。蒼い巨人だ」

「ローズバルト様が言っていた『鬼神』か。ガジーエー大陸で洗脳した適応者が足止めしている内に仕留めねばな…」

「鬼神は任せろ。お前は『死神』を頼む」

「ああ、わかった」

ガモツサの目に闘争の火が滾っていた。

ガジーエー大陸、ギロン港

宿屋『宿木のほこら』

偵察から戻ったムラサキから報告を受けた一行は驚愕した。

『適応者を洗脳し、手駒にすることに成功した』と兵士が酒場で酔っぱらって話しているのを聞いたのだ。

ムラサキはニンジャ。変装して敵地に潜り込み、情報収集をするとは慣れている。

酒場の給仕に変装して、酔っぱらった兵士から情報を聞き出して回った。

ギロン港の北にあるチュテンの町にいた適応者を幹部のシユトライドが魔法で洗脳したのだという。

「面倒な事になりましたね」

報告を聞いたルーデウスは苦い表情をする。洗脳系の攻撃手段を持つ敵の存在を考えていなかったのである。

しかし無理もないことだった。ルーデウス達、異世界から集まった『適応者』は無限の魔力を持つ。要するに、ロールプレイングゲームで技や魔法を使用する際に必要なマジックポイントが尽きないのだ。その恩恵から、そういった攻撃が自分たちに効かないと思いついてしまった。

だが、前回ならいざ知らず、今日に至っては状況が変わる。ハルトや百代達といった魔法を使用しない適応者もいる以上、精神攻撃を防ぐための魔法などを使用することは出来ない。

「多分、洗脳された適応者は、魔法やスキルを使えなかったんじゃないかな？」

リムルが顎に手をあてて考えながら言う。

リムルは精神攻撃に耐性があり、アノスは反魔法で洗脳魔法などに

対する反魔法を持つ。敵が洗脳魔法を使用する以上、戦える戦力は限られてくる。

「だろうな。だが、そのシユトライドとやらを倒せば、洗脳も解除されるのではないか？」

「でもなアノス、洗脳された適応者の相手もしなきゃいけないんだぞ？」

「その相手は、俺達がしますよ」

名乗り出たのはハルトだった。それに百代も同意する。

「いいのか？」

リムルが訊ねる。ハルトは口元に笑みを湛えて頷いた。

「では、今後の方針を確認します。北のチュテンの町に向かい、敵幹部のシユトライドを倒すか捕縛します。ハルトさん達は洗脳された適応者を抑えてください。シユトライドの相手はリムルさんとアノスさんをお願いします」

「わかった」

「敵に洗脳された仲間を助けよう！」

リムルの合図に全員が頷いた。

## 適応者VS適応者

ギロン港より北に行ったところに、その町はある。  
チュテンの町。

その町は“町”と呼ばれているが、実際は“村”と言って差支えないほどの規模だった。

ガジーエー大陸の中央に位置する『ゴツゾ火山』の麓にあるチュテンの町は、かつて多くの人で賑わっていた。

“平和”を絵に描いたような、そんな町だった。

その平和は魔王軍の侵攻の前に脆くも崩れ去った。

本来、ガジーエー大陸へ渡るには、ヨクゼン大陸を経由する必要がある。

リムル達が渡った方法と同じだ。

しかし、魔王ローズバルトは独自の船を建造した。それによってウロナ大陸から直接、ガジーエー大陸へと渡ったのだ。

未踏大陸侵攻の前線拠点となったギロン港。

チュテンの町も例外ではなく、労働力確保の為に多くの若者がチュテンの町から連行された。

抵抗した者は老若男女問わず殺された。そして、魔王軍が未踏大陸へ上陸を果たした頃には、連行された者達の半数が減っていた。

連日の重労働、休む間もなく強制される船の建造と武器の作成。反抗すれば即刻、別室に連行され“教育”という名の拷問を受ける。

一度、別室に連行されればもう戻ってくることは出来ない。男はサンドバックに、女は慰み物にされた。

未踏大陸に上陸してからは“偵察”として未踏大陸の情報収集をさせられた。

“偵察”と言えば聞こえはいいが、実際は未踏大陸に生息する魔物の生態を調べるために魔物の眼前に立たされ、ひたすら逃げ続けるのだ。

捕まれば、魔物の“餌”

そうしている内に1人、また1人と魔物の餌食となって死んでいっ

た。

その時だった、リムル達適応者が転移してきたのは。リムル達のおかげで魔王ローズバルトは倒され、魔王軍は壊滅した。

しかし、攫われた者達の中に、生き残った者はいなかった。

魔王軍が復活してから、ガジーエー大陸に再び魔の手が伸びた。

しかし、チュテンの町に転移した適応者がこれらを撃退した。

彼等は好戦的ではなかったが、向かって来る敵には容赦がなかった。彼等は各々、剣技の達人であり『伐刀者―ブレイザー―』と呼ばれる者達だ。

チュテンの町を拠点に彼等は活動していた。

しかし、真・魔王軍幹部のシウトライドがチュテンの町を包囲して、住民を人質に取った。

「おとなしく投降すれば、町の住人の無事を保証する。しかし抵抗したならば、一斉攻撃で蹂躪する」

シウトライドはそう言った。

彼等は投降することを選んだ。

しかし、それが罠だった。

シウトライドは投降してきた4人に洗脳魔法を掛けた。4人は防衛術を持たず、魔王軍の駒となった。

だが、それで終わらなかった。

シウトライドは洗脳魔法が成功したことを確認すると、部下に町への攻撃命令を出した。

洗脳された4人の前で、チュテンの町は1日中燃え続けた。

焼けて、廃墟となった町に4人はいる。

シウトライドの作戦だ。

「この4人を助ける為に適応者は来るだろう。そこを包囲し、一網打尽にする」と。

シウトライドの作戦通り、リムル達は来た。

しかし、それがシュトライドの運命を決めることとなる。

リムル達はチュテンの町に来ていた。

「なんだ、これ…?」

リムルは言葉を失う。一行の眼前には“町だった場所”が広がっていた。

崩れて瓦礫となった住居、焼けて何が描かれていたのか分からなくなつた看板や商店。世紀末のような光景が広がっていた。

「町の住人は、どうしたんでしようか…」

隣でルーデウスが周囲を見渡している。

「——これは酷いね」

そこにムラサキが戻ってきた。町に到着後、偵察に出ていたのだ。

「何がだい、ムラサキ?」

ハルトが訊ねるとムラサキは視線を少し落として口を開いた。

「いくつかの住居に白骨があつた。おそらく、死んだ後放置されたんじゃないかな」

「そうか…。魔王軍、しかないかな」

ハルトは頷くと、静かに手を合わせた。

「それとねハルト、洗脳された適応者だけど。この先にいるよ」  
「どうしてる?」

「私達が来るのを待ってるみたいだね、ただ立って待ってる。けど敵幹部らしき姿は無かつたね」

「敵幹部は俺とアノスで探すよ」

「わかりました。…行こうか」

ハルトは百代に目配せをする。百代もそれに頷いた。

「では作戦通り、リムルさんとアノスさんは敵幹部のシュトライドを頼みます。ハルトさんと百代さんを中心に、洗脳された適応者の相手を頼みます」

「ルーデウス、私達はどうするの?」

「俺達は町の周辺に魔王軍がいないか警戒する」



「わかったわ」

「では皆さん、また後ほど」

3組に分かれて行動を開始した。

「どうやら3組に分かれたか」

リムル達の様子を伺っていたシュトライドは口元に笑みを浮かべる。

「4人の相手は…あれか、どうやら魔法も使えぬザコらしいな。これは上々だ、さて…」

そしてシュトライドは部下に命令を出す。

「包囲しろ」

「「はっ」」

魔王軍が、チュテンの町を包囲するように展開していく。

ルーデウス達の戦闘が始まった。

ハルト達SORDの面々と百代達、川神学園の面々は洗脳された適応者と相対していた。

向こうが男1人と女3人の合計4人に対して、こちらは11人。

といっても、川神学園の直江大和（なおえやまと）は軍司であり、戦闘には参加しない。参加しても戦力にならないからだ。

それともう1人、葉桜清楚（はざくらせいそ）も戦えない。文学少女である彼女もまた、戦力にならないのだ。

こちらの戦力は9人。1人に2人ずつ相手が出る。

「おいハルト」

百代がハルトを向く。その姿は闘志に満ちていた。

「なんです?」

「私はあの眼鏡を相手にするが、いいな?」

「構いませんよ。俺は真ん中の男の相手をします」

こうして割り当てが決まった。

ハルトが少年の相手を、  
百代が眼鏡の少女の相手を、  
S O R Dのレナ、トーカ、クリス、ムラサキが小柄な少女の相手を、  
川神学園の薙刀使いの川神一子（かわかみかずこ）、弓使いの椎名京  
（しいなみやこ）、刀使いの黛由紀江（まゆずみゆきえ）が赤髪のツイ  
ンテールの少女の相手をする事となった。

最初に動いたのは小柄な少女だ。  
少女を中心に地面が凍結する。

全員、自身の足元が凍る瞬間にジャンプして足が凍り付くのを防い  
だが、それによって出来た隙を残りの3人は逃さなかった。

男が刀を抜き放ち、斬りかかってくる。ハルトは抜刀して受け止め  
ると上半身をずらして少年の刃先を横に逸らせる。

態勢を崩した少年に剣撃を繰り出すが、それを躲されて距離を取ら  
れる。

ハルトに眼鏡の少女が襲い掛かるが百代がそれを阻止する。

ハルトと百代はそれぞれ一騎打ちの状況を作ると、それぞれの敵に  
仕掛けていった。

川神学園の生徒達と相対しているのは赤髪のツインテールが特徴  
の少女。

目を引く赤い髪と、深紅の瞳。赤い線状の装飾があしらわれた金色  
の剣から繰り出される剣撃は炎を纏い、周囲を包む。

由紀江が刀で剣撃を受け流し、一子が薙刀で一撃を加える。

しかし、剣撃とともに放たれる炎によって攻撃が阻まれ、戦いは拮  
抗していた。

S O R Dが戦っている小柄な少女は小太刀を振るい、氷を出現させ  
てS O R Dの面々を苦しめた。

氷による防壁はレナ達の銃器では簡単に突破することは出来な  
かった。唯一突破力が高いトーカの狙撃も、飛来する氷塊によって狙  
撃チャンスが邪魔されて動けずいた。

百代は眼鏡の少女と戦っていた。

少女は抜刀姿勢で雷撃を放ち、百代を牽制している。百代は襲い来る雷撃を避け、拳を繰り出す。

だが、少女は姿勢を崩すことなく躲すと、再び雷撃を放つ。

凄まじい速度で抜き放たれた刀から雷撃が走る。雷撃はとうとう百代を捉えた。

雷撃を受け、皮膚の表面が少し焦げるが、百代は気にすることなく突撃し、正拳突きを放つ。

「川神流、無双正拳突きー！」

放たれた雷撃を突き破り、今度は百代の拳が少女を捉えた。

少女は正拳突きをまともに食らい、後方へ突き飛ばされる。しかし、受け身を取り、何事もなく着地すると、再び抜刀術で雷撃を放つた。

ハルトは少年の剣撃を2本の刀で受け流しながら反撃する。

少年はハルトの剣筋を読んでいるかのように躲すと、再び剣撃を繰り出してきた。

(何か引つかかるな。この違和感はなんだ…?)

ハルトは少年と斬り合いながらずっと疑問に思っていた。剣撃を交わす度に、少しづつこちらの剣技に「寄せて」きているような感覚を覚えたのだ。

まるで、「技を模倣されている」ような感覚。

その感覚はしばらくして、確信に変わることとなった。

少年の繰り出す剣撃が、ハルトの剣撃と同じ物となったのだ。しかも、ハルトよりも剣筋が鋭く、そして速く、重い。

(マズいな。こちらが押されてきた)

ハルトが繰り出す剣撃より強い剣撃が返ってくる。徐々にハルトが押されてきた。

(アノスさん、リムルさん。速く敵を捕らえてください)

ハルトは呼吸を落ち着かせる為に一旦距離を取ると、再び少年に斬

りかかった。

《告。近くに敵性反応があります》

シュトライドを探していたリムルとアノス。リムルの智慧之王が近くの生体反応を発見した。

《どこだ？》

《南西50メートルの位置です》

そう言われて南西の方角を見る。しかし、そこには廃墟しかなかった。

現在2人がいるのは、チュテンの町の外周付近。見渡す限り廃墟しかない。

「何も無いな…」

そう言ってリムルが目線を正面に戻した時——

「——いや、そこにいるな」

アノスは真つ直ぐ南西の廃墟を見ていた。

「廃墟しかないぞ？」

「擬態魔法のような物で隠しているだけだ。存在はそこにある」

「よく見えるなく」

「擬態魔法の深淵を覗けば容易い」

そう言ってアノスが掌を廃墟に向けると掌が青白く光る。

「イ・グネアス」

距離を超えてありとあらゆるものを掌握するその魔法は、擬態結界の中にいたシュトライドを引きずり出した。

「おお〜」

引きずり出されたシュトライドを見下ろしながらリムルは感嘆の声を出す。

「な、なんだ。何が起こったのだ!？」

事態が読めず、狼狽えるシュトライドを睨み、リムルは口を開いた。

「おい、適応者に掛けた洗脳を解け」

「い、言うとおりにすると思っ——グフウ！」

言い終える前にリムルに殴り飛ばされる。リムルは鼻血を出して横たわるシュトライドに馬乗りになる。

「もう一度言うぞ。洗脳を解け」

「こ、殺せえー!」

「洗脳を解いた後にな。さあ、早くしろ」

「く、くそお…」

(何故だ、何処で間違えた。何を間違えた!? どうする? こいつを振り切れたとしても、暴虐の魔王が逃がさないだろう。)

リムルの強さは分からないシュトライドだが、アノスの強さは聞いていた。

以前アノスに敗れたローズバルトから直接聞いた為、今回アノスを警戒していたが、目論見が甘かった。

シュトライドは覚悟を決めた。

「グデル・アルヴァー!」

次の瞬間、シュトライドの体が眩い光に包まれる。

《告。敵から膨大なエネルギー反応を感じ》

智慧之王からの警告を受け、リムルはシュトライドから飛び退く。

「今死なれては困る、訊きたい事があるのでな。——『時間操作——レバイド——』」

シュトライドの時間を止めると。もう一つ魔法を重ね掛けた。

『理滅剣——ヴェヌズドノア』

あらゆる理を否定し滅するその魔法、いや剣によって、シュトライドの自爆魔法は無効化される。

「イージェ」

アノスは隷属の魔法をシュトライドに掛けるが、シュトライドに何も変化が見られない。

「私に洗脳や隷属の類の魔法は効かぬ。我等12柱にはローズバルト様が反魔法を掛けているからな」

「そうか、なら体に訊くでしょう」

アノスは漆黒に染まった指先をシュトライドの腹部に抉り込ませた。シュトライドは苦痛に表情を歪ませる。

「さあ、最後だ。洗脳を解け」

「何をされても答えはおな——ぐううっ！」

さらに腹を抉られて苦悶の声を漏らす。

（マズい、マズい、マズい！ どうする、洗脳を解くか？ いや、ダメだ。それでは帰還しても、いい笑いものだ。しかし、死ねば洗脳は解ける。ならば——）

「せ、洗脳を。解く……………」

シユトライドは洗脳魔法を解除した。

ハルト達と相対していた適応者の動きが一斉に止まった。

「……………あれ？」

少年が周囲を見渡す。どうやら状況が飲み込めていないようだ。

しかし、ハルト達を視界に捉えると、刀を構えて戦闘態勢をとる。

「待ってください。こちらに戦闘の意思はありません、話を聞いていただけませんか？」

ハルトは刀を収めると両手を上げて戦闘の意思が無いことを伝える。

「……………君達は？」

「お前達と同じ境遇の者だ」

問いに答えたのは百代だ。

「同じ境遇、ということは皆さんもブレイザーなんですか？」

「いえ、別の世界からこの世界に来た者です。俺は蒼井ハルトといいます、よろしく」

ハルトが差し出した手を少年は握った。

「黒鉄一輝です。こちらこそよろしく」

リムルとアノスは、飛び立つ敵を見ていた。

無論、シユトライドを逃がした訳ではない。

シユトライドの腹に抉り込ませていた手を引き抜き、尋問を開始し

ようとした時だった。

2人の目の前に筋骨隆々のスキンヘッドと眼鏡の少女が降り立った。

真・魔王軍幹部のグワツツエとミニツサだ。

「この場は引かせてもらいます」

ミニツサがリムルとアノスに言うと、グワツツエが拳を振りかぶり、地面を殴りつけた。

地面が割れるように岩塊が出現し、リムルとアノスを妨害する。

その隙にミニツサがシュトライドを担ぎ、撤退していった。

「…よかったのか?」

リムルがアノスに視線を向ける。敵が飛び去った方角を見たままアノスは答える。

「なに、先に進めば機会はあるだろう。それより、ハルト達と合流するでしょう」

「そうだな」

2人は合流地点に向かった。

「すまん、ミニツサ、グワツツエ。私のミスだ……」

ミニツサに担がれて運ばれるシュトライドが謝辞を述べる。

「気にする必要はありません」

「お前は元々、戦闘向きではない。お前1人に前線を任せたら3人のミスだ」

この3人とは、シュトライド、グワツツエ、ミニツサを指している。

今回、一輝達を洗脳する作戦を計画したのはシュトライドとグワツツエだ。そこに、お目付け役として参加したのがミニツサだったのだ。

洗脳魔法を得意とするシュトライドは、戦闘向きではない。どちらかというの後方支援向きなのだ。

しかし、そのことを失念し、シュトライドに前線指揮を任せたらグワツツエとミニツサにも責任はあるのだ。

「一時退却して、態勢を整えましょう。兵士も全滅した今、ガジーエー大陸を放棄する他ありません」

「しかしそれでは、適応者に未踏大陸までの足がかりを与えることにならないか？」

「大丈夫ですよシュトライド。ガモツサとロンゴドルの決戦装備の準備も完了しました。こちらのフィールドに誘いこみ、勝負です」

「そういうことだシュトライド。とりあえず休め」

「…ああ、わかった。すまない……………」

そうしてシュトライドはミニツサに担がれたまま眠りに落ちるのだった。

ハルト達と合流したりムル達に、一輝達がそれぞれ自己紹介をはじめた。

「黒鉄一輝です。助けて頂いてありがとうございます」

ハルトと対峙した黒髪の少年——黒鉄一輝が一同を見渡してお礼を言う。

「ステラ・ヴァーミリオンです。よろしく願います」

隣の赤髪のツインテール少女——ステラ・ヴァーミリオンがお辞儀をする。

「黒鉄珠雫です。よろしく願います」

「東堂刀華です。今後もよろしく願います」

小柄な少女と眼鏡の少女もお辞儀をして、自己紹介は終わった。

「一輝達は、どうして洗脳されてたんだ？ ハルトから聞いたけど、みんな強いんだろ？」

リムルが疑問をぶつけると、一輝達は悔しそうに表情を曇らせる。

「実は——」

そう言っつて、このチュテンの町で起こった事を話した。

話し終えると、全員の顔色が変わっていた。殺気の籠った表情の者、驚愕の表情の者など様々だ。

「なあ一輝。俺達は魔王ローズバルトを倒すためにこの先の未踏大陸



に向かっているんだ。一輝達も一緒に戦わないか？」

リムルがそう呼びかけると一輝達はすぐさま頷いた。

「僕達も一緒に行きます」

一輝達が仲間になった。

---

同時刻

未踏大陸、中央部。

魔王軍の機工隊が適応者に奪われた兵站拠点を攻撃した。

しかし、機工隊は壊滅。生存者は無し。

いや、正確にはいた。被弾して動かなくなった自身の巨神外骨格に潰され、身動きが取れなくなっている兵士が1人。

「く、くそお。ここまでかよ、畜生っ！」

脚が潰されて身動きが取れずに、その場に倒れ伏していた。

一方的な戦いだった。大人が赤子の腕を折るように、ただただ一方的に戦いは展開された。

真・魔王軍幹部の1人であるガモツサの配下の機工隊員25名全員が巨神外骨格に身を包み、適応者の拠点となった兵站拠点到攻撃を開始した。

しかし、適応者の戦闘力は想像以上だった。

連携の取れた5機の動き。まるで誰かが戦況を把握して、指示を出しているような。そんな統率と連携が取れた動きだった。

兵士の巨神外骨格に砲弾が直撃する。それにより右半身を失った兵士は、そのまま息絶えた。即死だった。

命が尽きる最後まで、その眼は眼前にいる“敵”を見ていた。

純白の機体、4足歩行を思わせる脚部と機体上部に固定された砲塔。

そして――

---

機体に描かれた、“シヨベルを担いだ首のない骸骨”を。

## 合流

リムル達一行はギロン港に戻ってきていた。

目的は未踏大陸に渡るための手段を探すためだ。

しかし、港の受付嬢や商人達に訊いて回っても情報は得られない。未踏大陸に渡る正規の手段が無いのだ。

そこで思いついた。

“無ければ作ればいい”と。

早速アノスが『創造建築―アイビス―』で船を作った。しかし、ただの船ではない。空を飛ぶ城、飛空城艦だ。

「宙に浮かぶ城か、ラ○ユタみたいだな」

「リムル様、ラピユ○ってなんですか？」

「いや、なんでもない。なあアノス、これで未踏大陸に渡るのか？」

「ああ、これはかつて俺の配下だった者が創造したものを参考にしたものだ。未踏大陸に渡ることなど造作もないぞ」

「よし、じゃあ乗り込もう！」

一行は飛空城艦に乗り込み、ギロン港を出発した。

未踏大陸。北部の船着き場。

蒼い巨人のコックピット内で、少年は未踏大陸に向かってくる飛空城艦をコンソール越しに見ていた。

「おお！ 空飛ぶ城。あれはまさしく○ピユタではないですか！」

少年は飛空城艦へと巨人を稼働させた。

「敵…、ではなさそうですね。使うなら船でしょうし」

これまで少年は未踏大陸からガジーエー大陸へ出航する敵船を撃沈したことがある。それはあくまで“海に浮かぶ船”だった。

しかし今、目の前にあるのは“空を飛ぶ船”というか城なのだが、これまで敵が使用した移動手段には無かったものだ。

少年の乗機『イカルガ』は飛空城艦に並ぶと、並走しながらコンタ

クトを試みた。

『こちら、フレメヴィーラ王国、銀鳳騎士団団長のエルネスティ・エチバルリアです。そちらの所属を教えてください』

マイクで呼びかけると、飛空城艦の外に人影が現れた。リムルだ。「魔国連邦の盟主、リムルⅡテンペストだ。俺達は別の世界からこの世界に来た、城内には同じ境遇の者が他にもいる」

リムルは敢えて『魔王』という肩書きを隠した。もし向こうが同じ適応者なら、『魔王』と名乗ればローズバルトの仲間と思われるかもしれないからだ。

『あなた方は真・魔王軍ではないのですか？』

やはりローズバルトとの関係を訊いてきた。予想通りだと安堵しながら、言葉を紡ぐ。

「それに敵対する者だ。そちらも同じ境遇なら一緒に戦わないか？」  
『……………』

沈黙が返ってきた。

こちらの発言に？が無いか考えているのだろう、とリムルは思った。

しばらくすると、答えが返ってきた。

『わかりました、このまま進むと未踏大陸の船着き場に着きます。そこで合流しましょう』

そう言うといカルガは速度を上げて先に行ってしまった。

「あれは、ロボットだね。異世界ってのはなんでもアリなんだね」

リムルとエルネスティのやり取りを聞いていた一行。ムラサキが感嘆の声を漏らす。

「仲間になってくれるといいね」

「そうですね」

ハルトとクリスも飛び立つイカルガを見ながら話している。するとリムルが城内に戻ってきた。

「このまま進もう。向こうは先に行って待ってる」

「急ぐとしよう」

アノスは飛空城艦の速度を上げた。

しばらく進んでいると、大陸が見えてきた。未踏大陸だ。

そして、海岸に佇むイカルガを目視で確認すると、飛空城艦は海に着水した。

一行が上陸すると、イカルガから1人の少年——エルネスティが降りてきた。

一行とエルネスティが向かい合う。

リムルが一步前に出た。

「俺達と一緒に戦うってことでいいのか？」

「はい。僕も真・魔王軍と敵対している身ですので、皆さんと目的は同じだと思います」

「エルネスティと言ったか。お前は今までどこにいた？」

訊いたのはアノスだ。エルネスティはアノスの眼を真っ直ぐ見据えて口を開く。

「僕はこの地——大陸に飛ばされました。その直後から真・魔王軍に攻撃を受けてきたのです」

「ここには魔王軍の軍勢がいるのか？」

「はい、真・魔王軍はこの大陸で勢力を拡大しています。敵兵士が話しているところを聞きましたが、どうやら僕たち適応者をこの世界で殺して、その後、各世界を攻撃するつもりなのでしょうね」

「俺達はそれを止めたいと思っています。力を貸してください」

リムルが差し出した手をエルネスティは両手で握った。

「よろしくお願いします」

---

真・魔王城、円卓の間。

「適応者がこの地に辿り着いたそうだ……」

ロマールが肘をつき、俯き気味に言う。

「シュトライドとグワッツエの作戦が失敗したそうじゃねえか。その

「せいだろ?」

「ロンゴドル、そこまでです。これからの事を考えましょう」

「ミニツサの言うとおりだ。上陸した適応者の殲滅を優先し、総力をもつてあたる。他の幹部も異論は無いな?」

ロマールが幹部を見渡す。こういう時、ロンゴドルは必ず反論するが、今回は状況が状況の為に黙っている。

しかし、意外な者から反論が出た。

「おいらかあらあ提案なあんだがあく」

ガイコツだ。

「なんだ?」

ロマールが舌打ち気味に問う。ガイコツは得意げに続けた。

「いつそのおこおとお、やあつらのお世界をお攻めえるのはどうであく?」

「その間に魔王城を攻撃されるぞ?」

「すうぐじやあない。魔あ王城を守おう結界を構築すうるう、それえでえ適応者あはあ手え出しがええ来なくなあるう」

「いつまでに結界は完成する?」

「数日うまあでにいはい出来るぞお」

「……………他の物はどう思う?」

「賛成だな。適応者の世界に行けば、注意をそちらに逸らせる。適応者も自分達の世界なら『守るもの』も多いだろうからな、戦いにくいんじゃないか?」

賛成したのはロンゴドルだ。

「私も賛成です」

ミニツサも賛成する。それに続いて他の幹部も同意する。

「…では、結界魔法が完成次第、適応者の世界に侵攻する。ローズバルト様には私から報告しておく。では、解散」

ロマールの号令で幹部たちが円卓の間を出ていく。

全員が出て行ってからしばらく、ロマールは考え事をしていたが、立ち上がり、ローズバルトの元へと向かった。

真・魔王城、魔王の間。

魔王ローズバルトは玉座に腰を下ろし、頬杖をついて眼前の配下を見下ろしている。

ローズバルトの眼には、首を垂れるロマールが映っている。

幹部同士での話し合いの報告に参じたロマールを見下ろしながらローズバルトは考えていた。

“こんなものか”と。

かつてウロナ大陸の北部に城を構えていた時の幹部は全滅。兵士も多数が死ぬという結果だった。

その頃には未踏大陸の侵略をほぼ完了していたローズバルトだったが、アノスに敗れたことで計画に歪みが生じた。

ロマールはウロナ大陸時代からの配下だ、未踏大陸の征服の責任者を任せていた。

見事、ロマールは未踏大陸を征服した。それどころか、ローズバルトが復活するまでの間に『真・魔王軍』として軍団を再編して準備を進めていたのだ。その時、ローズバルトは“ロマールは使えるな”と感じたのだ。

ならば先程の感情は何なのか。それは他の幹部に向けられたものだ。

“12柱”などと呼称されているが、実際ローズバルトにとって、ロマール以外は眼中にないのだ。

結界魔法の話をロマールから報告されたローズバルトは一言『好きにしろ』と言った。

適応者の世界への侵攻、そして征服は目標である。

部下からその意見が出たことは嬉しいが、もっと良い意見が出なかつたのか？ と失望もした。

故に“こんなものか”なのだった。

しかし、結界魔法を用いた作戦が妙案であることは間違いない。

今回こそはやり遂げる、ローズバルトはそう決意した。

エルネスティと合流した一行は未踏大陸を南下していた。

飛空城艦にイカルガを格納し、中央部を目指す。エルネスティがこれまでで撃退した敵兵の通信にあった情報の真偽を確かめるためだ。その情報とは「中央部の兵站拠点を適応者に奪われた」というものだった。

一人だった為に迂闊に動かなかったエルネスティだったが、リムル達と合流したとなれば話は変わる。早速情報にあった中央部を目指すこととなった。

「エルのロボット、カッコイイなく！ 機体名は何ていうんだ!」

格納されたイカルガを前にして、リムルは興奮を隠せずにいた。

『イカルガ』といいます。僕が設計・開発した、僕の専用機です」

「自分で作ったのか?! スゴイなく、俺でも操縦出来るのか?」

そう訊かれ、エルネスティは少し思案すると、口を開いた。

「別の世界から来たリムルさん達では難しいと思います。『幻晶騎士—シルエットナイト—』を操る為の魔法形態が違うと思いますから」「そつかく。ところで、海上で話した時『銀鳳騎士団』と言ってたけど、それってなんなんだ?」

「はい、元の世界で僕が所属している騎士団のことです。イカルガの他にも多くの幻晶騎士がありますよ」

「いいなあ。もしエルの世界に行くことがあったら、他の幻晶騎士も見せてくれよ!」

「その時は、ぜひ銀鳳騎士団が誇る幻晶騎士をご覧に入れますよ」

転生者同士、話が合う2人なのであった。

飛空城艦、艦橋。

アノスは椅子に座り、前方の空を見ていた。傍にはシンが控えている。

操縦はミーシャとサーシャが担当し、レイとミサは周囲の警戒をしている。

「アノス様、あれじゃないですか？」

ミサが地上の一点を指す、その地点には純白の機械兵器と1両の装甲車が並んでいた。

「エルネステイと同じような技術体系の世界からの来訪者なのかもしれないな」

純白の機体はこちらを警戒するように構えている。

「サーシャ、着陸しろ」

アノスがサーシャに指示を出すと、サーシャは表情を険しくする。

「いきなり攻撃してこないかしら？」

「する気があるなら、とうにしていると思うけどね」

レイが肩を竦める。

飛空城艦は着陸し、アノス達は城内から外に出た。すると、向こうの適応者の一団から声が飛ぶ。

『止まりなさい。こちらは共和制ギアード連邦、第86独立機動打撃群指揮官ヴラディレーナ・ミリーゼ大佐です。そちらの所属を述べなさい』

向こうの装甲車から発せられた問いに答えたのはアノスだ。

「暴虐の魔王、アノス・ヴォルディゴードだ」

『魔王、とは、どういう役職なのでしょう？ 私達に攻撃を仕掛けてくる敵は“魔王軍”と名乗っていました。何か関係が？』

レーナはアノスが言ったことが理解できなかった。むしろ敵と思われるわけてしまった。

「あく、ごめんごめん。こちらに交戦の意思は無いんだ、多分そちらと同じ境遇だと思うから、話し合いをしたい」

リムルがアノスの横に並び、弁明する。

そうすると装甲車から1人の少女が降りてきた。青みがかった銀髪を長く伸ばし、軍服に身を包んだ少女はリムル達と向き合う。

少女を守るように四足の機動兵器が展開するが、少女は手でそれを制止する。

「同じ境遇とは、どういうことでしょうか？」

「お前達は『別の世界』から『この世界』に来たのではないか？」



アノスが訊ねるとレーナは少し考えて口を開いた。  
「確かに私達はこの世界の人間ではありません。ではあなた達はどこから来たのですか？」  
「俺達は別々の世界からこの世界に来たんだ。そちらの敵ではないから、1度話し合いの場を持たないか？」  
リムルの提案を受けて、レーナはしばし考えると、その提案を受け入れた。

飛空城艦の1室でレーナとリムル達はソファに座り、向かい合っていた。

リムル、アノス、ルーデウス。それと百代とハルトがL字になったソファに座る。向かいのレーナの背後には四足歩行兵器のパイロットの少年が直立で姿勢正しく立っている。

「では改めて。俺はリムルIIテンペスト、元の世界では魔国連邦の盟主と魔王をやっている」

「アノス・ヴォルデイゴードだ。元の世界では暴虐の魔王と呼ばれている」

「ルーデウス・グレイラットです。よろしく願います」

「蒼井ハルトです。元の世界ではSORRDのハンドラーをしています」

「川神百代だ。元の世界では武神と呼ばれてる」

各々が短く挨拶をすると、レーナも自己紹介をはじめた。

「共和制ギアード連邦、第86独立機動打撃群、指揮官のヴラディレーナ・ミリーゼ大佐です。よろしく願います」

レーナの自己紹介が終わったタイミングで背後の少年が口を開く。  
「第86独立機動打撃群、機甲班総隊長。シンエイ・ノウゼン大尉です。」

腕を後ろで組んだまま、淡々とシンエイは自己紹介する。

「それで、あなた方はどのような世界から来たのですか？」

レーナの問いに答えたのはリムルだ。

「バラバラだよ。巨大ロボットが動く世界から来た者もいれば、魔法が使える世界から来た者など様々だ」

「皆さんの目的は、元の世界に帰ることなのですよね？」

「そのために行動している。この世界の魔王が俺達の世界に侵攻してくる前に、こちらから出向いて倒す。その為の仲間を集めている」

アノスが答えると、ルーデウスが疑問を投げかける。

「ミリーゼ大佐は、どうやってこの世界に来たのですか？」

「出撃直前に、私を含む7人の体が突然光りだして、気が付いたらこの世界に来ていました」

「ここにいる者は皆、同じようにこの世界にやってきた。ミリーゼ大佐は、元の世界に帰りたいか？」

アノスに問われたレーナは間髪入れずに答える。

「勿論、帰りたいです」

「では、目的は同じということだな」

そう言うアノスは立ち上がり、手を差し伸べる。

「改めて、よろしく頼む。ミリーゼ大佐」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

レーナは姿勢正しくその手を握った。

「おおお！ 四足歩行メカ。陸上戦に於いて理にかなった設計。ロマンです！」

格納されたイカルガの横に鎮座する四足歩行メカ。シンエイ達の乗機であるギアード連邦製フェルドレス『レギンレイヴ』を舐めるように隅々までエルネスティは堪能していた。

レーナ達の世界での戦闘兵器は『フェルドレス』と呼ばれる四足歩行の機動兵器が主流である。

肘の長い四本の脚部と、赤い一つ目のセンサー。背面にはそれぞれのプロセッサの戦闘スタイルに合った火器が装備されている。

シンエイ達が駆るこの機体は、機動力は高いがプロセッサへの負担が大きい機体である為に乗る手を選ぶ機体だ。

シンエイ達 “エイティシックス” と呼ばれる者達は、このレギンレイヴより性能の劣る『ジャガーノート』で長年、絶死の戦場を戦い抜いて来たのだ。

「こんなアルミの棺桶のどこがいいんだ？」

レギンレイヴの “プロセッサ” 兼副官役のライデン・シユガが嘆息する。

「グレーテめに見せてやりたいのお。お主等が散々酷評した機体を絶賛する者がいるのが、よもや別の世界というのも皮肉じゃが」

ライデンの横で小柄な少女——フレデリカ・ローゼンフォルトが肩を竦める。

「これは遠距離狙撃に特化した機体ですか。こちらは火力支援、こちららはミサイルランチャーですか。各々の戦闘スタイルを反映させることで戦術の幅を広げるとは、すばらしい！」

エルネスティの顔は興奮の一言だった。

「…これが隊長機ですか？」

レギンレイヴを順番に見て回っていたエルネスティが、1機のレギンレイヴの前で足を止める。

シンエイの駆るレギンレイヴ “アンダーテイカー” だ。

「ああ、シンの機体だ」

ライデンが答える。

シンエイ達プロセッサには戦場でのコールサインのような役割の “パーソナルネーム” が有る。

シンエイは “アンダーテイカー”

ライデンは “ヴェアヴォルフ” といったものだ。

そして、それぞれのパーソナルネームをマークにして機体に描いている。

シンエイの機体であるアンダーテイカーにはシャベルを持った首の無い死神が描かれている。

エルネスティはアンダーテイカーを見つめている。

「そんなに気になるか？」

「この機体には、強い意思のようなものを感じます」

エルネスティの返答を受け、ライデンは少し笑みを零すと口を開いた。

「意味か……。この機体というよりかは、シンのだろうな」

「どういうことですか？」

「シンは、俺達の死神だからな」

「死神……。ですか？」

「ああ。みんな、あいつに連れて行ってもらった」

その言葉を聞き、エルネスティは察した。

死神がみんなを連れて行く。そしてパーソナルネームのアンダーテイカー。

アンダーテイカーとは「請負人」「葬儀屋」などの意味がある。

死んでいった仲間を連れて行く「葬儀屋」

「仲間の死を、受け継ぐ存在……」

ぽつりと言葉がこぼれた。

翌日。

飛空城艦の朝は早い——わけではなかった。

ルーデウスはエリスに抱き枕のように抱き付かれていた。それも、骨が軋むような強さで。

「エ、エリス……。もっと、やさし、くう……」

苦悶の表情を浮かべるルーデウスとは対照的に、エリスはご満悦の表情で熟睡していた。

起きると、食堂の方からいい匂いがした。

エリスと並んで食堂に着くと、レーナ達の仲間のアンジュが台所に立っていた。その横でクリスも調理している。

「あら、おはようございます」

ルーデウス達に気付いたクリスが挨拶してくる。

「おはようございます。朝食を作っているんですか？」

「ええ、もう少しで出来ますので座って待っていてください」

クリスに促され、ルーデウスとエリスは椅子に座る。しばらくすると料理が運ばれてくる。

カレーだった。

スパイスの香りが辺りを包む。香りに誘われてリムル達も食堂にやってきた。

カレーをひと口頬張り、リムルが歓喜の表情を浮かべる。

「うーん、美味しい！」

「お口に合って良かったです。おかわりもありますから、どんどん食べてくださいね」

少し遅れてやってきたレーナにカレーをよそいながらクリスが笑顔を向ける。

一同は朝食を堪能すると、そのまま会議を始めた。

「……1つ気になったのですが」

ルーデウスが切り出した。全員の視線を受けてルーデウスは続ける。

「俺達がこちらにきていることを敵は知っているはずですよ。その間にこちらの世界に侵攻してくる可能性はないでしょうか？」

昨日から引つかかっていた疑問をぶつけた。敵は前回以上に勢力を拡大しているという情報は得ている、なのに敵がこちらに割く戦力が少ないと感じていた。

レーナから聞いた未踏大陸での戦闘情勢はルーデウス達よりも熾烈だった。

それもそのはずだろう、ここ未踏大陸は敵の本拠地がある大陸。ルーデウス達は敵の喉元まで迫っているのだ。

しかし戦力差では合流前のルーデウス達の方が大きいはずだ。この差はなんなのか、昨日からずっと疑問だったのだ。

ルーデウスの疑問に答えたのはアノスだ。

「可能性はあるだろう。差し向けられた戦力の違いは、迎撃の優先度だろうな」

「しかし、差し向けられた戦力は基本変わりませんでした」

レーナが割って入ると、レーナにリムルが問う。

「ミリーゼ大佐、 変わらなかった」というのはどういうことだ？」  
「こちらが敵の兵站拠点を制圧した後、 3度の襲撃を受けました。 1  
度目の襲撃を迎撃した後の2度目の襲撃では、 1度目より数人多い程  
度で、 3度目は2度目と同じでした」  
「こちらを倒す気があるなら、 2度目以降は戦力を増やすはずだよな。  
なんでそんな中途半端なことを……………」  
「進撃させず、 撤退させず。 その場に釘付けにするという意図があっ  
たんじや？」

ルーデウスが口を開く。 リムルは合点がいったようにハツとする。  
「最低限の戦力でこちらを抑えて、 その内に俺達の世界に侵攻する気  
か？」

「もしそうなら、 急いだほうが良さそうだ」  
アノスが全員を見渡して最後にリムルに視線を向けると、 リムルは  
無言で頷く。

「今日、 これより、 真・魔王城を攻撃する。 敵が動く前に、 こちらから  
仕掛けるぞ！」

リムルの号令に全員が頷いた。

## 衝突

飛空城艦が未踏大陸を南下していく。

目指すは真・魔王城。

飛空城艦艦橋では、ミサが操舵を担当し、サーシャとミーシャ、それとレイが周囲の警戒をしていた。

艦長席に座るのはアノス、その背後にはシンが控えている。

それと、もう2人。

「敵の攻撃が全く無いな」

「こちらの飛空城艦を敵は捕捉している筈ですが…、もしかしたら、もう敵はいないのでは？」

「そうなったら最悪だな、敵がどの世界に行ったか分からないところからも動けないぞ」

リムルとルーデウスが話している。

リムルの言うとおり、敵が既に誰かの世界に侵攻したのなら、リムル達は行方が分からない為、1つ1つ調べるしかない。しかし、その間にも敵の侵攻は激化する。

「急ぐしかあるまい。まずは辿り着いてからだ」

アノスがミサに目配せをすると、ミサは飛空城艦を加速させた。

しかし、加速しなかった。

飛空城艦は「何かに押さえつけられる」ように減速した。

「ミサ、どうしましたか？」

シンがミサに駆け寄り声を掛ける。シンを振り向いたミサの表情は驚愕の一言だった。

「お父さん、何がなんだか…」

「落ち着きなさい。魔力を込めて、ゆっくり加速しなさい」

「は、はい…」

ミサとシンは舵に魔力を込める。レイも加わり、飛空城艦はゆっくり加速をはじめた。

「へえ〜。『重撃』を受けても進むのか」

アノス達の乗る飛空城艦を目視で捉え、青年は笑みをこぼす。

「感心している場合か。敵の増援かもしれん、ここで仕留めるぞ」

青年の隣に立つ眼鏡を掛けた軍服の男は右手を肩付近で構える。すると、右手の先に鉄塊が出現する。

「足場を作ってやる。お前が行け」

そう言うのと眼鏡の男は鉄塊を飛空城艦目掛けて投げつけた。しかも連続で。

直後、青年は手に持っていた太刀を抜刀姿勢で構えて跳躍する。眼鏡の男が投げた鉄塊を足場にして、それを踏み台にして一歩、また一歩と飛空城艦へ肉薄する。

まるで“閃光”のように。

「無数の何かが飛んで来てるわ!」

サーシャが鉄塊の飛来を知らせる。

「誰か来るな」

アノスがそう言った直後、鉄塊が飛空城艦に直撃する。艦内が激しく揺れる。

間髪入れず、艦橋の目の前に1人の男が着地した。

長めの銀髪を靡かせ、黒い軍服に身を包んだ青年だった。

「敵か!？」

その場にいる全員が構える。青年は艦橋と外を隔てるガラスをコンコンと叩いた。

「あのか。あなた方は魔王軍ですか？」

「それに敵対するものだ。お前は？」

答えたのはアノスだ。青年は合点がいったのか両手を上げる。

「てことは、あなた方も適応者?」

「そう呼ばれている。魔王ローズバルトに用があつて魔王城を目指している」



「そうだったのか、これはごめん、敵の増援が魔王城に向かっているのだと思ったから」

「悪いが先を急ぐ。この重力のような攻撃を解いてくれ」

「ああ、わかった。すぐ解くよ」

そう言うと青年は来た方向に戻って行った。直後、飛空城艦は加速を開始したところで青年が戻ってきた。

「今度はなんだ？」

リムルが半分疲れたように問う。

「ボク達も連れて行ってくれないかな？ 目的は一緒みたいだし」

「構わぬぞ、共に戦うならな」

「勿論戦うよ。じゃあ、この先で仲間を乗せてくれないかな？」

「いいだろう。ミサ、着陸だ」

「はい、アノス様」

ミサが飛空城艦を着陸させると、青年を含めて4人が乗り込んだ。艦橋に張り付いた青年はリヒトーと名乗った。

それとジエイルという眼鏡の軍人。それと、化け物のような顔の道安。長い黒髪を靡かせる眼鏡っ子、園原。

以上の4人を乗せて、飛空城艦は真・魔王城を目指す。

---

真・魔王城、円卓の間。

ロマール達幹部が集合していた。

「ガイコツ、進捗は？」

ロマールに訊ねられたガイコツはカタカタと顎を鳴らして笑う。

「準備は完了うしているう。指示いがあればあ、いいつでえもお発動う可能だあ」

「よし。ロンゴドル、ガモツサ。機工隊の準備は？」

「出来てるぜ。いつでもいけるー！」

「問題ない」

ロンゴドルとガモツサが頷く。そこでミニツサが立ち上がり、全員を見渡すと口を開いた。

「では作戦を説明します。ガイコツが結界魔法を発動すると同時に世界転移の魔法を発動します。それによって機工隊と歩兵を適応者の世界に転移させます」

「転移までの流れは分かっただ。だが、ローズバルト様はどうするんだ。ここに残られるのか？」

「いえ、機工隊と歩兵が転移した後に転移します」

「ミニツサ、ちよつといいか？」

「シユトライド、何でしょうか？」

「どの世界に侵攻するのだ？」

「第一目標は――」

---

### 真・魔王城。魔王の間

魔王ローズバルトは静かにその時を待っていた。

不本意な形ではあるが、適応者達の世界に侵攻する。

そして全ての世界を手中に収める、その時が近づいているのを肌で感じていた。

「……………もうすぐだ」

閉じていた瞳を開き、眼前に跪くロマールを見る。

しばらく前に来て、結界魔法の準備完了の報告をしてからずっと跪いている。

「…ロマール」

「はっ、ここに」

「ようやくここまで来ることが出来た」

「不本意な形ではございますが、ローズバルト様の悲願も近いと存じます」

「お前はよくやってくれた」

「もつたいないお言葉です」

「侵攻作戦には我も参加する。お前には城の守りを任せる」

「必ずや、守り抜いてみせます」

「期待しているぞ。……行け」

「はっ！」

そう言うのとロマールは立ち上がり、魔王の間を後にした。

「奴等は来るだろう。行きがけの駄賃に、奴等を捻り潰してくれ！」

ローズバルトが拳を突き出すと、先の時空が歪み、一振りの戦斧が現れる。

それを掴み立ち上がると、城中に轟く声で告げた。

「作戦を開始せよ！」

真・魔王城、中庭。

ロマールを中心とする結界魔法部隊が魔法陣を形成する。

直径30メートル以上ある魔法陣が出現し、光の柱が天へと伸びる。

「いつ転移出来るんだ？」

ロンゴドルがミニツサに訊ねる。ミニツサは結界魔法陣から目を離さず答える。

「安定するまであと30分はかかります。適応者が近くに来ています、警戒をお願いします」

「わかった、任せろ」

ロンゴドルが持ち場に戻ると、周囲を警戒していた部下が声を張り上げた。

「北の方角から、飛行物体が来ます！」

ロンゴドルはすかさず見通しの良い高台に昇る。すると、飛空城艦が迫ってきているのが目視で確認できた。

「やべえぞ……。砲撃を開始しろ、近づけるな！」

兵士が魔王城の外壁上部に備え付けられた大砲に魔力を込める。

飛空城艦目掛けて砲撃が開始された。

「撃ってきた!?!」

飛空城艦に砲弾が迫る。

トーカが狙撃を試みるが、高速で飛来する砲弾、しかも魔力を纏った砲弾は銃弾が翳めるだけでは撃ち落とせない。

百代が甲板に躍り出ると掌に闘気を込める。そのまま掌を迫りくる砲弾は向ける。

「川神流奥義、星殺し！」

掌から放たれたエネルギー波が砲弾を消し去る。

休む暇も無く第2波が迫るが、道安の『重撃』を受けて地面に落下する。

「あの光に向かってください！」

甲板で様子を伺っていたルーデウスが艦橋に告げる。

「ミサ、進路はそのまままで全速前進だ」

「はい。アノス様！」

飛空城艦がさらに加速し、魔法の光へと向かう。アノスは立ち上がると背後に控えるシンを振り返る。

「ここは任せる」

「御意」

返事を受けて、アノスはレイと共に甲板に向かった。

甲板にはリムル、リヒトー、オルステッド、そして魔導鎧を纏ったルーデウスが待っていた。

「先に行くか？」

甲板に現れたアノスにリムルが訊ねる。

「いや、一度で行けばよからう」

「そうだな」

6人は甲板の先に行くと、そのまま床を蹴り、魔法の光の元へと飛び去った。

魔法の中心、真・魔王城の中庭に6人は降り立った。

無論、敵が迎撃態勢に入るが、悉くを倒していく。

ガイコツとミニツサがアノス達を食い止めるべく立ちはだかる。

「あの骸骨の相手は俺がします。オルステッド様は先へ！」  
「任せる」

「眼鏡の女の子の相手はボクがする」

「頼んだぞー！」

ルーデウスはガイコツと、リヒトーはミニツサと相対する。

4人はそのまま魔法を詠唱している結界魔法陣に向かう。しかしそこに、ローズバルトが現れた。

「邪魔はさせぬ。返り討ちだ」

ローズバルトが体からエネルギー波を放つと、4人はエネルギー波を受けて動きを止める。ローズバルトと相対する4人。

「ちようどお前に用があつたんだ」

「我には無いな。リムルテンペスト」

「そう言わずに聞けつて。お前を倒して、この戦いを終わらせる」

魔王と戦う勇者みたいなセリフを言った自分に羞恥心を覚えるリムル。実際のところ相手は魔王なのでこのセリフで合っているのだが、恥ずかしいことに変わりはなかった。

「貴様達には倒せぬ、我はこのまま貴様達の世界に侵攻し、力を得る。貴様達の命を、行きがけの駄賃にしてくれる！」

ローズバルトはそう言うと、魔法陣を描き、雷撃を放った。

4人は躲すが、続けざまに放たれた衝撃波は躲しきれずに直撃を受けた。

「魔法の発動時間が短くなっている。連携せねば勝てぬぞ」

アノスはリムル達に告げると魔法陣を展開する。

『『獄炎殲滅砲―ジオ・グレイズ―』』

「レイとオルステッドさんは俺に続いてくれ！」

リムルの言葉に2人は無言で頷くと、ローズバルトへ向かうジオ・グレイズを盾にして斬り込んだ。

「小賢しい」

ローズバルトは戦斧でジオ・グレイズを払うと、斬りかかったリムル達の攻撃を受け流した。

攻撃が失敗した3人はアノスの元まで退避する。

「意外と速いぞ。前回、よくあんなの倒せたな、アノス？」

「いや、強さの次元が前回の比ではない。今回は本気なのだろう」

「マジモードか。あの奥の魔法を止めないと、何が起こるか分からないな」

「もう一度行く?」

霊神人剣エヴァンスマナを握り直してレイが訊ねる。リムルは頷くとオルステッドを見る。

「俺とオルステッドさんとローズバルトに攻撃をして隙を作る。そうしたらアノスとレイが奥の魔法陣へ抜ける作戦だ」

「いいだろう」

オルステッドは頷くと、リムルと共に仕掛けた。

ローズバルトは先程と同様に戦斧で受け流すが、間髪入れずに再度攻撃をする。

それを数回繰り返すと、ローズバルトはリムルとオルステッドにかかりつきりになる。

その隙をアノスとレイは逃さなかった。

ローズバルトを抜けて、結界魔法部隊へと仕掛けた。

しかし、それは阻まれた。

敵、ではない。——光だ。

結界魔法から放たれた光の奔流に阻まれて、アノスとレイは動きを止める。

そこでアノスは見た。

魔法の光から放たれたヴェールが真・魔王城を包んでいく様子を。そして、魔法の光に足を踏み入れた敵兵の姿が一瞬で消えるところを。

『ミサ、聞こえるか?』

『何でしょうか、アノス様?』

飛空城艦にいるミサと『思念通信——リークス——』で会話する。

『飛空城艦を光に突っ込ませろ』

『ええ!? 本気ですか?』

『敵は魔法陣で別の世界に向かっている。俺達も追うぞ』

『わ、分かりました!』

直後、飛空城艦が加速し、魔法陣から天へと伸びる光に突撃する。

艦首が光によって阻まれるが、飛空城艦は減速することなく突撃する。徐々に艦首が光にめり込んでいく。

アノスは再度、光に触れる。バチツと音を立てて弾かれるがお構いなく右手を突っ込んだ。

「いけるな」

右手が光の内部に入ることを確認したアノスは上空を見上げる。

飛空城艦の半分が光に入り込み、さらにのめり込んでいる。

次の瞬間、つかえが取れたように一気に飛空城艦が光に包まれて消えた。

アノスは飛空城艦が消えるのを確認すると、自身も魔法陣の内部へと一気に入り込んだ。そして、自身が光に包まれるよりも速く、イグネアスによってリムル、オルステッド、リヒト、ルーデウス、レイを魔法陣の内部に引き寄せた。

自身と戦っていたリムルとオルステッドが突然転移したことにローズバルトは気付くと、アノスの方を振り向く。

既に魔法陣の内部にはアノス達6人の適応者がいた。それが何を意味するか気付いたローズバルトは魔法陣内部にいるアノス達へ戦斧を振りかぶった。

「先に行っているぞ」

そのアノスの言葉を最後に、6人は光に包まれて消えた。

## 六面世界へ

「青白い空間を飛空城艦が進む。

周囲には数多の世界が浮かんでいる。

真・魔王軍の軍勢は世界の奔流を進み、1つの世界に向かっていった。

「あの世界は！」

飛空城艦の艦橋にいたルーデウスは驚愕の声を漏らす。敵軍が向かっている世界は『ルーデウス達の世界』だったのだ。

「ルーデウス達の世界に向かっていいのか。アノス、アレを追えるか？」

「問題ない。…ミサ、状況は分かっているな？」

『はい、アノス様。ルーデウスさん達の世界に向かいます』

ミサはリークスで返事をする、飛空城艦を加速させた。敵軍が陣形を構築してルーデウス達の世界に向かっていているが、その中央を飛空城艦が縦断する。

そのまま一直線にルーデウス達の世界に向かうが、すでに幾らかの軍勢は侵入に成功していた。

「ルーデウス。お前達の世界に敵軍を迎え撃てる戦力が残っているか？」

甲板に降りてきたルーデウスにアノスが訊ねる。

「います。このような事態を想定して、各国の要人にも伝達済みです」

「なら、俺達が到着した頃には征服されていた。などというような事は無いな」

「無い、と信じます」

ルーデウスは気が気ではなかった。オルステッドやアレクサンダー程ではないが、多くの手練れがまだ残っている。だが、ルーデウスの脳裏を過つたのは再び異世界に行く前のことだった。

骸骨の敵にエリスが成す術もなく敗れた。しかもアノスが割って入らなければエリスは死んでいただろう。

あのエリスが敗けた敵。残っている者達は確かに強いが、犠牲は出るかもしれないとルーデウスは考えていた。いや、考えてしまってい



た。

そして何よりも、シルフィ達家族の安否が何よりも気がかりだった。

「ルーデウス」

おそらく暗い顔をしていたのだろう。エリスが隣から覗き込んできた。

「なんだい、エリス？」

「大丈夫よ。シルフィもロキシーも強いもの、絶対無事よ」

エリスは微笑んでルーデウスに話しかけた。愛する夫を安心させるために。

「…そうだねエリス。急ごう、みんなが待ってる」

「ええ！」

そうしている内に飛空城艦はルーデウス達の世界の目前まで迫り着いた。

『アノス様、どうしましょうか？』

「かまわん。ミサ、そのまま突っ込め」

『分かりました！』

飛空城艦はさらに加速してルーデウス達の世界に接触する。

強大な波動のような力で押し出されそうになりながらも、なんとか世界の壁を超えた。

---

ラノア王国、魔法都市シャリーア

ルーデウス邸

ルーデウスの邸宅の周囲に侵攻してきた魔王軍の軍勢に敵対する人影があった。

ロキシー・M・グレイラット。ルーデウスの2人目の妻であり、魔術の師匠である。

『静かなる氷人の拳。アイシクルブレイク』！

ロキシーが放った氷撃が敵軍を吹き飛ばす。直後、ロキシーの横を

すり抜けるように駆けだした者がいた。

エリナリーゼ・ドラゴンロード。ロキシシーの旧友であり、シルフィの祖母にあたる女性だ。豪華な金髪ロールを靡かせて氷撃を逃れた敵を倒していく。しかし、敵兵士は頑丈で一人倒すのも一苦労だ。

邸宅を挟んだ反対側では、リニアとプルセナが敵の軍勢と交戦していた。

邸宅の中ではシルフィが子供達と共にいた。子供とルーデウスの母のゼニス、アイシャの母のリーリヤもいる。

「ルデイ……………」

ここにいない愛する夫の名を呟きながら子供達を抱き寄せる。

邸宅の外では戦闘の音が轟いていた。

「ロキシシー。これが以前話していた異世界の敵ですよ!」

外で戦うエリナリーゼが訊ねる。ロキシシーは攻撃魔術を放ちながら答える。

「おそらくそうでしょう、以前より強くなっているのが気になります。ルデイ達が行っている状況で攻めてきた意図が分かりません」

「ルーデウス達は戻って来るんですの!」

「この状況を知っていれば戻って来ると思います」

「倒してもキリがありませんわよ!」

そこに大きな影がかかる。

ロキシシー達は頭上を見上げて絶句する。

「なんですか、あれ!」

「城が、飛んでますわよ!」

頭上に辿り着いた飛空城艦から2人の人影が降りてくる。

「ロキシシー、無事ですか!」

「助けに来たわ!」

ルーデウスとエリスだった。

「ルーデウスはロキシシー達と合流出来たな。…さて、俺達も行くか!」  
ルーデウスとエリスが無事に降り立ったのを確認すると、リムルは

アノスを向く。

「ルーデウスが言っていたアリエルとやらの元へ行くべきだろうな」  
「そうだな。まずはそこに行こう」

飛空城艦はアスラ王国の方角へと向かった。

アスラ王国へ向かう道中に、敵の軍勢がアノス達と同じ方角を目指しているのが確認できた。

アスラ王国へ辿り着くと、既に戦闘が始まっていた。各地で散発的に戦闘が起きていたが、最も大規模な戦闘が繰り広げられているのは首都である王都アルスだ。

中央に位置する王城シルバーパレスから城壁と居住区画が交互に囲った大都市である。

その最も外側に位置する街並みは、この世界を蹂躪せんと進軍する真・魔王軍の軍勢で溢れていた。

活気に満ちた街並みは戦場と化し、魔王軍と王国騎士団が激しく剣を交える。

その最前線で戦っている戦士の中に、ギレーヌ・デドルディアの姿があった。

現在ルーデウス邸で戦っているリニアの叔母にあたり、ルーデウスの剣術の師匠でもある。

ルーデウスの世界にある剣術の流派の1つ『剣神流』の中で『剣王』の称号を持つ手練れだ。

「こいつらは、ルーデウスが言っていた敵か！ どれだけいるんだ！」  
敵を斬り倒しながらギレーヌは押し寄せる敵の軍勢を睨みつける。

敵軍は次々と押し寄せてくる。戦闘は消耗戦に移りつつあった。

王城から戦闘の様子を見守る者が2人いた。  
国王アリエル・アネモイ・アスラと護衛のルーク・ノトス・グレイラットである。

「あれがルーデウス様の言っていた異世界の魔王軍ですか…。勝てると思いますか、ルーク？」

編み込みの入った綺麗な金髪を靡かせながら、アリエルは城下の戦闘を見守っていた。

傍に控えるルークも同じく城下を見ている。

「ギレーヌやドーガ達が戦線を食い止めてくれていますが…。このままでは消耗戦になります、見たところ敵の戦力は逐次増援されていますから、こちらの不利は変わらないでしょう」

「このままでは戦線を支えきれず、敵軍がこの城まで辿り着くかも、ということですか？」

「考えたくありませんが…」

ギレーヌ達がいる前線からは見えないが、アリエル達がいる王城からは増援の姿が僅かだが確認できる。

しかも、王城の警備にあたっている兵士からの報告では多方面から軍勢が迫っているという。

増援が到着すれば、現在の戦線は物量差で崩され、王城へと攻め込まれる可能性は大いにあった。

「しかし、この状況をルーデウス様やオルステッド様が黙って見ているとは思えません。なにか対策を講じているはずです、それまで持ちこたえましょう」

「ええ、そうですね。ここを持ちこたえ……、あれは？」

ルークが彼方からこちらへ向かってくる光を指さした。

それが人だと分かったのは、その「光」が自分達の目の前まで来たからだ。

「えっと、アリエル王女ですか？」

長めの銀髪に黒い軍服。リヒトード。

「そうですが…。あなたは？」

アリエルは表情を崩さずに答える。隣のルークは剣に手を掛けて警戒している。

「ルーデウスの知り合いのリヒトード・バッハと言います。あなた方の加勢に来ました」

「ルーデウス様のこと？ 加勢は助かりますが、あなたお一人ですか？」

「いえ、他にもいますよ。もうすぐ到着します」

「…わかりました。では、加勢をお願いいたします」

「よろしいのですかアリエル様!？」

疑念をぶつけるルークに、アリエルは振り向く。

「この方達は、ルーデウス様の『対策』でしょう。なら、信じるしかありません」

「…分かりました」

ルークの言葉を聞き、アリエルはリヒトーに向き直る。

「ではリヒトー様、どうかお願いいたします」

「分かりました」

リヒトーはそう答えると、王城の窓枠を蹴って跳躍し。そのまま最前線へと降り立った。

リヒトーに少し遅れる形でアノス達が乗る飛空城艦も王都アルスに辿り着いた。

『閃撃の撃墜王』と呼ばれるリヒトーは光速で移動することができる。

なので、リヒトーを先に行かせて、アノス達は魔王軍の増援を片付けながら来たのだ。

「なあミーシャ、リヒトーの様子は見えるか？」

リムルがミーシャに訊ねると、ミーシャは王都の方角に魔眼を向ける。

「もう戦ってる」

「なら、アリエル王女に『挨拶』出来たってことだな。俺達も到着次第、加勢しよう」

「どうやら機甲部隊もいるようね。あれには銃弾が効かないわ」

トーカが双眼鏡で敵軍の一角にいる機工隊を見る。

「それはエルやノウゼン大尉達に任せよう」

隣のハルトが戦闘準備をしながら言う。トーカは「そうね」と短く言う。自身の銃の準備にとりかかった。

「ミリーゼ。ノウゼン達の機体は、この高度からの降下に耐えられるか？」

アノスが艦橋に待機しているレーナに訊ねると、レーナは少し思案してから口を開いた。

「機体を牽引する土台のようなモノがあれば可能です。現に、その方法で戦場に投入されたこともありますから」

「『土台』とは、どのようなモノだ？ 板のようなモノでよいのか？」  
「形状は大まかに言うとはですが。スラスタ―…、地面に対して反作用の力を発する必要があります」

「降下しつつ地面に対して何らかの力を発して、落下速度を減速するということか？」

「そうです」

「反作用か…。難しいな」

アノスとレーナの会話を聞いていたリムルが頭を抱える。

すると、レーナが何やら反応する。

「…いえ、しかし。その方法は現実的なのですか？ …はい、はい、分かりました」

独り言のような、会話のような言葉を発していたレーナがアノスに視線を向ける。

「可能な限り高度を下げた後、レギンレイヴを投下してください」

「…いいのか？」

「大丈夫です。本人達も承諾済みです」

「今の独り言は、ノウゼン達との会話だったのだな？」

「アノス陛下にはお見通しでしたか…」

「俺達の世界で言うところの『リークス』のような技術がミリーゼ達の世界にもあるということだな」

「そのとおりです」

「では、高度を下げよう。ノウゼン達を投下した後、飛空城艦は上昇し、空からの支援にあたれ」

「はい、アノス様。高度を下げます！」

ミサの合図と操艦で、飛空城艦は高度を下げていく。艦底が地面に擦るギリギリのラインまで降下すると、レーナが指示を出す。

『スピアヘッド戦隊』降下してください！』

「『了解』」

レーナの指示を受け、5機のレギンレイヴが飛空城艦から戦場に投

下される。

シンエイの『アンダーテイカー』、ライデンの『ヴェアヴォルフ』、セオの『ラファイニングフォックス』、アンジュの『スノウウィッチ』、クレナの『ガンスリンガー』が戦場に降り立つ。

着地姿勢をとり、機体への負荷を最小限に抑えつつ着地する。着地後、一拍置いた後、5機のレギンレイヴは敵機工隊へ向けて進撃を始めた。

先頭に行くのは『アンダーテイカー』。その後背に『ラファイニングフォックス』と『ヴェアヴォルフ』が続き、最後尾を『スノウウィッチ』と『ガンスリンガー』が続く形だ。

その後、上昇する飛空城艦からエルネスティのイカルガが発進していった。

「大攻勢の時と同じようなことをするとはのお、ミリーゼ？」

艦橋にフレデリカが上がって来る。レーナはフレデリカを視界に収めて口を開く。

「前回よりも酷い方法ですが、現状ではこの方法が最適だと判断しました」

「シンエイ達も慣れたものなんじゃろうな。一切臆せず行つたわ」

「機工隊は彼らに任せましょう」

「では、俺達もそれぞれの戦場に降りるか」

「そうだな」

リムルとアノスは顔を合わせると頷き合い、艦橋を後にする。

「オルステッド様はどうされますか？」

リムル達に続いて艦橋を降りながら、アレクサンダーはオルステッドに訊ねた。

「アリエルに会ってくる。状況を全て把握してはいないだろうからな」

「僕は父さんの加勢に向かいます、よろしいですか？」

「好きにしろ」

「ありがとうございます！」

アレクサンダーは喜々として降下していった。

「アノス、リムル」

降下姿勢に入った2人にオルステッドが声をかける。

2人は「なにごとか?」と喋って様子で振り返る。

「力を貸してくれたこと、感謝する」

オルステッドの言葉を聞いた2人は一瞬キョトンとしたが、すぐに笑顔を浮かべて言った。

「仲間なんだ。お礼は無しだぜ、オルステッドさん」

「俺達は前回の戦いから、共に戦うと決めた仲だ。礼など不要だ」

そう言うと2人はそれぞれの持ち場へと降下していった。

そんな2人の姿を見送るオルステッドの口元には、僅かに笑みがこぼれていた。



## アスラ王国防衛戦

最前線にて、リヒトーは太刀を抜刀して斬り込んだ。

斬り込んだといっても、その姿を視認できた敵はいなかった。敵は、自身が斬られたと認識する前に絶命していたのだ。

『閃撃』と呼ばれるリヒトーの斬撃は音速を超える速度で繰り出され、敵を斬り倒していく。

そのリヒトーから少し距離を置いた所で、ジェイル達も戦っている。

アレクサンダーは父であるアレックス・ライバックの担当するエリアに降り立ち、敵と交戦している。

各々がそれぞれの戦場に降り立ち戦っていた。

「あれがルーデウス様が言っていた異世界の方達ですか。話にいなかった方達もいるようですが、ルークは知っていますか？」

アリエルが戦闘の様子を見守りながらルークに訊ねると、ルークは首を横に振った。

「もしかしたら、新たに仲間になったのでしょうか」

「それは心強いですね。この戦いが終わったら、盛大におもてなししなければ」

「———そんな時間の余裕は無いだろうな」

声がして、アリエルとルークは振り向く。声がした方からオルステッドが近づいてきた。

「これはオルステッド様。戻って来られていたのですね」

「先程戻ったばかりだ」

「ルーデウス様は、どちらに？」

「シャリーアの家にいる家族を守るため、エリス・グレイラットと共に降りた」

「左様ですか。あの空を飛ぶ城は、味方ですか？」

「そうだ、異世界の魔王の配下が操縦している。向こうで仲間となった者達が戦場に降り立って戦闘を開始した」

「この戦いの後は、また異世界に向かわれるのですか？」

「ああ、その事で話がある」

「…なんででしょうか？」

アリエルの表情が変わった。

シンエイの『アンダーテイカー』が地面を滑るように走る。

5機のレギンレイヴは減速することなく敵機工隊群へと突撃していく。

『アンダーテイカー』『ヴェアヴォルフ』『ラフィンングフォックス』の3機が敵に迫るのを確認して、『スノウウィッチ』がミサイルランチャーの照準を敵機工隊群に定めて発射する。

無数のミサイルが敵に降り注ぎ、スクラップと屍を築く。異世界にて交戦した敵機工隊よりも強力な戦力を投入してきていることはシンエイ達皆が理解している。異世界で交戦したのはアーマースーツのような装備である巨神外骨格であった。しかし、現在各機のコンソールに映る敵影は戦車のような外見をした機動兵器なのである。

ミサイルランチャーの斉射で崩れた敵戦線に3機が飛び込んだ。

『アンダーテイカー』はコックピットがあるメインユニットの先端に2刀の高周波ブレードを装備している。

本体との接続にアームユニットを使用している為、フレキシブルな可動が可能だ。シンエイは接近戦に特化したプロセッサである。故に高周波ブレードを装備した機体はシンエイのみである。

敵機の横をすり抜け、『アンダーテイカー』は高周波ブレードによる斬撃で敵機を両断していく。

後背に控える『ヴェアヴォルフ』と『ラフィンングフォックス』が銃火器による支援を行い、『スノウウィッチ』によるミサイルランチャーと『ガンスリンガー』による狙撃で敵軍を次々に撃破していった。

『斥候型―アーマイゼー』みたいなのばかりだな」

ライデンが『ヴェアヴォルフ』の背部固定武装の40mm機関砲を斉射しながら口を開く。それにセオやアンジユが反応する。

「形も似てるし、やりやすいよね」

「どちらかと言えばヴァナルガンドに近いかしら？」

「ノロいことにならないね」

そう言うときセオは建物に屋上にワイヤーアンカーを掛け、『ラフィングフオックス』を跳躍させた。

建物の上に乗った『ラフィングフオックス』の背部固定武装である88mm滑空砲が火を吹き、敵機工隊機を吹き飛ばした。

戦線に投入された機工隊の2割以上が既に撃破されていた。

リムル達が降り立った戦場は酷い有様だった。

敵の侵攻が開始された時点でアリエルは避難指示を出していた。市民を王城に近い城壁や居住区付近へと避難させたのだ。

おかげで迅速に避難が完了した。

しかし、それでも犠牲は出た。

逃げ遅れた者が僅かにいたのだ。その者達を惨殺する敵魔王軍とそれを阻止せんとする兵士達の戦闘が繰り広げられた。

しかし兵士隊は壊滅敵打撃を受けた。原因は敵が使用する魔法だ。

自分達の使うどの魔法とも違う『異質な』魔法に兵士達は苦戦を強いられたのだ。

残った兵士達がどうにか持ちこたえているが、長くは保たないだろう。

故に、2人は降り立った。

最も被害が深刻なエリアに。

「これは酷いな…」

惨殺された市民や兵士の亡骸を見下ろしながらリムルは言う。アノスは近くに倒れる兵士の傍に膝を着くと、絶命して見開かれている兵士の目にそつと手を載せて、ゆっくり鼻先まで下ろし、瞼を閉じてやる。

その兵士の傍らには安らかな表情の女性の亡骸もあった。

おそらく守ろうとしたのだろう。もしかしたら恋人か夫婦だったのかもしれない。

アノスにはどちらかは分からないが、この兵士が市民を守るべく戦い抜いた事だけは分かった。

「安らかに眠れ。異世界の戦士よ」

そう言うアノスは立ち上がり、眼前の敵を視る。

「俺はちよつと腹が立ってる。本気でやるかな」

リムルが伸びをしながら隣に並ぶ。アノスは一息吐くと、敵群へと歩き出した。

一歩遅れてリムルが続き、敵との交戦が開始された。

敵兵士はリムルとアノスの存在に気付き、攻撃を開始した。

魔法による攻撃が飛来し、周囲を炎が包む。アノスはお構いなく敵群に突っ込むと、ベブズドによって漆黒に染まった指を敵兵の1人の腹に抉り込ませた。

しかし敵兵士は腹に刺さったアノスの腕を掴むと、もう片方の腕を振り下ろした。振り下ろされた腕は金色に輝いている。敵魔王軍が使用する『闘技』の『金剛』だ。

アノスは振り下ろされた腕を掴むと、ベブズドを使用している手を引き抜いた。そのまま相手の腹を蹴り飛ばすと、敵兵士は後方へ吹き飛んだ。

「おかしいものだ…」

「どうした、アノス？」

「これまではベブズドで腹を貫けば、一撃で絶命していた」

「でも、死んでないな」

「ああ。ルーデウス達の世界に来たことで、敵になにか変化が起こったのだろうか」

アノスの言葉を聞き、リムルは考えた。

（ルーデウス達の世界に侵攻したことが原因か？ それだけで強くなるのか？）

そこで思い出す。敵の目的を。

ローズバルトの目的は各世界を征服することだ。そうすることで

何を得るのか、答えが分かった気がした。

「…敵は、俺達の世界に侵攻してその世界の人を殺すことで強くなるんじゃないか？」

リムルはぼつりと漏らした。現にこのエリアだけでも死者が出ている、この仮説が正しいなら、この惨状は都合が悪い。

先程アノスが蹴り飛ばした兵士が再び起き上がり、リムル達へと襲い掛かってきた。今度は、周囲にいた他の兵士と一緒にである。

「それならば、他のエリアにも伝える必要があるな」

アノスが襲い掛かる敵兵士目掛けてジオ・グレイズを放つ。漆黒の太陽が敵兵士を包み燃やし尽くす。

他のエリアでも味方兵士が戦闘で死んでいる、現在進行形だ。アノスの言葉を聞いたリムルはアノスを向く。

「アノス、ここは任せていいか？」

「かまわんぞ」

アノスの返事を聞いたリムルは一度領くと、翼を展開して空中へと上昇して王城に向かった。

「さて…」

リムルを視線で見送ると、アノスは残敵に向き直る。

「少しは強くなったようだが、どこまでやれるかな？」

敵兵士達が一齐にアノスに襲い掛かった。

「この世界の兵士も無念だろうからな。欠片も残さず消滅させてやる」

アノスの魔眼が妖艶に輝いた。

---

「オルステッドさん！」

王城に辿り着いたリムルは、オルステッドの姿を視認すると窓から王城内に降り立った。

すぐさま警備の兵士がリムルを囲むが、アリエルがそれを制した。

「そちらがアリエル王女様？」

「お初にお目にかかります。私はアリエル・アネモイ・アスラと申しま

す」

「リムルⅡテンペストだ。よろしく」

「リムル様はルーデウス様のお仲間ですか?」

「そうだな。オルステッドさんに話があつて寄つたんだ」

「…なんだ?」

オルステッドが訊ねると、リムルは神妙な面持ちになつて口を開いた。

「敵がこの世界にくる前より強くなっている。おそらくこの世界の間を殺したことで力を得たんだ」

「根拠はあるのか?」

「アノスの魔法でも一撃で倒せなかった。こんなことはこれまで無かつた」

その事を聞いたオルステッドは僅かに驚愕の表情を浮かべた。

アノスの強さはこの世界の七大列強上位、もしかしたらそれ以上だとオルステッドは考えていた。

そのアノスの魔法に耐える敵、少なくともこれまでの戦いではいなかった。

「アリエル。兵士を王城周囲の城壁内に退避できるか?」

「それは可能ですが。どうなさるおつもりですか?」

「これ以上死者を出せんからな。敵を城壁外に釘付けにして、一気に殲滅する」

「わかりました」

アリエルは頷くと、ルークに指令を出した。

「オルステッド様、リムル様やリヒト様以外の方達の退避は可能ですか?」

オルステッドに向き直つたアリエルが訊ねる。

「簡単にやられる者達ではないが、伝えて回る必要があるな」

「俺はシオンやアノスに伝えてくる。一輝やハルト達への連絡は任せていいか?」

「わかつた」

オルステッドの返事を聞くと、リムルは来た方角へ飛んで行つた。

「ハルトさん、城壁内への退避命令が出ました」

アレクサンダーと同じエリアで戦闘をしていた一輝がハルトに退避命令を伝える。

ハルトは敵兵士と斬り合いの最中だったが、一輝の言葉を聞き、退避を開始した。

「レナ、ムラサキ。城壁内に後退だ！」

ハルトは近くで戦闘していた2人に声をかけると、後退を開始した。しかし、敵兵はハルトと一輝を追撃する。

ハルトは振り返りざまに刀を一閃する。刀は敵兵の横腹に斬り込んだが、敵兵が絶命することはなかった。敵兵は持っていた剣を振り下ろすが、一輝がそれをいなして、ハルトが敵兵の首を落とした。

「助かりました」

後退しつつハルトが一輝に礼を言うと、一輝は走りながら頷いた。

「ハルト。トーカとクリスに後退命令は伝えたのかい？」

ハルトと併走しながらムラサキが訊ねる。ハルトは頷くと口を開く。

「トーカとクリスは城壁付近にいたから、もう退避してるだろうね」

「ならいいんだけど。あと、敵が強くなってる気がするのはいけいだろうか？」

「多分、その通りだと思う。リムルさん達と対策を考えないといけない」

そう言いながらハルト達は城壁内に後退した。城壁内にはすでにアレクサンダー達がいた。アレクサンダーがハルト達を見つけて近づいて来た。

「アレクサンダーさん、この後の作戦は知っていますか？」

一輝がアレクサンダーに訊ねるが、アレクサンダーは首を横に振った。

「いえ、なにも聞いていません。オルステッド様が何か作戦を考えていると思いますが…」

「アレク君、そちらが異世界の方達ですか？」

アレクサンダーに1人の男が近づいてくる。男を視界に収めると、アレクサンダーは首を縦に振った。

「はい、父さん」

アレクサンダーの隣に並んだ男は北神カールマン二世、アレックス・ライバツクだった。

「はじめまして。シャンドル・フォン・グランドールと言います」

そう言うアレックス——もといシャンドルは右手を差し出した。

「黒鉄一輝です。先程の戦いを見ていました、随分お強いんですね？」  
「これでも以前は『北神』を名乗ってた身ですので」

その回答と、先程のアレクサンダーの「父さん」発言で納得がいった。

（現北神のアレクサンダーさんがあれほど強いんだ、先代が強いのも納得だな）

一輝はシャンドルの手を握った。

その後、シャンドルはハルトとも握手を交わすと、周囲の兵士に指示を出しに向かった。

後退が完了した後の作戦がまだ発表されていない為、混乱を避けるための指示だ。

「ハルトは城壁や王城を眺めながら言葉を漏らした。」

「こんな世界もあるんだな」

戦いはまだ続く。



## 六面世界から異世界へ

シンエイ達スピアヘッド戦隊の面々も後退を完了し、城壁内で機体から降りた。

そんなシンエイ達を味方兵士達は距離を置いて物珍しそうに見ている。

「なんか気まずいな」

「まあ、こつちの世界じゃフェルドレスは未知の技術だろうしね」

シンエイの後ろでライデンとセオが話している。すると、人混みをわけてリヒトーがやって来た。その後ろにはジェイル達もいる。

「ノウゼン大尉。この後の作戦は聞いた？」

「いえ。城壁内に後退しろ」としか聞いていません」

世界が違えど自身より階級が上であるリヒトーに対してはシンエイも敬語だった。

「オルステッドさんとアリエル王女が作戦を考えた。リムルさんの魔法で城壁外の敵を殲滅するそうだ」

「魔法。一人で、ですか？」

魔法というものをシンエイ達は知らない。以前読んだファンタジー小説で似たような文言を見た気がするが。イマイチ想像出来なかった。

「以前の戦いではリムルさん一人で敵魔王軍を壊滅させたそうだから、問題ないんじゃないかな」

「それまで、各人は待機ということですか？」

「そうなるね。アノスさんが、今のうちに休息を取っておけだっさ」  
「了解」

スピアヘッド戦隊の5人が敬礼すると、リヒトーも返礼してその場を後にした。

「ということだから、各員休息を取ろう」

シンエイがライデン達を振り返ると、4人が頷いた。

全員が城壁内に後退したことを確認したりムルは、王城の真上に滞空していた。

目的は前回の戦いでローズバルトの軍勢を壊滅させた魔法『神ノ怒—メギド—』を発動するためだ。

ローズバルトの軍勢は城壁外周を取り囲むように展開している。

(敵は前回より強くなっている。侵攻し、その世界の人間を殺す度に強くなるなら厄介だ。このまま他の世界にも攻め込まれたら、勝つことは難しくなるかもしれない)

リムルは魔法の術式を展開していく。

なるべく数を減らしておきたいと、リムルは思った。

全滅まではいかないにしても、敵が撤退するほどの打撃を与えれば、この戦いで死んだこの世界の人たちも少しは報われるだろうと考えたからだ。

術式が展開され、リムルが魔法を発動する。

「メギ——」

「させんつー」

地上から弾丸のように跳躍した「何か」が、リムルに攻撃をしかけた。

咄嗟にリムルは魔法の発動を解除し、防御態勢をとる。

「お前か！」

「させんぞ。リムルIIテンペスト！」

ナニかの正体はローズバルトだった。ローズバルトはオーラを纏わせた拳をリムルへと突き出した。

リムルは両腕でガードするが、態勢を崩されて地面に落下した。

追撃をするためローズバルトはリムル目掛けて急降下しようとする。

「お前の相手は俺だ」

ローズバルトを制止したのはアノスだ。アノスに続くように各人が城壁外に躍り出た。

ハルトや一輝、スピアヘッド達が城壁外に待機している敵軍との戦闘を再開した。

アノスは漆黒に染めた指先をローズバルトの胸元へと突き出した。しかし、その腕をローズバルトに掴まれ、阻止される。

しかしアノスは構わず『穢黒雷滅牙―ジ・ノアヴス―』を放つ。

「その魔法はもう効かぬ」

ローズバルトはアノスの腕を離すと、拳を握り絞めてジ・ノアヴスを払い除けた。

「前回から随分と強くなったようだな」

「もう貴様らに邪魔はさせん！」

ローズバルトが拳を繰り出すのが、アノスは回避して距離をとる。

距離をとったまま、アノスはジオ・グレイズを放つ。漆黒の太陽がローズバルト目掛けて直進する。しかしローズバルトは両手を前に突き出してそれを受け止めた。

「この程度か、暴虐の魔王！」

ローズバルトは受け止めたジオ・グレイズを彼方に投げ飛ばすとアノスに肉薄する。

そのままアノスの腕を掴み、リムルの元へと投げ飛ばそうとする。

しかし、割って入る者が2人いた。

リヒトーと百代だ。

リヒトーが神速の斬撃を放つと、アノスを掴んでいた腕に一筋の傷ができる。

すかさず百代がローズバルトに接近しながら拳を構える。

「川神流、無双正拳突きー」

百代の渾身の拳はローズバルトの頭を捉えた、ローズバルトはアノスを掴んでいた手を離すと防御姿勢をとる。

それによって自由の身となったアノスは漆黒に染めた指先を突き出した。

狙うはローズバルトの心臓があると思われる左胸。

それを援護するように飛翔してきたリムルが刀を振り下ろす。

「うおおおおー!!」

ローズバルトは体から魔力を放出する。

放たれた魔力は強き波動となって大気を揺らし、衝撃波となって4

人を吹き飛ばした。

「おいおい、冗談だろ？」

百代は冷や汗を拭いながら言葉を紡ぐ。近くの建物の屋根に着地したリヒトーも口には出さなかったが、額には脂汗が滲んでいた。

『魔法』という概念が存在しない世界から来たリヒトーと百代は、今、はじめて魔法を、それを構成する魔力をその身に受けた。

拳でも、斬撃でも、銃弾でもないその「波動」は、これまで2人が感じたことがない「攻撃」だったのだ。

しかし、それで戦意を喪失する2人ではない。

「倒し甲斐があるな……」

リヒトーと百代の瞳には、闘志が燃えていた。

そして、それはもう2人も例外ではなかった。

アノスとリムルはそれぞれローズバルトとの間合いを詰める。

ローズバルトを左右から挟撃するように同時攻撃をする。リムルは刀を振るい。アノスは雷撃を放つ。

雷撃を警戒したローズバルトは、リムルの斬撃を防ぎきることが出来なかった。

咄嗟に構えた腕が斬れて、鮮血を散らす。しかし構わず拳に風を纏わせて薙ぎ払った。

大気が渦巻き、烈風となつてリムルを襲う。リムルは態勢を崩さないように耐えている。

アノスが『焦死焼滅燦火焚炎―アヴィアスタン・ジアラー』によって炎を纏わせた拳で殴りかかった。

それにリヒトーと百代が続く。

ローズバルトはアノスの拳を片手で受け止めると、拳を強く握り絞める。

「力比べというわけか、いいだろう」

アノスも掴まれた拳が潰されないように力を籠める。

「その手、この場にてもらい受けるー」

ローズバルトがさらに力を籠めるとミシミシと音が鳴った。

「こつちも見ろよー」

百代がローズバルトの頭に拳を叩き込んだ。

続いてリヒトーが真正面から斬撃を放つと。ローズバルトの胸元に僅かに血が滲んだ。

百代は続けざまに無数の拳を打ち込むが、全く微動だにしないローズバルトを見て戦慄する。元の世界では『武神』と呼ばれた彼女でさえ、今のローズバルトからすれば赤子同然であった。

しかし、それに続くように放たれたリムルとリヒトーの斬撃は、ローズバルトを僅かに怯ませた。

アノスは掴まれた拳にアヴィアスタン・ジアラで炎を纏わせる。

炎はアノスの拳を掴んでいるローズバルトの手を伝い、ローズバルトを包む。

「どこまで我慢できるか、見届けてやる」

ローズバルトに拳を握られながらも、アノスの口元には笑みが浮かんでいた。

炎に包まれたローズバルトの表情が険しくなり、ついにはアノスの拳を離して距離を取った。

「まだか、まだ足りないのか…」

ローズバルトは唸る。それは己の力が未だに足りていないことへの悔しさからくるものだった。

「分かったのならおとなしく自分の世界に帰り、未来永劫引き籠るこ  
とだ」

アノスはローズバルトに言い放つ。

「…このままでは終わらせぬ」

そう言うときローズバルトは姿を消した。

それに続くように敵軍の姿も消えていった。

「敵は後退した、ということでしょうか？」

王城で戦闘の様子を見ていたアリエルが隣のオルステッドに訊ねる。

「あの様子なら、そうだろうな」

オルステッドはアリエルの問いを肯定した。

「ではルーク、兵士に休息を。それと、異世界の皆様をここへ呼んでください」

「かしこまりました、アリエル様」

ルークは一礼すると、伝令を出しに向かった。

それを見送ると、アリエルはオルステッドに向き直った。

「それでオルステッド様、すぐに異世界に向かわれるのですか？」

「いや、予定を変更した方が良さだろうな」

オルステッドはアリエルの問いを否定した。

しばらくすると、アノスやリムル達が王城に集合した。

アリエルは全員を前にして、最初に頭を下げた。

「アスラ王国国王、アリエル・アネモイ・アスラと申します。この度は、この国を救っていただき、感謝の言葉もありません」

それを聞いたアノスが口を開いた。

「俺達は仲間を助けただけだ。礼には及ばぬ」

「ルーデウス様から伺っていた通りの方がたのようですね」

「ルーデウスから聞いているなら話は早いな。アリエル陛下、俺達は魔王ローズバルトの侵攻を防ぎ、倒さないといけない。アリエル陛下にも、助力をお願いしたい」

リムルの嘆願をアリエルは頷いて答えた。

「喜んでご助力させていただきます。具体的には、何をすればよいのでしょうか？」

「まずは、敵の再侵攻に備えての準備。それと――」

リムルが今後の方針を話すと、アリエルは驚きの表情を浮かべる。

「そのようなことが可能なのですか？」

「俺達も出来たんだ。大丈夫だよ」

「：わかりました。準備を進めておきます」

「ありがとうございます」

そしてリムルと握手を交わしたアリエルは、全員を見渡して口を開いた。

「ところで皆様、この後すぐ異世界に向かわれますか？」

その問いを受け、各々が顔を見合わせる。

各々、「どうする?」といった問答を小声で繰り返していると、リムルが口を開いた。

「この世界に来てすぐに戦闘だったから、みんな疲れてると思うし。数日、休ませてもらっていいかな?」

「それは構いませんが。敵は放っておいて大丈夫なのですか? 私達の世界に来たように、皆様の世界に向かったのでは?」

アリエルの問いを受け。アノスが答える。

「ローズバルトの様子では、一度異世界に退却して態勢を整えるだろうな。今回の戦闘で少なくない被害を向こうも受けた、続けて他の世界を攻めようとしてもしないだろう」

「わかりました。この世界での滞在中は、この王城の客間を用意します。ゆっくりとお寛ぎください」

「お言葉に甘えさせてもらおう」

口元に笑みを浮かべたままアノスは頷いた。

それからしばらくして、ミサの操艦する飛空城艦がルーデウス達を連れてきた。

現在、大部屋を借りての作戦会議を行っていた。

参加者はリムル、シオン、アノス、シン、ルーデウス、オルステツド、リヒト、ジェイル、レーナ、シンエイ、百代、大和、ハルト、クリス、一輝、刀華の16人とアリエルとルークを合わせた18人だ。

他の面々はそれぞれ観光や休息などで羽を伸ばしている。

「それじゃあ、今後の方針だけど。次にローズバルトが攻めるのは、ここ以外の世界だと俺は思うんだけど、みんなはどう思う?」

リムルが議題を切り出すと、各々顔を見合わせて話し合う。

「質問いいですか?」

ルーデウスが挙手する。

「なんだ、ルーデウス?」

「〃ここ以外の世界〃といった根拠はなんですか？ 再襲来の可能性もあると思いますが？」

「いくつか理由はあるけど、あえて言うなら〃目的を果たした〃からだと俺は考えている」

「〃目的をはたした〃ですか…。征服は完了していませんか？」

ルーデウスは首を傾げて頭上に？マークを浮かべる。そんなルーデウスをニコニコと見ながらリムルは説明を開始した。

「ローズバルトはこの世界に来る直前、我は貴様達の世界に侵攻し、力を得る〃って言った、征服はそのついでなんじゃないかと思うんだ」

「敵は〃侵攻すること〃が優先目的であって〃征服すること〃まではそこまで本気じゃないと？」

問いを口にしたのはハルトだ。そのハルトにリムルは頷くと説明を再開した。

「現に、先程の戦いではあっさり撤退した。この世界に〃来た〃時点で敵の目的は完了したのかもしれない。あるいは、それぞれの世界の住人を一定数殺害した時点で」

リムルの考察を聞き、多くの者が戦慄した。リムルやアノスといった『魔法』を使用できる者達の世界なら、侵攻されても持ち堪えることが出来るかもしれない。だが、ハルトや百代達の世界には『魔法』というものが存在しない。

もしローズバルトの軍勢が攻めてきた時のことを考えると、ハルトや百代達の心境は穏やかではなかった。

「世界を渡る手段が確立した今、各々の世界を巡って危機を伝えるべきではないでしょうか？」

姿勢よく拳手をして発言したのは刀華だ。刀華の言葉を受けてリムルは一同を見渡して言った。

「確かにその通りかもしれないな。俺とアノスと、この世界は前回の事を踏まえて準備をしているが、ハルトや一輝達の世界はそうはいかないだろうし」

「では、いくつかにチームを分けて手分けして各世界を巡る方が良い



だろうな」

アノスが賛成の姿勢を見せると、一同もそれに呼応するように頷いた。

結果、チームを3つに分けて行動することになった。

リムル達と一輝達ブレイザーの面々とハルト達S O R Dの面々のAチーム

アノス達とシンエイ達ギアード連邦組とエルネスティのBチーム

ルーデウス達と百代達川神学園生徒とリヒトー達のCチーム

この構成で各世界を周り、警戒を喚起していくのだ。

出発日前日。

ルーデウスとエリスは久しぶりに家族との食事を楽しんだ。

シルフィとロキシシー、それに子供達もルーデウスとエリスの帰宅を心から喜んだ。

「では、明日には出発するのですか?」

食事を終えて夫婦4人で寛いでいるとロキシシーが問うてきた。ルーデウスは頷き、安心させるように答える。

「ええ、明日の朝にはアノスさんが創った飛空城艦で出発します」

「危険は無いの?」

シルフィが不安そうな声で訊ねるとエリスが胸を張って答えた。

「ルーデウスは私が守るから心配いらないわ!」

「お願いねエリス」

「ルディを頼みました」

シルフィとロキシシーからルーデウスを任されたエリスは誇らしげに口元を緩ませた。

「ところで、今回はリムルさんやアノスさん達以外の方も多いようですね」

ロキシシーは先程の食事中にルーデウスが話していた他の世界の戦士達のこと気がなっていた。

「はい、今回は俺達だけではなく様々な世界から戦士が来ています。必ずアイシヤを助け出して帰ってきます」

「気をつけてくださいいね」

「シルフィとロキシ―ともしばらく会えませんが、体に気をつけてください」

そのルーデウスの言葉を受けたシルフィとロキシ―は笑顔を浮かべる。

「じゃあさ、ルデイ。今夜は…、するの？」

少しモジモジしながらシルフィが訊ねる。

やや上目遣いのシルフィの姿にルーデウスは固唾を飲む。

「そ、そうだね。今夜は3人でしようか」

出発前夜。

その夜はルーデウスにとって“アツい”夜となった。

## 死神の世界へ

出発日当日。

アストラ王国の外れの平原に3隻の飛空城艦が鎮座していた。

リムルとルーデウスはそれぞれの飛空城艦の艦橋で操艦のレクチャーを受けていた。

その間にシンエイ達の搭乗するレギンレイヴやレーナの搭乗する装甲指揮者が格納されていく。エルネステイのイカルガも例に漏れず格納された。

「やれそうか。ルーデウス？」

艦橋にてミサからレクチャーを受けていたルーデウスのもとにオルステッドがやってきた。

「初めての経験ですが、何とかなると思っています」

「そうか。任せたぞ」

そう短く言うオルステッドは艦橋を後にした。

居住スペースにはリヒトとジェイル、そしてアレクサンダーとシャンドルがいた。

シャンドルは今回の遠征にアリエルへの報告役も兼ねて同行することとなった。

4人は何やら話しているようだった。オルステッドが近づくとリヒトが気配に気づき顔を向けてきた。

「オルステッドさん。ルーデウスの方は大丈夫ですか？」

「ああ、あの様子では問題ないだろう。ところで、何を話していたんだ？」

オルステッドが訊ねるとアレクサンダーが目を輝かせた。

「リヒト様達の世界にいる『撃墜王』という強者の話を聞いていたところですよ！」

「撃墜王、とはリヒト達もそうだったか？」

「はい、ボク達4人も撃墜王です。他の3人と合わせて撃墜王は7人います」

「『七大列強』のようなものか…」

「『七大列強』とは、オルステッドさん達の世界の方達ですか？」

「そうだ。俺は第二位で『龍神』と名乗っている」

「龍の神、ですか。ではルーデウスは第三位とかなんですか？」

「いや、ルーデウスは七位だ。七大列強は空席もあるからな、7人全員いるわけではない」

「なるほど」

「それで、リヒトー達が使う技はどんなものだ？」

「ボクは『凄く速く動く』ことが出来るので、『閃撃』と呼ばれています。道安は『重力を操る』ので『重撃』。園原は『放った弾丸が敵を追尾し続ける』ので『追撃』と呼ばれています」

「園原が使用していた武器はS O R Dの面々が使っていた物と似ていたが同じものか？」

「構造原理は同じだと思いますが、『全く同じ』物ではないと思います」

「そうか。先にリヒトー達の世界に向かう。現地での案内を頼むぞ」  
「わかりました」

「では向かうとするか」

3隻の飛空城艦の発進準備が完了すると、アノスは操舵を担当するミサに目配せする。ミサはアノスの視線を受けると頷き、飛空城艦を離陸させた。それにリムルとルーデウスの飛空城艦も続くように離陸すると上昇して、世界の向こう側へと旅立った。

ルーデウス達の世界を出た一行は世界の奔流を進む。

そして、目的の世界にそれぞれ向かっていった。

アノス達が最初に向かうのはシンエイ達のいた世界。

リムル達が最初に向かうのは一輝達の世界。

ルーデウス達が最初に向かうのはリヒトー達の世界だ。

「ミリーゼ」

アノスは艦橋で待機しているレーナに声をかける。声をかけられ

たレーナはアノスを振り返る。

「なんででしょうか、アノス陛下？」

「ミリーゼ達の世界の情勢は先程聞いたが、世界に入った後のことは聞いていなかったな。どうするつもりだ？」

「まずは、我々が所属する共和制ギアーデ連邦に向かいます。上層部に今回の件の報告をする必要がありますから」

「その後、敵魔王軍の存在を話して迎撃の準備をさせる、という事か？」

「そうです。ですが、簡単に信じて貰えないでしょう…」

「俺達も行くのだ、嫌でも信じるのではないか？」

「そう思いたいです。ギアーデ連邦の上層部はまだいいと思えますが…」

そう言うレーナの表情は曇っていた。

「何か問題があるのか？」

「いえ、問題という程ではないと思いますが…」

歯切れ悪く答えるレーナ。アノスは察して言葉を紡ぐ。

「信じて貰えない。いや、信じようと、理解しようとしないう者達がいる。といったところか？」

「…そうです」

「それは、ギアーデ連邦の上層部の者達ではないな？」

そうアノスが問うと、レーナは俯き気味に答えた。過去の汚点を、思い出したくないものを思い出すかのように。

「私たちの世界には4つの国家が存在することは、お話ししたと思います…」

「確かに聞いたな」

「その国家の内の一つである『サンマグノリア共和国』。私やノウゼン大尉達がかつて所属していた国ですが、そこは信じないでしょう」

「ノウゼン達や同胞を最前線で使い潰してきた国、だったか」

「そうです。おそらく彼等は、私やノウゼン大尉達の言葉を聞かないでしょう」

「その結果、自分達が滅びたとしてもか？」

「おそろくは…」

「救いようが無いな。だが、それでも行かなければなるまい」

「ありがとうございます…」

「礼など不要だ」

そう話している内にレーナ達の世界が見えて来た。白濁とした水晶のような球体状の形をしており、近づくにつれて大きくなってくる。

そこで疑問が生じた。

「以前この空間を渡った時よりも形がハッキリしていますね」

そう言ったのはシンだ。『以前』というのは刺客たちを追いこの奔流を渡った時のことだ。その時はシャボン玉のように揺れて、近づけば弾けそうな程であったが、今はしっかりと球体を形成している。

アノスはその様子を観察すると、口を開いた。

「ローズバルトが世界を渡ったことで、何らかの影響が生じたのだからな。ミサ、そのままミリーゼ達の世界に入れ」

「そのまま入って大丈夫でしょうか？」

「問題あるまい。いいか、ミリーゼ？」

「はい、お願いします」

レーナの返答を受け、アノス達の乗る飛空城艦は世界の1つへと足を踏み入れた。

レーナ達を乗せた飛空城艦が進入した先は共和制ギアーデ連邦遠方のレギオン支配域だった。

「この付近はレギオンの支配域です、警戒して進みましょう」

レーナが周囲を見渡しながら言う。

「レギオン。ミリーゼ達が戦っている無人機械だったな」

「はい。かつてギアーデ帝国が起動したレギオンは独自生産を行い、勢力を拡大してきました」

「しかし、戦線を大分押し返したと言っていないなかったか？」

「それでもレギオンの支配域はまだ存在します。いま私達が飛んでいるこの場所も、安全ではありません」

そう言っていると艦橋にシンエイが上がってきた。

「レギオンが来ます」

「なぜ分かるのだ、ノウゼン？」

シンエイの言葉の真意をアノスが訊ねる。シンエイはアノスの方を向くと口を開いた。

「俺はレギオンの“声”を聞くことが出来ます。この先にレギオンの部隊が展開しています、迎撃か迂回を進言します」

「ノウゼン達が戦っている敵に興味があるな。ミサ、このまま前進だ」

「前進ですか…？ 安全に迂回した方がいいんじゃない？」

「異世界の無人機械に臆する俺ではないぞ。立ち塞がるなら突破するだけだ」

「わかりましたあゝ」

ミサは不安そうだが、自分達の魔王が“前進”と言っている以上、選択肢は前進しかなかった。

しばらくすると飛空城艦の進路上に青銀の機械兵器の一団が確認出来た。レギオンだ。

「あれがレギオンか。見たところ様々な形状があるようだが？」

艦長席から立ちあがり、窓からレギオンを観察するアノスの問いにレーナが答える。

「レギオンはその形状によって種別を分けます。種別ごとに役割があり、それらが群を形成したのがあのようない団です」

「あれは戦力としては脅威になるのか？」

「ノウゼン大尉達であれば問題無いと思います」

「なら、俺も出るとしよう」

アノスは艦橋からドックに続くタラップへと向かう。そのアノスをレーナが呼び止める。

「本気ですか、アノス陛下？」

「本気だ。俺の実力がこの世界で通用するか試してみたい」

「わかりました。ですが念のため、ノウゼン大尉達を護衛につかせます」

「かまわんぞ。シン、ここは任せる」

「御意」

シンの返事を聞くとアノスは艦橋から降りて行った。残されたレーナはシンエイに目配せすると、シンエイは頷き、アノスの後を追った。

飛空城艦の底部がハッチのように開くと、そこにはアノスとスピアヘッド戦隊の面々が駆るレギンレイヴの姿があった。

飛空城艦がレギオン群の上空に差し掛かると、アノスはハッチから飛び降りる。

それに続くようにスピアヘッド戦隊の面々も降下していく。

レギオン群の中央に降り立ったアノスは、自身を取り囲むレギオンを見渡す。

未知の存在に最初は戸惑う様子を示したレギオンだったが、近くにいた『斥候型―アーマイゼー』がアノス目掛けて機関銃を連射した。アノスは機関銃の掃射を軽やかに飛び退いて躲すと、ジオ・グレイズを放つ。

漆黒の太陽がレギオンを飲み込み、スクラップに変える。

しかし大型個体である『重戦車型―ディノザウリアー』に対してはジオ・グレイズも有効打にはならず、装甲の表面を僅かに焦がす程度であった。

「凶体は伊達ではないようだな」

アノスは魔法陣を展開し、エギル・グローネ・アングドロアの魔法陣を展開するとディノザウリアへと放つ。

大気を、世界を揺らしながら終末の火がディノザウリアを包み、今度こそスクラップに変える。

「滅茶苦茶だね」

「魔法」 っつのがあればフェルドレスいらねえじゃんか」

アノスから少し離れた場所で戦闘していたスピアヘッド戦隊の面々は、アノスの戦いぶりを見て感嘆した。

現在スピアヘッド戦隊はシンエイの「アンダーテイカー」を前衛として戦闘を継続中である。



シンエイはアンダーテイカーの機体前部に装備された左右の高周波ブレードを巧みに操り、レギオンを片付けていく。

その背後を守るようにライデンの「ヴェアヴォルフ」が火力支援を行い、セオの「ラファイニングフォックス」はシンエイの狩り損ねたレギオンを掃討していく。

アンジュの「スノウウィッチ」とクレナの「ガンスリンガー」は後方支援だが、アノスに当る可能性を懸念して攻撃範囲を狭めての支援を行っていた。

「戦隊各位。こちらに注意を向けているレギオンを掃討後、アノス陛下の支援に向かう」

シンエイが各員に通信を送る。各々の返事が返ってくる中、ライデンは苦笑気味だった。

「だがシン。陛下のアノ様子じゃあ、支援は必要無いんじゃないか？」  
ライデンの言葉を聞いてシンエイは『確かに』と思った。

現在アノスの表情は余裕そのもので、とてもじゃないが支援が必要そうには見えなかった。

シンエイと同じスピード、あるいは僅かに早くレギオンを片付けている。

対レギオン戦の「スペシャリスト」であるシンエイに対して、である。

気が付けばアノスの周囲にあるのはレギオンのスクラップだけだった。その姿にスピアヘッド戦隊の面々は僅かに戦慄した。

フェルドレスを使用せず。魔法が使えること以外は生身の存在と認識していた存在の強さを再認識した瞬間だった。

そして、その事実にはシンエイ達に1つの不安を覚えさせた。  
レギオンをもつともしないアノスが倒しきれない存在、ローズバルト。

もしローズバルト率いる魔王軍が自分達の世界に侵攻してきたらどうなるだろうか？ と。

答えは簡単だ、敗けるだろう。

侵攻初期の頃は物量差で拮抗するかもしれないが、それも時間の経

過によって状況が変わるだろう。

こちらの人間を殺して力を強化する敵。戦況が不利になれば戦死者は少なからず出るだろう。

そうならば、結末は。

そう考えていたのはシンエイだけではなかった。

レーナも少なからず、シンエイが感じた不安と同じものを感じていた。それと同時に決意した。

「必ず、ローズバルトを倒しましょう…」

飛空城艦の艦橋でレーナはそう呟いた。

「無論じゃ」

隣にいたフレデリカが大きく頷いたのだった。

## 会合

ギアーデ連邦に近くなるにつれてレギオンの姿は見られなくなった。ギアーデ連邦の街並みが艦橋から見えてきたところでサーシャがレーナに訊ねた。

「レーナ達の国に向かうのはいいとして、向こうは私達のことを知らないのよね?」

「はい。『魔法』という概念も、この空を飛ぶ城のことも未知の存在だと思えます」

「いきなり撃ってきたりしないわよね…?」

「飛空城艦の真下をノウゼン大尉達が行軍していますから、それは無いと思いますが…」

現在アノスは艦橋に戻り、シンエイ達スピアヘッド戦隊が飛空城艦の真下を行軍する形でギアーデ連邦へ向かっていた。

シンエイ達が真下を進むことで、その上空の飛空城艦が敵ではないというアピールをする為である。

そしてその目論見通り、飛空城艦はギアーデ連邦国内に入国することが出来た。

そして現在、レーナとシンエイ、アノスの3人はギアーデ連邦暫定大統領であるエルンスト・ツイーマーマンと対面していた。

現在応接室にはレーナとアノスがソファに座り、レーナの背後にシンエイが控えている。

それに向かい合う形でエルンストがソファに座り、背後にはヴィレム・エーレンフリート准将とリヒャルト・アルトナー少将が控えている。

最初に口を開いたのはリヒャルトだ。

「それで、ミリーゼ大佐。貴官らが姿を消していた数日間、貴官らは別の世界に行っていたと?」

「はい」

「俄かには信じられないが、大佐の横にいるアノス陛下の存在がその

証拠になるか…」

「我々がいる世界は、数ある世界の一つに過ぎません。そして、その世界全てを巻き込んだ戦いが起こっています」

「すこしいいかな？」

そこでエルンストが口を挟む。眼鏡の奥の瞳を細めてレーナを見る。

「敵は我々に対して必ず敵対するのかい？ ミリーゼ大佐」

「はい。敵は我々を『適応者』と呼び、我々の世界に侵攻することを目的にしています。征服までは目的ではないと思いますが、侵攻してくる可能性は非常に高いと考えられます」

「敵はそれほどまでに脅威なのかい？」

「はい」

「しかし、こちらの戦力で対応出来るのではないか？」

そう言うヴィレムを見てレーナは首を横に振った。

「こちらにおられますアノス陛下は、生身でレギオンを殲滅出来ます。それも、デイノザウリアなども含めたレギオン群をです」

そう聞いてエルンスト達の顔色が変わった。驚愕に、だ。

基本人間は生身でレギオンには勝てない。ライフルなどで武装したとしても限界がある。例外としてヴィレムは白兵戦に長けており、『近接猟兵型―グラウヴォルフ―』程度なら相手を出来る。

しかしデイノザウリアを相手に出来、かつ撃破出来るとなれば驚く他なかった。

「しかし、敵の大將であるローズバルトはアノス陛下やそれに並ぶ強さの方達で挑んでも倒しきれませんでした」

レーナの発言を聞いてエルンスト達は黙る。

「しかし、レギオンの相手をしつつ異世界の敵に対処するのは難しいな」

リヒャルトの言葉にヴィレムも同意するように頷く。

「レギオンとローズバルト軍が戦闘して、潰し合う可能性は？」

エルンストがレーナに訊ねるが、レーナは答えることが出来ず黙る。代わりに口を開いたのはアノスだった。

「割り込んで悪いが、そうなったとしても意味がない」

「どういう事でしょうか、アノス陛下?」

「ローズバルトにとってレギオンは脅威ではないからだ。レギオンを撃破しながらでも、この国や周囲の国を襲撃するだろう」

「そうなれば、この国だけの問題ではなくなりますな。閣下、周辺国家にも知らせるべきでは?」

リヒャルトの提案を聞いたエルンストは、しばし俯き考えた。

そして顔を上げてアノスを見る。

「アノス陛下。敵が侵攻してくる時期はわかりますか?」

「現在は戦力を整えている頃だろう。もう少しは猶予があるだろう」

「そうですか——」

「——ただ。すぐにこの世界に侵攻してくるかは分からぬ」

「と、言いますと?」

「先程ミリーゼ大佐からも話があったが、世界は無数に存在する。この世界がどのタイミングで攻撃を受けるかは分からぬのが現状だ」

「それでは我々は、いつ襲ってくるか分からない敵に対して準備する必要があるということでしょうか?」

そう言ったのはヴィレムだ。

「それを伝える為に来たのだ。それと、ミリーゼ大佐とノウゼン大尉達を借りたい」

アノスの申し出を受け、リヒャルトとヴィレムは苦い顔をする。

理由はレーナとシンエイにすぐわかった。レーナとシンエイ達はギアーデ連邦の精鋭戦力。未知の脅威が迫る中、彼女らが欠けることはギアーデ連邦にとって痛手だ。

しかし、1人だけ、それに賛同した者がいた。エルンストだ。

「分かりました。ですが条件があります、アノス陛下」

「なんだ?」

「ミリーゼ大佐達を無事に帰すこと。これだけは守っていただきたい」

強い視線でエルンストはアノスを見る。

「わかった。元よりそのつもりだしな」

エルンストの目をしっかりと見てアノスは返答した。

「ありがとうございます…」

「礼を言うのはこちらだ」

そう言つてアノスは右手を差し出した。エルンストはそれを強く握った。

握手の後、エルンストはシンエイに訊ねた。

「ところでシン。フレデリカは連れて行くのかい？」

その質問を受けたシンエイはいつもの愛想の無い表情のまま答えた。

「『ここに残れ』と言つたところで大人しく残るとは思いませんが？」

「それもそうだね、わかつた。頼んだよ、『お兄ちゃん』」

そう言われ、少し嫌そうな顔をするシンエイであった。

一方、サーシャ達は飛空城艦が停泊している基地にいた。

ミーシャ、レイ、ミサ、シンに加えてセオ、アンジュとクレナ。それとフレデリカもいた。

ライデンはレギンレイヴの整備の打ち合わせの為ここにはいない。整備クルーとドックに行つてしまった。

それとエルネステイはライデンに頼み込んでついていった。レギンレイヴをはじめとするフェルドレスを生で見える為である。

「シンとレーナ、遅いね」

セオが頭の後ろで腕を組みながら溢す。

「アノスが余計なことを言つてなければいいけど…」

横でサーシャが溜め息を吐く。

そう言っているシンエイとレーナとアノスが戻ってきた。

「おかえり。随分長かったけど、何かあったの？」

アンジュがシンエイに訊ねる。

「状況を理解してもらうのに時間がかかった」

「まあ、突飛な話だもんね…」

そう言うクレナはシンエイが戻って嬉しそうだった。シンエイは周囲を見渡しセオに訊ねる。

「ライデンは？ それとエルネスティも」

「整備長と打ち合わせ中。大分酷使したから整備に出した方がいいつてさ。エルは、フェルドレスを見る為について行つたよ」

「そうか。だが、整備が終わり次第また出発することになった」

シンエイの発言を聞いてスピアヘッド戦隊の面々が表情を変える。

「もう行くの？ 早くない？」

「ていうか、よく上が許可したね？」

クレナとセオにシンエイは神妙な表情で返す。

「お前たちを借りたいと言つたのは俺だ」

そこでアノスが口を挟んできた。セオがアノスに訊ねる。

「でも、僕たちが戦力として必要？」

「未踏大陸で合流前に敵魔王軍を幾度となく撃退、撃破したとミリーゼからは聞いている。ともに戦って欲しいものだがな」

「わかつたよ。ところでレーナ、行くメンバーは変わらないの？ シン達も連れて行く？」

セオの問いにレーナは数秒考えた後、答えた。

「いえ、多くの戦力を連れて行く許可は出ませんでした。参加するのは我々7人です」

「7人…、てことはフレデリカも？」

「ええ」

「まあ、行くなと言っても聞かないだろうしね」

そう言うセオを見ながらレーナは少し笑った。

「シンと同じことをいいますね」

「簡単に考え付くと思うけど。ところでシン、ファイドはどうするの。連れて行く？」

「ああ」

シンは頷くと、ドックの方を見る。その視線の先にはこちらに近づいてくるオレンジ色の「スカベンジャー」がいた。

それと、一緒にこちらに来るライデンとエルネスティも。

「整備と持参するパーツの準備にもうしばらく掛かるらしい。それまで待機だな」

戻ってきたライデンが整備長との打ち合わせの内容を報告する。

「それと、ファイドを連れて行くだろうと思ってコンテナの準備は頼んでおいたぜ」

「ありがとう、ライデン」

『ピ、ピ、ピ、ピ』

シンエイの隣でファイドが電子音を鳴らす。しかし、何を言っているかは全く分からなかった。

ただ一人を除いて。

「一緒に来てくれるか？」

『ピ、ピ、ピ、ピ』

「そうか」

シンエイが訊ねるとファイドは電子音で答えた。シンエイはファイドが何を喋ったか分かるかのように答えた。

「え？ シンエイさんには何を言ったか分かったんですか？」

ミサが訊ねるとライデンが答える。

「ファイドが何を言っているかはシンにだけ分かるんだよ。俺達は何のこともかさっぱりだけどな」

「何かしらの特殊技能なのかい？」

訊ねたのはレイだ。ライデンは少し考えると問いに答えた。

「俺達もよく分かってねえんだ。だが“特殊能力”みたいなのはシンにはある」

「どんなものだい？」

「シンはレギオンの“声”を聞くことが出来るんだ。それでレギオンの大体の位置が分かる」

「じゃあ、対レギオンに於いてはノウゼン大尉は重要な戦力ってことだね？」

「最初は気味悪がった奴もいたけどな…」

「でも僕達自身、シンに助けられてきたからね」

とセオ。その横ではアンジュとクレナが笑っている。



「…いいチームなんだね」

「付き合いが長いだけだ」

レイの言葉をライデンは否定したが、その表情は満更でもない様子だった。

レギンレイヴの整備と補給が完了した。ついでとばかりに機体の修理パーツなどが満載のコンテナも準備された。

それらの飛空城艦への格納が完了すると、アノスの号令のもと飛空城艦は離陸した。

次の世界。エルネスティがいた世界に向かうために。

基地の滑走路から離陸する飛空城艦をレーナ指揮下の隊員達やエルンスト達が見送る。

フレデリカは艦橋から大きく手を振っていた。

「もう見えてないだろう」

フレデリカの背後に足音一つ立てずにシンエイは立っていた。フレデリカはもう慣れたのか、驚く様子は無かった。

手を振るのを止めて、シンエイに向き合う。

「それでも、〃行ってくる〃と伝えることは大事なことじゃ。お主たちこそ少しは手を振れば良かったものを」

「別に戻って来るつもりだし。そんなことをしなくてもいいだろう」

「良くないわたわけ。ミリーゼはシデン達に手を振っておったぞ。お主も少しは見習うべきじゃな」

「必要ない」

「…まあよい。次はエルネスティの世界じゃったな」

「ああ」

「すぐに着くのじゃろうな。この魔法とやらで動く城は」

「使ってみたいのか、魔法を？」

そう訊かれたフレデリカは少し考えると頭を振った。横に。

「べつにそうは思わぬ。わらわは自分に不満を抱いてはおらぬ、このままでよいのじゃ。それに…」

そこでフレデリカは言葉を切つて、シンエイの顔を正面から見ると、  
「わらわ達が持つ『血の力』も、考え方によつては魔法じやろうから  
な」

「…そうだな」

シンエイは頷くと、格納庫へと降りて行つた。

「『血の力』とはなんだ、ローゼンフォルト？」

艦橋の玉座に座つたままのアノスがフレデリカに訊ねる。フレデリカはアノスに向くと、その瞳を深紅に染める。

「わらわ達の世界では稀に『異能』と呼ばれる特殊能力を持つて生まれる者がいる。シンエイの『死者の声が聞こえる』というもののように、わらわにも『見知つた者の過去と現在を見る』力がある」

「ノウゼンは『レギオンの声が聞こえる』ではなかったか？」

「そうじゃ。レギオンは人間の脳を取り込んでおる。シンエイが聞いているのは『生きていた者』の声じゃ」

「気分がいい話ではないな。ではお前達は『同胞だつたナニか』と戦つていふというのだな？」

「…そうじゃ」

フレデリカは表情を険しくして頷いた。アノスはそれ以上この話題に触れなかつた

「それでアノス陛下。次は僕のいた世界に向かうということでしょうか？」

艦橋に上がつてきたエルネステイがアノスに確認する。

「ああ、エルネステイの世界にも知らせておくべきだろうからな」

「ご厚意感謝します」

「1つ聞くが、お前とローズバルトが戦つた場合、勝てるか？」

アノスに訊かれたエルネステイは考え込むと、しばらくして口を開いた。

「実際に戦つたことがないので分かりません。こちらからすれば相手は小さすぎますから、捕捉に手間取ると思います」

「そうか。ではもしローズバルトがいたのなら、俺が相手をしよう」  
「お願いします」

エルネスティは頭を下げた。

そうしている内に飛空城艦は世界の壁を越えて“世界の奔流”へと飛び出した。

アノスが玉座から立ち上がり、艦橋前方の窓へと近寄った。

窓から見える青白い世界。川の流れを彷彿とさせるその奔流の中に、いくつもの世界が漂っている。

その中には数日前まで滞在していたルーデウス達の世界もある。

「エルネスティ。お前の世界はどれだ？」

揺蕩う無数の世界を見比べながらアノスは訊ねる。エルネスティはシャボン玉のように揺蕩う無数の世界を見ていく。

「見当たりません。どれも知らない世界です」

「もう少し先に進むか。ミサ、前進だ」

アノスの指示を受けたミサは飛空城艦を前進させる。世界の奔流を進む飛空城艦の艦橋の両脇を世界を形成するシャボン玉が過ぎていく。

「この無数の世界の中に、いまだ未知の世界があるのでしようか？」

通り過ぎていくシャボン玉を艦橋から眺めながらレーナは言う。

「その可能性はあるだろうな。ざっと見る限り、俺達の世界よりも多くの世界がこの空間には存在している」

そう、アノス達はそれぞれ9つの世界から集まった者達だ。

しかし現在アノス達がいる空間には9つどころではない数の世界が存在している。

軍服に身を包んだ幼女が銃を手に戦場を闊歩している世界。

黒髪の男が勇者のような鎧を纏う男と殺し合いをしている世界。

髑髏顔のアンデットが配下を従えて覇道を歩む世界、など様々な世界が流れていく。

「ありました。あそこですー！」

エルネスティが指さした方向にはシャボン玉が浮かんでいる。

「あれで合っているのだな、エルネスティ？」

「間違いありません。あそこに向かってください」

「わかった。ミサ！」

「わかりましたアノス様。正面の世界に向かいます」

そう言うともミサは飛空城艦の進路をエルネステイが差した方向にある世界へと変える。

「エルさんの世界、私達のは違う技術体系を持つ世界ですね」

「楽しみじゃの！」

飛空城艦の進行方向を見ながらレーナとフレデリカも期待の声を漏らす。

一同を乗せた飛空城艦は、エルネステイの世界の壁に触れた。

## 異なる次元の日本へ

時は少し戻り。リムル達一行は。

ハルト達SORDの面々がいた世界に向かっていった。勿論、目的はローズバルトの脅威を知らせる為である。

「ところでさ。ハルト達の世界ってどんな感じなんだ？ 普通に日本とかアメリカとかあるのか？」

艦橋にて操舵をしながらリムルはハルトに訊ねた。ハルトは少し驚いた表情を浮かべるが、すぐに笑顔に戻して口を開いた。

「ええ、ありますよ。しかし、なんで国名をご存じなんですか？」

逆に訊き返されてリムルは「しまった！」という表情になる。そして少し考えると話し始めた。

「俺も日本に住んでたことがあるんだ。死んで目覚めたらスライムになってたけどな」

「“転生”というやつですか？ ネット小説とかで見たことあります」

「そうだな。今は一国の盟主だよ」

「どんな国なんですか？」

「魔物と人間が平和に暮らしている国だ。俺は魔物と人間の共存を目指しているからな」

「行ってみたいですね」

「ハルト達の世界を周ったら立ち寄るつもりだから、楽しみにしててくれ」

「はい。レナ達も喜ぶと思います」

「そのレナ達なんだけど。相談いいか？」

唐突な相談にハルトは一瞬表情を険しくした。

「なんででしょう？」

「SORDのメンバーはハルト達5人だけなのか？」

「いいえ、他にもいますよ。我が美浜学園はSORDを育成する機関の一つに過ぎません」

「てことは、他にもSORDが所属する学園があるのか？」

「そのとおりです。そして各SORD校には俺みたいなハンドラーがいて、レナ達のような人材を育成しています」

「立ち寄るのはハルト達の学園だけだけど、他の学園への情報共有は可能なのか？」

「問題ありません。ただ、ウチの組織にも親会社のようなものがある、そここの話し合いが難航しそうです」

苦笑いのハルトに同じように苦笑いの表情を向けるリムル。

「どの組織も『親』と『子』の関係は似てるのかな」

「お恥ずかしいですが」

申し訳なさそうにハルトが頭を掻いた。

「何はともあれ、報告には俺も立ち会おうよ。魔法が無い世界で実際に魔法を見せた方が話がスムーズに進みそうだしな」

「助かります。よろしくお願いします」

「別にいいって。ほら、着くぞ。ハルト達の世界だ」

リムルに促されたハルトは艦橋から外に目をやる。前方には大きなシャボン玉が浮かんでいる。その表面に映る街並みは間違いなくハルト達の世界だ。飛空城艦が世界の壁を抜けてハルト達の世界へと飛び込んだ。

「帰って来たね、ハルト」

ハルトの横にムラサキが並ぶ。レナやトーカ、クリスもハルトの近くにやってきた。飛空城艦は美浜学園近くの海に着水した。

「ああ、そうだね。でも、まだ終わったわけじゃない。まずは一縷さんに報告だ」

「有坂先生達も心配してるだろうからね。私達はそっちに挨拶してくるよ」

「わかった。リムルさんも一緒に来てもらえますか？」

「もちろんだ！」

ハルト、リムル、レナ、トーカ、クリス、ムラサキの6人は飛空城艦を後にして美浜学園へと向かった。

そして現在、ハルトとリムルは美浜学園の学園長室にいる。

ソファに座るハルトとリムルの向かいには、同じくソファに座る美浜学園学園長の仙石一縷（せんごくいちる）が煙草を吸いながらドカツと座っている。その背後にはお付きの野上姫子（ののがみひめこ）が姿勢を正して立っている。

「それで蒼井、そんなファンタジーな話を『上』に話せと？」

一縷が実に嫌そうに訊ねる。ハルトはいつもの笑顔のまま頷く。「危険が迫っているのは事実だし。準備をしておいて損はないかなって」

その返事を聞いた一縷は頭を抱えて髪をワシヤワシヤと掻く。後ろの野上が険しい目つきで訊ねてきた。

「そんな話が信じて貰えるわけが無いだろう。『戯言だ』と一蹴されるだけだ」

「そのためにリムルさんに同行して貰ったんじゃないか」

「たしかに真実だろうが、それで『はい、信じます』というような『上』なら、私達もこれまで苦労していないだろう」

リムルは一縷と野上に会った直後、自信をスライム化させたりして魔法の存在を2人には見せていた。

故に一縷と野上はハルトの話を信じたが、問題は『上』の存在だった。

「愚弟と宇川には伝えておく。それで、その魔王とやらはいつ来るんだ？」

「それは分からない。それとこの後、俺とレナ達はリムルさんと異世界に行くつもりだけいいかな？」

ハルトの言葉を受けた一縷は考えている。すると野上がリムルを向く。

「魔法が使えない蒼井達が戦力として必要ですか？」

野上の問いかけを受けたリムルは即座に頷くと、そのまま野上の顔を真っ直ぐに見ながら口を開いた。

「俺としては一緒に戦って欲しい。敵は強大だ、少しでも戦力は必要だし、早くケリをつけないとこの世界も危ない」

「…わかった！ 蒼井、A組からの出征メンバーの人は任せる」  
「わかった」

「いろいろ頼んで申し訳ない」

そう言っつてリムルが頭を下げる。一縷は煙草を灰皿に擦りつけて  
消火すると一言口を開いた。

「どうか死なない程度にコキ使ってくれ」

「そんなわけで、異世界に行くメンバーを発表しまゝす」

美浜学園A組の教室にいるハルトを除いた10人の視線が一斉に  
ハルトへと集中する。

そこでレナが手を挙げる。

「マスター。全員で行くんじやないの？」

「それも考えたんだけどね。いろんな可能性を考慮して全員での出征  
は止めておくことになった」

「私は!? 私はお留守番じゃないよね!?!」

「心配しなくてもレナは連れて行くよ」

「やったくー！ えへへ〜」

「ご満悦なレナから視線を外したハルトは教卓の右に立っている担  
任教師の有坂秋桜里へありさかしおり〜に視線を向ける。

「今回、有坂先生にはお留守番をお願いします」

ハルトの言葉を受けた有坂は驚愕の表情を浮かべる。

「ええ!? 私、先生ですよ!? 担任ですよ!? ついて行けないんです  
か!?!」

その表情と言動から「自分は必ず行く」と信じていたようだった。

「今回の出征は未知の世界での戦闘になります。危険ですし、有坂先  
生に危険が及んだ場合に助けることが出来る者がいません」

「あ、蒼井君も前線に出るんですか!?!」

「俺も出ます、なので有坂先生が来た場合、有坂先生を守る余裕ができ  
ない可能性が高いんです」

「…わかりましたあ」



明らかにガツクリしている有坂の次にハルトが『お留守番組』として名前を挙げたのは仙石大雅へせんごくたいがだつた。

学園長である仙石一縷の従妹にあたる大雅は美浜学園の初等部の生徒である。故にレナ達よりも年齢と体格が幼い。

ハルトがGOサインを出さなかつた理由はそれだつた。それに仙石家は日本国内において「名家」と言われている。大雅はその仙石家の姫であるため、万が一のことを想定しての判断だつた。

「大雅様も待機です。よろしいですか？」

ハルトが穏やかに大雅に訊ねる。まるで赤子を諭すように。

「ハンドラーであるハルトがそう判断したのなら従う」

「助かります。それとユーキもお留守番だ」

大雅に一礼したハルトはムラサキの姉ユーキを見る。

「ええ。なんでえ？」

ユーキは豊満な胸を両二の腕で寄せるように首を傾げる。そんな様子に少し不機嫌そうな表情をしながらもハルトは努めて冷静に話し始めた。

「万が一敵がこの世界に侵攻してきた時のためだ。うちちゃんやアヤメさんと連携して対処してくれ」

「わかつたわ」

ユーキの返事を受けたハルトは他の2人の生徒を見る。

トーカのバディでもある九真城恵へくましろめぐみとレナの妹である井ノ原真紀へいのはらまきだ。

「グミとマキには来てもらうから。山本さんに言つて装備を準備してもらつて」

「了解であります！」

「…わかつたよ」

グミとマキがは頷くと教室を後にする。

「ではリムルさん。この後の予定はどうしますか？」

ハルトは教壇の横に立つリムルを向く。

「一輝達の世界にも向かわないといけないから、準備が出来たなら出発したいな」

「わかりました。レナ達も、山本さんのところに行って装備を確認して貰ってください」

レナ達は返事をした後、教室を後にする。4人が退室したことを確認すると、ハルトは有坂へ視線を向ける。

「では有坂先生、残った生徒をお任せします」

「はい！ 任せてください」

ハルトにそう言われた有坂は力強く頷いた。

数時間後。

飛空城艦が停泊している海には人だかりが出来るといふ事態になったが。学園から要請を受けた警察の周辺封鎖によって大事になる前に収束した。

出発前、ハルトは野上にこの件で小言を言われたことは、また別の話。

そして、ハルト達は無事に飛空城艦へと戻ってきた。

ちなみにマキとグミの2人のテンションがおかしなことになったのは説明に難くない。

戻ってきたハルト達を一輝達が出迎えて一行は再び世界の奔流へと旅立っていった。

一方、リヒトー達の世界に向かったルーデウス達一行は、次の目的地である百代達の世界に来ていた。

リヒトー達の世界での用事はすんなりと終わった。現在、リヒトー達の世界での最高戦力である『撃墜王』が3人参加している以上、これ以上の追加派遣は困難だった。なので、ローズバルトへの警戒を伝えした後、出発したのだった。

場所は百代達が通う川神学園、ではなく。百代が使う武術『川神流』の総本山である『川神院』だった。

そこで客間に通されたルーデウス、オルステッド、リヒトー、ジェイルの4人は川神院総代であり百代の祖父である川神鉄心と川神院

師範代のルー・イーに会っていた。

エリスは川神院の門弟と稽古をしておりこの場にはいない。

客間に通されてすぐ『座ってばかりで、つまらないわ!』と一言発して、門弟たちが稽古している稽古場に向かったのだ。

よって現在、鉄心との話し合いに参加しているのは4人なのだ。ちなみに園原と道安は飛空城艦でお留守番だ。

「話はわかった。百代達も同じことを言っておる以上、真実じゃろう」「信じて貰えて助かります」

ルーデウスが鉄心に頭を下げる。百代達は川神学園に登校したが、鉄心にある程度話してから登校していった。

「異世界。俄かには信じられんが、こうしてお主達がこの場にいることが証明なのじゃろうな…」

「はい。この世界にも異世界の敵が侵攻してくるかもしれません。俺達は敵のトップである魔王ローズバルトを倒すために戦力を欲しています」

「百代が『相当強い』と言っておった敵か。こちらもそれ相応の戦力で臨まぬとな」

「百代達帰還組と、手練れを数名借りたい」

そこで口を挟んだのはオルステッドだ。オルステッドが言った『帰還組』とは異世界に飛ばされてた百代達川神学園メンバーのことだ。

「1人は、このルーを同伴させる」

鉄心に紹介されたルーが会釈をする。

「ルーはこの川神院の師範代。『手練れ』としては申し分ないはずじゃ」

「助かる。百代達の通う川神学園には『手練れ』と呼べる者はいないのか?」

オルステッドに訊ねられた鉄心は少し口ごもる。

それもそのはず。鉄心は川神学園の学園長でもある為、学園の生徒を危険な場所に行かせることは本意ではないのだ。

しかし、そう言っただけではいられないことも理解しているからこそ葛藤していた。

「少し、考えさせてくれんか？」  
結果として鉄心が出した結論は「保留」だった。

話し合いを終えたルーデウスはエリスを呼びに稽古場へと向かった。

エリスは川神院の門弟を薙ぎ倒すように模擬戦をしていた。その様子はまさに地獄、鬼に蹂躪されるかのように門弟たちは倒れていく。

勿論死んではない、気絶だ。

「ルーデウス！ 話は終わったの？」

稽古場の入口付近で見学していたルーデウスにエリスが声をかける。

「今日の所はね。とりあえず飛空城艦に戻ろう」

「そうね！」

エリスは門弟たちに礼をするとルーデウスと共に稽古場を後にした。

2人が去った後の稽古場に鉄心とルーがやって来た。

門弟たちは鉄心とルーに気付くと体に鞭打って立ち上がり礼をする。

「ああ、構わないから。休んでいなさい」

少し片言な独特の口調でルーが門弟を見渡す。ボロボロになり、立っているのもやつとの者もいる。

エリスが使っていたのは稽古用の木刀だったが、それでここまで川神院の門弟を戦闘不能にした強さに鉄心とルーは僅かに戦慄した。

「…ルーよ」

鉄心が門弟達を見ながらルーに声をかける。ルーは鉄心を向き、返事をする。

「何でしょう、総代？」

「龍神オルステッド達、異世界の強者をもってしても倒せぬ敵。危険な戦いになるが任せたぞ」

「お任せください。…ところで総代。他の人材はどうされますか？」  
先程の会談で議題になった“川神学園からの人材”のことだ。鉄心は出来ることなら川神学園の生徒を異世界に向かわせたくはない。しかし、オルステッドとルーデウスが話した現状を鑑みると、戦力が少しでも欲しいというオルステッドの気持ちも分かるのだ。  
だからこそ悩んだ。

その結果、川神学園から5人の生徒を百代達に加えて派遣することにした。

## 魔国連邦防衛線

リムル達一行は次の目的地である一輝達の世界に向かっていた。艦橋ではリムルとハルト、それと一輝と刀華の4名で今後の方針を話し合っている。

「一輝達の世界に行った後、俺達の世界に一度寄ろうと思うんだけど。どう思う？」

リムルは3人を見渡して意見を求める。するとハルトが口を開く。「リムルさんの世界にも状況を伝えた方がいいと思いますから、俺は賛成です」

一輝と刀華もハルトの意見を肯定するように頷く。

「ありがとう。その後はアノス達と合流するために異世界に向かおうと思うけど、どうだろうか？」

「なるべく早く、異世界に到着した方がいいと思います」

そう言ったのは刀華だ。他3人の視線を受けて、刀華は言葉が続ける。

「早く異世界に戻ることで、敵軍を牽制出来ます。私達が異世界に来たと知れば、敵も迂闊に動けないと思います」

刀華の意見は尤もだとリムルは思った。自分達、この際アノスやルーデウス達でもいいのだが、誰かが異世界に来ていることを敵が知ればこちらの世界への侵攻を牽制できる。敵が侵攻して未踏大陸が手薄となれば、そこを適応者に占拠されるからだ。

しかし懸念点もある。それは今回の分散作戦の原因となった「敵魔王軍の異世界への侵攻」だ。

現在のリムル達は異世界からも離れている為、敵がどういう行動に出るかなどの情報が足りない。故に早く異世界に到着して、敵の現状を把握する必要があるのだ。

「そうだな。急ぐ」

リムル達を乗せた飛空城艦は次の目的地である一輝達の世界に入した。

一方、アノス一行はというと。エルネスティ達の世界に向かい、ローズバルトの情報を伝えると時を待たず出発した。

その際、エルネスティの仲間であるキットとアデイを加えて戦力強化をしていた。

飛空城艦の格納庫内には5機のレギンレイヴとファイド。イカルガとキットとアデイの乗機であるツェンドルグが鎮座している。

「戦力は整いました。あとは——」

「——異世界で決着をつけるだけじゃの」

艦橋で世界の奔流を眺めながらレーナとフレデリカが言葉を零す。

「他の者達も目的を果たしているだろう。このまま異世界に向かい、合流する」

艦橋の玉座に座ったままアノスは各員に聞こえるように言う。

「アノス陛下の世界に向かわなくてよろしいのですか?」

レーナがアノスに疑問をぶつける。シンエイ達の世界とエルネスティ達の世界に行っただけで、アノス達の世界には未だ向かっていないからだ。

「配下達に留守は任せてある。何かあってもしばらくは持ち堪えるだろう」

出発前、配下の七魔皇老やエールドメイドに留守を任せてきた為、アノスは何も心配せず異世界に向かうことが出来た。

故にアノスは留守を任せることを貫く姿勢でいるのだ。

「では、このまま異世界に向か…。アレは何でしょうか?」

レーナが艦橋の窓から指した方角、そこにあつたのは。

「誰の世界だ?」

1つの世界だった。

本来、世界の奔流を揺蕩う世界は白濁としたシャボン玉のような様相をしており、薄く透けるようにその世界の様子が映っている。

しかし、現在艦橋にいる全員の視線の先にあるシャボン玉は白濁どころか赤黒く輝いている。

一目で「異常」だと理解できた。

故に結論が出るのも早かった。

「突入するぞ」

アノスの号令で飛空城艦は進路を“異常な世界”に変更した。

ミサの操艦で飛空城艦が前進する。その世界に近づくにつれて、その様相が露になった。

そこは、戦闘状態にあった。

硝煙があがり、人間とは違う姿をした魔物が戦っている。

戦っているのはローズバルト軍だった。

「アノス様、このまま突入しますか？」

ミサがアノスの方を振り向くと、アノスは頷き命じる。

「このまま前進。あの世界に入れ」

「分かりました、アノス様！」

飛空城艦は速度を落とすことなく、さらに加速する。そのまま世界の壁を突き破り進入した。

眼下には戦場となった森や街道が見える。森は焼き払われ、綺麗に舗装されていたであろう街道はガタガタに崩れている。

「これは、あまりにも酷いの。…まるで地獄のようじゃ」

艦橋の窓から眼下を見ながらフレデリカは言葉を漏らす。

「加勢しましょう、アノス陛下」

レーナがアノスに具申すると、アノスも同意するように頷いた。アノスの意図を察するようにミサが飛空城艦の高度を下げる。

「どうやら機工隊もいるようだ。ミリーゼ、ノウゼン達の出撃を」

「わかりました」

レーナは頷くと自身の知覚同調機械『パラレイド』を作動させる。

「スピアヘッド戦隊各位、出撃してください。前方の都市中央から北西に進軍して敵の迎撃を行ってください」

知覚同調によって伝わった指令通りにシンエイ達は出撃する。

「エルネスティ達は飛空城艦で待機だ。操艦は任せる」

「出撃しないでいいのですか？」

「見たところ非戦闘員もいるようだ。エルネスティ達の機体ではそれらに被害が出るかもしれぬ」



「分かりました。では操艦を引き継ぎます」

エルネスティはそう言うのとミサから操艦を引き継いだ。

「敵は都市の北西から攻めてきているね、僕達も北西に降りる？」

レイが降下ハッチに降りながらアノスに訊ねる。

「私達の存在を都市の責任者の方に伝えておいた方がいいんじゃない？」

ミサが疑問をぶつけるが、アノスは頭を横に振る。

「俺達の姿を確認すれば、向こうは分かるはずだ」

「えっ、それって？」

不思議そうにしているミサとは対照的に、アノスとレイは冷静に最前線の戦闘を見ていた。

いや。正確には魔眼にて『最前線で戦っている者』を見ていた。

「これは、『彼』が本気で怒るだろうね」

「ああ、ローズバルトは愚かな決断をした。それでも勝てる自身があるのかは分からぬがな」

2人が見ている先。その視線の先には。

魔国連邦テンペスト軍事部門総司令

ベニマルの姿があった。

「一般人の避難を優先しろ。『紅炎衆―クレナイ―』はゲルド達と合流して敵の迎撃！」

最前線で指揮を執るベニマル。さらに先で敵の軍勢を食い止めているゲルド含む第二軍団のもとへ自身の親衛隊である紅炎衆を向かわせると他の軍団の指揮をする。

戦端が開かれたのは数時間前。魔国連邦と周辺国家を結ぶ街道に設置された防御結界の一部に『異常な反応』が検知された。

その直後、北西方面が街道もろとも吹き飛んだ。正確には防御結界を突破しようとした『何者か』が防御結界ごと周囲を吹き飛ばした

のだ。

直ちに魔国連邦全域に警戒態勢が敷かれ、魔国連邦を守護する戦力が展開された。

ゲルド率いる第二軍団は北西方面に向かった。

襲撃者は、ゲルド達も知る敵だった。

魔王ローズバルト軍。

機工隊も引き連れてリムル達の世界に侵攻してきたのだ。

魔国連邦屈指の防衛戦力である第二軍団でさえ、徐々に押されていった。

ドラゴニユートのガビル率いる第三軍団が到着して上空からのブレスによる援護を開始した。しかし、敵幹部であるグワツツエが高く跳躍してガビルを殴り飛ばした。

ガビルは一直線に後方に吹き飛び、地面に激突する。

それでも残った団員で攻撃を続けるが、敵幹部の一人であるエンリクスの雷撃を受けて多くの者が戦闘不能となった。

ローズバルトは後方から前線の様子を見ていたが、一隻の飛空城艦がこの世界に進入したことで軍を動かした。

機工隊を前線に出して、第二軍団を一気に押し倒すつもりだ。

「マズいな、多方面から包囲されつつある。特に北西方面に戦力を割いてきた。戦力が足りない」

ベニマルは一般人の避難が完了すると北西方面へと向かった。走りつつベニマルはこちらに近づいている飛空城艦に気付く。

(なんだアレは、敵の増援か!?)

「ベニマル様!」

そこにガビルの配下が飛んてくる。

「どうした!?!」

「北から少数の軍団が接近しています!」

「敵か!?!」

「分かりませんが、敵軍へと向かっているようです!」

その返答を聞いたベニマルの頭にはいくつかの結末、その中でも最悪の結末が浮かんだ。

敵が前回の比ではないほど強くなっていることは理解していた。リムルが不在である以上。軍事部門最高司令官であるベニマルの負う責任は大きい。

偵察に出たソウエイの報告でローズバルトが北西戦線の敵軍の奥にしていることは判明している。

どうにかローズバルトを撃退すれば敵軍も同じように撤退するはずだ。

ベニマルはローズバルトがいるであろう敵軍の奥を目指して走る速度を上げた。

北西方面の最前線で防衛線を展開しているゲルド達のもとにベニマルが到着する。

「ゲルドー！」

ベニマルの呼びかけにゲルドが振り向く。

「ベニマル殿、この敵はー！」

「分かっている、リムル様が警戒した通りになった。敵軍の奥にローズバルトがいる、奴を撤退させれば敵軍も退くはずだー！」

「しかし、敵の攻撃が激しく。持ち堪えるので精一杯だ、どうやって突破する!?!」

「ヘルフレアで焼き払う。防御陣形のまままで戦線を維持しろ！」

「承知したー！」

ゲルドは承諾すると、部下に指示を出す。ベニマルの前方を僅かに開けるようにして道が出来る。

ベニマルが放った黒炎が敵陣へと飛来し、敵機工隊の中心付近でドーム状に燃え広がった。

敵軍の多くが黒炎に包まれる。やがて黒炎が収束すると、そこには敵機工隊の残骸が積み重なって――

――いなかった。

敵機工隊は健在。いや、多少の焦げ付きなどはあったが戦闘続行に支障が出るほどの損傷ではなかった。

「なに?！」

ヘルフレアがまるで効いていないことにベニマルは驚愕する。

「なんとー！」

ゲルドも同じ感情を抱いていた。それもそのはずだ、ベニマル屈指の攻撃であるヘルフレアをもものともしない敵の存在にその場にいるほぼ全員が驚愕し、戦慄した。

その時だった。

上空から無数の「ナニか」が敵機工隊へ降り注いだ。

その「ナニか」は敵機工隊に炸裂すると、周囲一帯を炎上させて吹き飛ばした。

何事かとベニマル達が茫然としてみると、ベニマル達に襲い掛かるうとしていた敵兵士が鈍い音と共に吹き飛んだ。

次いで1機の純白の四足歩行兵器がベニマル達の視線の先に躍り出た。

シンエイの『アンダーテイカー』だ。

それに続いてライデンの『ヴェアヴォルフ』とセオの『ラファイニングフォックス』も戦線に加勢する。

シンエイはアンダーテイカーの高周波ブレードを横一文字に構えて擦り抜けざまに敵兵士を両断する。

しかし、両断されても尚、敵兵はこちらに攻撃しようとしている。

シンエイはアンダーテイカーを跳躍させると高周波ブレードの剣先を下へと向けて敵兵士に降りかかると同時に突き刺した。

胴体に大穴と頭を潰されたことで敵兵は遂に絶命した。

直ちにシンエイは次の目標へと仕掛けていった。

それに続いてラファイニングフォックスが機体上部の88mm滑空砲を敵軍後方の機工隊へと撃つ。

機工隊は装甲を強化した『特攻型巨神外骨格』を纏った敵兵士が自軍の盾になるような陣形をとる。

88mm滑空砲から放たれた砲弾は特攻型巨神外骨格の両腕の増加装甲を用いた盾によって防がれた。

「やっぱり平地は苦手だよ。アンジユ、お願い」

セオは不得手な平地での戦闘に苦言を呈した。本来セオはワイヤーアンカーを使い、市街地などの障害物を跳躍移動しながらの戦闘を得意とするため平地での戦闘はそこまで得意ではないのだ。

「わかったわ。シン君とライデン君も後退して」

「了解だアンジユ。シン、一時下がるぞ！」

「わかった」

シンエイとライデンが後退したタイミングでアンジユがミサイルランチャーによる面制圧攻撃を行った。

敵軍は甚大な被害を被り、ついにはローズバルトが動いた。

「またしても邪魔をするか！」

ローズバルトは自軍後方から跳躍すると、ベニマル達のいる魔国連邦側の陣地へと降り立った。

突然敵の総大将が目の前に現れたことを好機とみたベニマルはローズバルトに仕掛けた。

太刀ともとれる長身な刀を構え斬りかかった。刀身に炎を纏わせて、だ。

結果、ベニマルは斬りかかった方向と真逆に吹き飛んでいた。

木に激突し、ズルズルと地面に落ちるベニマルは自身に起こったことを理解できずにいた。

いや、自信が「されたこと」は分かっている。しかし「何故そうなった」のかが理解できなかった。

「貴様は以前ポユテロに苦戦していた適応者か。やはり弱いな」

ローズバルトは拳を握り絞めながらベニマルに歩み寄る。

ベニマルを守るようにゲルド達が立ち塞がるが、ローズバルトが拳を振り払うと周囲が揺れ、ゲルド達も吹き飛ばされた。

ベニマルは刀を構えて立ち上がるとローズバルトを睨みつける。

「まだ戦意は残っているようだな。よかろう、次でトドメだ」

ローズバルトが拳を腰だめに構える。正拳突き構えである。

「リムル様が戻るまで、ここは死守する！」

ベニマルは決意を込めて刀を構える。ローズバルトの攻撃を受け止めるために。

「その忠誠心は見事だ。だが、実力が伴わない以上ただの戯言でしかない」

ローズバルトが腰を落とす。

「…終わりだ！」

ローズバルトが地面を蹴りベニマル目掛けて突進する。

ベニマルは刀を上段に構えるがローズバルトの速度が僅かに速い。

刀を振り下ろす前にローズバルトの拳がベニマルの顔面を吹き飛ばすだろう。

ローズバルトが拳を突き出す。確かに拳はベニマルの顔面を捉えた——

——はずだった。

何者かがベニマルとローズバルトの間に割って入り、ローズバルトの拳を受け止めて防いだのだ。

受け止めた衝撃が周囲に炸裂する。ベニマルも衝撃で少し後ずさった。

衝撃波で巻き上がった土煙が晴れていく。

ベニマルはローズバルトの拳を受け止めた人物をその目で見る為に目を凝らす。

そこには。

「ローズバルト。お前の選択は悪手だったな、これは『アイツ』が黙っていないぞ」

漆黒に染めたその指で、ローズバルトの拳を受け止める——

——暴虐の魔王。アノス・ヴォルデイゴードがいた。

## 魔国連邦防衛線②

「また貴様か、アノス・ヴオルデイゴード！」

ローズバルトが拳を振りかぶる。振りかぶった拳に雷が纏わり、アノス目掛けて振り下ろされた。

「ベブズド」

アノスは右手を漆黒に染めて受け止める。それによって発生した衝撃波で敵味方問わず周囲を吹き飛ばした。

ベニマルはゲルドが構えた盾に身を隠してやり過ごした。

しかしガビル達はそのまま吹き飛ばされた。

「サーシャ。リムルの配下が吹き飛んだ、何とかせよ」

リークスによつてサーシャに話しかけると文句の嵐だったが、サーシャは大人しく従った。

「ベニマル、ローズバルトは任せろ。お前は本陣に戻り指揮を執れ」

「しかし、アノス殿。俺は——」

「リムルも異変を感じて駆けつけるはずだ。主が帰るまでこの国を守りきるのがリムルの右腕であるお前の役目のはずだ。違うか？」

ローズバルトの拳を受け止めてパワーが拮抗したままアノスは諭すように話した。

「…かたじけない！」

そう言い残すとベニマルは本陣へと後退していった。

「たとえ貴様でも今の我を止めることは出来ぬ！」

「また滅ぼされたいようだな、ローズバルト」

アノスは右手で掴んだままのローズバルトの拳を振り払うと、ローズバルトの顔面目掛けて回し蹴りを繰り出した。

アノスの足は確実にローズバルトの顔面を捉えたが、ローズバルトは繰り出された脚を掴むと勢いよく振り落とした。

アノスは地面に叩きつけられるが受け身を取って後退する。

そしてローズバルトへ向かってジ・ノアヴスを放った。

黒き雷撃がローズバルトに纏わりつく。根源、魂を喰い続ける雷撃を受けてローズバルトは苦悶の声を上げるが。

「効かぬ、これしき！」

体を振り払うようにして捻り、ジ・ノアヴスを払い消した。

「ほう、このレベルの魔法も効かなくなっているとわな。リムルの世界に侵攻したのも、その強さゆえの自信か？」

ジ・ノアヴスを払ったローズバルトに賞賛を送りながらもアノスは攻撃の手を緩めない。

すかさずローズバルト目掛けてジオ・グレイズを放った。

放たれた漆黒の太陽は真つすぐローズバルトへと迫る。しかし、その大きさは普段アノスが使用するときよりも小さかった。

「この世界では少し勝手が違うようだな」

放ったジオ・グレイズの違和感を探りながらアノスは嘆息する。

ジオ・グレイズはローズバルトの目前に迫る。そしてローズバルトに直撃した。

「効かぬと言ったはずだ！」

ローズバルトは右腕でジオ・グレイズを払うと地面を蹴ってアノスに肉薄する。

そのままの勢いのまま繰り出された蹴りをアノスもまた蹴りで受け止めた。

「前回とは比較にならない。何があった？」

前はアノス一人でローズバルトを倒した。そこまで苦戦せず、だ。

しかし今回、今アノスの眼前にいるローズバルトは前回より遥かに強くなっている。

生き返った際に強くなったと考えていたアノスだったが、少し違う理由だと考え始めていた。

「最早『適応者』は貴様達だけではない、ということだ！」

ローズバルトは答えた。答えても何ら損が無いからだろうか、それとも別に意図があるのか。

どちらにしてもアノスにとって今重要な情報は一つ。

「お前も『適応者』になったということか？」

「我は世界を渡る術を得た。龍神のいる世界、そしてこの世界にも侵



攻めた。この次は貴様の世界に侵攻する、そして蹂躪する。我等はただ強くなる、貴様達が束になっても意味が無いほどになー！」

「させると思ったか？」

アノスがそう言った直後。4つの人影がアノスの背後に降り立ち砂煙を上げた。

降り立った人影の片方が砂煙を払うようにしてローズバルトに肉薄する。『それ』は鎧だった。いや、よく書籍で見る騎士のような鎧ではない。

細身とは言えないフォルムは若干ゴツゴツした見た目をしており、その左手には巨大な盾を持ち、右手には銃身が剥き出しのガトリングを装備している。

鎧は左手の盾でローズバルトを弾き飛ばした。

後方に弾き飛ばされたローズバルトにもう片方の人影が迫る。

その正体はローズバルトも知る者だった。銀髪と白のコートを靡かせて肉薄するその人物は。

「龍神オルステッド！」

ローズバルトは吹き飛ばされながらもオルステッドを視界に捉えていた。受け身を取り、迫るオルステッドを迎え撃つために構える。

しかし、左右に気配を感じたローズバルトは地面を蹴って跳躍する。

その気配はローズバルトを追うように上昇すると、ようやくローズバルトにも正体が分かった。

長い黒髪を靡かせて、学園の制服をマントのように肩に羽織った少女。もう一人は黒い軍服に身を包み、刀身の長い刀を抜刀姿勢で構える長身の男。

「武神と閃撃か！」

川神百代とリヒトー・バッハの2人であった。

リヒトーが放った光速の斬撃がローズバルトを捉える。ローズバルトは躲しきれないと判断して防御の態勢をとる。

リヒトーの斬撃による傷は浅いが、それによって空中での態勢を崩されたローズバルトは、続く百代の拳をモロに受けて地面に叩きつけ

られた。

叩きつけられる瞬間に受け身をとり、態勢を立て直す。そこにオルステッドと魔導鎧を身に纏ったルーデウスが追撃する。

オルステッドが放った『光の太刀』による斬撃を手を合わせるようにして受け止めるが、防ぎきれずその身に斬撃を受けた。

そこにルーデウスが『岩砲弾―ストーンキャノン―』を連射して牽制する。

「小賢しい！」

両腕をクロスするように構えてストーンキャノンを防いでいたローズバルトだったが。そのままルーデウス目掛けて突進した。

「な!？」

突然のローズバルトの行動に意表を突かれたルーデウスにそのままローズバルトはタツクルをくらわせる。

ルーデウスは後方に吹き飛ばされるが、どうにか立ち上がった。しかし、魔導鎧に与えられた衝撃が思いのほか大きいのか動きがぎこちない。

「援護をしろ、ルーデウス！」

その様子を見たオルステッドは即座にルーデウスを後退させると、アノスと並び立った。

ローズバルトの背後にはリヒトーと百代がいる。挟み撃ちの状況が完成した。

「…アノス」

オルステッドが隣のアノスに声をかける。

「お前の言いたいことは分かっているぞ、オルステッド」

アノスもオルステッドの言わんとすることを察していた。

「このままでは平行線だ」

「分かっている。仕掛けるぞ」

アノスの合図でオルステッド達も動いた。

一番に仕掛けたのはリヒトーだ。リヒトーはローズバルトに肉薄すると、握った刀を横薙ぎに一閃した。

光速で放たれた斬撃は衝撃波となってローズバルトに直撃した。

しかしローズバルトの胸元に横一文字の傷を付ける程度だった。

続いてオルステッドが光の太刀を放ち肉薄すると、ローズバルトの両目目掛けて手刀を突き出した。

しかしローズバルトはそれに対応し、突き出された手刀を掴むと、投げ飛ばそうと振りかぶる。

「させるかー！」

しかし百代が突き出した拳から放たれたエネルギー波によってローズバルトの全身の骨が軋みを上げる。

「ぐうー！」

苦悶の声を上げたローズバルトはオルステッドを離すと攻撃対象を百代に変更した。

ローズバルトは雷撃を拳に纏わせると百代へと突き出す。

百代はガードするが、雷撃によって僅かに腕が痺れた。

しかし百代は構わず拳を打ち込んだ。

「川神流。無双正拳突きー！」

高速で突き出された拳はローズバルトの腹部を捉える、深く抉り込んだ。間髪入れずもう片方の拳を叩き込む。

「その程度か武神ー！」

百代の正拳突きを連続で受けても尚、ローズバルトは反撃出来た。

繰り出された拳を避ける為に上体を逸らす、突き出された拳によって発生した衝撃波が百代を吹き飛ばした。

「ぐう、クソっー！」

空中で受け身を取り着地をした百代に追撃するためローズバルトは地を蹴った。

しかし正面に回り込んだリヒトーがローズバルトの首へと刀を振るった。

閃光。光の速度で放たれたその斬撃は確実にローズバルトの首を捉え、そのまま滑るようにローズバルトの首へと刃を食い込ませる。

「フンッー！」

突如ローズバルトの首が金色に輝き、リヒトーの斬撃を弾き返した。

それでもリヒト―は斬撃を放つが、金色に輝くその肌に悉く弾かれた。

「『金剛』か。デヒブよりも強固なようだな」

アノスが漆黒に染めた指先をローズバルトの胸元へと抉り込ませる。ローズバルトは闘技『金剛・極―きわみ―』によって防ぐが、徐々に指が食い込んでいく。

「先程の発言は撤回しよう。我はまだ最強ではないようだ」

ローズバルトが拳を振りかぶる。狙いはアノスだ。

アノスは動かない。いや、動けない。アノスがベブズドで漆黒に染めた指先を食い込ませた胸元。徐々に突破されようとする金剛・極の上、アノスの指に被せるようにローズバルトは金剛・極を重ね掛けた。

これまでとは違う金剛を見たアノスは僅かに驚いたが、それでも余裕の表情を崩すことはなかった。

「重ねた程度で。俺を捕らえたと思ったか？」

アノスが発したと同時に振り下ろされた拳をオルステッドが水神流奥義『流―ながれ―』によって受け流す。

振り下ろされた拳の威力をそのまま別方向へと受け流し、ローズバルトの態勢を崩した。

それによって金剛・極が解かれ、アノスは解放される。

『焦死焼滅燦火焚炎―アヴィアスタン・ジアラー―』

炎を纏わせた拳を振りかぶり、アノスはローズバルトに肉薄すると。そのまま拳を腹部へと打ち込んだ。

時は少し戻り。

魔国連邦の南より進軍してきたローズバルト軍をゴブタやハクロウ達が食い止めていた。

ローズバルトがいる北西方面に次いで激戦区となった南方戦線にもベニマルの指揮のもと多くの戦力が割り振られた。

そんな南方戦線にもローズバルトは幹部を投入しており、ハクロウ

とゴブタがそれぞれ戦っていた。

敵幹部のミニツサ、グワツツエ、ガイコツの内。ミニツサの相手をゴブタが、グワツツエの相手をハクロウがしていた。

ガイコツの相手は遅れて合流したガビルがしていたが、3人とも決め手に欠け、徐々に押されてきていた。

「こ奴ら、前回の敵よりも強い」

グワツツエの剛腕から繰り出されるパンチを躲しながらハクロウが言葉を漏らす。

魔国連邦において最強の剣士であるハクロウでさえ、グワツツエの剛腕は脅威であった。

放たれた拳を回避しつつ剣戟を浴びせるが、グワツツエの巨体に僅かな切り傷を付けるだけに留まっていた。

「随分硬いのお」

「鍛えているからな。この程度では倒れん！」

グワツツエは一度ハクロウから距離をとると、両拳を腰だめに構える。

すると大気が揺れ、グワツツエを中心に渦を巻いていく。強大なオーラが発せられ、ハクロウの肌にビリビリと伝わる。

グワツツエは大きく息を吐くと、吐いた息を補充するように吸い込んだ。

そして息を止め、一拍置いた時だった。

「ワイド・ボーン！」

腰だめに構えていた両拳を同時に前方に突き出した。突き出された拳からビームのように白いオーラがハクロウへと放たれた。

ハクロウ目掛けて一直線に放たれたオーラ。ハクロウはそのオーラを横に飛び退いて躲すが、オーラは意思を持ったように軌道を変えた。

ハクロウが何度避けても軌道を変えて追尾してくる。

「貴様達が以前戦った魔王軍幹部は、ただの尖兵。ザコだ」

オーラを躲し続けるハクロウを眺めながらグワツツエは喋りだした。

その表情は実に下卑た表情をしていた。

「だが今回は違う。こちらの戦力は十分にあり、ローズバルト様は力を強くした。これから、『惨劇』が始まるぞ」

グワツツエの話をハクロウは流しで聞いていた。

ローズバルトの強さに関しては真実だろうとハクロウは思った。ベニマルが手酷くヤラレたという報告はハクロウにも届いていた。

アノスが加勢して撤退することが出来たと聞いたが、そのアノスでも1人では倒しきれなかったようだ。

「…たしかにお主らは強いんじゃない？」

ハクロウは回避を止めて立ち止まる。背後からはオーラが迫ってくる。

「なんだ、諦めたのか？」

「そうではない。ただ逃げ回るのに飽きただけじゃ」

そう言い放ったハクロウは振り向きざまに刀を一閃した。

その剣筋は、オーラを切り裂き霧散させた。長年研鑽され、磨き抜かれた剣技をもって、ハクロウはグワツツエの攻撃を無力化したのだ。

「お主先程『惨劇が始まる』と言っておったの？」

「たしかに、言ったな」

自身の渾身の攻撃を無力化されたグワツツエは内心焦っていた。しかし平静を保ち、冷静に会話する。

「それをワシらが許すと思ったか？」

「許す許さないの話ではない。これはローズバルト様の計画を完遂するための道だ。そして、道に落ちている石は蹴ってどかするのが道理だろう？」

その言葉を聞いたハクロウ達の表情が怒りで険しくなった。明確な殺意を纏った表情を張り付かせ、眼前の敵を睨んでいる。

無論、その殺気は敵にも伝わっている。

そうやってハクロウ達を長髪するグワツツエを冷めた目で見ながらミニッサは嘆息する。

「悪趣味な挑発ですね。言っていることは正しいんですが」

「余所見とは、迂闊っスね！」

僅かに生じた隙を逃さずゴブタが仕掛ける。しかしミニツサはそれを難なく躲すと、二刀流による反撃を加えた。

攻撃を回避されたゴブタは一撃目は刀で受け流したが、続く二撃目をいなすことが出来ず腹部に裂傷を受けた。

「ぐっ！」

苦悶の声を上げながらもその場から飛び退き距離をとる。

「首を狙ったのですが。外しましたか」

ミニツサが剣を構え直しながら涼しげな表情で言う。

そんなゴブタを援護するためにガビルが駆けつける。

「お退がりを、ゴブタ殿！」

ガビルがゴブタの前に立ち、ミニツサを睨みつける。ゴブタは刀を構え直してガビルの横に並ぶ。

「大丈夫っスよ、ガビルさん」

「しかし無理をしない方が！」

「リムル様が戻ってくるまで、何としても死守するっス。こんなところで負けたくな——」

「——でえもなあ、お前え弱いかあらなあ」

そんなゴブタの背後に先ほどまでガビルと戦闘していたガイコツが現れた。ガビルが駆けつけたことで手が空いたガイコツがゴブタに奇襲を仕掛けたのだ。

ゴブタはガイコツへと刀を横薙ぎに振ったが、振った刀は刀身を挟まれるように消滅した。

「無意味だあぜえ、おおとなしいくしろよお〜」

ガイコツの手がゴブタの頭へと伸ばされた。ゴブタは飛び退くが、次元の裂け目が目の前に現れて手を伸ばしてきた。

ガイコツの伸ばした腕の肩から先が次元の裂け目に飲まれて、実体的、物的な距離を超えてゴブタの眼前に伸ばされたのだ。

ゴブタの頭に伸ばされた手は、どこまでも次元の裂け目の位置を変えてゴブタを追尾する。

「させぬ！」

ガビルがガイコツに攻撃するが、ミニツサによって妨害される。

「させないのはこちらです。邪魔はさせません」

「ミイニツサア、もうう少しいだあ。持おちこたえてえくれえよおく」  
「さっさとしてください」

ミニツサはそう言うのとガビルの槍『水渦槍―ボルテクス・スピア―』の刺突をいなす。

突き出された矛先を二刀の剣をクロスさせて地面に固定させると、ガビルの顎を蹴り飛ばした。

よろめいたガビルの腹部を続けざまに蹴ると、ガビルの口から胃液のような物が漏れた。

その一部がミニツサの服に掛かると、ミニツサの表情が険しくなった。

「汚いですね、勘弁してもらいたいものです！」

ミニツサはボルテクス・スピアを地面に固定していた二刀の内、一振りを引き抜くと、ガビルの背後に回り込んだ。

顎を蹴られ、続けて腹を蹴られて意識が朦朧としているガビルだが。なんとか反応してボルテクス・スピアを勢いよく地面から引き抜きミニツサへと一閃。

しかし矛先は虚空を裂いた。

「どこを見ているのですか？」

ガビルの背後に回ったミニツサがボルテクス・スピアが引き抜かれた際に空に舞ったもう一振りをキャッチする。

そのまま剣を二刀とも上段に構えて。

振り下ろした。

振り下ろされた剣はガビルの翼を斬り落とした。両翼ともである。

「ぐあああああー！」

ガビルは痛みに悲鳴を上げてその場に倒れ込んだ。

「ガビル!？」

「ガビルさん!？」

ハクロウとゴブタはガビルの元へ駆けつけようとするが、グワツツエとガイコツによって阻まれる。



「終わりです」

ミニツサが剣先をガビルの頭に向ける。

「や、やめるっスー！」

ゴブタは必死の形相で叫ぶが、ガイコツの手がゴブタを射程範囲に捉えた。

「ひとおの心配いを、してるう場合いかあ？」

ガイコツのあるはずのない眼が、薄気味悪く光った気がした。

「クソっ！ やめろっスウウウウ！」

ゴブタが必死の叫びを放った。

次の瞬間であった。

ガイコツとミニツサが突如、地面にめり込むように倒れ込んだのだ。

「随分と状況が悪いみてえじゃねえか」

「この国を守ろうとするその信念、見事だ」

「お節介ですが、手を貸します」

“重撃の撃墜王” 道安武虎

“アルシア王立軍総司令” ジェイル・マードック

“追撃の撃墜王” 園原水花

3人の戦士が加勢に来た。

### 魔国連邦防衛線③

時は少し遡る。

アノス達が降下した後、エルネスティは飛空城艦の進路を世界の外へと向けた。

そして世界の外へと出た飛空城艦はリムル達の世界の周辺を周りに続けた。そうしていれば、他のチームが気付くかもしれないと考えたからだ。

結果としてルーデウス達が搭乗する飛空城艦が近くを通った際、エルネスティからこの事態を聞くことが出来た。

それが結果として、テンペストにとつての増援となったのだ。

そして現在。ルーデウス達と共に駆けつけたリヒトー達も、それぞれの戦場に降り立っていた。

「大丈夫ですか？」

園原が倒れたガビルに駆け寄る。ガビルは途切れそうな意識の中、園原に問う。

「貴殿らは。一体…？」

「安心してください、リムルさんの仲間です」

「リムル様の…？」

「ここは私達が食い止めます、一時後退してください」

そう言う園原はガビルの上体を起こし、駆けつけたゴブタに任せた。

ゴブタは近くで待機していた嵐牙狼にガビルを乗せると、自信も乗り込み後退した。

「手伝っていただけますか？」

園原がハクロウに声を掛けると、ハクロウは静かに頷いた。

「いくぞー！」

ジェイルがグワツツエへと突撃する。

グワツツエはハクロウから視線を外してジェイルを迎撃する態勢に入る。腰だめに構えた拳を勢いよく突き出すと、ジェイル目掛けて衝撃波が放たれる。

ジェイルは瞬時に鉄柱を作り出してグワツツエへと投擲する。

鉄柱と衝撃波がぶつかり、僅かに大気が揺れた。構わずジェイルはグワツツエとの距離を詰める。

そんなジェイルにグワツツエも同じく近づいていく。

グワツツエは歩みを止めると、右拳を地面に突き出した。

「ビッグ・ボーン！」

勢いよく地面に拳が突き刺さり、その衝撃で地面から岩が盛り上がった。盛り上がった地面は波のような形状となり、ジェイルに襲い掛かった。

「鉄獅子！」

ジェイルが形成した鉄が悪鬼を思わせる化身となって現れる。余裕で人より大きな鉄獅子には腕があり、鬼を思わせる牙と鬣を靡かせていた。

鉄獅子はジェイルを守る様にガード態勢をとると、地面の波をもろに被った。

しかし、鉄獅子が地面を殴り飛ばすように粉碎する。

「随分と図体がデカいなその鉄獅子とやらは」

「貴様に言われたくない」

グワツツエの皮肉を打ち返すと、ジェイルは鉄獅子を操り攻撃をしかける。

繰り出された拳がグワツツエが立っていた地面を抉る。グワツツエは飛び退きながらも反撃する。

グワツツエの繰り出した拳を鉄獅子の拳が真正面から打ち払う。

「おい、ミニッサ。こっちを手伝え！」

グワツツエがミニッサに援護を求めるが、ミニッサは園原と戦闘中の為その場を動けない。

園原が放った銃弾は縦横無尽にミニッサに迫り、包囲するように襲い掛かる。

「ふっー」

ミニッサが剣を振るうと銃弾は弾き返されて地面に落ちた。

「こちら手一杯です。1人でなんとかしてください」

「ちっ！」

ミニツサの素っ気ない返事に舌打ちを打つと、グワツツエは再び鉄獅子と拳を交えた。

本陣に帰還したベニマルを行政管理担当のゴブリン「リグルド」とベニマルの妹のシユナが迎える。

「ベニマル殿、敵は!?」

リグルドが食い気味に訊いてくる。ベニマルはそれを避けて戦力分布図を広げた机に向かいながら答える。

「アノス殿をはじめとした異世界の戦士達が加勢してくれたおかげで市民への被害は出ていない」

アノスの名前を聞いてシユナが驚きの声を漏らす。

「アノスさん達が来ているのですか?」

「ああ。現在、魔王ローズバルトを食い止めている。他にも、純白のモンスターもこちらに味方している」

「純白の、モンスター?」

シユナが疑問を漏らした次の瞬間、本陣にベニマルの部下が駆け込んできた。

「ベニマル様。ご報告が!」

「なんだ?」

ベニマルは分布図から視線を上げて訊ねる。部下は少し言い淀んだが、意を決したように口を開いた。

「ガビル様が重傷を負い後退しました。現在ハクロウ様が異世界の戦士の方と共闘して迎撃を継続中!」

「ガビルが重傷を負った?」その言葉に一同がざわつく。

「フルポーシヨンは使用したのか!」

「使用しましたが、効果が無く。切断された翼も元に戻りませんでした」

その報告を聞いたベニマルは僅かに戦慄した。フルポーシヨンでも回復しないとなれば、死者が出るのも時間の問題だからだ。

現在各方面から侵攻を受けているテンペストの戦力も無尽蔵ではない。

そんな中、幹部のガビルが重傷を負ったことで、戦線が後退する可能性もある。

現在ディアブロ達、他の幹部も防衛戦を継続中だが。どうなるかはわからなかった。

「ベニマルはいる!?!」

そんなところに聞き覚えのある声が響く。ベニマルとシユナが声の方向を見ると、エリスがこちらに歩いてきていた。

「エリスか?」

「久しぶりねベニマル、シユナも!」

「お久しぶりです」

「アノス殿達と来たのか?」

「アノスとは別よ、上を飛んでいる飛空城艦で来たわ!」

そう言ったエリスの頭上を飛空城艦が過ぎていく。その飛空城艦から人影が降下していくのをベニマルは確認した。

「他にもいるのか?」

エリスに視線を戻してベニマルは訊ねる。

「それは敵? それとも味方?」

「味方だ」

「ええ、前回よりも多いわ。比例して敵も多いけどね」

「オルステッド殿やルーデウス達は?」

「アノスと一緒にローズバルトを抑えているわ!」

「そうか…」

「私は北に向かうわ。ベニマルはどうするの?」

そう言うエリスの視線は、ベニマルに何かを語りかけていた。まるで『お前は来ないのか?』とでもいうような。

ベニマルは決意してシユナを振り向く。

「シユナ、俺はエリスと北方戦線に向かう。ここは任せていいか?」

シユナは『待ってました』とばかりに笑顔で頷いた。

「行ってらっしゃい、お兄様」

「これは酷いな…。敵はお構いなしだ」

飛空城艦の艦橋から双眼鏡で戦線の様子を見ていた大和は憤りの声を漏らす。

現在ルーデウス達が乗ってきた飛空城艦の操艦は一子が担当している。大和は京と一緒に戦線の様子を確認していた。

「モモちゃんは敵総大将と戦ってるね」

同じく双眼鏡で北西戦線を観察していた清楚は薙ぎ倒されていく木々から百代が戦っていると判断した。

そこに大和は東部戦線に侵攻している軍団に気付いた。

見る限り敵軍の方がリムルの軍団よりも多く、苦戦するかもしれないと判断した。

そして、そんな大和と同じ考えの者が1人いた。

「大和くん、私も行くね。敵よりリムルさんの味方の方が数が少ないみたいだから」

「わかりました。葉桜先輩、気を付けて」

清楚が艦橋から底部ハッチへと降りていく。ハッチ格納庫には1台の黒いバイクが停まっていた。

そのバイクのボディを撫でると、清楚は右手を顔にあてる。

「悪いけど、ちよつと出て来てくれないかな?」

「え、嫌? いつも勝手に出てくるくせに?」

「モモちゃんも戦ってるよ? このままじゃ置いていかれるよ?」

独り言のような、会話のような。そんな言葉を発したかと思えば、清楚は開いた底部ハッチから飛び降りた。

降下していない飛空城艦から命綱無しバンジーを敢行した清楚の体はグイグイと地面に吸い寄せられる。

「ふ、ふふ、フハハハハハハ!」

突如笑い声を上げる清楚、その瞳は元の「黒」から妖艶に煌めく「赤」に変わっていた。

清楚はそのまま真っ逆さまに降下し、ヒーロー着地を決めた。

「スイ、方天画戟を出せ！」

清楚の言葉に従うように飛空城艦格納庫にあるバイク『スイスイ号』から武器が投擲された。

清楚は跳躍し、空中で方天画戟を掴むとそれを振り下ろしながら再度着地した。

清楚の姿を視認した敵軍は進軍を止めて様子を伺っている。

「『清楚』は数で不利だと言っていたが。質は申し分ないようだな」

そう振り返った清楚の視線の先には、ソウエイとその部下がいた。

「お前は何者だ？」

ソウエイが訊ねると、清楚はフハハと笑い答えた。

「我が名は『項羽』。安心しろ、リムルの仲間だ」

「どの世界の者だ？ アノス殿か、それともオルステッド殿か？」

「どちらでもない。俺はお前達が言う『前回組』ではないからな」

「敵ではないのだな？」

「それは保証しよう。…さて。敵の数は多いが、相手にならんだろうな」

そう言うとき清楚——もとい項羽は方天画戟を振り上げる。

そして一気に踏み込んだと思うと地面を蹴って跳躍し、敵軍目掛けて振り下ろした。

振り下ろした衝撃は敵軍の前衛集団を天高く吹き飛ばした。項羽はそのまま敵軍へと歩いていく。

敵兵士は一瞬怯んだが、武器を構えて突撃した。

しかし、項羽が方天画戟を一振り、もう一振りするたびに敵兵士は吹き飛ばされていく。

「前に大和が言っていたな。敵集団を一か所に集めて叩くよりも分散させて各個撃破した方が確実だと。なら！」

項羽は方天画戟を振るう際、敵を散り散りに吹き飛ばすようにした。

それによって集中していた敵軍を分散させることに成功した。

しかも、多くの敵兵士は森林へと散り散りになった。

「おい。お前」

項羽は状況を見ていたソウエイを振り返る。

「なんだ？」

「お前たちは忍者だろうか？ 闇に潜んで敵を倒すことには慣れているか？」

「…ああ」

ソウエイは頷く。それを聞いた項羽は再びフハハと笑い口を開いた。

「俺は目の前の残った敵集団を倒す。お前達にはバラバラに散った敵をやる、忍者なら森での戦いは得意だろうか？」

「…いいだろう」

そう言うとソウエイとその部下は一瞬で姿を消した。しばらくすると周囲全体から敵兵士のもものと思われる悲鳴が聞こえてきた。

その悲鳴は項羽の目の前にいる敵兵士達に恐怖を植え付けた。

「では、俺も始めるとしよう」

項羽は方天画戟を振り上げると、地面を蹴って敵集団へと突撃した。

振り下ろした方天画戟が地面を抉る。それによって発生した衝撃波によって敵兵士が数名打ち上げられる。

項羽は跳躍すると1名の敵兵士に肉薄すると態勢を崩して落下していく敵兵士の腹に拳を叩き込んだ

腹に強烈な一撃を食らった敵兵士は勢いよく殴り飛ばされ、別の落下中の敵兵士に激突してそのまま地面に墜落した。

墜落した2名の敵兵士は地面に小さなクレーターを作ると、そのまま動かなかつた。

関節が変な向きに曲がった死に方だったため、それを見た他の敵兵士はさらに恐怖した。

項羽はそれに見向きもせず、他の兵士を次々に地面に叩き落としていった。

着地した項羽は再び敵集団へと肉薄すると、敵兵士の1人に方天画戟を振り下ろした。

振り下ろされた方天画戟を敵兵士は避けることも、ましてや受け止



めることも出来ずに片口を負傷する。

項羽は苦悶の声を上げて蹲る敵兵士を蹴り飛ばすと、別の兵士に斬り込んでいった。

---

「葉桜先輩も戦闘を開始したね」

飛空城艦の艦橋で戦況を見守っていた京が隣で双眼鏡を覗いている大和に声をかける。

「ああ。それじゃあみんなには、別の戦線に降りて貰おうかな」

そう言って振り返った大和の視線の先には、2人の川神学園生徒がいた。

## 魔国連邦防衛線④

ローズバルトとの戦闘にも進展が見られた。

最初こそ互角にアノス達の相手をしていたローズバルトだったが、徐々に押されてきていた。

「…まだ届かず、か」

ローズバルトはアノス達から距離を取ると両拳を腰だめに構える。

「うおおおおお！ グレート・ワイド・ボーン！」

勢いよく突き出された両拳から放たれた衝撃波がアノス達に迫る。すると一同の先頭に百代が躍り出る。

「川神流、 畳返し！」

百代が地面に拳を突きつけると、まるで畳を返すように地面が捲れ上がった。

捲れ上がった地面の壁によって衝撃波を受け止めるが、全てを受け止めることは出来ず壁は軋みをあげて押されてくる。

「川神流、 星殺し！」

衝撃波に耐え切れず、砕け散りそうになる壁もろとも百代はローズバルト目掛けてエネルギー波を放つ。

そのエネルギー波はさながらビームのように百代自身で捲った地面の壁を突き破り、衝撃波と衝突する。

ローズバルトが放った衝撃波は百代のエネルギー波すらも抑え込む。

「嘘だろう？ そんなのありかよ」

百代に焦りが滲む。横からアノスが放ったギア・グレアスの岩の流星群によってローズバルトが態勢を崩すことで衝撃波が弱まる。

その際にオルステッドとリヒトーが肉薄する。

オルステッドの光の太刀とリヒトーの光速の斬撃を左右から受けたローズバルトが膝を屈した。

「まだだ！」

ローズバルトは再び立ち上がる。そこにローズバルト軍の兵士が2人やって来る。

「我は負けぬ。負けるのは貴様達だ」

そう言うのとローズバルトは兵士2人の首を掴んで持ち上げる。

「今の我にはこういう事も出来る」

ローズバルトの拳が光輝くと、掴み上げられている兵士が見る見るうちに痩せ細っていく。

まるで「命を吸い取られる」ように。

「味方を食い物にするか、見下げた魔王だな」

オルステッドが静かに怒りの声を漏らす。

そして、すっかり搾りカスとなった兵士をそこらに放り投げると、ローズバルトは天へと雄叫びを上げる。

「さあ、2回戦目といくぞ。覚悟し——」

「——覚悟するのはお前だ、ローズバルト。お前に王を名乗る資格はない」

アノスでも、オルステッドでも、百代でも、リヒト——でもない声が響く。

「貴様は！」

ローズバルトがアノス達の頭上に視線を向けて驚愕の声を漏らす。「遅かったな、待ちくたびれたぞ？」

対照的にアノスは頭上を見上げることもなく冷静に話す。

「悪かったなアノス。それとありがとう、みんな」

上空から声の主が降りてくる。降り立った人物の背後から2つの人影が姿を現す。

1人は一輝、もう1人は刀華。

そして——

「ローズバルト。お前、生きて異世界に戻れると思うなよ？」  
降り立った人物。リムルⅡテンペストがいた。

シオンとランガはリムルと分かれて本陣に戻って来ていた。  
「シユナ様！」

「シオン、戻ったのですね？」

本陣にてシオンとシュナが再開を喜ぶ。

「シオンが戻ったということは、リムル様も？」

「はい。ローズバルトの元に向かいました」

「現在、アノス様やオルステッド様達が迎え撃つてくれています。各戦線も、異世界の方々の助力もあつて持ち堪えています」

「そうですか。一般人に被害は？」

「ありません。ただ…」

途中まで言いかけてシュナは言い淀む。そんなシュナにシオンは首を傾げる。

「シュナ様？」

「ガビルさんが敵幹部と交戦した際、重傷を負いました。フルポーションでも回復しません」

「そんなっ!？」

「現在、異世界の方々とハクロウが協力して戦っています。お兄様はエリスさんと一緒に北方戦線に向かいました」

「では、私もハクロウの援護に向かいます」

そう言うときシオンは愛刀『剛力丸・改』を肩に担ぎ、本陣を後にした。

「頼みましたよ、シオン」

シオンが向かった先にシュナは言葉を零した。

「なんだか体が軽いな」

ハルトは木の陰に隠れて軽くジャンプする。

「危ないよハルト、敵は正面にいるんだから」

傍に隠れているムラサキに注意されたハルトは大人しく姿勢を低くして隠れる。

現在ハルト達SORDの面々がいるのは北西戦線の北寄りに位置する森林だ。

敵幹部であるエンリクスを他の戦線に向かわせないために足止め

している。

レナが新たに持参したアサルトライフル『M4レギウス』でエンリクスを牽制するが、エンリクスを囲むように放たれる電撃に阻まれる。

「銃弾が効かないよ、マスター」

「とりあえずは足止めだ。リムルさん達がローズバルトを撃破するまで、あの敵をここで食い止める」

「了解！」

レナがレギウスで正面から牽制し、エンリクスをその場に釘付けにする。

（こちらを牽制するのが目的。ローズバルト様の元へ行かせない為ですか）

エンリクスはハルト達の狙いを看破していたが、レナとマキによる銃弾の弾幕の濃さによって動けずにいた。

雷撃を放てば銃弾を無力化できるが、エンリクスが警戒しているのは他のSORDメンバーだ。

（ヤツらは5人いたはず。現在蒼髪と他2人は確認できますが、他の2人は何処に？）

エンリクスは木の陰から銃弾の射線を辿る。その先には確かにハルトを含む3人がいた。

しかしそもそも、エンリクスは大きな勘違いをしている。正確には敵は7人いるのだ。

ハルト達が元の世界に一度戻り、マキとグミを連れてきたことをエンリクスをはじめとした敵魔王軍は知らないのだ。

無論、他の適応者の加勢でもある。

周囲を警戒しているエンリクスの足元にスモークグレネードが投げ込まれる。

ムラサキがハルト達から離れてエンリクスの右側面側に迂回し、投げ込んだのだ。

「ゲホッ、ゲホ。鬱陶しいですね！」

エンリクスがスモークグレネードが投擲された方向に雷撃を放つ、

しかしすでにムラサキの姿はそこにはなかった。

(手応えが無かった。…どこに!?)

煙で周囲の状況が確認できないエンリクスにレナとマキが放つ銃弾が襲いかかる。

エンリクスは発射音を確認してから雷撃を自身の周囲に展開するが、数発をその身に受ける。

「ぐっ、ああー!」

苦悶の声を上げてその場に蹲る。しかし、エンリクスに迫るのは銃弾だけではなかった。

「っ!」

咄嗟に反応したエンリクスは両腕に雷撃を纏わせてガードの態勢をとる。

そこに間髪入れずに一本の刀が振り下ろされる。

煙とレナ達の牽制の隙を突いてハルトが突撃したのだ。

「奇怪な武器を使いますね…。厄介ですよ!」

振り下ろされた刀を両腕で抑えながらエンリクスは毒づく。

「あれ、銃を知らないの? てつきりその辺の情報は持つてるんだと思ってたのに!」

ハルトはエンリクスの言葉に疑問を投げかける。

これまでハルトは敵が自分たちの情報を掴んでいるものだと思っていた。無論、銃の存在も敵は掴んでいる。

しかし、今日の前にいるエンリクスの反応を見る限り、ハルトの思い違いだったのかもしれない。

「煙とは想定していませんでした。おかげでこのザマですよ!」

「でもこれで一つ、こちらの戦力を知ることが出来たんだから、よかつたんじゃない?」

「おちよくつっているのですか?」

「いたって真面目なんだけどなく!」

軽口を叩きながらもハルトは振り下ろす力を緩めない。

体重を乗せているため、エンリクスは徐々に押されてくる。

「もう後が無いよ?」

「ええ。しかし、まだです！」

エンリクスがクロスさせた両腕のガードを横にずらすと、振り下ろすために体重を乗せていたハルトの態勢が崩れる。

エンリクスは態勢を崩し、その場に倒れそうになるハルトの顔面に掌をかざすと、そのまま最大出力で雷撃を放った。

しかしハルトは上体をずらしてそれを回避すると、地面に手を着いて態勢を戻して距離をとる。

エンリクスはハルトを追撃したがレナとマキの放った銃弾がハルトの背後から襲い掛かる。

エンリクスは雷撃を前面に展開して防ぐ。

しかし、次の瞬間。右方向の陰から現れたムラサキがカスタム自動小銃『ニンジャガン』から銃弾を放った。

銃弾はエンリクスの右二の腕に吸い寄せられるように命中した。

「ぐッ、くそおっ！」

エンリクスは構わずハルトに突進する。

しかしハルトはステップで後方に距離をとる。

2人の距離はまだ遠い。

パスン。表現によってはストーンとも聞こえるだろうか。

そんな音とともにエンリクスの足元を一発の銃弾が翳める。

これまでとは違う射撃だと察したエンリクスは一瞬歩みを止めて振り返る。

(5人目。ここからは見えない。遠くからの攻撃ですか！)

5人目が行った攻撃が「狙撃」だとエンリクスが理解するのに要した時間は一瞬だった。

しかし、その一瞬を見過ごすことなく放たれた銃弾が、エンリクスの喉を貫通した。

(何故、何故だ！ 敵は5人ではなかったのか!?)

喉を撃ち抜かれたことで言葉を出すことが出来ないエンリクスは、自信の喉を撃ち貫いた銃弾の射線を目で追った。

そこには――

「ふく。危なかつたでありますな、ハルト殿」  
グミの『ステアーAUG』から放たれた銃弾が、エンリクスの喉を貫いたのだった。

ローズバルトは感じた。

「…エンリクスか。役立たずめ」

エンリクスが戦闘続行不能になったことをである。  
部下の醜態に毒づきながら拳を振り上げる。

「引き際か…」

そう言つて振り下ろした拳をリムルが刀で受け止める。

「逃がさないと言つただろ」

リムルは身を翻してローズバルトの顔面に蹴りを見舞うが、足を掴まれて叩きつけられそうになる。

スライム形態になって脱出すると、一旦距離をとる。

リムルの右隣にはアノスが、左にはオルステッドがいる。回復したルーデウスも合わせた8人でローズバルトを取り囲んだ。

「この世界での目的は達成した。我は次の目的の為にここは撤退する」

「引き際を弁えていることは評価するが。逃げ切れると思うか？」

アノスが訊ねるとローズバルトは大声で笑う。

「…何がおかしいんだ？」

リムルが感情を殺した低い声で訊ねる。そんなリムルとは対照的にローズバルトは笑っている。そして空を見上げて言った。

「この世界に侵攻した我が軍の戦力は、ほんの一部。そして貴様達を滅ぼすために用意した“モノ”を見せてやる！」

ローズバルトが言い終わると同時に空の彼方から“ナニか”が降り立った。

激しい轟音と地響き、そして土煙を上げて着地したそれは――



——巨人だった。

## 魔国連邦防衛線⑤

降り立った「モノ」は「巨人」だった。

いや。「巨人」といっても人間を巨大化させたものとは違った。

鈍い銀色に輝き、ゴツゴツとした武骨な巨体。

人体のような曲線など一切無く、機能美を追求したかのような角ばったフォルム。

それはまさに。アニメに出るような「巨大ロボット」であった。

「デカいな」

リムルは巨大ロボットを見上げて固唾を飲む。

「いいぞ、いいぞ。獲物がデカいとワクワクしちゃうな！」

「うわあ…」

呑気に感嘆の声を漏らす百代とは対照的にルーデウスは呆気に囚われている。

「ガモツサ、後は任せる」

ローズバルトは頭上のロボットを見上げてそう言うと、リムル達に背を向けて歩き出した。

「逃がすか！」

リムルは翼を展開して追撃しようとするが、巨大ロボットが立ち塞がる。

「凶体ばかりで、邪魔だな」

リムルの背後からアノスが躍り出ると、巨大ロボットの眼前まで上昇してジオ・グレイズを放つ。

ジオ・グレイズを顔面にモロに受けた巨大ロボットは僅かに怯んだようだったが、それでも破壊までは出来なかった。

アノスに続くようにリヒトーと百代が跳躍する。

リヒトーが巨大ロボットの脚部と下腹部の付け根を一閃するが、浅い一本に傷を付けるだけだった。

「川神流、星殺し！」

百代が両掌を合わせてエネルギーを圧縮する、そして最大まで圧縮されたエネルギーを右手から巨大ロボットへ向けて放った。

放たれたエネルギー波はさながらビームのように巨大ロボット目掛けて一直線に進み、その腹部に直撃した。

しかしそれでも、巨大ロボットの腹部を僅かに焦がす程度であった。

巨大ロボットはその極太な腕を振り上げると、百代へ向けて振り下ろした。

巨大な拳は百代を正確に捉え、そのまま地面へと叩きつけた。

巨大な質量にものを言わせたその一撃は地面にクレーターを形成し、爆音と土煙を上げる。

巨大ロボットが地面から腕を上げる。

『まずは1人』

巨大ロボットから声が聞こえた。

「お前は誰だ？」

そう訊ねるアノスに対して巨大ロボットは向き直る。

『我は魔王軍幹部12柱の1人、ガモツサ。ここで貴様達を排除する』  
そういうと巨大ロボットは再び拳を振り上げる。その視線の先にいるのはルーデウスだ。

『これで2人目だ。覚悟し——』

「——おいおい、勝手に殺すなよ」

ガモツサは声が出た方向に視線を向ける。そこは先程、百代を叩きつけた場所だった。

砂煙が晴れて、声の主が姿を現した。

その者は地面を蹴って跳躍すると、巨大ロボットへと肉薄する。そして先程百代が『星殺し』を食らわせた腹部に張り付いた。

『『星殺し』が効かないなら、至近距離でどうだ？』

声の主、百代は不敵な笑みを浮かべると、自身の体にエネルギーを収束させる。

「川神流、人間爆弾！」

そして百代の体からエネルギーが放出される。それは大爆発となつて周囲を揺らし、巨大ロボットをも揺らした。

怯み、よろめく巨大ロボット。数歩後退すると、地面を踏みしめて態勢を整える。

着地した百代の体はどこにも怪我が無く、ピンピンしていた。

「おい百代、大丈夫なのか？」

リムルが訊ねるが、百代は涼しい顔をしている。

「私には『瞬間回復』があるからな。自爆しても瞬時に回復するんだ」

「無敵じゃん！」

「流石に一回の戦闘で使用できる上限はあるけどな」

「頼りにさせてもらうよ」

そう言ったリムルは巨大ロボットに向き直る。

巨大ロボットは再び拳を振り上げるが、この戦場に割って入る者がいた。

「おお、巨大ロボット。リアル系ではなくスーパー系ですね！ 無駄なものがないシンプルなデザイン、たまりません！」

敵にさえ興奮を覚える者はリムル達側に一人しかいない。

自身も巨大ロボットを駆り、そして生粋のロボットオタク。

そう――

「破壊するのは勿体ないですが、仕方ありません。あなたの雄姿は僕の心の中に生き続けます！」

――エルネステイだった。

イカルガが巨大ロボットの拳を受け止める。それによって周囲に衝撃波が発生するが、リムル達はその場に留まった。

巨体同士の影が重なる。

エルネステイは受け止めた拳を押し返す為にイカルガを操縦する。イカルガはエルネステイの操縦に応えるようにガモツサの駆る巨大ロボットの拳を押し返した。

拳を押し返されたことで僅かにバランスを崩す巨大ロボット。

『なんだと!?! 我が『ジャイアント・ガモツサ』の拳を押し返すだ?!?!』  
ガモツサが驚愕の声を上げる。

(だ、ダセエ)

その場にいるリムル達は1人の例外無く同じことを考えた。無論。巨大ロボットの名称である『ジャイアント・ガモツサ』のことである。

「ネーミングセンスがなっていないな。そのまんまではないか？」

アノスがジャイアント・ガモツサを見上げて口を開いた。

アノスの発言に周囲の者達も「それ言っちゃう!?!」的な視線を向ける。

『貴様。この名前を侮辱するか、許さん!』

再び拳を振り上げるジャイアント・ガモツサ。今度の標的はアノスだ。

『させませんよ!』

エルネスティはイカルガを操り、ジャイアント・ガモツサを突き飛ばした。それによりジャイアント・ガモツサは今度こそ態勢を崩して倒れた。

『フレメヴィーラの鬼神と戦うにはまだ足りないか。ここは、…退くべきかっ』

ガモツサの声が聞こえたと思った直後、ジャイアント・ガモツサは目的を果たしたかのように姿を消した。

そう、巨体は徐々に透明になり、消えたのだった。

「潮時いだあなあ」

南方戦線で戦闘していたガイコツ達も撤退を開始した。

ガイコツが開いた次元の裂け目にグワツツエとミニツサも撤退していった。

他の戦線でも敵軍の撤退が開始していた。

しかし、幹部でもない一般兵の多くはベニマルやエリス、ソウエイや清楚に倒され捕縛された。

ハルト達によって捕縛されたエンリクスの体も、塵となって消えていく。

完全に体が消える直前、エンリクスは捨て台詞が言えない代わりとばかりにハルト達を鋭く睨みつけた。

「防衛は成功、かな？」

エンリクスが消える瞬間を見届けて、ハルトはレナ達を振り返る。

「ねえマスター。私達、勝ったんだよね？」

「この場においてはね。とにかく戻ろう、クリスが待ってる」

ハルト達SORDが参加したこの場の戦闘。その中でクリスだけは本陣で待機していた。

本来クリスは爆発物処理や陣地運営、医療活動など後方での作業を得意としており。この場の戦闘に参加せず本陣にて待機していたのだ。

「お腹すいたなく。早くクリスのご飯が食べたいよ」

「ほんとだな姉さん。早く戻ろう」

レナとマキは特殊な出自であるため人より多く食べる、比例して燃費も悪いのだ。

そんな姉妹にとってクリスと、彼女の作るご飯の存在はとても大きいのである。

「その前にリムルさん達と合流して状況の確認だ」

ハルトは2人を振り返ってそう言った。

レナとマキは一刻も早く食事でありつきたい所だろうが、報告は必要だったため文句はなかった。

本陣に戻るとクリスがハルト達を出迎えた。

「皆さん、おかえりなさい。怪我はありませんか？」

「全員無事だよ。他のみんなは？」

そう訊ねたハルトにクリスは臨時の防衛本部の建物を案内した。

本部内にはリムル、ベニマル、リグルド、アノス、オルステッド、ルーデウス、シンエイ、レーナ、リヒト、ジェイル、大和、一輝、刀華がいた。

「リムル様、こちらは？」

本部に入ってきたハルトとクリスを見たリグルドがリムルに訊ねる。ベニマルもリグルド同様、訝しんだ視線を向ける。

「今回から仲間になったハルトとクリスだ。仲間だからな、警戒するなよ?」

「ご紹介に預かりました、蒼井ハルトといます。よろしく願います」

「鯨瀬・クリステイナ・桜子です。よろしくお願いいたします」

ハルトとクリスはベニマルとリグルドに自己紹介を終えると、中央にある大きな机を囲む輪に加わった。

「ハルト達も来たことだし、今後の方針を考えよう!」

リムルの号令で、今後の方針を決める会議が開始された。

「今回、魔国連邦が受けた被害は小さくありません。幹部を含む一部の国民が治癒不可能な傷を受けました」

ベニマルが全員を見渡しながら話し出した。

「特にガビルの受けた傷は深く、フルポーションをもつてしても回復しませんでした」

「ガビルの容体はどうなんだ、ベニマル?」

リムルの問いにベニマルは表情を曇らせる。

「安定していますが、両翼を欠損したことが相当堪えているようです」

「先程ミサが治癒魔法を試してみたが効果は無かった。おそらく敵の『武器』に秘密があるのだろう」

アノスの言葉を受けてリムルは一度頷くと、今後の方針に関して提案する。

「敵の使用する武器には特に注意して、戦闘を展開する必要がある。これから再度、異世界に向かおうと思うけど、どうだ?」

「そう焦っても仕方あるまい」

アノスが反対する。それに同意するようにルーデウスが口を開いた。

「リムルさん。敵は前回の比ではないほど強くなっています。こちらも仲間を募って戦いに向かうべきではないでしょうか?」

「仲間を募るってのは、俺達以外の世界からということか? けど、それは難しくないか? 俺達と同じ境遇の者が新たに現れるのを待つのか?」

「いえ待ちません、俺達以外の世界を巡るんです。世界の向こう側にはまだ多くの世界があります、その内の全てとはいかないまでも共に戦ってくれる世界はあると思います」

「ルーデウスさんの言うとおりでと思います。焦って敵陣に突撃しても、確実に勝てる保証はありません」

ハルトが同意すると、さらに同意するように他の者も頷く。

無論、アノスもルーデウスもハルトもリムルの気持ちを無視する気はない。

自身の仲間と国が被害を受けたことの悔しさと怒り。一刻も早く異世界での決戦に臨みたい気持ちと確実に勝利するために戦力を欲する気持ち、今リムルはそんな気持ちの狭間にいることはこの場の全員が理解していた。

だからこそ、確実に勝つための準備をする必要があると考えただ。

「リムルの気持ちも分からぬでもない。だからこそ、ルーデウスの言っていることは正しいのではないか？」

アノスにそう諭され、リムルはみんなを見渡して頷いた。

「…そうだな、すまない。少し冷静じゃなかったみたいだ」

「確実な勝利を掴むための方法を探しましょう」

「そうだな。ありがとう、ルーデウス」

そう言うリムルは隣のベニマルに目配せをする。それを受けたベニマルは一度頷くと、全員を見渡して口を開いた。

「それでは、今後の方針ですが――」

## 異世界・未踏大陸

### 真・魔王城

ローズバルト率いる魔王軍は一時帰還した。戦闘にて消耗した兵士の休息と補給のためである。

そして、魔王軍幹部『12柱』は魔王の間にて跪いていた。



横一列に、ただ一点に向かって。

12柱の跪く先にある玉座、そこに座すローズバルトはただただ黙っていた。

肘をつき、瞳を閉じて、ただ黙っていた。

「…次の侵攻目標は決まったか？」

長い、悠久とも感じる静寂を破りローズバルトが口を開く。

12柱は即座に答えることが出来なかった。

「…ロマール。どう考える？」

指名されたロマールはビクツと一瞬体を強張らせると、震える口をゆっくり開いた。

「魔法や闘技などが使えない適応者の世界が良いかと…」

「その理由は？」

「この短期間で“侵攻”した世界は4つ、デモンスライムの世界や六面世界など。異なる世界ごとの魔法が存在する世界でした」

「そうだったな。…それで？」

「一度、考え方を変えて別の概念に含まれる世界に侵攻すべきではないでしょうか？」

ロマールの考えを聞いたローズバルトはしばらく沈黙する。

「魔法が使えない適応者の世界、か…。いいだろう、準備が済み次第出発する」

ローズバルトの号令を受けた12柱が頭を垂れる。

「はっ！ 必ずやご期待にこた——」

「——ただし」

ローズバルトが遮る。

12柱の視線がローズバルト1人に集まる。頬に添えていた右拳を肘置きに下ろしてローズバルトは言う。

「隊を分ける。ロンゴドルとガモツサとガイコツとブギョル、グワツツェとエンリクスとヴォイド、シュトライドとカシユロントとシテイツクの3組に分ける」

「ローズバルト様、私とミニツサはいかがすれば？」

「ロマール、お前はミニツサと共に我とここに残る」

「かしこまりました」

ロマールとミニツサが頭を下げる。

「隊を3つに分けることは分かりましたが、どこに侵攻するのですか？」

そう訊ねてきたのはヴォイド。魔国連邦への侵攻直前に合流した幹部の1人だ。

短く切り揃えられた黒髪と右手の籠手が特徴の青年だ。

「ある程度の候補はある。貴様では物足りないかも知れぬがな」

そう言うとローズバルトは右手を虚空に翳す。すると何も無い空間に白濁とした球体が出現する。

その数は全部で3つ。

「これらの世界だ」

ローズバルトは口角を上げて笑みを浮かべる。

12柱は3つの球体を見つめていた。その球体の内部にはそれぞれの世界が映されていた。

「暴風竜ほどの敵はいそうにありませんね」

ヴォイドが落胆の言葉を漏らす。

先の魔国連邦侵攻時、ヴォイドは単独で魔国連邦の『暴風竜ヴェルドラ』を相手していた。

ヴェルドラはリムル達の世界で「最強」の一角を担う存在。

そんなヴェルドラを単独で抑えたヴォイドの評価は上がっていた。それはローズバルトからの評価も例外ではなかった。

「これらの世界は征服しても構わん。徹底的にやれ」

「しかし。ローズバルト、様！」

そこで口を挟んだ者がいた。ヴォイドと同じく魔国連邦侵攻の直前に合流したカシユロントである。

“へ”の字に結んだ口を尖らせるように突き出し、続きの言葉を紡ぐ。

「敵が攻めてくるかも、しれません！」

「その為にロマールとミニツサを残すのだ。貴様達も侵攻した世界で適応者と遭遇する可能性を考慮して行動せよ！」

ローズバルトが号令すると、12人の幹部が一斉に返す。  
「必ずや！」

12人の決意の籠った声音が魔王の間に響き渡った。

## 次の舞台へ

真・魔王城 円卓の間

ローズバルトの御前を後にした12人は別室の円卓の間に集まった。

今後の方針、詳しくは各世界に向かう戦力の割り振りを決める為である。先程ローズバルトから見せられた世界を映す球体をロマールが借りてきての会議である。

「では、それぞれの世界に関して報告してくれ。シテイツク」

ロマールから話を振られた者。幹部12柱の1人であるシテイツクは椅子から立ち上がると他の幹部を見渡して話し始めた。

「それでは、偵察結果の報告を始めますわ。よく、お聞きになること。よろしくて?」

金髪の縦ロールを右手でかき上げながら少女——シテイツクは話し始める。

シテイツクはまず円卓の中心に浮かぶ球体の一つを指さす。

「この世界は、今回この世界に来訪した適応者の1人、『武神』のいる世界ですわ」

「変わった街並みの世界だな。楽に征服出来そうだ!」

ロンゴドルが肘を突きながら余裕を感じさせる発言をするが。シテイツクはそのまま話を続けた。

「街並みは確かに違いますわ。しかしこの世界には『武神』をはじめ多くの猛者が存在しますわ。ロンゴドル、油断は禁物ですわよ」

「例えばどんな猛者がいるんだよ?」

「先の魔国連邦侵攻時に東側を攻撃していた隊の大半を倒した『項羽』。他にもこの世界に存在した『過去の猛者』を復活させているそうですわ」

「この世界には俺が行こう。いいか、エンリクス、ヴォイド?」

名乗り出たのはグワツツエだ。確認されたエンリクスとヴォイドも「かまいませんよ」と同意した。

「次の世界は…、これですわ」

次にシテイツクが指した世界はシンエイ達の世界だった。

「この世界は適応者の一角『死神』達の世界ですわ。この世界には『レギオン』と呼ばれる機械が存在しており、死神達はそのレギオン討伐のスペシャリスト。とのことですよ」

「常に機械を相手に戦ってきたからこそそのアノ強さということか。この世界には俺とガモツサ達で行くぜ！」

ロンゴドルが立候補する。隣のガモツサも異論は無いのか黙って頷いた。

これで2つの侵攻目標の割り当てが決まった。

続いてシテイツクが指した世界は他の幹部の誰も知らない世界だった。

世界の様相を映し出す球体の内部には、現代日本のような街並みが映されている。幹部たちは揃って『武神の世界にとっても似ている』と感じた。

「この世界の適応者は、既に俺達と戦っているのか？」

ロンゴドルが訊ねると、シテイツクは首を横に振った。どうやら未開の世界だということだとロンゴドルは理解した。

「この尖った建造物はなんだ？ 隣の建造物は反対に壊れているが、これは『塔』か？」

グワツツエが球体を覗き込み、その内部に映った『並び立つ塔』を見る。

シテイツクも球体を覗き込み、グワツツエが指摘したものを確認すると口を開いた。

「『エンクウボク』というそうですわよ。この世界は『S O R Dの世界』と同じく『銃』が存在しますわ、この武器は実に脅威と考えますわ」

そう言うとシテイツクはエンリクスを見る。

エンリクスは『銃』という単語を聞いてから表情を曇らせている。「数での不利と奇襲があったとはいえ、エンリクスは先の侵攻でその脅威を身をもって体感したはずですよわね？」

「ええ。敵の数を見誤ったということもありますが、なかなか脅威

でした」

エンリクスの言葉に頷くと、シティックはカシユロント、続いてヴォイドを見る。

「この世界にはワタクシとカシユロントとヴォイドで向かいますわ。よろしくつて、カシユロント、ヴォイド?」

「異論は、無い!」

カシユロントは独特な活舌で同意の意思を示した。シユトライドも「問題ない」と短く同意した。

2人の返事を受けたシティックは再び全員を見渡す。

「それと、ワタクシが偵察した残り2つの世界について報告しますわ」  
「先程ローズバルト様が仰っていた世界か。どうだった?」

ガモツサの問いにシティックは一度頷くと、手に1枚のスクロールを持ち報告を開始した。

「前提として、2つとも魔法が存在する世界ですわ。それを理解したうえで聞いてくださいいな」

「分かった」

「では、1つ目の世界は。国同士が戦争している世界でしたわ。それも、終わりの見えない」

「魔法でか?」

「そうですわ。順番に説明しますから、静かに聞いてくださいいな、ロンゴドル」

「わかったよ…」

「…続けますわ。その世界では魔法で空を飛びながら、銃を使用した戦闘方法が確立されていましたわ。かなり面倒ですわね」

魔法に対しての対策は行ってきた魔王軍であったが、銃に関しての対策はいまだ十分とは言えなかった。

それには理由がある。

『魔法』と一括りに言ってもそれぞれの世界で違いがある。故に魔王軍はその対策に着手してきた。それこそ、リムルやアノス達と全面衝突する以前からである。

その結果、魔王軍の兵士、幹部、ローズバルトに至るまで魔法に対

しての知識と耐性を備えることが出来た。

しかし銃への対策は十分とは言えない為、幹部たちも警戒していた。

そこで一度話を切り、息を吸うと再びシテイツクは説明を開始した。

「続けますわよ。2つ目は、面白い支配体制をとる国が存在する世界ですわ。よりによって『アンデット』が国を統率しておりましたわ」「その世界にも適応者が？」

「いましたわよ？ まだ接触はしていませんけれど、敵に回る前に潰しておくべきと思いますわ」

「ならば、ここは——」

会議はさらに続いた。

## 真・魔王城

魔王の間。最奥の玉座に肘をついて座ったままローズバルトは瞳を閉じて瞑想していた。

頭に浮かんだのは、父の顔だった。

父は幼かったローズバルトに戦いを教えた。

敵を殺し、自身が生き残る術をローズバルトに教え続けた。

当時、ウロナ大陸の魔道はアノス達が訪れた時以上に荒んでいた。

大地は枯れ、生き物のほとんどは息絶え、異形な魔物が闊歩する場所であった。

そんな魔道の一角の集落で生まれたローズバルトに父は生きる術を叩き込んだ。

しかし、父はローズバルトが少年の時に死んだ。

いや、死んだと形容するには語弊がある。

「消えた」のである。それは突然のことだった。

父が消えた日を境に、ローズバルトは知識を求めた。貪欲に。集落に僅かにあった古代文献を読み漁り、知識を吸収していった。

全ての文献を見終わると、ローズバルトは隣の集落に向かった。ま

だ見ぬ知識を求めて。

ローズバルトはとり憑かれたように文献を読み漁り、体を鍛えた。睡眠時間と食事時間を削りながら。

そんな生活の中でふと手に取った文献に書かれていたものを見たローズバルトは、すべてに合点がいったように不敵に笑ったという。その文献にはローズバルトが生まれた世界の真実に迫る文言が書かれていた。

“この世界は数ある可能性の一つに過ぎない。この世界の外に広がる世界の波を超えた先に別の世界がある”

“この世界のモノは他の世界のリソースに過ぎず、数多の世界が存在する限りこの現実は変わらない”

“世界の未来と存続はさらなる可能性を掴むことから始まるであろう”と。

ローズバルトは愕然とした。自分達が他の世界の“養分”でしかないことに。

それから成長したローズバルトは魔王となり。自身の計画を開始した。

“自身の存在の確立”

それが目的だった。

そして現在、自分達以外の世界に侵攻したことで「様々な世界に存在した”痕跡を残すこと”が出来た。

痕跡を残すことによって自分達の存在を確立する。可能性の奔流を揺蕩う可能性の一つに過ぎないローズバルト達にとって、自分達の存在の確立は悲願であった。

リムル達『適応者』はその類ではないが、ローズバルトにとっては『大人しく可能性のまま消える』か『自分達が存在した爪痕を残すこと』でその存在を確立するか』の選択が迫られた。

結果としてローズバルトは後者を選んだ。

自分の存在の確立の為にその他の世界を巻き込む。

巻き込まれた世界にとっては迷惑極まりないだろうが。そんなこ



とはローズバルトも承知だ。

承知の上でもあるし、手段を選んでいられないことも事実。そうして行動してきた結果。

ローズバルトの欲は増大した。

元から知識欲が旺盛だった少年時代を経て、魔王として君臨してきた今日までの歩みがローズバルトの「欲」をより強いものへと変えてしまった。

「自身が存在した痕跡を残す」という目的はいつしか「世界を我が手に収める」という目的に変わってしまったのだ。

ローズバルトはそれが間違っているとは思っていない。

だからこそ願い、欲するのだ。

「全て手に入れる…」と。

## 魔国連邦

リムル達は休息をとりながら次の目的の為の準備をしていた。

豪華な旅館を貸し切ったの食事会が催された。先の戦闘で負傷したガビルは命に別状は無いものの、翼を失ったショックで寝込んでいた。

しかしアノスが『敵の武器に秘密があるかもしれない』と推測し、それをリムルが破壊するとガビルに約束したこともあり僅かに元気を取り戻していた。

アノスが敵の武器に目をつけたのには秘密がある。

異世界にて敵幹部のエンリクスに足止めをくらった時、エンリクスは魔法発動のキーとして武器を使用していた。

そのことからアノスは、異世界の敵にとって武器は「ただの武器ではない」と推察したのだ。

そんなこんなで、一同は食事会を楽しんでいた。

「ねえマキ。ハンバーグがあるよ！ それにこっちはラーメンだよ！」

レナがマキの袖を引つ張りながら料理を食べている。自分達の世界で食べ慣れた料理が振る舞われたことに感動と興奮を覚えながら舌鼓を打っていた。

各人がそれぞれ食事を摂る一方、上座に位置する奥にはリムル達がコの字に囲むように食事を摂っていた。

「今回の戦闘に於いての魔国連邦側の負傷者は多いのですか、ベニマルさん？」

レーナが料理を口に運びながら訪ねる。箸を使うことが出来ない為、フォークを使用しての食事だ。その為か、レーナ達のように箸を使えない者達の食事はレナ達と少し違うのだ。フォークを使う前提での献立に変わっている。

「負傷者は多いが、死者はゼロです。皆さんが加勢してくれたおかげですね」

ベニマルも食事を摂りながら答える。無論、咀嚼しながらという行儀の悪いことはしていない。

「それは何よりです。ところで、敵が再度この世界に侵攻する可能性は考えられるのでしょうか？」

「可能性はゼロではないと思うけど、低いかもしれないな」  
答えたのはリムルだ。

レーナ達の視線がリムルに集まる。リムルは数秒考えると再び口を開いた。

「敵の目的が『侵攻』ならもう侵攻する必要はないだろう。けどもし、目的を『征服』に切り替えたのなら……」

「再びこの世界、この国が戦場になる、ということか？」

リムルの言葉をアノスが継ぐ。

リムルは「ああ」と頷くと、持っていた箸を強く握った。

「たしかに可能性はあるだろうが、それを考え出してはキリが無いのではないか？」

それまで料理を楽しんでいたジェイルが言葉を挟んだ。ジェイルの発言にリムルは表情を険しくする。

ジェイルの言う事にも一理あることはリムルも理解している。し

かし、それでも楽観的なジェイルの考えが腑に落ちず、苛立つのだ。そんな空気を察してか、リヒトーがフオーローする。

「ジェイルの言うことも正しいけど、言い方があるんじゃない？ 多くの可能性は考慮すべきだよ」

「しかしだな、それではこちらの行動に支障が出るだろう。後手に回れば、同じことが繰り返されるぞ？」

「そうならない為に、他の異世界を巡って敵の脅威を知らせて仲間を募るんじゃないか」

「ジェイルの言うことも分かるよ。切り替えて臨まないとな、引きずってたら失敗するかもしれない」

リムルがジェイルとリヒトーを交互に見て言う。その様子を見ていたオルステッドが口を開いた、

「先の戦いで死者がゼロだったことは不幸中の幸いだった。敵の武器の破壊も優先事項に加えるべきだろうな」

「今後、脅威になるでしょうから、敵の武器の警戒および破壊を念頭に戦闘すべきですね」

ルーデウスが捕捉し、各人がそれぞれ領いた。

翌朝。

魔国連邦のはずれにある平原に停泊させていた飛空城艦にリムル達は乗艦していた。

遠征の目的は『共に戦ってくれる仲間を探しつつ、各世界に敵の存在を知らせる』ことである。

各自、魔国連邦に集結する前と同じ編成で飛空城艦に乗り込んで出発の準備に取り掛かる。

「ベニマル、あとは頼む」

タラップに足を掛けたリムルは、見送りに来ていたベニマル達を振り向く。

「お任せください、リムル様」

ベニマルが力強く頷く。隣のシユナは「どうかご無事で」と微笑む。

「一緒に行くのはシオンとランガだけで良いのですか？ 敵は強くなり続けています。追加で誰かが行った方がよいのでは？」

「戦力は残しておきたい。それと準備を進めておいてほしい事もあるからな」

「〃例の〃ですね？ わかりました」

「じゃあ、行ってくる」

「〃お気を付けて！〃」

仲間の声を受けたりムルはタラップを上がり、飛空城艦に乗り込んだ。

## 彼岸花

可能性の奔流に揺蕩う無数の世界の中に、その世界は存在する。東京の地にそびえたつ二柱の塔。

一つは崩壊し、中心塔から外装が花開くように広がっている。

もう一つは出来たばかりの真新しい塔。下部に4本の支柱を持つその塔は、カラーリングも相まってSF映画のロケットのようにそびえたつ。

そんな世界の平和を維持するために、少女達は駆ける。

「実際に見てみると、SORRDや武神の世界に似ているな」

「文化レベルは近いと思いますわよ。この世界にも銃は存在しますわ、気を付けて臨みますわよ！」

「俺は、大丈夫だ！」

奔流からその世界を覗きながらシュートライド達は話している。

現在、異世界を出発した12柱達は各世界に向かっていた。目的は『レーナ達の世界』と『百代達の世界』と、シュートライド達の眼前にある『未知の世界』への侵攻の為である。

今回は侵攻だけでなく征服して構わないというローズバルトからの指示も出ている為、12柱達は意気込んで出発した。

先の『六面世界』への侵攻時に使った大規模魔法ではなく、今回シュートライド達は可能性の奔流を渡る『次元船』を用いて出発した。

見た目はザ・海賊船のような作りだが、シュートライド達の他に百人からなる魔王軍戦士達と3体の魔獣を連れてきている。

前回の侵攻時は次元船を管理しているシテイツクが遠征中だったため、大規模魔法で世界を渡ったのだった。

「見事この世界を征服して、留守番をしているミニツサ達にドヤ顔をしてやりますわよ。前進！」

シテイツクの号令のもと、次元船が前進していく。

そこに一筋の閃光が走る。

その閃光は雷、——雷撃だった。

雷撃が次元船の左舷に直撃して船全体を包む。甲板にいたシテイツク達も雷撃を受ける。

痺れた体に鞭打って立ち上がると、部下に状況確認をする。

「どうなっていますの!?!」

「左舷方向の船からの攻撃です。おそらく、適応者の船かと」

シテイツクの部下が左舷方向に並ぶ飛空城艦を指す。次元船と併進しながら雷撃を叩き込んでくる飛空城艦。

いや、正確には雷撃を放っているのは飛空城艦ではない。飛空城艦の甲板に立つ少女から放たれたものだ。

「あの適応者は、『雷切』!」

そう、雷撃を次元船に叩き込んでいるのは『雷切』こと東堂刀華であった。

刀華は眼鏡の奥の瞳を鋭く光らせ、刀を抜き放つ。刀が抜き放たれた刹那、一筋の雷光が走ると、それは雷撃となって次元船に襲い掛かった。

しかし、シテイツク達もただやられてばかりではない。左舷に兵士を集中させて火球にて応戦する。

火球が刀華に迫るが、突如刀華の足元から壁のように水が噴き出した。撃ち続ける火球が悉く防がれる。

「水!?! いったいなんですか!?!」

シテイツクは水の壁を凝視する。するとその向こうに2つの人影が見えた。

(1つは雷切。ではもう1つはなんですか?)

火球を放ち続けたために一時的に魔力切れを起こした部下を一時後退させてシテイツクは左舷の端へと歩いていく。

すると水の壁が消失して、もう1人の姿を確認できた。

『深海の魔女(ローレライ)』、やはりあなたでしたの!」

歯軋りし、拳を握り絞めるシテイツク。さながら「キー、悔しい!」とハンカチを啜えるお嬢様のようなのである。

シテイツクの視線の先。水の壁を出現させたのは刀華達と同じ世界の住人である黒鉄珠雫(くろがね しずく)であった。

水と氷を操る戦闘スタイルの珠雫の技『障波水蓮』によってシティックの部下は火球を無駄撃ちし、魔力切れを起こした。

それによってシティック達は遠距離での攻撃手段を失った。

「カシユロント、適応者の船を斬れませんの!？」

振り返りながらシティックは訊ねるが、カシユロントは首を横に振った。

「距離が離れすぎているから、無理だな！」

「ではこのまま突入しますわよ。前進！」

シティックの号令で次元船は加速すると、そのまま世界の壁に接触する。

世界の壁は異物を拒むように次元船を押し戻そうとする。

しかし、次元船はさらに加速して徐々に世界の壁にめり込んでいく。

「あともう少しですわ！」

次元船全長の3分の1が世界へと進入した。

「リムルさん、敵船が進入します。俺達も行きましょう！」

艦橋で敵船の様子を伺っていた一輝が操舵席に就いているリムルを見る。しかしリムルは別の案を提示した。

「この船をぶつけて、敵船を押し出す」

リムルは併進していた飛空城艦を右に90°。回頭させると、敵船の左舷目掛けて前進した。

飛空城艦が加速し、敵船の左舷を捉える。

「全員、衝撃に備えるんだ！」

リムルの号令を受けて、各員は近くのものに掴まった次の瞬間。

爆音と煙を上げて飛空城艦の艦首が敵左舷に食い込み、そしてめり込んだ。

艦全体に衝撃が走り、一部の者は掴まっていたものから手を離してしまい転倒した。

しかしリムルは操舵輪から手を離すことなく、さらに飛空城艦を加

速させる。

飛空城艦はさらに加速すると敵船を左舷から押し始める。敵船の進行方向の垂直に、だ。

世界は水晶玉のように球体形状である。よって押し続けければ世界から押し出せると考えたのだ。

しかし、シテイツク達も易々と押されない。

真つ直ぐ進入していた次元船の進路を、突如左に向けたのだ。それによって飛空城艦はバランスを崩し、左舷中央にめり込んでいた艦首がズルズルと敵船の船尾方向に向かって流れていく。

「マズい、態勢が崩れた!」

リムルは飛空城艦の進路を修正するが、敵船はリムル達が態勢を崩した隙に世界に進入した。

「このまま突入する! 刀華達は?」

「艦内に退避しています!」

一輝からの報告を受けたリムルは一度頷くと飛空城艦を世界に入させた。

世界の壁を越えた先に広がる風景は、まさにリムルの生前いた世界にそっくりだった。

しかし、見たことの無い塔など細かい違いはあった。

(そんなことを考えてる場合じゃないよな。敵は!?)

リムルは操舵をしながら敵を探す。

「リムルさん、敵船です!」

艦橋に上がってきた刀華が指した方向に確かに敵船がいた。

敵船からはすでに兵士の降下を開始していた。完全に後手に回ってしまった。

(この世界がハルトや百代達の世界に近い文明レベルの世界なら、『魔法』は間違いなく存在しない。確実に被害が出る)

被害が出る前に敵を退けるつもりでいた一行の計画は頓挫。残す手段は自分達も降下して敵を撃退する他ない。

しかし、この中で間違いなく最強であるリムルは操舵席から動けない。



飛空城艦を動かすためには魔力——それに近いものを扱える者でなくてはならない。

「シオン、ランガ。ハルト達と先に降下して、敵を迎え撃つてくれ」

「リムル様はどうされるのですか？」

「飛空城艦を着陸させてから合流する」

「わかりました。お気をつけて」

そう言うとシオンとランガは艦橋から底部格納庫へと向かう。

「ハルト。俺は飛空城艦を東京湾に着水させたらそっちに向かう。それまで指揮を執ってくれ」

意外な指名にハルトは一瞬面食らったような表情を浮かべるが、すぐに表情を引き締めて頷いた。

「分かりました。合流をお待ちしていますよ、リムルさん」

「ああ、また後でな」

リムルの言葉に笑顔で頷くと、ハルトはレナ達を連れて艦橋を後にした。

「リムルさん。私達が降下したら、この艦への敵の攻撃を迎撃する者がいません。リムルさんは操舵に掛かりつきりになるでしょうから、なお危険です。私達が降下したら速やかに離脱してください」

艦橋から底部格納庫へのタラップを降りていく一輝達ブレイザー組。その中の1人、刀華は一輝達より最後に艦橋を後にしながら声を掛ける。

「分かっている。なるべく早く降下してくれると助かる」

「わかりました。どうか気を付けて」

そう言うと刀華はリムルに右手を差し出す。

リムルはすかさずその手を握った。

飛空城艦が敵軍が降下した地点付近の上空に進路をとる。底部ハッチが解放され、リムルを除く全員が姿を現す。

「すでに戦闘は始まっている。急ごう」

ハルトの視線の先、東京の高層ビル群の足元では敵軍が一般人を

襲っている。

「ハルトさん、あのビルの屋上に降りましょう」

クリスが近くの高層ビルの一つを指す。

『右斜め前方のビルでいいの？』

艦橋のリムルから確認が入る。ハルトが「お願いします」と答えると飛空城艦が高層ビルへと近づいていく。

底部ハッチが高層ビルの屋上に重なるうとした、次の瞬間。

飛空城艦に衝撃が走る。大きく揺さぶられる飛空城艦。咄嗟のことで数人は転倒してしまう。

ハルトと一輝が顔を上げた視線の先、そこには飛空城艦に砲撃を加える次元船があった。

可能性の奔流での戦いの時とは違い。鉄の砲弾のような球体をこちらに向けて発射している。

魔法を使用できる兵士を降下させた次元船にはシティックが1人残り、砲台を展開しての攻撃を敢行していた。

多くの世界を偵察してきたシティックだからこそその発想。

自分達魔王軍は魔法に対しての知識はあるが、銃などの物理的な飛び道具に対しての知識はまだまだ乏しい。そこでシティックは考えた、自分達で使用する弱点を探ればいい、と。

次元船から砲弾が放たれる。砲弾は若干の放物線を描き、飛空城艦に直撃する。

飛空城艦は揺れ、底部ハッチに集まっているハルト達の足元はおぼつかない。

「このままでは……！」

刀華とステラが動いた。2人は底部ハッチから飛空城艦の船体を駆け上がり甲板に躍り出る。

すかさず2人は得物を構えると、迫りくる砲弾を迎撃する。

刀華の放つ雷撃が、ステラの放つ火炎が、砲弾を迎撃していく。それによって一時的に飛空城艦の態勢が安定する。

その隙を狙い、刀華とステラとリムル以外の全員が高層ビルの屋上に降り立った。

『2人も降りてくれ。もう大丈夫だ!』

リムルの声を受けて刀華とステラも屋上に降下する。

受け身を取りつつ着地する刀華とステラを確認すると、リムルは飛空城艦を離れさせる。

しかし、次元船は飛空城艦を追撃する。

放たれた砲弾を回避するために、後方を次元船に向けて退避するよう加速する。

それを追撃する次元船。無数に放たれた砲弾の半分は飛空城艦に直撃する。砲弾が艦の装甲を貫通することは無い。

まがりなりにもこれはアノスが創った飛空城艦。かつてアノスが搭乗した飛空城艦ゼリドヘヴヌスを小型化したものだ。

しかし砲撃装備等を搭載していないこの艦では敵船を沈めることは出来ない。

「逃げるが勝ちだな!」

リムルは飛空城艦を加速させる。シテイツクも逃がすまいと次元船を加速させるが、距離が離れていく。

リムルは自分達がいるこの地が『東京』であると考え、ある場所を目指していた。

東京湾である。

そこに飛空城艦を着水させて戦闘に参加するつもりだ。

相変わらず後方の次元船は砲撃を続けているが、距離が離れ続けているために当たらない。

(いけるぞ。このまま直進だ)

飛空城艦がさらに加速し――

――しなかった。

上空から放たれた一筋の光が、飛空城艦に直撃する。

閃光は銃弾のように飛空城艦を貫いた。

強烈な衝撃に揺れる艦橋でそれでもリムルは操舵を続ける。東京

湾を目指しながら先程の閃光を識別するため周囲に目を向ける。

そしていた。艦橋の目の前に1人の少年が。

『お主達は何者だ?』

リムルの頭の中に声が響く。その声が目の前の少年から発せられていることを一拍遅れて理解した。

黒と赤のオッドアイがリムルを見据えている。

「…魔国連邦盟主、リムルIIテンペストだ。お前は?」

先程の攻撃によって高度を下げ続ける飛空城艦の艦橋に少年が降り立つ。

リムルは操舵を中断して少年と向き合う。どのみち東京湾までは保ちそうにないからだ。

『お主達は可能性世界の一つから来たのか?』

「可能性世界とはなんだ? 初めて聞くんだがつ——!」

リムルは突如、言い終える前に後方に吹き飛んだ。まるで「見えないう手」によって押し飛ばされたように。

『何処かの可能性世界で聞いたことがあるな。「質問を質問で返すな」と。可能性世界は可能性世界、それ以上でも以下でもない』

話を通じない。とリムルは思ったが、体を起こして立ち上がり、少年の目の前に立つ。

「俺がいる世界が可能性世界の一つであるなら、回答は「イエス」だ」

『何故、可能性世界同士で争う?』

リムルは少年の問いの意味を最初理解できず、一瞬ポカンとした。

(こいつは、今この世界で起きていることが理解できないのか?)

リムルには目の前の少年の思考が分からなかった。今、少年の周りで起きている惨状。

魔王ローズバルト軍による異世界への侵攻。自分達はそれを止める為に戦っているのだ。

しかし目の前のこの少年はそんな現状は知ったことかと言わんばかりの態度だ。

「ローズバルトの暴挙を止めるためだ」

だからこそリムルは本心で答えた。この回答こそ、リムルの本心で

あり。今は別行動をしている仲間達との共通の目的だからだ。

『何故争うのだ。大人しくローズバルトに降伏すればいいだろう？』

「こちらにも理由があるんだよ。ところでお前はローズバルトのなんだ？」

リムルの問いを受けた少年は首を傾げると。ケロツとした表情で話し始めた。

『逆だ。ローズバルトは我等の傀儡でしかない』

リムルの時間が止まった。いや、正確にはそう感じたと言った方が正しいだろう。

今、この少年はなんと言った？

——ローズバルトは私の傀儡でしかない。要するにローズバルトはこの少年の手駒だと言ったのか？

リムルには疑問だけが残った。

## 傲慢なる敵

「傀儡…。ローズバルトはお前達の『手駒』なのか？ 仲間ではなく？」

降下し続ける飛空城艦の艦橋にてリムルと少年は向かい合っていた。

『仲間ではない、あの程度の小物が我等と並び立てるわけもない。ローズバルトはただの手駒でしかないのだ』

少年は無表情のまま答える。飛空城艦が軋みをあげて揺れる中、2人は向かい合ったまま動かない。

「『我等』と言うからにはお前に仲間はいるのか？」  
『いる』

「そいつらは何処にいる？」

『他の可能性世界を見ている。お主達は我等に常に見られているということだ』

そこでさらに飛空城艦の揺れが大きくなった次の瞬間。

先程の揺れはどこへやら。一転して揺れと降下が止まったのだ。

まるで『何者かの力で浮かんでいる』ような。

『また別の可能性か。乱戦は好かん』

少年が天を仰ぐ。リムルは少年の言葉が理解できずその場で警戒している。

次の瞬間。

白く光を放つ雷撃が飛空城艦の真下から昇ってきた。雷撃は飛空城艦を突き破り少年を足元から飲み込んだ。

そのまま雷撃は龍のように天へと昇って行った。  
しかし少年は変わらぬ姿のまま立っていた。

少年はリムルから視線を外し、足元に空いた穴を見る。  
いや、正確には足元に空いた穴『の向こう』を、だ。

少年の体は浮いていた。足元は雷撃によって崩れたが、それでも姿勢正しくその場にいる。

『可能性を乱すつもりか？ ならば――』

「――どうするといふのかね？」

飛空城艦のはるか下、そこから「ナニか」が上昇してくる。

ナニかは飛空城艦よりも高度を取ると、リムルの背後に降り立った。

リムルが振り返った先、その視線の先にナニかはいた。

金色の杖を携えた一体のアンデットが。

「リムルさんは大丈夫でしょうか？」

地上にて敵の迎撃にあたっていた刀華が抜刀姿勢のまま上空を見上げる。視線の先にはその場で停止している飛空城艦があった。

「さっきの雷撃が気になりますね。援護に向かうべきでは？」

一輝が刀華に並び立ち、同じように飛空城艦を見上げる。

現在一輝達をはじめとした降下組は侵攻を開始した敵軍との戦闘を継続中だった。

現地の戦力『DA』と共に敵の迎撃を続けている。

降下した一輝達が現地戦力から攻撃されなかったのは、魔王軍に対して敵対行動をとったからであった。

その様子を見たDA東京支部司令官の楠木は、現場戦力の『リコリス』達に一輝達への攻撃禁止を命令していた。

少なくとも、一輝達が敵ではないと判断したのだ。

敵群に向かってハルトが駆ける。腰に帯びた二振りの刀を抜き放ち、二刀流で斬り込んでいく。

敵兵士が火球を放つが、ハルトにとってはお構いなし。自前の動体視力で火球の軌道を読み、身を振って回避する。最小限の動作で回避した為、大きな失速は無く敵兵士に肉薄出来た。

火球を放った兵士はまさか回避されるとは考えておらず、次の行動が遅れることとなった。

ハルトは刀を横薙ぎにはらう。敵兵士は鎧を着ていたが、脇腹は

ガードされておらずガラ空きだった。

刀は敵兵士の脇腹の衣服に食い込んだかと思うと、そのまま衣服を横一文字に破り、敵の体を滑るように一閃した。

敵兵士の脇腹から刀を振り抜くと鮮血が飛び散る。

「これでは倒せないか」

鮮血を垂れ流しながらもハルトに攻撃しようとする敵兵士に感嘆の言葉を送りながらも、ハルトは追撃を行った。

先程斬り裂いた脇腹に刀を二振りとも突き刺して両手首を捻ったのだ。

内臓をグチャグチャにされた敵兵士は今度こそ息絶えた。

そんなハルトの戦い方に僅かに戦慄した敵軍だったが、恐怖を払拭して斬りかかってきた。

臆することなくハルトは迎え撃った。

一撃くらわせるだけでは敵を無力化出来ない以上。徹底的にやる必要があると判断したハルトの戦いぶりはまさに悪魔、鬼と形容してよいものだった。

そんな様子をD A指令室で見ていた楠木がいた。

「あの者達は何者だ？」

そう独り言をこぼしても誰も答えない。

その場に誰もいない訳でも、楠木が嫌われている訳でもない。

皆、ハルト達の正体がさっぱりわからないのだ。当たり前と言われればそこまでだが、自分達と同じ形をしている人間が別の世界から来たことへの戸惑いが勝ったのだ。

「ミカに連絡を」

楠木は近くにいた副官に指示を出した。

「Enjoy！」

少女がテイクアウト用カップに入ったコーヒーを客に渡す。

客は笑顔で手を振りその場を去っていく。次いで並んでいた客が一步前に入る。



大型のバンを改造した移動コーヒーショップ『カフェ・リコリコ』には現地、観光問わず多くの客が並んでいる。

バンの側面のカウンターで笑顔で少女が接客している。

その隣で黙々とコーヒーを淹れている黒人男性。彼は淹れたばかりのコーヒーに飲み口も兼ねるフタを被せると、カウンターの少女に渡す。

「エスプレッソ出来たぞ」

「はい。追加でカフェオレをお願いします」

少女はカップを受け取りながら客をさばっていく。

「アローハア〜。アローハ〜」

バンの周囲を小柄なデコ出し少女がメニューが掲載された看板を背負って歩いている。

少女は運転席を周る様に歩き、その途中で運転席に座ってサボっている女性と言い合いをしていた。

そんな賑やかな移動カフェの電話が唐突に鳴り響く。

その電話をバナラ色の髪をした少女がとる。

「あ〜い、カフェリコリコ〜」

『楠木だ』

「おや〜、どうも、どうも〜」

少女は意外な人物からの電話に少し驚きながら挨拶を返す。

電話の相手——楠木は少女の気楽な挨拶に少しイラッとしたが、平静を保ち話を続けた。

『緊急の仕事の話だ、ミカはいるか?』

「ですから日本での仕事は受けられませんっ〜」

『「緊急」と言っただろう。早く代われ』

「む〜。分かりましたよ」

唇を尖らせながらも少女は従った。

受話器を耳から離してマイク部分を手で覆うと、コーヒーを淹れている黒人男性——ミカを振り返る。

「センセ〜、楠木さんから電話〜」

少女に呼ばれたミカは途中まで淹れていたコーヒーを淹れ終わる

と、少女の元へ若干の違和感のある様子で歩いていった。

少女から受話器を受け取ったミカは一度頷くと口を開いた。

「なんだ？ 仕事か？」

『日本のニュースを見ることは出来るか？ あるいはラジオでもいい』

「少し待て。：おーい、クルミく」

一旦受話器を離れたミカは看板少女——クルミを呼ぶ。

「なんだ？」

クルミは眠たそうな目で訊ねる。

「日本のニュースを調べてくれ。大至急だ」

「わかった」

クルミは返事をする、ノートPCを立ち上げて日本国内のニュースの情報収集に入った。

そしてしばらくして見つかったニュースサイトには日本国内の現状が掲載されていた。

ミカは受話器を再び耳元にあてて話しはじめた。

「敵襲、ということか。真島か？」

『今回は別だろう。敵はゲームやマンガであるような攻撃をしている。2人にも戦場に立つてもらおう』

そう言われたミカは受話器を耳にあてたまま振り返る。その視線の先にはバニラ色の髪色の少女と、カウンターで接客をしている黒髪の少女がいた。

「それで、どうすればいい？」

電話機の方へ振り返ると、ミカは再び口を開いた。

『間に合うかはこちら次第だが、とにかく向かって来てくれ』

「：わかった。すぐ準備しよう」

そう言うとミカは受話器を電話機に戻して店内を振り返る。

「楠木さん。何だって、先生？」

バニラ色の髪色の少女——千束が訊ねてくる。ミカは腕を組んで少し唸ると、口を開いた。

「あつちに謎の敵が現れたそうだ。2人に召集指令が出た」

ミカの言葉を聞いた千束は接客中の黒髪の少女を見る。黒髪の少女——たきなは接客を終えると千束とミカを振り返った。

「すぐに準備します」

「臨時休業だな。千里、ミズキを呼んできてくれ。店仕舞いだ」

「わかった」

千里の返事を受けたミカはバンの接客用窓を閉じると『CLOSE D』の看板を掲げた。

「それで、どうするといふのかね？」

場所は変わって日本。飛空城艦の艦橋に降り立ったアンデットが謎の少年に問いかける。

アンデットはリムルの背後の立ち、少年と対峙している。

『お主は何故この可能性世界に介入した？ お主達にはこの可能性世界で起こることは関係無いはずだが？』

アンデットの問いを無視して少年は話し始めた。その少年の様子を見たアンデットの瞳の奥に揺らめく深紅の光が一際強くなる。

「質問に質問で返すなどそちらが言っていたはずだが。まあいい、そちらの質問に答えよう。私は『アレ』を追ってきたのだよ」

そう言ってアンデットが指さした先にはローズバルト軍がいた。

「アレが私の配下に戦闘を仕掛けてきたその『お礼』をするためにわざわざ追ってきたのだよ」

『それはご苦労なことだ。ではアレと思う存分戦えばいい』

「しかし今回の一連の黒幕の1人がお前ならば、私が倒す相手はお前ということになる」

『お主達がどのように解釈するかなぞ知ったことではない。それと、我を『お前』と呼ぶな。失礼な奴め』

少年の言葉を聞いたアンデットは肩を竦めてみせる。その態度が気に入らなかつたのか、少年は表情を険しくする。

『おい、お主に言つて——』

「——私の名前は『お主』ではない。お前も同じことをしているで

はないか」

まさにそのとおりだな、とリムルは心の中で同意した。アンデットは金色の杖を持ったまま両手を左右に広げると、高らかに話し始めた。

「私はナザリック地下大墳墓の主、アインズ・ウール・ゴウン魔導王である。…さて、私は名乗ったぞ。次はそちらだな？」

アインズの言葉を受けた少年は興味なさそうな表情を作り、一向に名乗ろうとしない。

そんな少年の態度に対してアインズがとった行動は――

「さもアレの上位存在感を出しているが、所詮名乗りも出来ない小物だったか…。すまないな、気付いてやれなくて」  
煽りだった。

『身の程を知れよ。雑魚どもがあああ！』

少年の額に青筋が浮かび、表情筋がピクピクと揺れる。完全に怒らせてしまった。いや、アインズの目的はそれだったのだが。

『『心臓掌握―グラスプ・ハートー』』

アインズが右手を翳して握り絞める。本来アインズのいた世界では心臓を握りつぶす即死魔法であるが、少年には効果が見られなかった。

（即死が無効化されたとしても朦朧状態になるはずだが…。即死魔法がそもそも通じないのか、それとも第九位階魔法自体が通じないのか）

アインズは金色の杖を異空間に仕舞うと、その中から一本の杖を取り出した。

杖は僅かに湾曲しており、先端が殴打武器のようになっている。いわゆるT字である。

少年が地面を蹴って跳躍し、アインズへと蹴りかかる。アインズはリムルの前に出るように構えて迎え撃つ姿勢をとる。

繰り出された少年の脚目掛けてアインズは杖を振るう。

(杖で殴るのか!? 受け止め切れるとは思えないけど)

リムルはアインズの杖が折れるのではないかと考えた。しかし、その考えは外れた。

少年の脚が杖に触れた次の瞬間、少年の体は少年が元々立っていた場所よりも後方に吹き飛ばされた。

少年は何が起こったか理解できず、ただ疑問と憎悪と屈辱が混ざった表情を浮かべるだけだった。

「この杖には『ノックバック』の効果があるのだよ。これで近接攻撃が私に通じない事が理解できたかね?」

アインズは余裕を思わせる声音で語り掛ける。

少年は立ち上がり、両拳を深紅に染める。それは少年の怒りを表すように、燃え上がるように赤く染まった。

「それで、名乗る気になったかね?」

アインズ of 言葉を受けて少年は瞳を閉じる。

『アインズ、と言ったな。いいだろう名乗ってやる、しかし後悔せぬことだ』

そして少年が眼を開くと、そこには――

『我はスペビア、可能性世界の管理者の1人。お主達を管理する者だ』

瞳は赤く、妖艶に煌めき。口角が上がり、不吉な笑みを浮かべてケタケタと笑う少年がいた。

## 怠惰の具現

気配が変わったとアインズとリムルは感じた。

先程までの余裕は無くなったが、代わりに残忍さが増した。そんな気配を感じていた。

「アインズ、だったか。目的は同じみたいだし共闘しないか？」

リムルがアインズの隣に並び立ち、髑髏顔を見上げる。アインズは見下ろすように見つめ返して答える。

「私もそのつもりだった、ぜひお願いしたいものだ」

「じゃあ、成立ってことで」

リムルが右手を差し出すとアインズはその意図を察して握手を交わした。

そんな2人の様子を見ていたスペビアは歯軋りをしながら睨みつける。拳を振りかぶり、今にも襲い掛かってきそうな様子である。

『お主達など雑魚に過ぎぬ。我が直々に屠ってやる！』

スペビアは腰を深く落とすと、勢いよく踏み込んだ。

そうリムルとアインズが感じた次の瞬間。スペビアの姿はアインズの眼前に迫っていた。

繰り出された拳がアインズの顔面を捉えるが、易々と直撃を食らうアインズではない。ブラステイングスタッフを振るい、ノックバックを狙う。

しかし、スペビアは読んでいたかのようにブラステイングスタッフの軌道から拳を逸らして拳の軌道を修正した。

相手の体に触れなければブラステイングスタッフのノックバック効果は発動しない。

確かにスペビアの拳がアインズを捉えた。

が、防がれた。

割って入ったリムルが腕に展開した身体装甲によってスペビアの拳を受け止めたのだ。

それでも、衝撃は防ぐことが出来ずにリムルは吹き飛ばされる。吹き飛ばされながらも受け身を取り、翼を展開して戻って来る。

そのまま刀を抜き放ちスぺピアへと斬りかかるが、スぺピアは体を逸らして躲す。

一太刀目を躲されたリムルであったが、一太刀目を振り下ろした勢いのまま二太刀目、三太刀目と繰り出す。

スぺピアは拳で刀を弾き飛ばそうと突き出す。しかし今度はリムルが刀の軌道を逸らして反撃する。

拳を避けた刀の軌道を修正してスぺピアの突き出された拳の根本、手首を狙い一閃。刃は確かに手首に食い込んだ。だが、それだけだった。

刃は手首に一センチほど食い込み、たしかにスぺピアの体を傷つけた。赤い血が数滴、滴り落ちた。

しかし、それだけだった。

さらに力を加えてもそれ以上刃が通ることは無い。 “何か” で止められたのだ。

『これがお主の限界。身の程を知れ』

自身の手首を捻って刀を掴むと、それを引き寄せる。刀に引つ張られて態勢を崩したリムルの顔面目掛けて、空いている拳を突き出す。

拳はリムルの顔面を腕ぎ取るかの勢いで食い込み、リムルを吹き飛ばす。

(おかしい。物理攻撃耐性が発動していない)

大したダメージではない、しかし本来発動するはずの能力が発動しないことに多少の疑問を感じるリムルであった。

『「チェイン・ドラゴン・ライトニング」！』

アインズが二頭の龍を思わせる雷撃魔法を放つ。雷撃は左右から食らいつくようにスぺピアに襲い掛かるが。

『これしぎのことでー』

スぺピアは両手で雷撃を受け止めている。

(無効化出来ていないが、第七位階は通じてもないか。もし第十位階以上しか通じないのなら戦闘方法は限られる、厄介だな)

しかしスぺピアはチェイン・ドラゴン・ライトニングを受け止めるのに精一杯の様子、このチャンスを逃すまいとリムルは突撃する。

そしてもう2人。

リムルとアインズの視線の先にいるスペビアの背後に2つの人影が躍り出る。

一輝と刀華だ。

「異常を察して来てよかった！」

一輝が刀を抜き放つ。対して刀華は抜刀姿勢のまま、リムルと相対するスペビアの背後をとった。

一輝が残骸を蹴って接近する。スペビアとの距離が迫る中、刀を構える。

「第七秘剣『雷光』！」

「『雷鳴』！」

一輝と刀華がそれぞれの技を放つ。

一輝の神速の斬撃が、刀華の雷撃が、背後からスペビアを襲う。

そして前方からはリムルが迫る。

『見くびるなあああ！』

スペビアは受け止めていたチェイン・ドラゴン・ライトニングを掴み、円を描くように振り回した。

肉薄していたリムルと一輝は回避を余儀なくされたが、刀華の雷撃はスペビアに直撃した。

刀華の雷鳴が直撃したことで態勢を崩したスペビア。チェイン・ドラゴン・ライトニングを受け止める力に一瞬綻びが生じ、その身に受けることとなった。

『少し。ああ本当に少しだが、痺れたぞ』

スペビアの体は雷鳴とチェイン・ドラゴン・ライトニングを受けたことで僅かに帯電している。視線を一周させて、リムル達4人を見渡す。

その瞳は殺気に満ちていた。

所変わってハワイ。

千束達一行は空港に移動していた。



店舗を兼ねるバンを走らせて空港への道を急ぐ一行、その車内では千束とたきなが現地で使用する装備の準備をしていた。

「でも私達が現着したところには戦闘は終わってそうだけどな」

愛銃であるデトニクス・コンバットマスターに特殊非殺傷弾を装填しながら独り言をもらす千束。そんな彼女をたきなは半目で見ている。

「それでも司令からの命令なら従わないといけません。間に合わなかったとしてもです」

「クルミが入手した動画に映ってた敵ってさ、ゲームとかに出そうな敵だったよ？ 対策はあるのかな」

カフェリコリコの情報担当にして世界最強クラスのハッカーであるクルミがインターネットの海から手に入れた動画に、東京に現れた敵の様子を記録したものがあつたのだ。

その動画に映っていた敵を見た千束とクルミの第一声は「ゲームの敵かな？」だった。

それほどもだに「魔法」を使用する敵の衝撃は大きかったのだ。

そして、そんな敵に銃弾が効くのかどうかを千束とたきなは心配していた。

「着いたぞ。搭乗手続きを済ませよう」

そうしている内に空港に到着した。ミカがバンから降りて空港入口へと歩き出す。

それに千束、たきな、ミズキ、クルミも続く。

「少しよろしいか？」

背後から声を掛けられて一同は振り返る。

振り返った先には厚手の戦闘服に身を包み、腰の前に箱のような装置を下げた一団がいた。

「なんだ？」

ミカは杖を突きながら向き直る。声を掛けてきたのは一団の先頭にいる小柄な少女。いや、「幼女」と言った方が正しいであろう人物だった。

「お尋ねするが、日本に向かっているのか？」

「そうだ、急ぎでな」

ミカが答えると少女は口角を上げて笑顔を作り、話し始めた。

「飛行機を待っていたら時間がかかる。よければ我々が東京まで送るが？」

突然の、しかも意外な申し出にミカ達は困惑の表情を浮かべる。

ミカ達は思った。『怪しい』と。

その反応は当然であった。突如自分たちのまえに現れて、「東京に連れて行ってやる」と言うのだから怪しいことこの上ない。

それに何より、幼女達の出で立ちである。見たところ戦闘服のようであるが、こんな戦闘服は資料などでも見たことが無い。

ミカ達の現状を理解しているかのような言動もまた、怪しさに拍車をかけている。

「ね、あなた方は誰ですか？」

沈黙を破って千束が口を開く。質問された少女は千束の瞳を真っ直ぐ見て答えた。

「お前たちの味方だ」

スぺビアとの戦闘は一進一退の攻防が続いている。

リムル、アインズ、一輝、刀華の4名が相手をしているが、いまだ戦いは続いている。

リムルは内心焦っていた。スぺビアを倒して地上の加勢に向かいたい気持ちがあったからだ。

地上で戦っているシオンやランガをはじめとした仲間たちが心配であった。今リムルの目の前にいるスぺビアがローズバルト軍とは別の戦力であるならば、現在地上に降りた者達はローズバルト軍の現戦力と戦っていることになるからだ。

リムル自身は飛空城艦を着水させて加勢し、来ているであろう敵幹

部を抑えるつもりでいた。

シオン達が強いことはよく分かっているが、今回の異世界での戦いは敵戦力が前回の比ではない。兵士一人ひとりの強さも桁違いだと感じている。

現にルーデウス達の世界や自分達の世界で交戦した時の敵兵士の強さは以前のものとは別物だと他の者からも聞いていた。

故にリムルは焦っていた。一刻も早く目の前の少年を倒して加勢に向かわねばならない。

しかし、決め手に欠けるこの現状を打破するのに何か妙案が無いものかと先程から考えている。

『なんだ、諦めたのか？ 大人しく跪くなら寛大な心で屠ってやるぞ』

スぺピアの挑発を4人は聞き流す。

スぺピアは何の反応も帰ってこなかったことに若干苛立った様子だが、そんなことはリムル達には関係ない。

リムルは仕掛けるタイミングを計っていた。

「名前はリムル、だったか？」

隣のアインズがリムルを見下ろしながら訪ねてくる。リムルはアインズを見上げながら「そうだ」と肯定する。

「仕掛けるタイミングを探っているのか？ なら私が魔法で隙を作る、そのタイミングで仕掛けてくれ」

「わかった。初撃は任せるよ」

「ああ、任されるとしよう」

アインズは頷くと魔法を展開する。

(グラスプハートは効いていなかったようだが、チェイン・ドラゴン・ライトニングは無効化できていなかった。即死に対しての耐性がある、といったところか…。ならば)

アインズは放った2撃の魔法に対してのスぺピアの様子から何らかの即死無効スキルを持っていると判断した。

しかし、第七位階のチェイン・ドラゴン・ライトニングを受け止め、あまつさえそれを振り回した以上。出し惜しみは命取りとアインズは考えた。

(ならば、第十位階魔法で相手をするしかないか)

アインズが魔法を放つ。放った魔法は第十位階。

『魔法最強化―マキシマイズマジック―』『現断―リアリティ・スラッシュ―』

あらゆる魔法防御が無効化される斬撃が空間を切断しスペビアの胸元から鮮血を飛び散らせる。

『っ!』

何が起こったのか理解できず、スペビアの動きに隙が生まれる。

それにより、背後から肉薄する2人への対応が遅れることとなった。

『一刀修羅』!』

自身の能力を一分間だけ数十倍に跳ね上げる伐刀絶技―ノウブルアーツ―を発動して回り込み、そのままの勢いで第七秘剣『雷光』によって神速の斬撃をもつて斬りかかる。

こちらへの対応が遅れたスペビアは上半身を捻ると振り返りざまに右拳で裏拳を振るう。

が、先程見せた“通常時”の雷光ではなく今回放った雷光は一刀修羅によって“速度が上がった”雷光である。

まして今振るった拳は狙いも半端な攻撃。当たる筈もなく拳は空を裂き、一輝の刀型固有礼装『陰鉄』によってその拳は手首から切断された。

残った左拳を振るうが、一輝は地面を蹴って僅かに距離を置く。

僅かに空いた一輝とスペビアの距離。一步踏み出せば拳が届くその距離を詰めるべく、スペビアが踏み出す。

完全にリムルとアインズを背後にする形となるが、手首を切断されて冷静さを欠いたスペビアにとっては最も近くにいる一輝を仕留めることが最優先となっていた。

しかしそこに割って入る者がいた。

『疾風迅雷』『武御雷神―タケミカズチ―!』

刀華だ。自身の伐倒絶技『疾風迅雷』を使用して一時的に能力を向上させて突撃する。刀華の伐倒絶技『疾風迅雷』は雷によって自身の

筋肉に働きかけることで能力を“一時的”ではあるが向上させるものである。

雷のトンネルを形成する刀華。その延長線上にはスペビアがいる。刀華は自身の刀型固有礼装『鳴神』を突きの状態に構えると突撃する。それが『武御雷神―タケミカズチ―』。刀華自身をレールガンの弾丸に見立てて突撃させる大技だ。

技としての威力ならば刀華の代名詞的技の『雷切』に勝るだろう。しかしこの武御雷神は未完成の技であるが故に肉体への負荷も相当なものなのだ。

しかし、刀華はその大技を放った。

少しでもスペビアにダメージを与える必要があると考えたからだ。

武御雷神を放つ直前。スペビアの背後から走って来るリムルが見えた。この技を放てば、刀華は戦闘継続が出来ないほど消耗するだろう。

しかし、次にリムルが控えている。それが、刀華にこの大技を放つ決心をさせた。

一輝に匹敵、いや凌駕するかもしれない速度で繰り出された刀華渾身の突きがスペビアの拳と激突する。

最初こそ拮抗していた切先と拳であったが、徐々に切先が拳に食い込むように刃が入っていく。

「はあああああ！」

刀華の覚悟が、スペビアの拳を破った。鳴神が拳を貫通する。スペビアは使い物にならなくなった拳に力を入れて鳴神が抜けないようにする。

下半身を捻って蹴りを繰り出すが、再び一輝がスペビアの左拳を切断した。

それによって解放された刀華は最後の力を振り絞って後退すると、そのまま座り込んでしまった。

『逃がすと思ったか。鬨り殺しにして――』

「――こっちのセリフだ！」

リムルが背後から刀を背中に突き立てる。

背中の中側——つまり人間でいう心臓のあたりに突き立てた刀はスペビアの体を貫通して前に抜ける。

『ぐう、うう、っ』

スペビアはぎこちなく首を捻り、リムルを睨む。

「お前の負けだ。仲間の情報を教えてもらおうぞ」

そう言うリムルの背後にはアインズが警戒を解くことなく佇んでおり、前方には一輝が陰鉄を構えている。

『言っただろう、我が直々に屠ってや——』

『——そこまでなのだ』

声がした。スペビアと同じように頭に直接流れ込んできた。

両手を合わせた坊主頭の青年がスペビアの真上に浮いている。

『私はピギユティア。武器を収め、スペビアをこちらに渡すのだ』

リムル達を見下ろしたままピギユティアと名乗る青年は言う。

リムルはスペビアに刀を刺したまま、ピギユティアを見上げる。リムルの背後にいるアインズが口を開いた。

「申し訳ないが、それは無理だ。こちらもその少年に訊きたいことがあるのでね。それとも、あなたが答えてくれるのかな？」

アインズの言葉を聞いたピギユティアは少し考える様子を見せる。両手の人差し指で側頭部を突いている。

『とても面倒なのだ、大人しく従ってほしいのだ。正直言ってダルののだ』

そう言ったピギユティアは自身の体を逆さにする。足を上に、頭を下にしてアインズに顔を向けると「ニイ」と気味の悪い笑顔を向ける。

そして、弾丸のようにアインズへと突撃した。

『光輝緑の体―ボディ・オブ・イファルジェントベリル―』  
ヴェールを被る様にアインズの体を緑の光輝が包んだ。

殴打属性の攻撃を一度だけ無効化し、一定時間耐性を付与する魔法を発動する。ピギユティアがアインズ目掛けて襲い掛かるが、バフがかかったアインズに対してはその突撃攻撃も無効化される。

スぺピアの脇を走り抜けて、一輝がピギユティアに斬りかかる。一輝の効果が切れたことによる反動で大きく消耗しているが、それでも力を振り絞り陰鉄を振るう。

しかし、ピギユティアは一輝に目もくれず繰り出される斬撃を掻い潜ると一輝の鳩尾に掌底を打ち込む。

一輝の体が「く」の字に曲がり、そのまま吹き飛ばされる。

「がはあ！　ぐう、あ…」

地面に体を打ち付けるように何度か跳ねてようやく止まったが、一輝が起き上がることは無かった。

(分が悪いな…。ランガを呼んだ方がいいかもな)

リムルはスぺピアに突き刺したままの刀を引き抜く。といっても、単に引き抜くだけではなく捻りながらである。

捻って引き抜いた為に刃がスぺピアの内臓を深く傷つけると、スぺピアは苦悶の表情を浮かべてその場に蹲った。

引き抜いた刀の血を払うと、リムルはピギユティアに向き直る。

スぺピアを無力化したが、刀華と一輝が戦闘不能。4対1の状況から2対1の状況になってしまった。

『2人だけで私に勝てるのだ？　無謀なのだ、大人しくしてほしいのだ。ダルののだ』

ピギユティアは心底面倒くさそうに欠伸をする。

「やってみないと分からないだろ？」

リムルが斬りかかる。アインズは魔法を放とうにもリムルへの誤射を警戒して様子を見ている。

『やらなくても分かるのだ』

ピギユティアは両手を勢いよく合わせる。「パンツ」という乾いた音が響いた次の瞬間だった。

リムルが吹き飛ばされていた。来た方向に戻る様に、逆再生するかのように。

リムルの視線。ピギユティアのさらに先では、アインズもリムルと同じように吹き飛ばされていた。

吹き飛ばされながらも態勢を立て直す2人。着地をすると、リムル

は再び斬りかかる。

しかし、先程と同じ結果になった。ピギユティアが手を合わせると、再びリムルは吹き飛ばされていた。

いや、正確には違う。攻撃を当てられた場所が違うのだ。

先程は腹。今回は額。

気が付けば痛みと共に吹き飛ばされている。

知っている。前世で読んだマンガでこんな能力を使うラスボスがいた。

「時間を止める、といったところか」

着地し、額をさするリムル。その考察にピギユティアは感嘆の表情を向ける。

『よくぞ見抜いたのだ。見事なのだ、これで私に勝てないと理解したと思うのだ。大人しく死を迎えるのだ』

ピギユティアは再び手を合わせようと構える。

リムルとアインズが身構えた、次の瞬間――

――ピギユティアが爆発した。

いや、正確には「攻撃を受けて」爆発したと言う方が正しいだろう。

ピギユティアが黒煙を上げてポカンとしている。自身に何が起こったのか理解できていない様子だ。

「帝国製、爆裂術式のお味はいかがかな？」

声がした。ピギユティアを嘲笑するような、高い、子供のような声だ。

リムルは声がした方向に視線をやる。視線の先には厚手の戦闘服に身を包んだ「幼女」がいた。いや、「浮いて」いた。

アインズはピギユティアから視線を外さずに言葉を紡ぐ。

「また会えてうれしいよ、ターニャ」

「それはこちらもだ。手を貸すぞ、アインズ」

金髪にアホ毛をポヨンと跳ねさせた幼女――ターニャ・フォン・



デグレチャフが不敵な笑みをたたえ、ライフルの銃口をピギユテイアに向けた。

## 混戦

時は少し遡る。

ハワイで千束達の前に現れたターニャ達。結果としてターニャの申し出をミカは受けた。それが最速で東京に行く方法であったからだ。

ターニャ達は魔法を戦争における戦闘手段に用いる世界から来た。それも、魔法を使用した飛行技術がある世界からである。

ターニャ達は千束達が乗ってきたバンを持ち上げて東京まで運んだ。

(私がいた世界の東京とは違うようだな)

東京に着いたターニャが感じた違和感、その答えはすぐにわかった。元現代人でサラリーマンであったターニャには、だ。

崩壊した塔と真新しい塔。例えるなら東京タワーが壊れかけのモニュメントとして残り、その隣に真新しい東京スカイツリーが並んでいるような光景だ。

そして、千束達が所属する組織の本部付近にバンを着地させると、ターニャは部下達に現地勢力への加勢を命じて飛び立った。

進路の先、そこには破壊されながらも滞空している飛空城艦があった。

(あきらかにこの世界のモノではない。アレも我々と「同じ」か?)

ターニャの瞳に映る飛空城艦。それはあきらかにこの世界に不釣り合いなものだ。

飛空城艦より高度をとったターニャの視界に入ったのは。坊主頭の青年——ピギユティアだった。

そして、それと相對している人物も。

視線を向けた先で一輝がピギユティアに吹き飛ばされ戦闘不能になる。

(どんな状況だ? どちらが敵だ。ん、あれは?)

落とした視線の先にソレはいた。

ソレは知った顔だった。世界は違えど、かつて同じ学び舎で学び、

そして共に異世界で戦った者。

出会った当初は神——もとい『存在X』と勘違いして突つかかったが、それも過去の話だ。

「私は友人を助けない薄情者ではないからな……」

ターニャはライフルの照準をピギユティアに定めると、爆裂術式を展開した。

「主よ、友の危機を退ける術を授け給え。願わくば、我等を脅かす脅威を排除する力を与え給え」

ターニャの祈りに呼応するかのように、胸元に下げられた演算宝珠エレ二ウム九五式から虹色の光が漏れだす。

光が広がり、ライフルの弾丸へと魔力が込められていく。

ターニャはピギユティアを照準器に捉えたまま。

——引き金を引いた。

『ラインの悪魔、なんの用なのだ？ 邪魔なのだ、おとなしくしておくのだ』

ピギユティアは標的をターニャ変更する。ターニャ目掛けて跳躍し、握った拳の手首を引くようにして突き出す。

ターニャは後退して回避すると、構えたライフルを連射する。次々に発射されて打ち込まれていく弾丸は両拳によつて打ち払われている。

「器用なものだな。…ならば！」

ターニャは射撃を続行しながら上昇する。自身の高度がどんどん上がっていく様子を五感で感じながらもピギユティアへの警戒を解くことは無く。ただひたすら上昇し続けた。

『逃がさないのだ』

ピギユティアは本格的にターニャを標的に定めた。

ピギユティアは腰を落として跳躍する。跳躍によつて衝撃波が生

じ、ピギユティアの体を包みながら上昇させる。

飛来する弾丸をもともせず空を突き抜けるとターニヤを追い抜き、頭上をとる。

「何!？」

ターニヤは軌道修正をすると、飛空城艦から距離を取るように飛行する。

(判断を誤るなよ、アインズ)

ピギユティアを牽引しながら飛行するターニヤに並ぶようにピギユティアは飛行する。

『逃げ切れるはずがないのだ。ここまでなのだ』

ターニヤは気にせず飛び続ける。徐々に、徐々に速度を落としながら。決してそれを悟らせないように。

「前線で死ぬなど御免だな。夢の後方勤務の為に生きて帰らせてもらおう」

先程ピギユティアが見せた加速をターニヤは警戒していた。その加速が跳躍による一瞬のものなのか、それとも、持続出来るものなのか分からない以上。相手の虚を突き、機先を制する必要があると考えた。

(そろそろだな…)

ターニヤの飛行速度はトップスピードの7割近くまで落ちていた。ピギユティアがそれに気づいた様子は無い。

『そろそろ追いかけてこも飽きたのだ。このあたりでお終いに——』

(———今だ!)

ターニヤが一気に加速する。進行方向を間下に変更し急降下する。突然のことに事態が飲み込めないピギユティア。

『なんの真似なのだ? 逃がさないのだ』

ピギユティアはターニヤを追いかけようと減速する。が、自身が先程まで体を向けていた進行方向の先にいる者達の存在に気付く。

ターニヤと同じ戦闘服を着用している者が5人。全員がライフルの銃口をこちらに向けている。

次の瞬間、ピギユティアの体を爆発が包んでいた。

ターニヤが一気に加速し急降下したのは、部下達の射程内に入ったからだ。

ピギユティアはそれに気づかず、5人が放った爆裂術式を一度に食らうこととなった。

急降下したターニヤは部下達に指示を飛ばす。

「各員、散開しつつ警戒せよ！」

先程までピギユティアがいた空間は爆煙が上がっている。

「…多少は効いたか？」

ターニヤはライフルの銃口を降ろすことなく独り言ちる。

爆裂術式が炸裂してから数十秒が経とうとしているが、いまだにピギユティアの姿は爆煙の中にある。

「…各員、他敵勢力の掃討にあた——」

『——今のはビックリしたのだ』

声が出たのと同時にターニヤの体は吹き飛ばされていた。

吹き飛ばされる直前、ニマアと気味の悪い笑みを浮かべたピギユティアをターニヤは確かに見た。

吹き飛ばされた先のビルに体を打ち付けてターニヤは止まった。

「ターニヤー！」

遠くでアインズの叫びが聞こえた気がした。衝突したことで舞い上がった土煙に咳き込みながら視界を上げると、部下たちがこちらに向かつてきていた。

しかし、それを追い抜くようにピギユティアがターニヤに迫る。先程と同じ薄気味悪い笑みを浮かべてである。

「ク、ツ…クソツ！」

どうにかビルから脱出しようと試みるが、体が深くめり込んでいるため脱出は困難だった。

体を捻ってみるもののビクともしない。そうしている内にもピギユティアはこちらに向かってきている。

こちらが動けないことを知っているのか速度を抑えて徐々に迫っ

てきている。

『おしまいなのだ』

ピギユティアが両手を広げて打ち合わせようとする。ピギユティアはこれまでにないほど息を吸い込み。そして――

――広げられた手が、閉じた。

周囲に衝撃波が拡散する。それは離れた位置にいるリムル達にも届いた。

飛空城艦が軋みを上げて揺れる。先程とは違う攻撃手段をとったピギユティアにリムルは僅かに戦慄する。

現在、リムル達がいる飛空城艦から見えるピギユティアはまさに“点”である。目視で認識出来はするが正確な動きは分からない程の距離だ。

リムルは隣のアインズを向く。アインズの表情は骸骨である為に分からないが、恐らくリムルと同じ気持ちだろう。

衝撃波によってターニヤがめり込んでいるビルからガラス片等が飛び散り、コンクリなどが粉碎されて土煙が上がっている。

そしてしばらくして土煙が晴れていく。

『何故なのだ。なぜ効かないのだ？』

ピギユティアの声が脳に響く。しかし、何か違和感がある言葉だった。

ターニヤが倒されたなら『これで1人倒したのだ』などの言葉を言うはずだ。しかし先程ピギユティアが発した言葉の内容がそういった内容ではなかったことにリムルは疑問を感じた。

“何が起こった？”と疑問が膨らんでいくリムルの隣でアインズが僅かに笑い声を漏らす。

「間に合ったか」

一度アインズに視線を向けたリムルはすぐさま視線をピギユティアのいる方角に戻した。

《個体名ピギユティアと個体名ターニヤの間に何者かがいます》

珍しく曖昧なことを言う智慧之王にリムルは半笑いを浮かべる。

《正体は分からないのか？》

《分かりません。ですが、その何者かが個体名ピギユティアの攻撃から個体名ターニヤを守ったと考えられます》

「安心するがいい」

声を掛けられたリムルはアインズを向く。アインズは視線をピギユティアのいる方向へ向けたまま話す。

「あれは私の配下だ。心配はない」

そう言われて視線を戻した先には漆黒の鎧で身を固め、鎧と同じ漆黒の翼で滞空する何者かがいた。

「助かったぞ。アルベド」

ターニヤは自身の前に立ちはだかり、ピギユティアの攻撃から自分を守った知己に礼を述べる。

「礼には及ばないわ。アインズ様の命令ですもの」

そう言うと、アルベドと言われた女性はピギユティアに得物を向ける。

アルベドが扱う得物はハルバード。そして装備は顔面を含む体全体を包む鎧で固めている。

『何故防ぐことが出来たのだ？ ありえないのだ』

ピギユティアは気味悪い笑みのまま首を傾げる。アルベドは内心舌打ちしながらピギユティアを警戒し、後ろのターニヤに声を掛ける。

「脱出は出来る？」

「ああ、先程の衝撃波で亀裂が入ったからな。大丈夫だ」

そう言うとターニヤは立ち上がり、服や顔に付着した砂を払うとアルベドに並び立つ。

「コイツはやばいぞ。次も防ぐことが出来るか？」

「愚問ね」

アルベドの返事を聞いたターニヤは口角をつり上げて笑みを浮かべる。

ピギユティアの後方からはターニヤの部下達が来ている。

「一度アインズと合流した方がよさそうだな」

「至高の御方であるアインズ様の元に敵を誘うと言うの?」

ターニヤの提案にアルベドは難色を示したが、続くターニヤの発言によって頷くしかなかった。

「この場の戦力だけでどうこうできる相手ではない。一度集結する必要がある」

「…、わかったわ」

アルベドもピギユティアの強さは別の次元だと感じていた。自分とターニヤ達だけでは倒せない、と。

ターニヤはピギユティアと睨み合っている。ピギユティアが仕掛けてくる様子は今のところ無いが、どこかのタイミングでこの場から脱出してアインズ達と合流する必要があった。

「各員、一斉射!」

ターニヤの号令を受けた部下達が一斉にピギユティアへ発砲する。

ピギユティアは銃弾を打ち払うが四方八方からの銃撃でその場に釘付けになった。

(両掌を合わせる隙を与えなければ、先程の大技は来ないはずだ)

ターニヤは隙を与えぬように撃ち続けた。そして。

『時間停止—タイム・ストップ—!』

こちらに向かっていたリムルとアインズ。そのアインズの詠唱と共に、周囲一帯が“停止”した。

宙を浮遊しピギユティアに近づくアインズは、ふとターニヤを見る。

「時間停止は通じるようだな…。ありがとう、ターニヤ。おかげで準備の時間を得ることが出来た」

タイム・ストップの効果で体内時間さえも停止している仲間に声を掛けると、ピギユティアへと向き直る。

『魔法最強化—マキシマイズマジック—』『魔法抵抗難度強化—ペネトレートマジック—』『魔法遅延化—デレイマジック—』『魔法三重化—トリプレットマジック—』

バフ効果のある魔法を重ね掛けしていく。

1つは、これから放つ魔法の威力を最大に引き上げ。



1つは、これから放つ魔法に対してのピギユティアの耐性を下げ。  
1つは、放つ魔法の発動を遅らせる。これは、時間停止中は攻撃魔法が発動できない為である。

1つは、これから放つ魔法を三重にして放つ魔法。

そして、これから放つ魔法こそ真打。

『現断ーリアリティ・スラッシュー!』

先程スペピアにダメージを与えた魔法。スペピアに効いたのならピギユティアにも効くとアインズは考えたのだ。

そして時間停止の効果が切れる。

時が再び動き出した刹那。ピギユティアの胸元から鮮血が散り、そして右腕と左足が切断された。

『!? なん、なのだ!?』

突然の事に困惑しているピギユティアであったが。すぐに事態を把握し、表情を引き締める。

『時間停止を使えるものが他にもいるとは驚きなのだ。まだまだ情報不足なのだ』

そう言うのとピギユティアは飛空城艦へと弾丸のように飛来し、スペピアを回収するとリムル達を見る。

『この場は退くとするのだ。また会うか分からないが、さらばなのだ』  
そう言うって次元に消えるように消失した。

『引いたか…』

『アレはなんだ、アインズ?』

先程までピギユティアがいた場所を見ていたアインズにターニヤが訊ねる。

アインズは顎に手を当てて考えを巡らせる。しばし考えた後、並んで立つターニヤを見下ろして答えた。

『私達がいる無数の世界を管理する者』といったところか…  
『自身を上位者と名乗る存在…。まさに『存在X』だな…!』

ターニヤは幼い見た目に反して、憎悪一色の表情を浮かべる。

『まあ何より…』

そう言うってターニヤに向き直ったアインズは右手を差し出す。

「久しぶりだな。また会えてうれしいよ、ターニャ」

ターニャは先程から一変、笑顔を浮かべる。

「ああ、こちらこそ。アインズ」

そして、差し出された手をしっかりと握ったのだった。

## 迎撃戦

「ところで。お前達も異世界から来たのか？」

リムルは握手を交わしている2人に割って入る様に声を掛ける。2人は握手を解き、リムルに向き直るとアインズが話し始めた。

「その認識で間違っていない。私はアインズ・ウール・ゴウン、アインズと呼んでくれれば幸いだ」

アインズは両手を広げて名乗ると、先程ターニヤにしたように手を差し出す。

「魔国連邦盟主、リムルⅡテンペストだ。さつきは助かったよ」

先程の戦闘の礼を述べながらリムルは握手を交わす。

「帝国軍第203航空魔導大隊、ターニヤ・フォン・デグレチャフ少佐だ」

「軍人さんだったのか。協力感謝するよ」

ターニヤとも握手を終えたリムルは真下の戦闘に目をやる。

市街地ではいまだに戦闘が続いている。ランガやシオン達も現地勢力に加勢しているが、敵幹部を抑えるのに精一杯のようだ。

「ついでに頼みたいんだが、『アノ敵』の掃討に力を貸してくれないか？」

「上位存在が撤退しても戦闘を継続しているということは、アレらの大将は先程の敵とは別ということか？」

ターニヤは真下を見下ろしながら訊ねる。リムルは「おそらく」と答えた。

「ここまで付き合ったのだ。もう少しぐらいいいだろう」

アインズはリムルに対して頷くと、ゆっくりと降下していった。

「我々は敵の航空戦力を叩くぞ！」

「「了解！」「」」

ターニヤも部下達に指示を出す。

「助かる。俺は動けない仲間を避難させてから戦闘に参加するよ」

そう言つてターニヤと分かれたリムルが向かった先は、大破した飛空城艦だ。

甲板——もとい甲板だった場所には刀華と一輝がいた。刀華は回復しているが、一輝はいまだ意識を覚ましていない。

「刀華！」

刀華達の近くに着地すると、急いで駆け寄っていく。

「リムルさん、無事でよかったです。アノ敵は？」

周囲を見渡しながら刀華が訊ねる。リムルは笑顔を作り口を開いた。

「別の世界の戦士が協力してくれたおかげで撃退出来た」

「そうですか…」

「それより、急いでもここから降りよう。一輝は俺が担いで行くよ」

「わかりました。お願いします」

「クリスがいるビルの屋上に一輝を運んだら戦闘に参加するよ。刀華はまだ戦えるか？」

そう訊かれた刀華は僅かに笑みを湛えて頷いた。

「勿論です」

リムルは飛空城艦を何とか東京湾に着水させると、一輝を担いで市街地へと向かった。

市街地ではシオンとランガが敵幹部のカシユロントと交戦していた。

シオンの得物は太剣『剛力丸・改』。対するカシユロントの得物も太剣。

両者が剣を振るうたびに大気が荒れ狂うように揺れる。それぞれの剣を振るい、刃を打ち合わせる。

鏢迫り合いの間隙を縫うようにランガが『声振砲——ボイスカノン——』を放つ。咆哮は衝撃波となってカシユロントに襲い掛かる。

しかしカシユロントは大剣の剣背の部分をランガに向けるように地面に突き立てると、自身を剣に隠すように構える。

衝撃波はカシユロントとの間に突き立てられた太剣に阻まれる。しかしその威力は凄まじく太剣は大きく振動し、カシユロント自身も太剣を支える腕を振るわせながら耐えるほかなかった。

シオンはボイスカノンに対して防御姿勢をとるカシユロントの背

後に回り込み愛剣を振るう。

『金剛・神』！』

しかし、剛力丸はカシユロントに届かなかった。

いや、正確に言えば届いた。カシユロントが発動した闘技『金剛・神』によって阻まれたことに目を瞑るならば。

カシユロントの体全体だけではなく大剣すらも金色に輝き、極限まで強化されたその防御力で剛力丸を受け止めたのだ。

それと、先程までボイスカノンによって震えていた大剣とそれを支える右腕も今や震えていない。

「この程度、か！」

カシユロントは大剣を振り抜く。体全体で回転を加えて振るわれる大剣による一撃をシオンは剛力丸で受け止めようと構える。

しかし直後、悪寒が走り回避行動をとった。

横に飛び退いた刹那、確かにシオンは恐怖を感じた。「コレを受け止めるのはマズい。不可能だ」と脳が危険信号を発した感覚になり、事実その直感は当たることになった。

シオンが先程までいた場所の延長線。つまりカシユロントが大剣を振り抜いた先に目を向ける。

「なッ……！」

驚愕し、安堵し、そして僅かに恐怖した。

大剣が振り抜かれた先にはビルがあった。シオンにとっては“大きな建物”という認識でしかないソレが、上と下に真っ二つにされていた。

剣筋は斜めに入り、ビルを両断している。直後、ビルの上部が滑る様に道路に落下した。

幸い、中にいた者はいなかった。早い段階で現地勢力であるリコリスを中心に避難していたからだ。

(真正面からアレを受け止め切れただろうか、私は?)

自身の強さには多少の自信があるシオンであるが、これはあまりにも想定外だった。

「次の一撃で、仕留める！」

カシユロントが大剣を振り上げる。

そこでランガが動いた。狼にしては大柄なその体軀をもつてカシユロントに体当たりをしたのだ。

それは、雷による広範囲攻撃が出来ない現状から導き出された手段だった。カシユロントの意表を突くことが出来た。

大剣を振り上げたことによつて無防備となつたその脇腹に強烈な衝撃を受けたことでカシユロントは態勢を崩した。

「はあああああ！」

シオンは剛力丸を上段に構えて突撃する。ランガの体当たりで態勢を崩したカシユロントは一瞬反応が遅れた。

『金剛・し——』

闘技の詠唱を言い終える前に振り下ろされたシオンの剛力丸がカシユロントの肩口から上半身に斬り込んだ。

刃は不完全に発動された『金剛・神』によつて心臓のすぐ上のあたりで止まったが。深く、カシユロントの体に傷を負わせた。

「ぐうツ、ブフウツ。ガア！」

言葉にならない苦悶の声を上げるカシユロント。真つ直ぐシオンを見上げるその瞳は、いまだ闘志に燃えている。

「まだだ。これで勝てたと、思うな！」

カシユロントは剛力丸を片に受けたまま立ち上がる。シオンは立ち上がらせまいと斬り下ろす力を強めるが、カシユロントはお構いなしに立ち上がる。

そして。

『風紋・神』！

闘技の詠唱の後、カシユロントは空気を肺一杯に吸い込む。そして両頬をプクウーと膨らませたまま地面に顔を向けて。

肺一杯の空気を自身の足元へと勢いよく吹き出したのだ。

吹き出された空気は地面へ届くと全方位に拡散され、衝撃波となつてシオンとランガに襲い掛かった。

ランガは踏ん張っているが、じりじりと押されている。シオンは剛力丸を握る手に力を込めて離れない。

が、カシユロントは持っていた大剣で自身の肩に食い込んだ剛力丸を下から叩くように斬り上げた。

剛力丸がカシユロントの肩から抜けたことで衝撃波の衝撃をさらに受けることとなったシオンは態勢を立て直すことも出来ずに吹き飛ばされた。

「驚いた。たかが体当たりで不覚を、取るとはな！」

シオンによって斬られた傷口を抑えながら2人を交互に見る。そして大剣を地面に突き立てると、拳を握りファイティングポーズをとる。

「第2、ラウンドだ！」

カシユロントは地面を蹴って跳躍すると。ランガへと迫る。

握った拳を振りかぶり、上空からランガ目掛けて突撃する。ランガは「迎撃」ではなく「回避」を選んだ。

カシユロントの拳が黒く染まったかと思った次の瞬間、ランガの体が地面にめり込んだ。

めり込んだと言っても頭のみであったが、ランガは何が起こったのか理解できずにいた。

唯一理解できたことは「自身が攻撃を食らったこと」であったが、それを理解するまでに数秒を要したことで追撃を食らうこととなった。

ランガの体は鈍器で勢いよく殴られたかのような衝撃を受ける。

しかも一箇所ではない。頭、胴、後ろ足、前足などをランダムのように殴られ続けた。

カシユロントは上空に滞空したまま拳を突き出している。

「ランガッー」

シオンが剛力丸を盾のように構えてランガとカシユロントの間に割って入った。

盾のように構えた剛力丸に連続で衝撃が走る。

「くうっ、重いッー」

シオンは剛力丸に受ける衝撃の強さで、ランガが地面にめり込まされた理由を理解した。

(拳の軌道が見えない。防御を解くこともできないとは！)

このままではジリ貧、こちらが消耗するのが先だとシオンは考えた。

しかし逆転する手段が無いのも事実。どうすべきか悩んでいた、その時だった。

「——散々好き放題してくれたな」

一つの影が、シオン達の頭上を抜けてカシユロントに肉薄した。

その声、そして地面に映ったシルエツトでシオンとランガは誰が来たのかを理解した。

先程の声の後、衝撃波はピタリと止んだ。シオンとランガが頭上の声の主を見上げると、そこには。

「お前の相手は俺だ」

リムルが、眼光を鋭くしてカシユロントと対峙していた。

「これじゃキリがないわ！」

ビルの屋上にて愛銃『417D』のスコープを覗いたままトーカはぼやく。

スコープの先ではハルト達が戦闘を繰り広げている。ハルト、レナ、マキ、の3名を援護するように狙撃を続けていた。

「それには同感であります。ぼやいても仕方ないでありますよ？」

「わかってるわよ……」

隣で『ブレイザーR93』を構えているグミにそう言われたトーカは若干苛立った様子だったが、すぐに狙撃を再開した。

「敵との戦力差は無くなりつつあります。ここが正念場ですよ」

そしてもう一人、リムルに担ぎ込まれた一輝の手当てをしながら戦況をパソコン端末でモニタリングしているクリスがいた。

「リムルが言っていた髑髏や空飛ぶ兵士は味方でもいいのよね？」

狙撃を続けながらトーカが訊ねる。クリスは手当てが完了した一輝を寝かせるとトーカを振り返って答えた。



「そのようですね。こちらは敵魔王軍のみを攻撃するようになってハルトさんも言っていましたから、このまま続行ですね」

「わかったわ」

「了解であります」

クリスはトーカとグミの返事を聞くと再びパソコン端末を操作する。現在の分布図や戦力差などを入力し、今後の敵軍の動きを予測するためだ。

しかし、クリスは戦術予報士でも軍司でもないので作戦を練ることは出来ない。

しかし、得られたデータを各人に共有することで被害を抑えようとしたのだ。

クリスはレナやマキのように前線で敵と殴り合えるほど強くはない。だからこそ見つけたクリスなりの「戦い方」なのだ。

クリスは後方支援のスペシャリスト。衛生兵、通信兵などを一人で兼ねる存在である。

だが、戦闘はからつきしである為。

「見つけたぞー！」

「ッ!？」

屋上の上ってきた敵兵士へクリスは『ボディーガード380』の銃口を向けるが、敵兵士が持っていた槍に弾き飛ばされる。

「クリス!？」

トーカとグミが背後の異変に気付いて振り返るが、間に合わない。

敵兵士は槍を構えて、クリス目掛けて突き出した。

「——来てくれ、陰鉄」

声と共に風が吹き抜ける。先程までクリスの隣で横になっていた一輝が目を覚まし、陰鉄を抜き放った。

突き出された槍の穂を下から打ち払うと、そのまま飛び上がるように斬りかかった。勢いよく横薙ぎに振られた陰鉄の刃は敵兵士が着用する鎧の胸当てを一閃、上下にパツクリと割るだけではなく敵の胸

部にも横一文字の傷をつける。傷からは血が滴り落ちる。

「ハア、ハア…」

一輝は表情を険しくして敵兵士へ2撃目を加えようと陰鉄を振りかぶり、刃を振り下ろした。

しかしピギユティアから受けたダメージが抜けきっていない状態での2撃目であつたために敵兵士に見切られてしまった。

敵兵士は槍で陰鉄の刃を防ぐと、体重を乗せるように押し込んできた。

「手負いで何が出来る!」

「ここを守るぐらいは出来るツ…!」

足裏に力を込めて踏みとどまる一輝だが、本調子でない故に徐々に押されてきている。

「無駄だ、無駄なことをして何に——」

「——無駄じゃあ、ないだろ」

声が出た。この場にいる誰の声でもない、男性の声が。

その次の瞬間だった。一輝と対峙していた敵兵士の首がズルリと落ちた。

首を落とされた敵兵士の体からは力が抜け、ドサリと崩れるように倒れた。倒れた死体の付近には、その体と先程までくっついていた首が転がっている。

そして、その向こう。先程まで敵兵士の体に隠れて良く見えなかった人影。

黒髪の男が立っていた。

胴体を守るための黒い鎧と黒のロングコート。どこぞのベータテスターを彷彿とさせる出で立ちだが、少し違う。

青を基調とした腰当てと、何より得物は「日本刀」だ。それも二刀流ではない。

「大丈夫か?」

男が手を差し伸べる。一輝はその手を掴んで立ち上がると、姿勢を

正して頭を下げる。

「ご助力、感謝します」

そう言われた男は僅かに笑うと頷く。

「気にするな。この世界の人間じゃないな、俺達と同じ境遇だろう？  
手伝うぞ」

一輝は頭を上げると、手を差し出す。

「助かります。僕は黒鉄一輝。あなたは？」

「ああ、俺か？」

そう言うと男は日本刀を鞘に納めると、差し出された手を握る。

「冒険者のクナギ・レンヤだ」

## 破剛

「喰らい尽くせ、『暴食之王―ベルゼビュート―』！」

リムルがかざした掌から黒い霧とも雲とも煙とも言えぬものが噴き出してカシユロントに襲い掛かる。

「そんな攻撃では、倒せぬ！」

カシユロントが両腕を顔の前で十字に組むと、地響きを立てるかのように叫ぶ。

「金剛ウ・神！」

カシユロントの体が金色に輝く。リムルはお構いなくベルゼビュートでカシユロントを飲み込んだ。

ところが、結果はリムルの想定とは違っていた。

ベルゼビュートがカシユロントの体に触れることを「拒む」ような反応を見せたのだ。

「飲み込めないのか!？」

リムルは驚愕の表情を浮かべる。こんなことは初めてだからだ。

《告。敵の体から放たれる金色の光にはスキル等の干渉を阻害する効果があると考えられます。ベルゼビュートのスキルが光に近づくほどに弱体化されています》

ラファエルからの現状の解析結果を聞いてリムルは少々焦りを見せる。

《オウエルポスの『金剛』よりも強固ってことか?》

《告。一時後退することを進言します》

リムルは一步ずつ後退するが、カシユロントも一步ずつ前進するため距離は離れない。

ベルゼビュートがカシユロントの纏わりついて動きを制限している為、一気に距離を詰められることは無いが、決定打に欠けるのも事実だった。

「俺の金剛を旧魔王軍幹部のものと一緒に、するな！」

カシユロントは十字にクロスしていた両腕を解き、振り払うようにベルゼビュートを掻き消した。そして。

「ワイルド・ワイド・ボーン!!」

叫びと共に両拳を突き出した。

衝撃波が真っ直ぐリムルに迫る。しかし、リムルは微動だにせず、両手でそれを受け止めた。

背後にシオンとランガがいたということもあるが、後退することが無駄だと判断したためである。

足と腰に力を入れてその場にて踏ん張るが、ジリジリと押されてくる。

「このまま押し、潰す!」

衝撃波は弱まることなく、むしろ強くなる。

(攻勢に出られない…、何かないか…)

リムルは打開策を模索するが、これといった策が浮かばない。衝撃波はリムルの予想を大きく上回るほど強力なものだったのだ。

ダンツ、と何かを蹴るような音をリムルは聞いた。そこは自分達がいる場所より高い位置、クリス達がいる場所だった。

次の瞬間だった。カシユロントの背中から鮮血が飛び散った。

『ワイルド・ワイド・ボーン』を放つ際に解除していた『金剛・神』の隙を突いた者がいたのだ。

黒いコートを靡かせたその者は日本刀にてカシユロントの背中に斬り込んだのだ。

黒いコートの男——レンヤは刃をカシユロントの背中に滑らせながら着地すると、振り抜いた刀を再び振るう。

二撃目を貰うまいとカシユロントは『ワイルド・ワイド・ボーン』を止め『金剛・神』を発動する。

レンヤの二撃目はカシユロントの金色に輝く体に傷を付けること敵わず滑る様に抜ける。

「硬いな」

三撃目の刃も防がれたレンヤは飛び退いて距離を取る。

レンヤと対峙するカシユロントの背後からリムルとシオンが仕掛ける。

三方から取り囲むようにして攻撃を仕掛けるが、それらの攻撃は防がれる。

「離れろ！」

声がして3人は飛び退く。

次の瞬間、カシユロントが爆発を起こす。頭上からターニヤが爆裂術式を込めた弾丸を放ったのだ。

黒煙が晴れる前にリムルはカシユロントへと再び斬りかかる。想定通り防がれるが、金色の光が僅かに鈍くなっていた。

「まだまだ、これからだ！」

カシユロントが振るう大剣が黒煙を払い、肉薄していたリムルへと振るわれた。

しかし、リムルは体を捻って回避すると、再び斬りかかる。一撃だけではない、二撃、三撃と繰り返される攻撃を防ぐたびに、カシユロントを包む金色の輝きは鈍くくすんでいく。

リムルと反対側からレンヤが斬りかかる、殺意を込めた瞳を向けた先にいるカシユロントの胴を執拗に狙っている。

レンヤの攻撃をいなしつつ、挟み撃ちに攻撃を仕掛けてくるリムルにも対処する。

リムルの刀が振り下ろされると、カシユロントは左腕でそれを受け止めようとする。

しかし、先程までのように防ぐことは出来なかった。振り下ろされた刃が僅かに左腕に食い込み、一筋の血が滴り落ちたのだ。

「限界か！」

切断、とまではいかないがリムルが振り下ろした刀は確かにカシユロントの『金剛・神』を破った。

無論、そこに至るまでの攻撃みよってカシユロントの『金剛・神』が消耗していたからこそだが。

(鉄壁のように思えるが、波状攻撃や連続攻撃を重ねることで消耗させることは出来るみたいだな)

リムルは現在の状況から『金剛・神』の弱点を理解したが、それでも完全に突破出来たわけではないのも事実。

「シオン！」

リムルとは別の位置から飛び出したシオンに指示を出す。「お任せを！」と返事を返してシオンは剛力丸を振り上げた。

振り下ろされた剛力丸は大剣で受け止められたが、それによって両手を塞がれたカシユロントはその場に抑え込まれる。

リムルとシオンは得物を振り下ろす力を弱めることなくカシユロントを抑えている。

カシユロントの背後にレンヤが刀を抜き放ち肉薄する。

そして突き出された刃はカシユロントの腹部を貫いた。遂に鉄壁の闘技である『金剛・神』を破ったのだ。

「各員、敵集団に一斉射用意！」

ターニヤの指示を受けた部下達が銃を構える。ターニヤを先頭とした魚鱗陣形をもって東京上空を飛翔して敵集団の頭上を取るとターニヤは斉射の号令を出す。

放たれた計6発の爆裂術式は敵集団を爆炎で包む。

「突撃！」

ターニヤは高度を地面スレスレまで下げると、敵兵士の攻撃を掻い潜りながら銃撃を行う。無論、現地勢力には当てないようである。

僅かに散開しながら各員が敵兵士を銃撃し、速度を落とすことなく戦場を抜けて飛び立っていく。

一撃離脱戦法による奇襲で、敵兵士は地上の現地勢力とターニヤ達を同時に相手をしなければいけない事態となった。

「カシユロントは何をしていますの。あの脳筋は!?!」

シテイツクが鞭を振るいながら別の場所で戦う同僚の悪態を吐く。

そこに、振るわれた鞭を掻い潜るように接近する人物がいた。

ハルトだ。

両手に一振りずつ、つまり二刀流で刀を抜き放ちシテイツクとの距離を詰めていく。

持ち前の視力をもって鞭の軌道を瞬時に読み、必要最低限の回避で

もつてうねる大蛇の如き鞭の猛攻を掻い潜る。

「あと15メートル。もう慣れた」

そう呟くハルトの目は確かに鞭の軌道を読んでいた。

その気になれば銃弾の軌道ですら読むハルトの目をもつてすれば鞭の軌道を読むことも可能だった。

シテイツクは先程から惜しげもなく鞭を振るいこちらを近づけまいと牽制してきた。

鞭の軌道とその癖は大体理解できたハルトは一気に距離を詰めるべく動いたのだ。

「近づけませんわよ、ブギーマン！」

シテイツクが振るう鞭が大きく跳ねる。地面のコンクリートを抉り、ハルトへと襲い掛かる。

ハルトは上半身を90°捻って縦方向にする。ハルトのすぐ脇を鞭が翳めるが、目もくれず走る。

距離は遂にクロスレンジまで縮まった。

縮まった間合いなら刀を使用するハルトに分がある。シテイツクの鞭は刀の間合いよりも長い間合いにて有効となる武器。

故にお互いの距離が縮み切った今となつてはハルトに利があるのだ。

『風弾』！

シテイツクの頬と顎、さらに下部の喉までもが膨らんだ次の瞬間だった。

風が弾丸のように口から撃ち出され、ハルトの頬を翳める。

頬に一筋のかすり傷を作りながらもハルトは刀を振るう。右手の『不知火』を振りかぶり横一文字に一閃、後退されて躲されるが構わず左手の『陽炎』を下から振り上げる。

振り上げられた切先がシテイツクの右頬を翳めて、そのボリューミーな金髪を散らす。

シテイツクは鞭を封じられた間合いの為『風弾』に頼るしかない。しかしそんな状況を見逃すハルトでもなく、距離を離されないように肉薄して刀を振るう。



連続して撃ち出される圧縮された衝撃波の弾丸の軌道を見切り、回避しながら追い詰めていく。

(焦って顔ばかり狙ってきているな。読みやすくて助かるけど…)

シテイツクのワンパターンの攻撃に心中でお礼しながらもハルトは刀を振るう。

刀がシテイツクの頬を翳める。薄皮を斬る程度ではあったが、少しずつハルトの攻撃が届こうとしていた。

(躲しきれない!? このままでは殺られますわ!)

シテイツクは現在の状況を覆す方法を考える。しかし、そのような方法は浮かばなかった。

しかし、シテイツクに加勢が現れた。シュトライドだ。

ステラ達ブレイザー組の攻撃を躲してシテイツクの元へとやってきたのだ。

『光弾』!」

両手を合わせたかと思えば、その両掌をハルトへと向けて開いたのだ。開かれたシュトライドの両掌から握り拳大の大きさの光弾が無数に放たれる。

光弾は拡散しながらハルトに襲い掛かった。ハルトは光弾を回避するために飛び退く。それによって詰められたシテイツクとの距離が再び開いてしまった。

「マスター!」

レナがM4カスタム銃『レギウス』を連射しながら走って来る。照準はシュトライドに向いている。

撃ち出された銃弾の大半はシュトライドの体を翳めて抜けていく。しかし数発は脇腹に着弾した。

シュトライドは表情を陰しくしながらも光弾を放つ両掌を目の前から両腕を開くようにして散らせる。

扇状に放たれる光弾はレナのすぐ隣を翳めると眩い光を放ち炸裂した。

レナの周囲だけではない、レナに続いて追いついてきたマキやハルトの周囲でも光弾が炸裂した。

「姉さん、危ない！」

そんな声が聞こえた直後、レナの視界は大きく揺れた。次に認識できたのは、自信の視界が先程よりも低い位置にあることだった。しかも何故か横を向いている。

「え…、何…？」

体を起こそうとするが、うまく起こせない。体が重いのだ。

しかし、その理由はすぐに理解できた。

マキが上に覆いかぶさっているのだ。

「……ッ！ マキ！ 大丈夫マキ！」

覆いかぶさるマキの体を揺するが返事は無い。

「レナ！」

ハルトの声がして、足音が近づいてくる。レナの傍に着いたハルトは膝をつくともマキをレナの上から移動させる。

隣に寝かされたマキを見るレナの表情は絶望そのものだった。

「ねえマスター。マキは？ マキは大丈夫なんだよね！」

「衝撃で気絶しているだけだ。マキは体は丈夫だからね」

ハルトの言葉にレナはホッと胸を撫でおろす。ハルトは立ち上がると再び二刀流の構えをとる。

シユトライドは再び『光弾』を放つ姿勢をとる。

「さすがに光は斬れないな…、どうするか…」

ハルトの視力をもってすれば『光弾』の軌道を読むことは出来る。しかし、炸裂する『光弾』を斬ることはハルトにも出来ないのだ。

背後にはレナと戦闘不能のマキがいる。よって、彼女達を守りながらの戦いとなる。

「レナ。マキを背負ってクリスのいるビルの屋上に行けるかい？」

こちらを見上げるレナにハルトは訊ねる。

レナは「わかった！」と力強く頷くと。マキを背負ってその場を後にする。そして――

――再び『光弾』が放たれる。

ハルトは回避行動をとるが、扇状に広範囲に放たれた光弾の内の数

弾はレナへと飛来する。

「レナ、避ける！」

叫んだハルトの視線の先にはこちらを振り向くレナ。一瞬の遅れによつて生じた隙を突くように光弾はレナに迫る。

レナは妹を背負った状態で守る様に立つと、自信を盾にするかのようになり立ち尽くした。

『障波水蓮』！』

どこからともなく声が響いた次の瞬間だった。レナの目の前に水が噴き出したのだ。

壁ともカーテンとも形容出来るソレは光弾を飲み込み、見事に消滅させた。

光弾が防がれたシュトライド目掛けて球体上の水が弾丸のように飛来する。

飛来するそれを身を捻って回避しつつ光弾で反撃するシュトライドに、続けざまに水弾が飛来する。

シュトライドの視界に水弾を放つ者——珠雫が映る。

水と氷を操る珠雫は水弾でシュトライドを牽制する。その間隙を縫うようにステラが脇から飛び出した。

ステラがシュトライドに肉薄し、『妃竜の罪剣——レーヴァテイン——』を下から斬り上げる。

振り上げられたレーヴァテインの剣身が炎を纏う。その軌道は頭を狙い、シュトライドは回避の為に大きく体勢を崩されることになる。

頭のすぐ横をレーヴァテインが翳める。纏った炎が髪を焦がす匂いを鼻腔に感じながらもシュトライドは距離を取る。

「私が相手よー！」

ステラがシュトライドの前に立ち塞がる。レーヴァテインを正眼に構えて睨みつけるその瞳は闘志に燃えていた。

「一度この私に操られた貴様達に勝てるっても？」

シュトライドは口角をつり上げるように挑発するが、ステラは平静を装い口を開く。

「今度は勝つわ」

そう言った次の瞬間だった。

腰を落としたステラが目の前に肉薄していたのだ。シュトライドは突然の事に対応が一瞬遅れる。

振り下ろされるレーヴァテインが炎を纏う。

シュトライドを両断し、焼き尽くそうと迫る剣身をシュトライドは見ていることしか出来なかった。

パチンツという音を立ててレーヴァテインが弾かれる。

左方向を見るとそこには、鞭を振り上げるシティックがいた。

## 捕縛

「カシユロントがやられましたわ。撤退しますわよ！」

鞭を振るいステラを牽制するシテイツク。

シユトライドは頷くと、ステラと珠雫から距離を取り、後退していく。

「逃がすと思った？」

ハルトが二刀を構えてシテイツクに迫る。近づけまいと鞭を振るうシテイツクの背後に人影が見えた。

バナラ色の髪と赤を基調とした制服を着用した少女——千束だった。

千束の存在にシテイツクはまだ気付いていない。そのチャンスを逃すまいと千束は愛銃『デトニクスコンバットマスター』の照準を定めて引き金を引いた。

放たれた銃弾は直線の軌道を描き、吸い寄せられるようにシテイツクの右肩と背中、それと足に命中する。

しかし、命中した銃弾はシテイツクを貫くわけでもなっければ体に食い込むわけでもなかった。

命中した銃弾から赤い粉塵が舞う。いわゆる“非殺傷弾”である。しかし、銃弾をもろに受けた衝撃と激痛によってシテイツクは苦悶の表情を浮かべる。

「このまま返すわけじゃないじゃん。大人しく掴まって、ね！」

千束がシテイツクに肉薄する。シテイツクは振り返りざまに鞭を振るおうとするが、背後からハルトの斬撃を受けて態勢を崩す。

そのまま構えたデトニクスコンバットマスターのマズルを腹部に押し当てて引き金を引く。

零距离で発射された特殊非殺傷弾が腹部に激痛を走らせる。シテイツクは再び苦悶の表情を浮かべるが、歯を食いしばり鞭を振るう。

シテイツクの周囲をなぞるように鞭は振るわれるが、千束とハルトはその軌道呼んで躲す。

「何故ッ!? 何故、当たりッ、ませんの!?!」

受けた傷と痛みによつて言葉が途切れながら、シテイツクは自身と相対する2人に恐怖を感じていた。

「だつて見えてるし。そりや避けるっしょ?」

千束は涼しげに答えると、照準をシテイツクの腹部に定めて引き金を引いた。何発も。

連続して腹部に鋭い痛みを受けて、白目を剥きつつあるシテイツク。鞭を振るう気力も体力も戦意も、既に無い。

「彼女の言うとおりだね」

ハルトが『不知火』と『陽炎』を振りかぶり、そして振り下ろした。振り下ろされた刃はシテイツクの両腕を肩から切り落とした。それは水が川を流れるような、静かな斬撃だった。

次元船に退避したシュトライドは、両腕を切断されて膝から崩れ落ちるシテイツクを視界に収める。

「シテイツク!」

視線の先ではシテイツクがリコリスによつて拘束されている。

カシユロントも同様であった。リムル達の加勢に入ったレンヤにダルマにされて拘束された。

「シュトライド様! 撤退命令を!」

シテイツクの部下が甲板にいるシュトライドの元へやって来る。

シテイツクから次元船の指揮を任されていた副官であり、次元船の艦長だ。

「何を言うか! 2人を助けに——」

シュトライドが声を荒げながら振り返り、そして絶句する。目の前の艦長は涙を流し、憎悪と後悔にその表情を歪めている。

それもそのはずだ、シテイツクは部下に対しては優しかったのだから。

部下に対してシテイツクは公明正大であった。そんなシテイツクを慕う部下は多かつた、艦長もその1人だ。

そんな艦長がシテイツクを「置き去りにして」撤退しようとする覚悟を無下にするシュトライドではなかった。

「……………撤退だ！ これ以上、誰一人欠けることなく真・魔王城に帰還する！」

無論、このまま帰還すれば魔王ローズバルトから厳罰を受けるだろう。

しかし、これ以上のこの世界での戦闘は無意味だと判断した。

なにより、覚悟を決めた艦長達を無駄に死なせることがシュトライドには我慢できなかった。

「…この借りは大きいぞ。必ず返してやるッ！」

上昇する次元船の艦橋からシュトライドは、既に見えなくなったりムル達を睨み続けていた。

「敵は撤退したか…」

上昇し、撤退していく次元船を見上げながらリムルは独り言を漏らす。

次元船が可能性の奔流に出たことを視認すると、視線を落とす。視線の先には『粘鋼糸』によってグルグル巻きに拘束されたカシユロントが横たわっている。

カシユロントを囲むように周囲にはシオンとランガ、レンヤもいる。

「助かったよ。協力ありがとな」

リムルはレンヤの元に歩み寄ると、手を差し出す。レンヤはその手を握ると笑みを浮かべる。

「気にするな。共通の敵が相手だったみたいだしな、流れだよ」

「俺はリムル⇨テンペスト。共通の敵ってことはあんたも「適応者」なのか？」

レンヤはリムルの言った「適応者」という単語の意味が分かっただけじゃなかった。

「クナギ・レンヤだ。「適応者」ってのは初めて聞いたが。まあ、魔王

軍と戦っていることは確かだな」

「なら、目的は同じってことだな。よかつたら一緒に戦わないか？」

「お前達とか？」

レンヤに訊ねられたリムルは一度頷くと口を開く。

「ああ。正確には俺達だけじゃないけどな。他の世界にも仲間が向かっていて、別行動してるんだ」

「一緒に戦うのは、俺は構わないぞ。魔王軍はどちらにしても1人では倒せそうにないからな」

「あらためて、よろしく」

「こちらこそな」

そう話している2人のところにリコリスの少女が1人近づいてくる。茶髪のツーブロックに紺色の制服を着用している。

「敵の撃退、協力感謝するっス。あとはこつちが引き継ぐっス、そいつを渡してもらえないっスか？」

「悪いけど、俺達もコイツには聞きたいことが山ほどあるんだ。まだそちらには渡せない」

リムルは頭をふって答える。

「そう言われても、ソイツを連れて来いってのは上の指示っスから。アシらも従うしかないんスよ」

リコリスの少女も引かない。そうしている内に少女の後方から数人のリコリスがやって来る。

(あまり揉めるのは良くないな…)

リムルは彼女達と事を構える気は毛頭ない。しかし、捕獲したカシユロントから情報を得たい気持ちもある。

「引き渡してくれないなら、気は進まないっスけど力づくで渡してもらうしか——」

「——サクラ、もういい」

声が出た方向に全員が視線を向ける。

そこには茶髪をアシンメトリーに分けた少女がこちらに歩いてきていた。

少女は“サクラ”と呼んだ少女を手で制すと、リムルの元へと歩い



ていく。サクラとは違い、赤い制服を着用している。

そして、リムルの目の前に立つと手を差し出す。握手を求めてきたのだ。

「先の戦闘、協力感謝します。私達の仲間が別の敵を捕獲しています、その敵はそちらにお譲りします」

「いいんすか先輩?!」

少女の後ろにいるサクラが声を上げる。

少女はサクラを振り向くと「上の指示だ」と言いサクラを黙らせる。

「わかった、ありがたく譲ってもらおうよ。ところで、そちらの上司と話は出来ないか?」

「理由を教えてくださいませんか?」

リムルが訊ねると、少女が理由を問うてきた。

「さっきの敵の情報はそちらよりも掴んでいる。情報共有すれば今後の対策もとれるだろう?」

「…確認します」

そう言うと少女はリムルから少し離れたところで耳にはめたインカムで確認を始めた。

しばらくのやり取りの後、リムルの元に戻って来た。

「問題無いそうです。案内します」

少女に先導され、リムルは歩き出す。その途中で振り向き、シオンとランガに言伝を託す。

「ハルト達に『少し話をして来るからこの場を任せた』って伝えておいてくれ」

「かしこまりました」

シオンの返事を受けて、再びリムルは歩き出した。

---

ハルトの目の前でシテイツクが拘束される。

先のシテイツクとの戦闘で加勢してくれた千束と後から合流したときの2人が拘束用ワイヤー銃でシテイツクを近くの電柱に拘束

した。

「え〜つと、『リリベル』じゃないよね？ どちら様？」

拘束を完了した千束がハルトを振り返り訊ねる。その後ろではたきなが警戒的な視線をハルトに向けている。

「SORD、と言ってもこの世界の組織じゃないから分からないよね？」

「聞いたことないな。この世界じゃないって、どゆこと？」

「俺達はこのことは別の世界から来たんだ。さっきの敵もね」

「うわあ、ほんとにファンタジーだなあ」

千束が項垂れる。

そこにクリス達がやって来る。クリスは負傷したマキの手当を開始する。

「そういうわけで、敵じゃないから安心してほしい」

「まあ、さっきの戦闘で協力してくれたし。わかった」

そう言うと千束は踵を返して歩き出す。

「東京を守ってくれてありがとう」

一度振り返って礼を告げると、たきなど共にその場を去った。

千束とすれ違うようにリコリスが現着してシティックを連れて行った。

「ハルト！」

千束達が去って行った方向とは別の方向からシオンとランガがやって来る。ランガの背には拘束されたカシユロントが乗せられている。

その背後からアインズ、アルベド、ターニャとその部下、レンヤがやって来る。

「シオンさん。リムルさんは？」

「現地の司令官との話し合いに向かった。ハルトにこの場を任せると伝言を預かっています」

「それは構いませんが。リムルさん1人で行ったんですか？ 危険は…、無いか」

「当たり前です！」

「ところで、そちらの方は？」

ハルトがシオンの背後にいるアインズ達を覗く。

「はじめまして。私はナザリック地下大墳墓の主、アインズ・ウール・ゴウン魔導王だ。アインズと呼んでくれれば幸いだ」

アインズが一步步み出て自己紹介をする。

それに倣うようにターニャ達もそれぞれ自己紹介をしていく。

最後にレンヤが挨拶を終えたところで、マキの手当を終えたクリスがレンヤに近づく。

「先程はありがとうございました」

そう言っ頭を下げるクリスにレンヤは笑みを崩さず「気にするな」と言う。

「ところで、さっきの気骨のある若者はどうした？」

レンヤの問いにクリスは一瞬何のことか分からず『？』を浮かべるが、それが一輝のことだと分かり、答える。

「黒鉄さんなら、現地の方達にストレッツチャーを借りて、安静にしてもらっています」

「そうか…。若いのに根性がある奴だったからな、どうなったか気になっっていたんだ」

「はあ……………。若いの？」

現在クリスの目の前にいるレンヤも十分若いはずだ。なのに先程からのレンヤの口調は“年上が年下を気にする”ようにクリスには聞こえた。

以前読んだマンガにあった“見た目は子供、中身は大人”的なものなのだろうかとクリスは考えたが、詮無いことだと思い、考えるのをやめた。

「クリス達を守ってくれてありがとうございます」

そこに、アインズとターニャへのお礼を済ませたハルトが近づいてくる。

「なに、大したことはしていない」

ハルトから差し出された手を握りながらレンヤは頭を振る。

「立ち姿から見て、かなりの使い手とお見受けします」

「お前もこちらの同類だな？」

「ええ」

ハルトはレンヤの立ち姿勢を見て、  
「剣術の心得があり、かなりの  
使い手」と判断した。

お互い剣術を極めた者同士だからこそ分かり得たことだった。

「まずは。先の戦闘への協力、感謝します」

DA指令室にてリムルは司令官の楠木から礼の言葉を受けていた。

「礼には及ばないよ。俺達もアノ敵には因縁があるからな」

「差支えなければ、敵に関しての情報を教えていただけますか？」

「わかった。その為はこの場を設けてもらったんだしな」

そしてリムルは魔王ローズバルトとその戦力に関して、持ちうる情報を開示した。

楠木達は最初こそ疑い半分で聞いていたが、話が進むにつれて先の戦闘との類似点なども判明したことで納得せざるをえなくなった。

「——と、いうことなんだ」

リムルが話し終える。楠木は口元に手を当ててリムルの話を頭の中で整理している。

「俄かには信じられませんが。こうして今我々の前にあなたがいることが何よりの証拠ということですね」

「ああ。ローズバルト軍と戦う仲間は他にもいるが、現在別行動をとっている」

「他にも多くの仲間がいるのですか？」

「ここ以外の世界を巡って、ローズバルト軍の脅威を知らせて回っている。それと並行して、俺達と一緒に戦ってくれる仲間を集めているんだ」

「つまり、『我々にも協力してほしい』ということですね？」

「端的に言うとそのうだ。出来るなら多くの世界と協力して対処したいと考えている」

楠木は少し考えると、ゆっくりと顔を上げて口を開いた。

「では、我々の組織の中で最強のリコリスをお預けします」

そう言った楠木が視線をリムルの背後に向ける。

リムルもそれを追うように振り返ると、そこには千束とたきながいた。

「ちよちよちよ〜い。楠木さん本気!？」

千束が素っ頓狂な声を上げる。その隣ではたきなが声を上げないまでも驚愕の表情を浮かべる。

「事は重大だ。お前とたきなに任せる」

「う〜、分かったよ〜」

「全力で任務に努めます」

千束とたきなはお互い反対の返事を返したが、納得はしたようだ。

そんな2人にリムルは歩み寄ると手を差し出す。

「リムル!! テンペストだ。よろしく!」

千束とたきなはお互い目を合わせると、再びリムルに向き直り笑顔で握手を交わす。

「私、錦木千束です。よろしく!」

「井ノ上たきなです。よろしくお願いします」

## 川神学園防衛戦

リムル達と別行動をとっていたルーデウスチームは戦闘の只中であつた。

場所は百代達の世界。

川神市。武道の総本山である『川神院』を囲むようにローズバルト軍が布陣している。

「ストリウムファイヤー！」

川神院師範代ルー・イーが熱波を放ち、押し寄せる敵軍を食い止めている。ストリウムファイヤーによって怯んだ敵軍へ川神院の修行僧が突撃する。

ルーの横を抜けるように1人の老人が歩み出る。

髪は無いが豊かな髭を揺らすその老人は川神院『総代』であり、百代と一子の祖父である川神鉄心である。

「ルー、下がっておれ」

そう言い、修行僧も下がらせた鉄心へ敵兵士が何人も襲い掛かる。

しかし、鉄心は涼しい表情をしたまま視線を前に向けている。

「顕現の参——」

敵兵士が武器の届く間合いまで接近する。

そして手にした剣を振りかぶる。

「——毘沙門天」

一瞬の出来事であつた。

鉄心に襲い掛かった敵兵士が一瞬で地面に倒れた。

いや、正確には鉄心の闘気により具現化された巨大な足によって踏みつぶされたのだ。

「あれが武神の祖父ですか。強いな…、これなら少しは楽しめそうですね」

ローズバルト軍・川神院包囲分隊の指揮官であるヴォイドは感嘆の声を漏らす。

ルーの技『バーストハリケーン』によって発生した竜巻に兵士が巻き上げられ、落下していく。旋風がヴォイドの短く切り揃えられた黒髪を揺らす。

何人かは後方のヴォイドの近くに降ってくる。

「少しは働かないとエンリクスに怒られますし、そろそろ行きますか」頭をボリボリと掻きながら立ち上がると、右手の籠手を振りかぶり。

「潰れる。ドゴス・アドラー！」

振り下ろした。

しかし、その場で何かが起こるわけではなかった。何かが起こったのは視線の遥か先、僅かに視界に捉えていた鉄心が地面に倒れ伏したのだ。

先程鉄心がローズバルト軍の兵士に放った技『顕現の参・毘沙門天』に似た攻撃をヴォイドは放ったのだ。

鉄心は上から襲い掛かる力によって身動きが取れないでいる。

「暴風竜に対してはそこまで効果がありませんでしたが、人間サイズなら問題なく潰すことができるようですね。：しかし——」

ヴォイドは百代達が通う『川神学園』の方角に視線を向ける。

「グワツツエ、遅いですね。まだ制圧出来ないんでしょうか…」

別の場所で戦っている仲間の事を考えながらヴォイドは歩き出す。

視線の先には、地面に押さえつけられている鉄心と、こちらに気付いて戦闘態勢をとるルー。それと川神院の修行僧達がいた。

ヴォイドが連れて来ていた兵士は先程のルーと鉄心の攻撃で戦闘不能となっていた。

現在、まともに戦えるローズバルト軍・川神院包囲分隊の面子はヴォイド1人だ。

しかし、ヴォイドは笑顔を湛えたままだ。『敗ける方が難しい』と本気で考えているのだ。

「お前達は、ワタシが相手するヨ！」

ルーがヴォイドの前に立ち塞がり、構える。

「あなたは武神や、その祖父より強いのですか？」

歩みを止めたヴォイドは笑顔のまま訊ねる。その問いにルーは絶句し、答えられなかった。

ルーの反応に落胆したヴォイドの顔から笑顔が消える。

「なら、これから私が行うのは『戦闘』ではありません。『作業』です」

ヴォイドの言葉にルーは表情を険しくする。暗に「お前など敵にも数えられない」と言われたのだ。この世界で武道を極めた者の一人としての誇りに賭けてヴォイドを通すわけにはいかないと心に決めたルーは腰を少し落とし、攻撃姿勢をとる。

「舐めてもらっちゃ困るヨ！」

勢いよく踏み込んだルーがヴォイドに肉薄する。その速度は音速を越えるかの如くだった。

---

場所は変わって川神学園。

ここにもローズバルト軍の軍勢が侵攻している。川神学園包囲分隊を指揮するのはグワツツエである。

川神学園を東西南北から包囲した後、雪崩れ込むように一斉に攻め入った。

グワツツエが相手をするのは『この世界で最強』である百代だ。

拳による格闘戦を得意とする者同士がお互いの拳を繰り出し、ぶつかり合う。

その周囲では戦闘可能な生徒による防衛戦が展開されていた。

一子がポニーテールを揺らしながら薙刀を振りかぶり跳躍する。そのまま敵兵士の1人目掛けて振り下ろすが敵兵士が構えた大盾によつて防がれる。

弾かれた薙刀を構え直して横薙ぎに振るうが、それも防がれる。

敵兵士が大盾を突き出すように突進してくる。一子は飛び退くが、左右から他の兵士が斬りかかる。



しかし、一子の背後から飛び出した2人によって防がれる。由紀恵と、一子のクラスメイトであるクリステイアーネである。

由紀恵の剣とクリステイアーネのレイピアが一子に斬りかかった敵兵士の攻撃を防ぐと一閃と一突きを見舞う。

首元に斬撃を受けた敵兵士はその場に崩れ落ちた。

「助かったわ。まゆっち、クリー！」

一子が左右の由紀恵とクリステイアーネに礼を送る。

「このぐらい、お安い御用です」

「無事で、後で会おう！」

そう言うのと3人は正面と左右にに散り散りに駆けだした。

学園校舎内にも敵兵士が入り込んでいた。

いくら百代達手練れが居ようと物量による一斉侵攻を完全に防ぐことは出来なかった。

校舎の中央付近から侵入された為、校舎の両端に分けるように戦えない生徒達は避難していた。

ルーデウスは1番端から何室かの教室の壁を土魔法で補強すると、そこに生徒を誘導するように教師陣にお願いした。

鉄心から事前に教師陣には通達があったため、ルーデウスのお願いはすんなり聞き入れてもらうことが出来た。

これから行うことをルーデウスから聞いた教師陣は「共に戦う」と願い出たが、「万が一突破された時の為」とルーデウスはこれを拒んだ。

確認できる限りの生徒を端の教室に避難させると、その教室へと続く廊下を土魔法で塞ぐ。

「魔力の心配はしなくて良さそうだな」

自身に疲れや消耗感が無いことを確認したルーデウスはスクロールを起動する。

展開された魔法陣から魔道鎧が現れると、これを着用する。

ガントレットに内蔵されたショットガンを迫る敵兵士に向けてと

「ショットガン・トリガー！」

——10発もの岩砲弾が打ち出され、敵兵士を肉塊へと変える。廊下という狭い空間だからこそ、ショットガンによる広範囲制圧が可能なのであった。

敵の中に自力で飛べる者がいない事が幸いした。現在ルーデウスが戦っているのは校舎の3階である、よって到達手段は階段で上がる他ないのだ。

なお、アレクサンダーとシャンドルは2階の反対側を、エリスはルーデウスのいる戦場の真下で戦っている。

そして、ルーデウスの反対側の校舎ではオルステッドが生徒の防衛を行っていた。

オルステッドは迫る敵兵士を迎え撃つ為に腰を落として踏み込むと、一気に距離を詰める為に地面を蹴る。

突き出された手刀が兵士の1人の腹部を抉り、引き抜くと同時に左拳で殴り飛ばす。

殴り飛ばされた敵兵士は後続の敵兵士を巻き込み、そのまま壁に激突する。殴り飛ばされた同僚の有様に気を取られた別の兵士にオルステッドは襲い掛かった。

手刀から放たれた『光の太刀』を受けて崩れ落ちるように膝を落とす敵兵士、その傍らにズチャリとネバついた音を立てて上半身が横たわった。

敵兵士達は完全にオルステッドの殺気とその強さに恐怖し、その場から動けずにいた。

そこに、降り立つ者がいた。

割れた廊下の窓枠に着地して、顔を覗かせたのはリヒトーだ。

「オルステッドさん。助けは………、いらないですね」

オルステッドの様子から状況を察したりヒトーは、加勢の申し出を取り下げる。

「ああ、問題ない。『九鬼』とかいう建物の方はどうだ？」

オルステッドは眼前の敵に注意を向けたまま訊ねる。

リヒトー達撃墜王組はこの世界における重要な組織である『九鬼財閥』の極東本部の防衛に参加していた。

ここにリヒトーが来た意味を察したオルステッドは窓から校庭の様子を見る。

「下が苦戦しているようだ。そちらに向かってくれ」

「分かりました」

一言返すとリヒトーは窓から垂直に校庭に飛び降りた。

「さて…。早く終わらせてルーデウスの援護に向かうか」

オルステッドは眼前の敵兵士を再び標的に定めると、一気に肉薄する。

突き出された手刀が敵兵士の心臓を捉えた。

校庭に降り立ったりリヒトーはグワツツエと交戦中の百代のもとに向かう。

ジエイル達も川神学園に合流して戦闘を開始していた。

「手を借そうか？」

グワツツエを百代と挟み撃ちにするように立つ。腰の大太刀に手を添えて臨戦態勢をとる。

「いや、ここはいい。オルステッドさん達もいるし大丈夫だ」

言い終えると百代は再びグワツツエに正拳突きを放つ。グワツツエも迎え撃つように正拳突きを放つ。

両者の拳がぶつかり、それによって周囲に衝撃が走る。

「ジジイ達の援護に行ってくれるか？」

突き出した拳を押し込みながら百代はリヒトーに視線を送る。リヒトーは「わかった」と頷くと、道安を伴って川神院に向かった。

『閃撃』の助けを借りなくてよかったのか？」

百代と拳を合わせたままグワツツエが不敵な笑みで訊ねる。

「私一人で余裕だからな」

百代もまた、口角を上げて不敵な笑みで返す。お互いが拳を離して一時距離を取ると。

「大きく出たな『武神』。貴様ではローズバルト様はおろか俺にさえも勝てんぞ」

挑発するように肩を竦める、しかし百代は先程から表情変えずに聞いている。

「そう言うお前だって、私を倒せていないじゃないか。特大ブーメランだな」

挑発に挑発で返すと、グワツツエはハッと短く笑う。そして、拳を振り上げ――

「これまでが小手調べだと分かんとは、貴様それでも『神』と言われる存在か？ 自称ではないの、かッ！」

――振り下ろした拳が地面を抉り、周囲を揺らす。

地面と拳が激突したことによって生じた衝撃が百代を含む川神学園生達を吹き飛ばした。

「川神流、畳返し！」

百代は吹き飛ばされながらも地面を捲り壁にして衝撃を防ぐと川神流の技『致死蛭』を放つ。

『致死蛭』は鬪気を弾丸のように放つ技である。

グワツツエは気弾を掴むと、そのまま握りつぶすように拳を閉じる。『致死蛭』は呆気なく防がれたが、百代は捲りあがった地面から飛び上がるグワツツエへと拳を突き出す。

『川神流、炙り肉』！

鬪気によって紅蓮の変化した腕から放たれた炎がグワツツエを包む。

炎はグワツツエを取り囲み、うねる様に燃え上がる。

「振り解けんだと!? 小癩なことをする！」

グワツツエは自身に纏わりつく炎を振り解こうと身じろぎするが、炎をグワツツエを逃がさない。

百代は好機を逃すまいと突撃する。拳を振りかぶり、『無双正拳突き』の構えをとる。

『川神流、無双正け』――

――拳を突き出した刹那、拳とグワツツエの間に一筋の光が走った。

いや、それは一瞬よりも速かった。言うならば光速だっただろう。光は百代を含む辺り一帯を白く染める。

そこに遅れて轟音が轟く。光よりも僅かに遅い速度で。

ドゴオオオン！

轟音と共に、百代の体に焼けるような激痛と強烈な痺れが走る。

それは雷撃であった。

完全に不意を突かれたことで百代は直撃を受けた。肩にかけた川神学園の制服が焦げている。

頭上からの攻撃であったあつた為、その場に膝を着くこととなった。

「私の最大攻撃である『ロドア・ギオ・グネエル・デロウイン』。お気に召したかな？」

グワツツエの背後の人影から声がする。

百代は直接相対したことはないが、リムルから話は聞いていた。

「手伝いましょうか？ グワツツエ」

声の主——エンリクスは、グワツツエと共に百代の前に立ち塞がった。

## 川神学園防衛戦②

川神院に到着したりヒトーと道安の眼前に広がるものは、廃墟であつた。

多くの建物が崩れ、その下敷きになつた修行僧達も目に入った。そして、倒壊した塔の頂点にソイツはいた。

「おや。次の相手は『閃撃』と『重撃』ですか？」

魔王軍幹部12柱の1人、ヴォイドである。籠手を撫でながらリヒトーと道安を見下ろしている。

その足元にはルー、そして塔の足元には鉄心と数名の修行僧が倒れていた。

「ルーさん…」

リヒトーが一步近づく。

ヴォイドは立ち上がるとつま先で倒れ伏しているルーを小突く。

「この人、この世界では上位の強さみたいですが、私の相手にはなりませんでした」

ヴォイドは心底つまらなさそうな表情を浮かべる。小突くのを止めると、ルーを足蹴にする。

リヒトーが太刀を抜刀姿勢で構える。隣の道安も怒りを具現化するかのよう黒と緑が混じり合った球体を両手に出現させる。

「私の相手をしてくれるのですか？ よかった、消化不良気味だったもので」

ヴォイドが籠手を構える。籠手の先端をリヒトー達に向ける。

3者間に緊張が走る。

「それでは勝負しましょう。あなた方相手なら少しは楽しめ——」

ヴォイドが言い終える前に、光が通り抜けた。一拍遅れて風が吹き抜けていくと、ヴォイドは足元に視線を落とす。

先程まで踏みつけていたルーがいないのだ。

何事かと視線を泳がせるが、分からない。

「お疲れさまでした、ルーさん」

背後で声がして、バツと勢いよく振り向く。

振り向いた先には膝を着いて屈んだりヒトトと、横に寝かされたルーがいた。

「速いですね。不意を突かれましたよ」

ヴォイドはリヒトトに向き直り、籠手を構える。籠手から光が放たれ、ヴォイドは笑みを浮かべて詠唱する。

「すり潰せ、ギデ・ドゴス・アド——」

気が付いた時にはヴォイドは地に伏していた。

口いっばいに砂の味が広がる。何事かと思考を巡らせていると。リヒトトとは逆の位置、ヴォイドの背後から声がする。

「——建物の壊れ方から見て。お前も重力を武器にしてるのか？」

倒れ伏し、地面に押さえつけられたままのヴォイドに影がかかる。

あまりにも長いその影はヴォイドを完全に陽の光から隠してしまふ。それだけで、声の人物が相当な体躯であると想像できる。実際はかなりの体躯なのだが。

「さっき『勝負しましょう』って言ってたな。俺が相手になってやる、出来るモンなら立ち上がってみろ」

声の主——道安はヴォイドを見下ろしながらニイツと歯を出して笑みを作る。線のような黒目が真つ直ぐヴォイドを見据える。

さらに重力が強さを増し、ヴォイドを抑える力が強くなる。

籠手を振ることが出来ない為、ヴォイドは反撃出来ないでいる。「どうした？ さっさと立てよ。勝負するんだろ？」

さらに煽る。

「このッ！ こんな、ものでえ！」

ヴォイドは下唇を噛みながら全身に力を入れる。噛んだ唇から血が僅かに滲む。

籠手から金色の光が溢れ出し、ヴォイドの体を包んでいく。

すると先程までの様子から一変、圧しかかる重力が“無くなった”かのように立ち上がる。立ち上がったヴォイドの姿は倒れ伏す前とは全く違うものだった。

金色のオーラを纏い、全身に黒い曲線のような痣が浮かび上がって

いる。

「ッ!? 道安!」

リヒトーが抜刀して斬りかかる。斬りかかるといっても、常人には視認など出来はしない。気が付いた時には斬り伏せられているからだ。

閃光の斬撃がヴォイドに襲い掛かる。しかし、ヴォイドは掌で太刀の刀身を掴んだ。

それだけではない。掴んだ刀身を引き寄せるとリヒトーの腹部に拳を叩き込んだのだ。

後方に吹き飛ばされたりリヒトーを視認した道安はすぐさまヴォイドと距離を取ると、再び『重撃』を発動する。

しかし、ヴォイドの様子は変わらない。動きが鈍化する様子もない。

「冗談じゃねえぞ……!」

後ずさる道安とは対照的に、ヴォイドは一步ずつ距離を詰めていく。

「今度はこっちの番です。覚悟してく——」

道安の背後、遙か後方から飛来した無数の銃弾が踊るように飛来する。

本来の直線の軌道ではない、本来ならあり得ない軌道を描き飛来した銃弾がヴォイドに迫る。

ヴォイドは横に飛び退いて躲すが、銃弾は弧を描いて旋回するとヴォイドに再び迫る。

「まさか!」

これほどのふざけた軌道を描く銃弾を放てる者は現在この世界には一人のみ。

「武虎くん到手出しはさせないわ!」

『追撃』の撃墜王、園原水花であった。

両手に握ったサブマシンガンを乱射する。撃ち放たれた弾丸は、命を得たようにヴォイドに肉薄する。

ヴォイドは籠手を構えて防ぐが、背後から回り込むように迫る銃弾



に気を取られた隙に突撃してきたリヒトーの斬撃を胸部に受ける。

「アルバ・ゴラ・アドラー！」

籠手が真紅に光ったかと思つた次の瞬間、ヴォイドを中心とするように衝撃波が放たれる。

周囲を押し返すように放たれる衝撃波は球体のように広がり、迫る銃弾さえも弾き飛ばした。

しかし、衝撃波の直撃を受けなかった園原は銃撃を止めない。

放たれた弾丸は上下前後左右にヴォイドを取り囲むように飛来する。

「銃弾の包囲陣。いや、結界ですか！ 面白いですね！」

先程の衝撃波によってリヒトーが態勢を崩した隙を突いて園原に襲い掛かる。

『追撃』本人を潰せばいいことでしょうか!？」

眼前に迫る銃弾を籠手で防ぎながら接近する。背後から銃弾が迫るが、それを振り切らんばかりの速度で肉薄する。

園原が銃撃を止めて回避行動に移るが、僅かに判断が遅かつた。このままではヴォイドの方が早い、園原は追いつかれるだろう。

ただし、〃誰もヴォイドの邪魔をしなければ〃の話ではあるが。

「させるかよ……！」

さらに加速しようとするヴォイドの速度がガクンツと落ちた。

それはまるで〃何かに押さえつけられるように〃

「お前の速度は確かに脅威だ。だがな、俺の〃本気〃の重力からは逃げられねえぜ」

減速したことで園原との距離が開き、さらに背後から迫る銃弾との距離が縮まる。

「おい、見てないで手を貸せ。メガネ野郎」

「言われなくても」

ヴォイドに振り向いた園原の背後から鬼神のような怪物が躍り出

る。それはジェイルが己の『鉄を自由自在に操る』能力で作り出した鉄獅子であった。

鉄獅子はその巨大な拳を振りかぶると、ヴォイド目掛けてくりだした。

頑強な拳を籠手で何とか防いだヴォイドの背中に無数の銃弾が直撃する。口から血を吹き出し、苦悶の声を上げながらもヴォイドは籠手を振り抜き、籠手の先端で鉄獅子に殴りかかる。

しかし、僅かに傷を付けただけで破壊までは至らない。背後からはリヒトーが太刀を構えて迫って来る。

「チー！ 『ドゴス・アドラ』！」

ヴォイドの体が地面から弾き飛ばされるように上昇する。

リヒトーの一太刀が空を斬る。空振った太刀を構え直したりヒトーは頭上を見上げる。

視線の先には滞空しながらリヒトー達を見下ろし、籠手を地面へ向けるヴォイドがいる。

「まだ、悔っていたかもしれません。超本気で戦うことにします！」

籠手が金色の光を放ったかと思うと。光が紫色へと変わる。

そして。光が収束して、野球ボール程の光球へと変貌した。

リヒトーが異変を察知して跳躍する。ヴォイドを視界に捉えたまま、グングンと距離を詰める。

園原もヴォイドに銃弾を乱射し、ジェイルも鉄塊を投擲する。

「間に合いませんよ……」

直後——光球が炸裂し、周囲一帯を真っ白に染め上げた。

川神院を包んだ光は川神学園からも視認できた。

グワツツエとエンリクスとの2人と交戦中の百代と清楚もまた、その光が川神院の方角からのものだと認識した。

「おお、ヴォイドに『アレ』を使わせるか。やはり本物の強さなのだな、撃墜王は」

エンリクスが感嘆の声を上げる。

「……………百代」

項羽の人格を表に出して百代と並び立ち、グワツツエとエンリクスと対峙していた清楚が百代を見る。

「なんだい、清楚ちゃん？」

眼前の敵から視線を外すことなく百代は応じる。その表情は僅かに強張って見えた。

清楚もまた、先程の光が只事でないことは直感していた。

しかし、状況を知るためにこの場を離れることも出来ない以上。優先すべきは――

「さっさとこの無礼者達を片付けることにするか！」

「気が合うねえ、清楚ちゃん」

――敵指揮官の撃破であった。

先に仕掛けたのは清楚だった。方天画戟を振りかぶると、地を蹴つてエンリクスへと接近する。

方天画戟を横薙ぎに振るうが、エンリクスは跳躍して避ける。しかし清楚は手首を捻ることで方天画戟の軌道を変える。

横薙ぎから斬り上げのように軌道を変えた追撃をエンリクスは両腕に雷を纏わせると、それをバリアー代わりとするように眼前でクロスして受け止める。

方天画戟を振り抜いた清楚は左拳によるボディブローを叩き込む。腹部に強烈な一撃をくらったエンリクスは僅かに表情を歪めるが、決定打にはならなかった。

両腕に纏わせた雷が解放され、方天画戟を通じて清楚へと放電される。

清楚の体を雷撃が包み、着用している川神学園の制服を焦がす。

「お？、いいなあ、ちょうど肩が凝っていたところだ！」

清楚は方天画戟を両手で握ると、雷撃を気にすることなく振り抜いた。

エンリクスは振り回されるように横に飛ばされるが、受け身をとって態勢を立て直す。

しかし、受け身をとっていた僅かな隙を清楚は逃さなかった。地を蹴りつけて肉薄し、腰ために正拳を突き出す。拳はエンリクスの顔を捉え、後方へと吹き飛ばした。

エンリクスの体が学園の外壁に叩きつけられ、土煙が上がる。そこにさらなる追撃を加えようと清楚が構えるた、その時だった。

突如として空が揺れたのだ。

それは一瞬のことだったが、清楚は異変を感じて追撃を止める。

「クソッ！　ここまでやられ放題とは。次はこっちの番だ！」

土煙を突き抜けてエンリクスが飛び上がる。雷撃を放ちながら降下し、降下した後も雷撃を放ち続ける。

「さっきと同じではないか。効かぬと分からぬか！」

清楚は雷撃を浴びながらも前進し、エンリクスとの距離を詰めていく。

しかし数歩歩いたところで体に異変が現れる。

(地面を踏んだ感触が無いだどツ!?)

そう、地面を踏んだ感触が弱くなっているのだ。それだけではなく、方天画戟を握る右手と握った左拳の感触も無くなってきているのだ。

雷撃を受けた時に体に起こる現象を大和に教えてもらったが、たった今思い出すまで忘れていた自分を清楚——もとい項羽は恨んだ。

感電による筋肉の収縮で手が開かないことが幸いして方天画戟を離すことはないが、このままでは全身の感覚が無くなるのも時間の問題だった。

しかし、先程のような大きな跳躍などを出来る余力はもうない。完全に——

「慢心だな……！　だが！」

それでも清楚は歩みを止めない。

周囲に放電されている雷撃によって由紀恵達に加勢できない以上は、清楚自身が戦うしかない。

その時だった。遠くで音が聞こえた。それから一瞬遅れてエンリクスが態勢を崩したと思えば、左肩を右手で抑えて呻き始めたのだ。そこに続けて音が連続して抜ける。すると、身を揺らしてエンリクスが苦悶の表情と雄叫びを上げた。

「邪魔をするかあ！」

エンリクスが絶叫を上げて空を見る。その視線の先にいたのは――

「オーケー、グツキル。上出来よメグミ」

「ふはあく、うまくいったでありますな」

スコープから顔を上げて一息吐いたトーカーとグミがいる飛空城艦であった。

### 川神学園防衛戦③

空が揺れた、その原因はリムル達の乗る飛空城艦が敵の次元船ともつれるように百代達の世界に接触したからであった。

そのまま世界の壁を越えた一同は百代達の世界へ足を踏み入れた。戦闘の気配を察した一同。川神学園での戦闘に加勢するべく急行したのだ。

近づくにつれてハッキリと視認することが出来たエンリクスの雷撃。ハルトはリムルに底部ハッチ開放を要請するとともに、トーカとグミに狙撃指令を出したのだ。

狙撃手ヘスナイパーをグミが担当し、観測手ヘスポッターをトーカが担当した。

グミの『ブレイザーR93』から放たれた銃弾は真つすぐな軌道を描いてエンリクスを撃ち抜いたのだった。

そして現在。ターニャとその部下達は飛空城艦から飛び立ち、ともにこの世界に進入した次元船への攻撃に向かった。

飛空城艦は川神学園の上空に辿り着くと、底部ハッチを開く。高度を下げたところでハルト達が一斉に降下していく。

川神学園の屋上に降り立った一同は高度を上げて離れていく飛空城艦とリムル達を視線で見送ると、校舎と校庭と学園周辺に分かれて戦闘を開始した。

リムルは飛空城艦を着水させる為、多摩川を目指す。艦橋にはシオンとランガ、それにアインズとアルベドもいる。

途中、川神院が視界に入る。瓦礫の廃墟と化した川神院が気になったリムルは、飛空城艦を着水させた後にシオンとランガを伴って川神院へと向かった。

『管理者』とやらはいないようだな。警戒を怠るなよ、アルベド」  
「承知いたしました、アインズ様」

アインズとアルベドは川神学園へ向けて歩いている。しかし、リムル達のように急ぐ様子は無い。

アインズが用があるのはあくまでスペビアやピギユティアといっ

た『管理者』を名乗る者達であつて、ローズバルト軍に用は無いのだ。「共に戦う」といった手前、力を貸さない訳にはいかず、こうして戦闘に参加しようとしている。

それはターニャも一緒であるが、表立って口にはしない。

「しかし、学生生活よりは遥かにマシだな」

「仰る通りかと…」

かつてターニャ達と過ごした異世界の出来事を思い出しながら歩いていると川神学園が見えてきた。

近づくにつれて戦闘の喧騒も大きくなる。

「ここにもリムルの仲間がいるということだったな…。先に降下した者達が伝えているだろうが慎重にな、アルベド」

「かしこまりました。アインズ様もお気をつけて」

そう言うところアルベドは漆黒の翼を広げて飛び立つと、空中に展開している敵兵士へと攻撃を開始する。

それを見送ったアインズは視線を戻すと、自信に魔法をかけていく。

『光輝緑の体―ボディ・オブ・イファルジェントベリル―』『不死者の接触―タッチ・オブ・アンデス―』。これだけでいいだろう」

準備を終えたアインズは川神学園の校庭に足を踏み入れた。

そこではいまだ戦闘が繰り返られており、百代もグワツツエと戦闘を継続中であつた。

しかしエンリクスはと言うと、グミに狙撃された銃傷と清楚によって掌を串刺しにされたことによつて戦闘継続が困難になり清楚によつて捕縛されていた。

「ん？ お前は誰だ？」

エンリクスを縛り上げた清楚がアインズに訊ねる。

「なに、敵ではないよ。私はナザリツク地下大墳墓の主、アインズ・ウール・ゴウン魔導王だ。アインズと呼んでくれ」

アインズは清楚に歩み寄りながら名乗ると、捕縛されたエンリクスを見下ろす。

「ハルト達と来たようだが、味方ということでもいいんだな？」

「構わないとも。私はコイツらと、その背後にいる存在に用があるのだ。君達と目的は同じだよ」

「そうか。だが、百代がああハゲを倒せば敵軍は崩れる。お前の出番は今回無いかもな」

「それは残念だ。だが、水を差すのも野暮だろうから、おとなしく雑魚の相手をすることにしよう」

そう言うときアインズは清楚に背を向ける。

清楚は捕縛したエンリクスを学園生に任せると、「お手並み拝見」とばかりに見物を決め込む。

「貴様はシテイツクの報告にあつた魔導王！　なぜ貴様達がこの世界に來ている!?!」

無理やり立ち上がらされたエンリクスがアインズを見て訊ねてくる。それを首だけでアインズは振り返る。

「それにああ赤と紺の服装の2人はシテイツク達が向かつた世界の者だ。シテイツク達はどうした!?!」

そんなエンリクスから「答える気は無い」と言わんばかりに顔を逸らすアインズ。

その態度に舌打ちをするが、自信の無力さを噛み締めるように学園生に連行されていく。

「…お前達の仲間を2人捕らえた。お前で3人目だ」

連行されていくエンリクスの背に、顔を向けることなく答えた。一瞬エンリクスは立ち止まるが、唇を噛んだまま再び歩き出した。

「さて…。味方を巻き込まないようにしないと。『上位転移―グレーター・テレポーターション―!』」

アインズは川神学園生が敵軍を1点に集中するように迎撃している中心に転移する。

ちょうど、川神学園生と敵軍の一部集団との間に現れる。正体不明の存在が現れたことに動揺する川神学園生に首だけで振り返ると「敵ではない」と一言言う。

そして正面の敵軍に顔を向けたアインズは魔法を放つ。

『連鎖する龍雷―チェイン・ドラゴン・ライトニング―』



龍の如くうねる雷撃が敵集団に襲い掛かる。雷撃は敵兵士を1人、また1人と飲み込み、そして蹂躪した。

川神学園生達は目の前で起こる一方的な殲滅に戦慄していた。

一帯の敵兵士を無力化すると、アインズは再び『上位転移―グレーター・テレポーターション―』で校庭の中心に戻ってきた。

「お前、強いな。リムルやアノスにも負けないんじゃないか？」

清楚が拍手を送りながら近づいてくる。

「アノスというのは知らないが…、そうだな。試してみないことには分からないな」

アインズは肩を竦めながら答えた。

場所は変わって川神院。

ヴォイドが放った爆発を受けたりヒトー達はその場から消えていた。

その場にいるのはヴォイドただ一人。そこにリムルがシオンとラングを伴って到着する。

瓦礫に腰を下ろし、ぐったりと項垂れるヴォイドの出で立ちを一言で言い表すなら『破れたボロ雑巾』だろう。

しかし、その瞳は光を失ってはおらず、焦点はまっすぐリムル達を捉えていた。

「撃墜王の次はあなたですか、スライム」

うんざりとばかりの溜め息交じりで言葉を発するヴォイド。リムルはヴォイドの言った言葉で疑問に思ったことを訊ねた。

「撃墜王………？ リヒトー達はどうした？」

訊ねられたヴォイドが体に鞭打つようにゆっくりと立ち上がる。

「ここではない次元に飛んでもらいました。さすがのあなたでも、自力で行くことは出来ませんよ」

「異次元ってことか。お前を倒せばリヒトー達は戻って来るのか？」

リムルの問いを受けたヴォイドは少し思索した後、ゆっくりと話し始めた。

「それは…、わかりませんね。なにせ敗けたことが無いものでして」  
ヴォイドが瓦礫の山から下りてくる。リムルと同じ高さに立ち、戦う姿勢を示す。

「3人で来ますか？ それとも1人ずつで？」

籠手を鈍く光らせながらヴォイドはリムル達を順番に見る。体や服装はボロボロであるが、その瞳に宿る闘志は霞んでいない。

リムルは背後のシオンとランガを交互に見る。

シオンもランガも頷くことで返す。リムルはヴォイドに向き直ると刀を抜き放つ。

リムルとヴォイドの視線が交錯する。お互いが腰を落とし、戦闘態勢を取る。静寂を破るように音を立てて風が両者の間を抜けていく。

籠手から放たれる光が少しずつ強くなっていく。

金色の光は徐々に籠手全体に及び、そのままヴォイドの体を包み始める。

先にリムルが動いた。タンツ、と地面を蹴る音と共にヴォイドに肉薄すると刀を片手で振り上げ、そのまま振り下ろす。

キーン、と甲高い音を立てて刀と籠手が接触する。刀を受け止めた態勢のままヴォイドは笑みを浮かべる。

『ドゴス・アドラ！』

籠手と鏢迫り合いをするように押し込んでいた刀が籠手から引き剥がされるように押し返される。

リムルは負けじと刀を両手で握り、振り下ろす力を強める。しかし刀は籠手から引き剥がされていく、まるで磁石の同極同士のように、まるで“反発”するかのよう。

ランガがリムルの背後から躍り出ると、ヴォイド目掛けて体当たりをする。人一人より少し大きいランガの体躯でもつてのタックルを受けたヴォイドは吹き飛ばされる。

「獣風情が、邪魔ですね！ 『ドゴス・アドラ！』」

吹き飛ばされながらも受け身を取ると、籠手を地面に向ける。詠唱の直後、ヴォイドの体は宙へと浮かぶ。というよりも跳躍した。

宙で体を捻って、直立姿勢をとるとリムル達を見下ろす。

箆手が先程から金色の光を放ち続けていることにリムルは気付いた。

（あの箆手が光っているあいだは何らかの能力を発動している、ということか？）

《解。個体名『ヴォイド』が詠唱した直後から箆手に何らかのエネルギーが検出されています》

リムルの疑問に対して智慧之王が解析結果を告げる。

《今もエネルギーは検出されているか？》

《解。検出されています。詠唱後に箆手が発光している間は何らかのスキルが発動しているものと考えられます》

（宙に浮くのが能力なのか、それとも他の能力があるのか。さっきの反発力の正体はなんだ？）

疑問に思考を巡らせていると、ヴォイドは箆手の甲を地上にいるリムル達に向ける。

『ガル・ドゴス・アドラ！』

ヴォイドが宙を蹴るようにして地面にいるリムル達目掛けて突撃する。

「リムル様ー」

弾丸のように飛来するヴォイドの射線上にシオンが剛力丸を構えて立ち塞がる。剛力丸をフルスイングするように振り上げると剛力丸と箆手が激しい音を立てて激突する。

衝撃波が周囲を揺らし、お互いの得物がぶつかる轟音が辺りを包む。

しばし耐えていたシオンであったが、徐々に押され始めた。剛力丸を振るう両腕は徐々に後退し、自身の体も後方にジリジリと押されている。

シオンが驚愕の表情を浮かべた次の瞬間であった。

ヴォイドの体はシオンの振るう剛力丸を押しつけるように弾き飛ばすと、シオンの体を後方に吹き飛ばした。

受け身を取れなかったシオンは瓦礫に激突すると短い悲鳴を上げて動かなくなる。

「シオンッ!?!」

振り返るリムルにヴォイドが襲い掛かった。

《告。個体名シオンの生命反応を感知、許容範囲を超える衝撃によって気絶しているだけです》

智慧之王からの声を聞いたリムルは安堵で胸を撫でおろすが、ヴォイドの猛攻が迫る。

ランガはヴォイドの追撃を阻止しようと割って入るものの、ヴォイドの能力によって何度も弾き飛ばされる。

「喰らい尽くせ、『暴食之王―ベルゼビュート―!』」

リムルが右掌をヴォイドに翳すと、漆黒の闇がヴォイドを飲み込む。

前回の戦いでは魔王軍四天王オウエルポスにトドメを刺したこの力であるが、それがヴォイドに通用するかは賭けであった。

前回戦った四天王よりも遥かに強いヴォイド達を相手に、負けはしないが、勝利の筋道を見出せないでいるのも事実であったのだ。

故に暴食之王でヴォイドの肉体、あるいは魂を捕食できるかは未知数である。しかし、リムルが暴食之王を使用した意図はもう一つあった。

「なんですか、これは!?! 纏わりついて…!」

ヴォイドは暴食之王を振り払うことが出来ずにリムルとの距離を離す。

しかし暴食之王にて追撃すると、再びヴォイドの体に暴食之王が纏わり付く。だが暴食之王に本来無い異変が見られた。

籠手の部分だけ。暴食之王が接触していないのだ。

それによってリムルの“疑問”は“確信”に変わった。ヴォイドの能力は『反発』であり、その特性を持つ魔法を行使するのだとリムルは結論付けた。

(だとすれば厄介だな…)

暴食之王でさえ弾く『反発』能力を突破するには籠手以外の部位に攻撃する他ない。

簡単に見えて難しい。ヴォイドが正面からの攻撃を籠手で防ぐ以

上、死角を狙う必要がある。

だが現状、3人で向かつても悉くの攻撃を防がれて決定打を与えることは出来ていないのが現状なのだ。

リムルの額を一筋の汗がったう。

「ランガ、仕掛けるぞ！」

「仰せのままに、我が主！」

リムルの攻撃に続くようにランガも仕掛けると、挟撃の態勢が出来る。上がる。

正面から仕掛けたリムルが刀を振り下ろす、しかし籠手によって防がれる。

だがこれはリムルの予想通りだった。リムルが刀を振り下ろしたのと同時にランガが仕掛ける。完全に背後を狙った体当たりを受けたヴォイドだったが、少し体を揺さぶられた程度で、その表情は余裕の笑みを浮かべている。

ヴォイドが空いている左手でランガの角を掴むと、右足の踵で蹴り上げた。

左手で抑えられたまま顎に蹴り上げを食らったランガは一瞬怯むが、再び体当たりを敢行した。

「何度やっても無駄ですよ」

ヴォイドは籠手の向きを僅かに地面へと向けると、弾かれるように上空に飛び上がる。リムルは跳躍によって生じた反発力によって後退する。

攻撃目標を射線上からロストしたランガは追撃の為に跳躍姿勢をとる。

しかし、ヴォイドが仕掛ける方が僅かであるが早かった。

頭上に向けて放たれた反発力によって急降下すると、先程のように地面目掛けて突撃する。

その射線上にはランガ。

ヴォイドはランガに狙いを定め、加速する。

閃光となって襲い掛かるヴォイドに対して回避行動を取れなかったランガは、その突進の直撃を受けることとなった。

「ランガッ！」

リムルの叫びを爆音が掻き消す。

土煙が上がり、そして収まった。

土煙が収まるのを見守っていたリムルの脳内に智慧之王の聲が響く。

《告。 个体名『ランガ』、 戦闘不能。 个体名『ヴォイド』 健在》

## 川神学園防衛戦④

リヒトー達は浮いていた。

いや、立ってはいいる。しかし、何処かもわからない上下左右さえ分からない霧の包まれた空間に佇んでいるのだ。

「ハッ！」

リヒトーは抜刀と同時に斬撃を放つ。しかし、閃光の斬撃は泡沫のように静かに消失する。

続けて斬撃を放つが、結果は変わらない。

「参ったな……」

納刀しながらリヒトーが言葉を零す。その隣で園原がサブマシンガンを連射するが、結果は同じだった。

「俺の鉄もこの空間では無力のようだ……」

リヒトーの背後ではジェイルが鉄塊を生成している。しかし、鉄塊は生成された瞬間から消失していく。

「やっぱり、＼アノ＼光が原因かな？」

「そう考えるのが妥当だと思います」

リヒトーの疑問を園原が肯定する。

川神院におけるヴォイドとの戦闘にて発生した、というよりもヴォイドが放った光に飲まれたリヒトー達は何処かも分からない謎の空間に飛ばされていた。

「幸いなことに脚で踏みしめる感覚はある。進むしかないだろう」

ジェイルの言葉に頷いた一同は霧を祓うように歩きだした。

しかし、先も見えず進み続ける一行。いくら歩いても霧を抜ける様子は無く、同じところを周り続けているような感覚に陥る。

「埒があかないね」

「歩き続けましょう」

園原に促され、一行は進み続ける。

どれだけ歩き続けただろうか。考えることすら嫌になってきた時だった。

リヒトーが突然立ち止まる。ジェイル達は何事かと振り向くとり

ヒトーは周囲をキョロキョロしている。

「どうした？　なんか見つけ——」

訊ねる道安を手で制して人差し指を口元に立てるリヒトー。

先程とは打って変わり、真剣な表情をしたその様子に道安達の気配も変わる。

「聞こえないか？　声がある」

リヒトーは耳に手を当てて周囲の僅かな音も漏らさぬとばかりに集中している。

しばらくすると、静かに虚空を指さす。

「……あっちだ」

リヒトーが指した先は相変わらず霧しかなかったが、一行はその方角に歩みを進める。

声がある方角に歩き続けていると、リヒトー以外にも聞こえるほどの音量で声聞こえる。

「誰かー！　誰かいませんか!?!」

声の主はどうやら女性のようにだとリヒトー達は気付く。

「誰かいませんか！　助けてください。誰かいます——」

「そこに来てくれ。君の声は聞こえてるよ、すぐそっちに行くからー」

リヒトーは声の主に向けて叫ぶと、歩く速度を速める。

そして、さらに歩いた時だった。一行の前に架かる霧にぼんやりと人影が見えた。

ロングスカートのような服装のシルエットと、声の様子から察するに女性で間違いなかったとリヒトー達は思った。

そして、さらに近づいていくと姿がハッキリと確認できた。声の主は、メイドだった。

「…メイドさん?」

女性に会った第一声がそれだった、ちなみに第一印象も同じであったが。

女性が振り向く。赤茶色の髪を肩にかけ、若干薄汚れたメイド服に身を包む彼女は戸惑いと不安とが混ざった視線を向けている。

「助けを呼んでいたのは、君?」



「はい。あなた方は…?」

先程の叫んでいる声とは変わって弱弱しい声音で訊ねる女性。いざ会ってみると不安で一杯になったんだな、トリヒトーは考えた。

「リヒトー・バツハ。ローズバルトっていう魔王の部下と戦っていたらこの空間に飛ばされちゃってね、脱出の方法を探りつつ歩いていたら君に声が聞こえたんだ。君の名前は？」

「アイシャ・グレイラットって言います。魔王ローズバルトと戦っているんですか？」

「ああ、そうだよ」

と、女性——アイシャの問いに答えたところでリヒトーの脳に疑問が浮かぶ。

「グレイラットって……、君がルーデウスの妹さんか!？」

「兄を知ってるんですか!？」

知った名前が出たアイシャは目を丸くする。

食い気味に訊いてくるアイシャに若干戸惑いながらもリヒトーは答える。

「一緒に戦ってるんだ。エリスやオルステッドさんともね」

「アイシャさん。よかったら一緒に行動しませんか？ お兄さんの元に帰るにも1人じゃ危険ですし」

リヒトーの隣にいた園原が手を差し出す。その手と園原達の顔を順番に見て、アイシャは握手を交わす。

「はい、よろしくお願いしますー!」

握手を交わしたままアイシャはぺこりと頭を下げるのだった。

土煙が収まると、そこにはヴォイドと、その足元に横たわるランガがいた。

「あとはあなただけです。リムルIIテンペスト」

横たわるランガには目もくれず、リムルとの距離を詰めるため歩き出す。

リムルも同じく、ヴォイドとの距離を詰める為に踏み出す。両者の距離がクロスレンジまで縮まった。

次の瞬間だった。

リムルが暴食之王を纏わせた拳を振りかぶると、地面を蹴って殴りかかる。その拳はアノスの『ベブズド』を参考にしたものだ。

拳は籠手によって防がれるがリムルは構わず拳を押し込む。力に任せての拳、仲間を目の前でやられて半分理性を欠いた攻撃であった。

「力技で私を倒すことは出来ませんよ。『ドゴス・アドラ』！」  
籠手が光を放ち、リムルの拳が徐々に剥がされていく。

リムルは押されながらも踏み留まる、両者の態勢が拮抗する。ヴォイドが体重をかけてリムルを押し潰さんとする、リムルは徐々に押され、一步、また一步と後ずさる。

だが、それはリムルの計画でもあった。リムルの視界には入っていた、気絶から回復し、剛力丸を振りかぶってヴォイドの背後に肉薄するシオンの姿が。

シオンが振りかぶった剛力丸を振り下ろす。ヴォイドはそれに気付いたが、籠手をシオンに向けることが出来ずに剛力丸のフルスイングを腹部に受けた。

中途半端に発動した『金剛』によって両断は回避できたが、ヴォイドの身の丈よりも長い剛力丸とシオンの怪力によるフルスイングによる衝撃でヴォイドは口から血を吹き出すとともに態勢を崩した。

だが、籠手から放たれた反発力によって上空に退避すると、息を深く吸って呼吸を整える。

数十秒の後、ヴォイドがリムルを見下ろして口を開いた。

「油断、しましたよ。とどめを刺しておけばよかった」

口元の血を拭いながら川神学園の方角に目をやり、ヴォイドは続ける。

「…向こうも苦戦しているようですし、このあたりでお開きにしましょう」

「逃げるのか？ ならおとなしく自分達の世界に引き籠ってればいい

じゃないか」

リムルの挑発に僅かに眉を動かしたヴォイドは、溜め息を吐きながら口を開く。

「逃げる？ 負けてもいないのに逃げると仰いますか？ なら帰る道中にあなたの世界に寄らせていただきましょう」

「……………来るなら来てみる」

ヴォイドの挑発返しにリムルの眼光が鋭くなる。視線だけで人を射貫くのではないかと思わせる鋭さで、ヴォイドを睨みつける。

「……………やめておきましょう」

ヴォイドは短く答えると、さらに上空へと飛び去ってしまった。

視線だけでそれを見送った後、視線をシオンへと落とす。

「大丈夫かシオン？」

「はい、大丈夫です。それより、ランガはどうですか？」

シオンとリムルがランガを見る。ランガは先程から動かない、しかし死亡したわけではない。先程までのシオンと同様、一時的に行動不能となっているのだ。

「『反発』か…。面倒だな」

そうこぼしながらリムルは周囲に倒れている川神院の修行僧やルー達にフルポーシオンを使用して回る。

「百代の方は、どうなったかな…」

いまだ怒号が聞こえる川神学園の方角に視線を向けて、リムルは呟いた。

川神学園での戦いも終わりを迎えようとしていた。百代とグワツツエの一騎打ちも百代が優勢である。

無双正拳突きを数発腹部に受けて、グワツツエにも疲れが見え始める。

無論、それは百代も同じであるが。

「ヴォイドの奴、撤退したか……………。なら」

グワツツエはファイティングポーズを解くと、百代を指さす。

「楽しい時間はここまでだ、決着は次の機会にするとしよう！」

そう言った後、グワツツエは地面へと拳を打ち付ける。するとグワツツエを囲むように地面が捲りあがり、まるで大砲が砲弾を打ち出すようにグワツツエが上空に真っ直ぐ飛び上がる。

瞬く間に姿が見えなくなり、百代達も戦闘態勢を解いた。周囲には戦闘不能となった敵兵とこちらの負傷者。

動ける者達で敵兵士達の捕縛と負傷者の手当とと搬送を行う。そうしていると、校舎内で戦闘していたルーデウス達が校庭へと出てきた。

「敵は撤退したか…」

オルステッドが周囲の惨状を見渡しながら口を開く。百代はオルステッドの前に立つと、右手を差し出す。

「みんなを守ってくれてありがとう」

「礼には及ばん」

そう答えながらオルステッドは百代の握手に応えた。

「少しよろしいかな？」

そこにアインズがやって来る。後ろにはアルベドが兜を外して控えている。

「そちらも、協力感謝するよ」

「なに、礼を言われるほどではないさ。共通の敵を追っているようだしね」

百代と握手を交わしながらアインズは答えると、グワツツエが飛び立った方向を見る。

「お前も魔王ローズバルトと戦っているのか？」

オルステッドに訊ねられ、アインズは「ああ」と頷く。

「自己紹介が遅れたな、私は川神百代。よろしく」

「オルステッドだ」

「私はアインズ・ウール・ゴウン。アインズと呼んでくれ」

オルステッドとも握手を交わしながらアインズは名乗る。

そこにリムルとシオンが到着し、続いてターニャ達も戻ってきた。

全員が自己紹介を終えると、川神学園の教室の1つを貸りての会議

が始まった。

まずはじめにリヒトー達が行方不明になった事、川神院で戦闘していた鉄心を含む全員が戦闘不能となった事などの情報が共有された。百代や一子達は心痛な面持ちではあるが、今後のためにも話を進めることにしたリムルであった。

「準備が出来次第、異世界に向かおうと思うんだが。どうだろうか？」  
リムルの問いにオルステッドが訊ねる。

「構わないが、アノス達は どうする。魔王軍と戦闘中かもしれないぞ？」  
その問いに続いてルーデウスが拳手をして口を開く。

「それに、他の世界が攻撃されているかもしれない。それを確認してからの方がいいのでは？」

「勿論、道中で魔王軍を発見したら戦うさ。アノス達は……大丈夫だろう」

オルステッドとルーデウスの問いに答える。そこにハルトとクリスが入室する。

「どうだった、ハルト？」

リムルに訊ねられたハルトは一度頷くと「成果はありました」と答えた。

「ローズバルトの情報を吐いたんですか!？」

「最初は口を割らなかつたんですが、少し荒っぽい方法を試したらポロリと話しました」

身を乗り出したルーデウスにハルトは答えると、数枚の書類をリムルに渡す。

「リムルさん達が遭遇した『管理者』についての情報は得られませんでしたが、ローズバルトや異世界についての情報は得られました」

クリスがホツチキスでまとめられた書類を全員に渡してまわる。

受け取った者から書類に目を通していくと、1人を除く全員が驚愕に表情を歪める。

「ハルト、説明を頼む」

リムルが視線をハルトに向ける。ハルトは頷くと黒板の前に立ち、全員を見渡して口を開いた。

「では、説明します」

## ギアード連邦防衛戦

魔王軍幹部であるエンリクスの尋問は最初こそ穏便であったが、エンリクスが黙秘を決め込んだために、「尋問」から「拷問」へと変わった。

顎、腹、そして急所などを段階的に殴打した。さらには刀による指詰めまで実行しようとした。

実際は刃が指に斬り傷を付けたところで、あつけなく吐露したのだが。

多くの世界の脅威となる魔王の配下である「敵」であるエンリクスに、ハルトは何の情も浮かばなかった。だからこそ、ここまで非情な手段を取ることが出来たし、情報を得ることが出来たのだ

そうして得られた情報を整理して資料にして全員に配る。無論、説明役であるハルト自身も資料を持っている。

ハルトは全員に、ローズバルトの目的を説明した。

他の世界の存続のためのリソースにされる自分達の存在、その確立と記憶のために多くの世界に侵攻しているのだと。

そして、その目的は「侵攻」から「征服」に変わったことも分かった。

これまで、漠然と考えてきた「征服」が事実となったことで、一同の表情は曇る。

これには、アインズ達、新規加入組も同様の反応を示した。

シテイツクの偵察によつてちよっかいを受けたアインズ達からすれば、いまだ直接戦ったことが無いローズバルトの実力を判断しかねているのだ。

未知の強さの敵が征服目的で向かってくることは、焦りを生んだ。

次にハルトが話したことは、同時進行で行われている侵攻についてだ。千束達の世界に侵攻した部隊と百代達の世界に侵攻した部隊。それとは別でもう一つ、部隊があることが分かったのだ。

その世界は――

「ジオ・グレイズ」

アノスが前方に翳した掌に魔法陣が展開され、放たれた漆黒の太陽がローズバルト軍の機甲部隊を飲み込んだ。

現在アノス達はシンエイ達の世界にてローズバルト軍との戦闘を展開している。

ジャイアントガモツサが先陣を切り、ロンゴドルの機甲部隊が続く。それと別動隊としてガイコツとブギョルが部隊を展開しており、シンエイ達が所属する共和制ギアード連邦はローズバルト軍に包囲される形となった。

ジャイアントガモツサが巨体を動かし、進軍する。

連邦軍も戦力を投入しているが、その戦力差は圧倒的で、進軍を遅らせるので精一杯だ。

「これ以上進ませませんよ!」

エルネスティの駆るイカルガが進路上に降り立つと、二丁のソーデッドカノンを構える。

銃剣のような武装の剣身がY字に開き、銃弾のように魔力を射出される。放った全てがジャイアントガモツサに命中するが、その巨体に対して効果は無かった。

『効かなくて、そんなもの!』

ジャイアントガモツサは頭部などを庇う事すらせず駆け出す。地響きを立てて巨体が地を踏みしめ、接近する。

イカルガに攻撃が届く距離まで近づくと、その剛腕を振りかぶり、文字通り鉄拳を叩きつける。

エルネスティはイカルガの背面のサブアームで鉄拳を受け止めた後、メインアームでジャイアントガモツサの頭部に拳を叩き込ませる。

直撃した感触はあったが巨体はビクともせず、サブアームに受け止められた拳を押し込んできた。

「イカルガが押されている!」



イカルガのコックピット内でエルネステイが驚愕の表情を浮かべる。その額には一筋の汗が滴る。

ジャイアントガモツサが空いている左拳も振り下ろすがイカルガの右側サブアームが受け止める。

ソーデッドカノンを振るおうにも距離が近すぎるために思うように動けないでいる。取っ組み合いのような態勢で両機の視線が交差する。

ジャイアントガモツサの頭部が後方に振りかぶられたと思った、次の瞬間だった。

その巨人は、イカルガの鎧武者のような頭部目掛けて頭突きを見舞ったのだ。

態勢を崩し後ずさるイカルガに追撃せんと拳を振りかぶるジャイアントガモツサ。エルネステイは予想外の攻撃に僅かに怯み、結果それによって生じた時間がジャイアントガモツサの追撃を許すことになった。

だが、ジャイアントガモツサの拳はイカルガには届かなかった。

横から割って入った機体——ツェンドルグがジャイアントガモツサに体当たりをしたのだ。

イカルガに並び立つようにツェンドルグが停止する。まるで人馬のような形態のこの機体にはエルネステイの仲間のキッドとアデイが搭乗している。

体当たりによって転倒したジャイアントガモツサが起き上がり、2機に視線を向ける。

ツェンドルグは右手に握る斧槍を構えると、回り込むように駆けだした。

『エル。挟撃するぞー！』

「わかりましたキッド。合わせてください！」

キッドからの通信に応じると、エルネステイはイカルガを跳躍させる。

両方のメインアームに握られたソーデッドカノンをソードモードで上段に構えると機体の落下に合わせて振り下ろす。それに合わせ

てジャイアントガモツサの背後からツエンドルグが斧槍を横薙ぎに振りながら肉薄する。

『むんっ！』

腰を落とす、両腕で斧槍とソーデッドカノンを受け止めたジャイアントガモツサは、自身をコマのように回転させて攻撃をいなした。

攻撃を弾かれたツエンドルグとイカルガは一時距離を取ると、再び得物を構えて挟撃態勢をとる。

その足元を駆けて、敵機工隊集団に迫るシンエイ達スピアヘッド戦隊。

後方の装甲指揮者『ヴァナディース』にてレーナが各プロセツサーに指示を出す。

車内にはレーナの他にフレデリカと管制官のエルウィン・マルセルが搭乗している。

『スピアヘッド戦隊』、敵集団と会敵。交戦に入りました」

マルセルからの報告を受けたレーナは直ちに他の戦隊への指示を出す。

『クレイモア』、『サンダーボルト』両戦隊は北西から侵攻する敵機甲部隊を迎撃してください」

第86独立機動打撃群、第四戦隊『サンダーボルト』と第七戦隊『クレイモア』が北西に展開していく。

敵軍の主力が展開するのはギアーデ連邦の西部戦線。レーナが総指揮官を務める独立打撃群もそこに投入された。

巨神外骨格を装着した敵兵士群が迫る。第七戦隊長リト・オリヤが搭乗するレギンレイヴ『ミラン』を先頭に戦隊各機が地面を滑走するように迎撃に移る。四つ足の蜘蛛のようなフォルムを持つレギンレイヴを巧みに操り、侵攻する敵機甲部隊と会敵する。

シンエイ達からの報告にあつた巨神外骨格を纏った兵士と、その後方には前足2本で姿勢を保ち、後部コンテナらしきものを引きずるように進軍してくる機動兵器が確認できる。

「あれはっ…、なんだ…？」

疑問を零すリト。巨神外骨格についてはシンエイ達からの情報共

有によって知っていた。

だが先程、光学センサ越しに目視で確認できた機動兵器は完全な謎であった。その機動兵器に敵兵士が搭乗している様子が視認出来たことで、それが敵魔王軍のものである確信に変わった。

そして、謎の機動兵器の目撃情報は他の戦隊からも報告されていない。

「っ、北西方面で謎の機動兵器を確認!」

リトは知覚同調で機動打撃群各員に謎の機動兵器の存在を伝える。すかさずレーナから同調が繋がる。

『敵魔王軍にもので間違いありませんか!』

「魔王軍の兵士が搭乗することが目視で確認できました。間違いはないと思います」

『その機動兵器の攻撃方法は?』

「今のところ攻撃してくる様子はありません。兵士が搭乗しているだけで、動きは止まっています」

「謎の機動兵器」の報告を受けた機動打撃群全体に緊張が走る。報告を受けたレーナは直ちに司令部との回線を開き、リトからの報告内容を伝えた。

司令部との通信を終えたレーナは再び知覚同調をリトに繋ぐ。

「敵機動兵器に何らかの動きがあれば、直ちに後退してください」  
『了解!』

リトは同調を切ると、自機を前進させる。正面から戦隊各機を連れたの迎撃を行う。リト達と衝突する敵機工隊の側面を突くように第四戦隊『サンダーボルト』が進撃する。

第四戦隊長ユート・クロウが駆る『ウルスラグナ』を先頭に敵機工隊を挟撃する。

両戦隊は巨神外骨格を纏った兵士に標的を絞って攻撃を開始する。謎の機動兵器に関しては一時放置することにしたのだ。

無論、警戒は怠らない。

リト達が駆るレギンレイヴは機動力はあるものの、装甲などは決して厚くはない。かつてリトやシンエイ達『エイティシックス』が隣国

のサンマグノリア共和国の『86区』で戦っていた時に搭乗していたフェルドレス『ジャガーノート』に比べると、レギンレイヴはまだ多少“マシなのだ”。

だが、ギアーデ連邦の主力フェルドレス『ヴァナルガンド』と比べると非力ではある。

故にリト達も警戒は解かない。不意の攻撃を食らうことがいかに危険かを知っているからだ。

リトが機体前部に装着された『12・7mm重機関銃』の照準を合わせる。

「……………やらないきゃ」

照準を敵兵士に定める。その瞳には迷いがあった。

これまで戦ってきた敵は『レギオン』。人間の脳を取り込んだ個体もいたが、その大半は無人工器だった。リトだけではない、ユートも、他で戦っている仲間達も、異世界の敵とは言え生身の人間を撃つことは初めてなのだから。

「……………やらないと。こっちがやられる!」

意を決したリトがトリガーを引く。機体前方の格闘用サブアームに装着した12・7mm重機関銃が火を噴いた。

共和制ギアーデ連邦、中央指令室。

暫定大統領エルンスト・ツイーマーマンはメインスクリーンに映し出だされた分布図を眺めている。

メインとなる照明は消され、室内を照らすのはメインスクリーンをはじめとする大小のモニターのバックライトだ。

エルンストは普段の量産品の背広ではなく軍服に身を包み、司令官用の席に座っている。その傍らには西方方面軍参謀長のヴィレムが控えている。

「押されているね」

席に腰を預けたままエルンストは口を開く。その言葉にヴィレムは一度頷くと、メインスクリーンの一部——西部戦線を指す。

「はい。ミリーゼ大佐の独立打撃群が展開している西部戦線に主力が集中しています。アノス陛下達の助力もあり、突破はされていませんが…」

「他の戦線が危うい、ということだね?」

エルンストはヴィレムを振り向く。

ヴィレムは普段の表情を崩さず頷くと、他の戦線の損耗率などのデータを表示する。

「西部戦線以外の戦線の損耗率が30パーセントを超えました。このままではいずれ突破されます」

「アノス陛下達にそちらの応援に向かってもらうのはどうかかな?」

「現在、幹部と思われる敵と交戦しているとのことですから。難しいかと…」

そう言われてエルンストは黙ると、別の策を思案する。だが、思い浮かばない。

ただでさえ無人兵器ではない生身の敵を相手にしているこの現状。各戦線からの「戦えない」旨の通信が先程から止まない。

敵とはいえ、顔が見えているのだ。そしてその敵を撃たなければならぬのだ、前線の兵士達の心労は計り知れないだろうとエルンストも理解している。

だが戦わなければならない。

戦わなければ

「死ぬのは僕達か……………」

「罅が空かぬな」

アノスが敵兵士の頭を掴んで振り回し、そのまま振りかぶって投げ飛ばす。

投げ飛ばされた兵士は味方を巻き込んで彼方に消える。

アノス達が戦っている西部戦線の南には真魔王軍幹部のガイコツ

旗下の部隊が展開している。

機甲部隊はレーナ達独立打撃群が展開している西部戦線の北方面から侵攻している為、こちらには生身の敵軍が展開していた。

数歩後退したアノスの背後の空間が揺らいだ次の瞬間、白骨の手刀が突き出される。

アノスが身を翻して手刀を躲すと、白骨は異次元に消えた。

「かくれんぼも飽きたな…」

アノスがため息交じりに言葉を漏らす。

いまだポケットに左手を入れたまま戦闘しているアノス。笑みをたたえた表情からも余裕が見て取れる。

再び空間が揺らぎ、手刀が繰り出される。

「ワンパターンでは芸が無いぞ」

アノスは指先を漆黒に染めて手刀を掴む。そのまま白骨を引き抜くように力をこめる。

引つ張られ、徐々に姿が露になっていく。

かつてルーデウスの世界で遭遇した骸骨の敵。エリスが戦っていたおかげで今回は対処が容易に出来た。

「引き籠っていないで、そろそろ出て来てはどうだ？」

アノスが思いつき引き抜くと、ガイコツの全身が露になる。

「なあに!?!」

髑髏顔の為表情は分からないが、驚愕しているのだとアノスは思った。

そして、今までポケットに入れていた左手を抜き、ベブズドによって漆黒に染めた指でガイコツの頭蓋を掴んだ。

メキメキと音をたてて頭蓋骨に亀裂が生じると、ガイコツが唸るような悲鳴を上げる。

「情報が欲しいとミリーゼが言っていたな。捕虜になるか、このまま消滅するか選べ」

さらに左手の力を強める。頭蓋を割れば消滅するのかはアノスにも分からなかったが、ガイコツが呻く様子を見て確信しつつあった。

「じい、次元があ、ゆがあ、むうううう!」

ガイコツがさらに悲鳴を上げた、その時だった。

ガイコツの背後や横などの空間が歪む。先程攻撃してきた時の比ではない程に大きく捻じれる。

「これはなんだ？」

ガイコツを見下ろしながら訊ねる。だがガイコツは答えず、ただ悲鳴を上げている。

さらに歪みが大きくなり、周囲一帯の空間が捻じれていく。

「――走れ、出口だ！」

声が聞こえた。アノスも聞いたことのある声だ。

声が大きくなる、まるで近づいているかのように。

周囲の歪んだ空間に亀裂が生じる。亀裂の隙間からは光が漏れ出している。

次の瞬間だった。亀裂が割れて人影が飛び出してきた。ガラスが割れるように飛び散り、一拍遅れて降り立った人影。

その人物をアノスは知っていた。

「――あれ、アノスさん？」

リヒトー達がアイシヤを伴って、この世界に降り立った。

## ギアード連邦防衛戦②

「リヒトーか。ルーデウス達は一緒ではないのか？」

ガイコツの頭蓋を掴んだままアノスが訊ねる。

訊ねられたリヒトーは若干苦笑いをしながら答える。

「俺達だけ敵の攻撃で異次元に飛ばされていたんです。ここに出られたのは偶然ですよ」

「なるほど、イレギュラーが起きたのだな。丁度いい、北の方角でミリーゼがノウゼン達を指揮している。そちらの加勢に向かえ」

アノスがガイコツを投げ飛ばして振り返る。リヒトーは「了解」とだけ答えて道安達と共にその場を離れた。

「さて…」

アノスは投げ飛ばしたガイコツに目を向ける。亀裂が生じた頭部を抑えながら立ち上がったガイコツはアノスを睨む。

実際に目は無い為、本当に睨んでいるのかは定かではないが。アノスには睨んでいるように見て取れた。

「リヒトー達は無事みたいだね」

少し離れた場所で戦っていたレイがやって来る。その横にはミサもいる。

「そのようだな。あとはミリーゼに任せることにしよう」

「たしかに、この世界の地形や地理を知っているミリーゼ大佐が指示を出した方がいいだろうね」

そんな2人の元に、敵兵士を切り伏せたシンがやって来た。

アノス達の視線の先には、ガイコツとその配下の兵士がまだ大勢いる。

「そろそろ終わらせるか」

そう言ったアノスの瞳が、標的である1人の髑髏を見据えていた。

西部戦線北部にて独立打撃群を指揮しているレーナの搭乗する装甲指揮者ヴァナディースの装甲がノックされる。



「誰じゃ？」

フレデリカが首を傾げながら搭乗ハッチに向かう。

ハッチの前に立ったフレデリカは大声で「誰じゃ！」と訊ねる。

『あ、その声はフレデリカだね。リヒトーだよ、リヒトー・バッハ』

その名前を聞いたフレデリカの顔は驚愕に歪んだ。

それもそうだろう。リヒトー達が異次元から現れたのを目の当たりにしたアノスでもない限り信じることは難しいだろう。

「どうする、ミリーゼ？」

フレデリカはレーナを振り向く。当のレーナもどうしたらいいの  
か困っている様子だ。

「…キュクロプス。ヴァナディースの搭乗ハッチの外にいる人物の特  
徴を報告してください」

知覚同調で直衛戦隊である『ブリジンガメン』の戦隊長である『キユ  
クロプス』ことシデン・イーダに指示を出す。

ヴァナディースの外にいる人物が本当にリヒトーなのかがはつき  
りしない以上、警戒を怠らない。

『了解だ、女王陛下』

すぐに返事が返って来る。その十数秒後だった、再びシデンとの同  
調が繋がる。

「黒い軍服を羽織った背の高い優男と、眼鏡を掛けた堅物そうな男。  
目付きが人間じゃない男と、ヒョロつとした黒髪の女——」

リヒトー達だとレーナは思った。少なくとも特徴は合致している。  
ハッチを開けようとフレデリカを振り返った瞬間。

「——それと、赤茶色の髪のメイド」  
動きが止まった。

(メイド？ 誰ですか？ メイドはいなかったはずですが…)

レーナが思考を巡らせるが、アノスやリムル達を含む異世界の仲間  
達の中にメイド服を着用している者などいなかった。

故に、開けるべきかさらに悩むことになってしまった。

「…開けてください」

数秒考えた後、レーナはフレデリカにそう言った。

「了解じゃ」

フレデリカがハッチを開く。その向こうには、レーナ達が見知った人物達が立っていた。

「やっと開けてくれた」

リヒトーはげんなりとした声で言うと、隣のアイシャの手を引いて前に出す。

「本当にリヒトー上級大将でしたか、失礼しました。敵の可能性もあつたので…」

レーナが謝辞を述べると、リヒトーは頭を振る。

「気にしてないよ。それより、アイシャちゃんを乗せてくれないかな？」

そこでレーナはメイドを見る。メイド服を着たアイシャはこの場においてフレデリカ以上に異彩を放っていた。

「こちらは…？」

「ルーデウスの妹だよ、こっちの世界に来る途中で会ったんだ」

そう言われ合点がいった。ルーデウスが「妹を敵の幹部に攫われた」と言っていたのを思い出したのだ。

そうとなればレーナの判断は早い。

「わかりました。アイシャさん、座ることは出来ませんがこの中なら安全です。さ、どうぞ」

レーナに促され、アイシャはハッチからタラップを上がり、ヴァナディースの車内に入る。

「じゃあ、ボク達も戦闘に参加するよ。どうすればいい?」

リヒトーに訊ねられたレーナは、司令部から要請があつた増援としてリヒトー達を向かわせた。

モニターに向き直ったレーナに同調が繋がる。相手はリトだ。

『敵機動兵器に動きがありました。先遣隊を壊滅させたタイミングでこちらに前進を開始しました!』

レーナはモニターを切り替える。たしかに『クレイモア』と『サンダーボルト』の展開している戦線の敵機動兵器に動きがある。

レーナは西部戦線全体の分布図に切り替えると、モニターを凝視し

て数秒固まる。

その後、同調を繋いで指示を出した。

「第五戦隊『リユカオン』は北西方面に向かってください。『クレイモア』『サンダーボルト』の両戦隊は敵機動兵器の動きに注意して後退！」

レーナは第五戦隊『リユカオン』が敵機工隊を撃退したことを確認すると、北西方面への支援を命じる。

『リユカオン』了解』

第五戦隊長レキ・ミチヒからの応答の後、『リユカオン』は北西へと移動を開始した。

『ノルトリヒト』『スピアヘッド』両戦隊が敵幹部のものと思しき機甲部隊と会敵！」

マルセルがモニターを睨みながら報告する。エルネスティ達がジャイアントガモツサと戦っている戦線から北に位置する戦線での会敵。

南で戦っているアノス達の状況が分からない。アノス達は知覚同調が出来ない、連携の為に現状を把握する必要がある。

『キユクロプス』。南側で戦闘しているアノス陛下達の支援に向かってください」

直衛の『ブリジンガメン』戦隊の戦隊長、シデン・イーダに同調を繋ぐ。

すぐさま返事が返って来る。勿論、反対の意思を示す言葉で。

『冗談だろ女王陛下!? 直衛が離れるわけにいくかよ!』

「現状、敵軍がここまで到達することはないでしょう。それに、アノス陛下達の現状を確認する必要があります」

そう言うと、しばらくの沈黙が返ってきた。

数秒後、シデンの「了解だ」の返事後に『ブリジンガメン』戦隊はシデンのレギンレイヴ『キユクロプス』を先頭に南方方面へと向かった。

「あの巨人は幹部で間違いないじやろうな」

フレデリカがジャイアントガモツサが映るモニターを見る。その

後、シンエイ達『スピアヘッド』戦隊が展開している戦場の状況を見る。

シンエイ達が相対している敵機工隊を見たフレデリカは思った。

——似ている、と。

シンエイ達が搭乗している『レギンレイヴ』は純白のカラーリングの四足歩行兵器だ。蜘蛛を思わせるフォルムと、本体上部に乗せられた大型火砲。

しかし、モニターに映る敵機工隊は四足歩行ではなかったが、前側左右二足と後ろ側中央に一本の支柱のような脚部を持つものだった。

フレデリカがシンエイ越しに見る敵機動兵器の挙動はまさに「フェルドレスそのもの」だった。

「おい、こんなの異世界でも遭遇しなかったぞ！」

ライデンが『ヴェアヴォルフ』のメイン武装である40mm機関砲を連射しながら前進する。その遙か前方では、シンエイの『アンダーテーカー』が辻斬りの如く敵機動兵器を両断していく。

両断と言っても、一度で出来はしない。斬り抜けを繰り返し、ダメージを蓄積しての両断だ。レギオン相手でもこうはならなかったために、シンエイにも若干の焦りが見える。

『どうするんです隊長、数を減らしても増援されたんじやあキリがありませんぜ？』

知覚同調が繋がる。声の主は『スピアヘッド』戦隊と同時に展開している『ノルトリヒト』戦隊の戦隊長ベルント・ベルノルトである。

シンエイ達が会敵している敵機工隊集団は、いわば前衛部隊。いくら撃破したところで後方から増援される。

独立打撃群以外のギアーデ連邦軍も同戦線に参戦しているが、敵前衛部隊を突破出来ずにいた。

現状の数による戦力差は覆せない、あまりにも数が違いすぎるの

だ。

シンエイもそれは分かっていたし、それをレーナが分かっている訳がないこともシンエイには分かっていた。

だからこそ、レーナが打開策を見出すための時間を稼ぐ必要がある。

ならば今、シンエイ達が取るべき行動は――

『スピアヘッド』『ノルトリヒト』両戦隊は遅滞戦闘を続行。これ以上進軍させるな――

――敵を現在位置から先に進ませないことだった。

アンジユのレギンレイヴ『スノウウィッチ』を筆頭に、複数のレギンレイヴのミサイルランチャーが一斉に火を噴いた。

連続して打ち上げられたミサイルは軌道を曲げて敵前衛部隊に降り注ぐ。

爆炎と衝撃が敵に襲い掛かる。敵の大半は衝撃によつて吹き飛ばされる。地面を数回バウンドして静止すると、数秒後には機体を起こして再び進軍を開始する。

吹き飛ばされて横転した敵機にクレナのレギンレイヴ『ガンスリンガー』を中心とする狙撃部隊の88mm狙撃砲による連続狙撃が襲い掛かる。

その連携を掻い潜った敵機工隊集団をシンエイやセオ達が叩いていく。

だが、敵前衛部隊の後方にはまだ戦力が残されている。

率いるのは真・魔王軍幹部のロンゴドル。

ガモツサと双壁を成す真・魔王軍の機工隊指揮官だ。

乗機である専用機甲巨神外骨格『オルディエンス・イータ』に搭乗し、前衛部隊の状況をモニターしている。

オルディエンス・イータは通常の巨神外骨格とも、ましてや機甲兵器とも一線を画す外見と性能をしている。

蜘蛛のような左右3本ずつ計6本の脚部ユニットの上部に接続された巨神外骨格の上半身。腰より下が蜘蛛型の脚部ユニットになっ

ており。多脚による立体戦闘が可能となっている。

「流石の『死神』も、数の暴力なら抑えられるか。……………だが」

ロンゴドルは前衛部隊の後方に控えさせている増援部隊を見渡す。いまだ多数の機工隊が残っているが、ロンゴドルには焦りが見える。数に於いて圧倒的戦力差を持つロンゴドルが焦っている理由は1つ。

「『抑えている』が、『押して』はいないか……」

これであつた。シンエイ達を前進させない程度には抑えているが、裏を返せば『優勢でもない』のだ。

拮抗した戦況を打開出来ずにいるのは魔王軍側も同様であつた。

「……………行くかな」

ならば己の力で打開する。ロンゴドルは自身の中でそう結論を出した。

オルディエンス・イータの脚部ユニットが姿勢を落とす。

「まあ、退屈してたしな。丁度いいか」

ロンゴドルはオルディエンス・イータの内部で口角を上げると。視線の先で前衛部隊と交戦している一機のレギンレイヴを補足する。

「勝負だ、潰してやるよ……。死神！」

視線の先のレギンレイヴ。『アンダーテイカー』目掛けてオルディエンス・イータが跳躍。放物線を描いて襲い掛かった。

## ギアード連邦防衛戦③

「ッ!? 戦隊各位、上空警戒!」

シンエイからの同調が『スピアヘッド』『ノルトリヒト』両戦隊に繋がる。

直ちに回避行動を取る僚機達を横目で一瞥すると、シンエイは上空から襲い来る物体に視線を戻した次の瞬間。

シンエイの眼前にそれは降り立った。いや、「墜落」と言っても過言ではなかったが。

降り立ったソレをシンエイは警戒しながら観察する。

自身が搭乗するレギンレイヴよりも一回り大きな物体。それは――

「……………機動兵器、か?」

キッドとアデイのツェンドルグに似ているな、とシンエイは思った。

多脚の人馬のようなシルエットのオルディエンス・イータが着地態勢を解き、その全貌を露にする。

『こいつ、今までの敵とは違うぞ。幹部か?』

ライデンが並び立つ。セオ達も背後にて警戒態勢で展開していく。

「間違いないだろうな。こちらの布陣に風穴を開けたいんだろ」

『(苦勞なことだ)』

シンエイは『アンダーテイカー』の光学センサ越しに敵の脚部を観察する。

先端は鋭く、刺突にも用いることが出来そうだ。下腿部は大腿部にいくにつれて太くなり、逆に大腿部は腰部にいくにつれて細くなっている。

(腰部手前の細い箇所は脆そうだな)

シンエイは脚部が集約される腰部の付け根を狙うことに決めた。

先に仕掛けたのはオルディエンス・イータだ。左右計6本の脚で地面の穴を穿ちながら突撃してくる。

狙いはただ一人、シンエイだ。

『アンダーテイカー』目掛けて突撃する。縦に長い体躯をもって潰しにかかったのだ。

無論、シンエイも大人しくやられるつもりは無い。回避行動を取り、オルディエンス・イータと『アンダーテイカー』との距離が離れる。

オルディエンス・イータは機体を制止すべく脚を地面へと突き立てると、ドリフトするかのように『アンダーテイカー』が回避した方向へと旋回する。

『アンダーテイカー』機体上部のガンマウントの88mm滑空砲が火を噴く。

爆音とともに撃ち出された徹甲弾がオルディエンス・イータの左前脚の上部付け根を翳める。

シンエイは蛇行するように後退しつつオルディエンス・イータを誘導する。

クレナの『ガンスリンガー』の88mm狙撃砲の射角に誘い込むためである。

ロンゴドルは違和感を感じていた。先程から追撃している『アンダーテイカー』の進路にである。

後退する『アンダーテイカー』を追撃するロンゴドルのオルディエンス・イータを『ヴェアヴォルフ』と『ラフィンングフオックス』が追撃するような状態であるのだ。

こちらが進路を変えて回り込もうとすると、『ヴェアヴォルフ』の40mm機関砲によって牽制される。

最初こそ「敵に追い込まれている隊長を助けるため」と考えていたが、どうやら違うのだと思いはじめた。

そして、その疑問はすぐに解けた。

『クレナ、今だ』

シンエイからの指示を受けたクレナの『ガンスリンガー』の88mm狙撃砲から放たれた徹甲弾は放物線を描いてオルディエンス・イータ



の襲い掛かった。

完璧な軌道でオルディエンス・イータの右前脚に直撃する徹甲弾。鉄同士がぶつかる鈍い音がしたと思ったら、オルディエンス・イータの右前脚がぐにやりと変形していた。

ガクンツと態勢を崩し、姿勢が下がる。しかしロンゴドルは残った脚を巧みに操り、戦闘を継続する。

左右に跳ねるような機動で『アンダーテイカー』に迫る。『読まれにくい』機動で狙撃に対して予防線を張っているのだ。

『シン君。後退してー!』

アンジユの声が聞こえたかと思った次の瞬間、無数のミサイルがオルディエンス・イータへと降り注いだ。

大半は地面を抉るだけだったが、数発は直撃したのをシンエイは光学センサ越しに確認した。

ミサイルの着弾と同じタイミングで『ノルトリヒト』戦隊の支援射撃も行われた。

土煙が上がり、オルディエンス・イータの姿が隠れてしまう。が、直撃弾もあつた為、ある程度の損傷を与えることは出来たと考えた。

だが、シンエイの考えは最悪の形で否定されることとなる。

土煙が晴れてオルディエンス・イータの姿がハッキリと見えた。

そこにあつたのは――

「なっ!?!」

『嘘だろ!?!』

『冗談じゃないよ…!』

『え!?! 嘘…!』

『そんな!?!』

――徹甲弾の斉射をもつともしない、無傷のオルディエンス・イータだった。

『スピアヘッド』『ノルトリヒト』両戦隊が敵幹部と交戦に入ったとい

う情報は、レーナにも同調で伝えられた。

各戦域から集まった情報を統合した後、中央司令部へと回線を繋いでいた。

「エルネステイさん達が交戦している巨人も敵幹部と見て間違いありません」

レーナの視線の先、スクリーンに映るヴィレムは苦い表情を浮かべる。

現在、ギアーデ連邦を包囲するように展開している真・魔王軍の軍勢をどう撃退するか、考え方によつてはレギオンよりも厄介なこの敵にヴィレム以下中央指令室の面々は頭を抱えている。

『異世界の戦士達の加勢によつて、戦線の崩壊は回避できたが。物量差がありすぎるな』

ヴィレムの言葉にレーナも険しい表情になる。リヒトー達が加勢した他の戦線にも敵の大部隊が展開している。

敵が集中しているのは西部戦線だが、他の戦線の状況も危険な状況だ。それはレーナも理解している、だが、現在の西部戦線の状況から多数の増援を他の戦線に遅れないのも事実。

「持ち堪えることは可能なのですか？」

『前線の兵士達も奮闘している。だが、敵は“疲れ知らず”とばかりに進軍して来ている。いつかは……………』

ヴィレムが言い淀む。ヴィレムが言おうとした言葉の続きはレーナも分かっている。

「こちらの戦闘が落ち着き次第、増援部隊を出します。持ち堪えてください」

レーナの言葉を聞いたヴィレムは一瞬驚きの表情を浮かべるが、すぐに表情を戻す。

『それまでは、持ち堪えさせる』

通信を終えたレーナは西部戦線の分布図を確認する。

北西方面に展開している『クレイモア』『サンダーボルト』を援護するため展開していた『リユカオン』が敵機工隊集団と会敵したところだった。

合流した3戦隊は南下を開始した。敵機工隊集団をエルネステイ達が戦闘している戦域まで誘引し、戦力を集結させて撃破するためである。

だが、エルネステイ達もジャイアントガモツサと交戦中の為、リト達の援護は難しいだろうとはレーナも考えている。

そこで、シンエイ達にも後退の指示を出す。敵幹部ロンゴドルが搭乘しているオルディエンス・イータと機工隊集団を徐々に一点に誘導しているのだ。

次の指示を『リユカオン』に出そうとした時だった、レーナに同調が繋がった。相手はシデンだ。

『アノス陛下達が戦闘している区域に間もなく到着する。到着後はどうすればいい、女王陛下?』

「北に敵集団を誘導するよう伝えてください。敵を集めて、包囲殲滅します」

「——了解だ、女王陛下」

シデンのレギンレイヴ『キユクロプス』を先頭に『ブリジンガメン』戦隊が西部戦線南部戦域に到着する。

機体を急停止させたシデン達が見たものは、彼女達の想像を遥かに凌ぐものだった。

アノスが放つジオ・グレイズが敵兵士を焼き尽くして直進する。

その隙を待ってました、とばかりにガイコツが異次元から姿を現して手刀を繰り出す。

だがそれはアノスの傍に控えていたシンによって阻まれる。

シンが魔法陣から抜き放った略奪剣ギリオノジエスとガイコツの手刀が甲高い音を立てて斬り結ぶ。

「我が君への奇襲といい、今の斬撃といい。精細を欠いていますね」  
凍てつく視線のままシンはガイコツを見下ろしながらギリオノジエスを振るう。

奇襲を防がれたガイコツは退避のタイミングを見計らっていた。  
ガイコツはシンの斬撃を躲しながら後退する。激しく動き続けた

ために頭蓋からボロりと欠片が落ちる。

「ぐう……。くううそおお……」

頭蓋を抑えながらガイコツ、それに相對するシンは劍呑な表情のままギリオノジエスの劍先を向けている。

「ここまではです」

シンが言葉を放った次の瞬間だった。

ガイコツの右手が宙を舞っていた。

そのことをガイコツ自身が認識した時には左手も宙を舞っていた。ボトリと音を立てて両手が地面に落ちる。地面に横たわる白骨の手をガイコツは茫然とした風に見下ろす。

「両手を斬り落とされた」という事実を理解するのに、数秒を要した。

そして、その事実を理解したガイコツは絶叫した。

いや、正確には声は出なかった。

ガイコツが声を発する直前に、シンはギリオノジエスにてガイコツの喉にあたる舌骨付近を斬っていた。

「次はその頭蓋を落とします」

シンがギリオノジエスを魔法陣に仕舞い、次いで流崩劍アルトコルアスタを抜き放つ。

美しい波紋が浮かぶその魔劍を振りかぶり。

「では、これで」

——振り下ろした。

だが、ガイコツは咄嗟に自身の背後に異空間を出現させて、飛び退くように消えた。

アノスが『森羅万掌——イ・グネアス——』によってガイコツを捕縛しようとするが、その手は虚空を掴む。

「多少、勝手が違うようだな」

先程まで『森羅万掌——イ・グネアス——』を発動させていた右手を見ながら嘆息する。

そこに複数機のレギンレイヴが到着する。シデン達『ブリジンガメ

ン』戦隊だ。

『キュクロプス』がアノスの隣に並ぶと、コックピットハッチが開き、褐色の女兵士が姿を現した。

「アノス陛下で合ってるかい？」

「ああ。お前はミリーゼの親衛隊、だったか。何の用だ？」

アノスが振り向きながら答える。シデンは機体から降りて、アノスの正面に立つと、話を続ける。

「女王陛下から伝言を託されたのさ。敵を一箇所に集めた後、包囲殲滅するから後退してほしいってね」

「なるほど、なら後退しよう。後退先は北でよいのか？」

「それで問題ない。アタシらは先に行かせてもらうが、道案内は必要かい？」

そう訊ねられたアノスは首を横に振る。回答を受け取ったシデンは「わかった」と頷くと、『キュクロプス』に乗り込み来た方角に戻って行った。

「後退する？」

ミーシャがアノスの元に戻って来る。その横にはサーシャもいる。「敵を誘導しなければならぬからな、こちらが『押されている』と見せかける必要があるな」

その後アノスはリークスにてレイとミサに今後の作戦を伝えたと、少しづつ後退を開始した。

## ギアード連邦防衛戦④

アノス達が後退を開始したことで、包囲陣が完成に向かいつつある。

ヴァナディースの車内でレーナはスクリーンを睨んでいる。後退と並行して誘引を開始した独立機動打撃群とエルネスティ達とアノス達。

それに釣られて敵軍が一箇所に集結しつつある。

敵は自分達が「押している」と考えているようだったが、それがレーナの作戦でもあった。

故に、アンジュやクレナ達を筆頭に遠距離狙撃や面制圧攻撃が行える者は早い段階で後退させた。

アノス達がフレスにて後退を完了したことがシデンからの同調で知らされる。

その知らせを受けたレーナは作戦を次の段階に進める。包囲戦を開始するのだ。

「ヴァナディースHQより各機、作戦を次の段階に移行します。包囲陣形を構築し、殲滅戦に移行します」

同調で繋がったシンエイ達からの応答が返って来る。

スクリーンには一箇所に誘導された敵軍を包囲するように展開する独立機動打撃群各戦隊とアノス達。

エルネスティとキッド、アデイの2機はジャイアントガモツサとの戦闘を継続中である。

「上手くいきすぎではおらぬかの？」

スクリーンに視線を向けてフレデリカが訊ねてくる。レーナはその少女を一度見下ろして、再びスクリーンに視線を戻す。

フレデリカの言葉の意味をレーナも理解している。敵軍がこちらの都合のいいように動きすぎているとレーナも感じていた。

だが敵は「レギオンではない」のだ、意思と感情を持つ人間と呼べる生物なのだ。故にこちらが後退したことに対して「好機だ！」と感じたのではないかとレーナは考えていたし、だからこそ、その敵の感

情を利用した作戦を立てた。

レーナは、フレデリカや自分の中にある疑問は杞憂だと思い始めていた。

現に包囲陣は完成しつつあるし、包囲すればさすがの物量差も問題ではないと思っていたからだ。

そして包囲陣が完成する。

問題なく作戦は進行しているとレーナは確信し、このまま包囲殲滅出来ると思っていた。

それが、慢心であったと理解するまでは。

前線で戦鬪を継続しているシンエイも違和感に気付いていた。

包囲陣が完成し、殲滅戦に移行した各戦隊は取り囲む敵魔王軍に対して一斉射を見舞った。

「……………何かがおかしい」

シンは自分だけのコックピット内でそう零した。

包囲した敵魔王軍は次々と屍の山を築いていく。無論、抵抗はある。だが、必要最低限のようにも感じられた。

何よりシンエイが疑問に思ったことは。先程まで先陣を切っていたオルディエンス・イータが敵機工隊の陰に隠れたことだ。

敵兵士はオルディエンス・イータの「盾」になるかのように展開し、アンジュやクレナの遠距離攻撃からオルディエンス・イータを守っているのだ。オルディエンス・イータを隠すように、まるでオルディエンス・イータを見られることが不都合とばかりに。

シンエイにはそのことが疑問を通り越して不気味に映った。

「……………ライデン」

シンエイの『アンダーテイカー』の隣に控えていた『ヴェアヴォルフ』に同調を繋ぐと、返事が返って来る。

『どうした。何かあったのか?』

「敵の動きがさつきと全然違う。何かとは言えないけど違和感を感じるんだ」

敵兵士がオルディエンス・イータの盾になっていることには、シンエイなりに結論が出ていた。

「指揮官を死なせない為」そう考えた。

だが、姿を隠すように守っているのは何故か。

それに、反撃も弱い。指揮官を死なせない為に盾になるだけではなく反撃してくるだろうと考えていた。だが現在、敵の反撃は包囲陣に移行する前とは比較にならない程である。

包囲陣が完成すれば、どこかを食い破るため反撃をしてくるだろうと最初こそ考えていた。だが、こうも反撃が弱いとなれば――

「何か別の意図があるのか……？ 各戦隊、状況報告」

シンエイは各方面の各戦隊に同調を繋ぐ。すぐに応答が返ってきた、リトだ。

『クレイモア』戦隊は北西方面から包囲陣を構築。『リュカオン』とともに殲滅戦を続行中です』

『こちら『サンダーボルト』戦隊。東に移動しつつ包囲陣を構築し、殲滅戦を継続中』

『こちら『ブリジנגアメン』。アタシらは女王陛下の護衛と並行して東から南にかけて包囲殲滅戦を継続中』

続いてユートとシデンからも応答が来た。

「敵の行動におかしな点は無いか？」

シンエイの問いに隊員達がざわつくのが分かった。皆、敵の行動に何の違和感も感じていないようだった。

ただ一人を除いて、だが。

『シンも気付いていましたか』

レーナだ。同調越しでも分かる切迫した声音が独立機動打撃群に緊迫した空気を走らせる。

「ええ、包囲陣完成後の敵の反撃が弱くなりました。極端すぎるほどに」

『それは私も疑問に思っていました。こちらの都合のいいように進みすぎていると』

間髪入れずにレーナから返事が来る。レーナが言っていたことを



整理したシンエイは「たしかに」と頷いた。

こちらの作戦通りに事が運んでいる。本来は喜ぶべきことだが、今のシンエイとレーナには何か引つかかるものがあった。

『だが、こうして敵の戦力は削れてるんだ。作戦は成功じゃないのか？』

シデンから同調が繋がる。

レーナは「確かにそうだ」と思う。だが何か見落としているような、何かを忘れていないかと考えてしまうのだ。

そして、それは起こった。

シンエイ達の足元がバイブレーションのように振動を始めたのだ。

振動は徐々に大きくなる、段々と音も大きくなる。耳障りな振動音がその場にいる全員に襲い掛かる。

「なんだ、なんの攻撃だ!？」

シンエイは顔を顰め、耳を塞いで周囲を見渡す。ライデンやセオ達から同調が繋がるが、皆、この振動音に身動きが取れないでいる。

それは『ヴァナディース』にいるレーナも同じだった。

「いったい何が、ああ!」

振動が全身を揺さぶる、それにかぶさるように音と振動で頭を揺さぶられる。振り返ったレーナの視線の先では、マルセルが苦悶の表情でモニターデスクに突っ伏しており、その足元ではフレデリカとアイシャが両手で頭を抱えて蹲っている。

「か、各機……。状況、ほ、報告を……………ッ」

レーナが同調で呼びかけると、シンエイが応じた。

「こちら、『アンダーテイカー』。敵の、攻撃と思われる、振動によつて…、作戦ツ、行動に、支障あ、り…」

途切れ途切れに紡がれるその言葉が、声音が、ヴァナディースと敵を挟んで反対に位置する『スピアヘッド』戦隊にも「この振動」が届いていることを物語った。

声の様子から、各戦隊も同じ状況にあるのだと理解したレーナが次に懸念したのは敵の動きだ。

こちらのプロセッサ達がまともな戦闘が出来ないこの状況を敵

が放っておくとは思えなかったからだ。

片手で頭を抱えながらコンソールを操作し、戦線の分布図をスクリーンに表示させる。

完成した包囲陣。だが、その包囲陣の完成こそが敵の狙いだったのだとレーナは今、理解した。

(この攻撃は敵のどれかから放たれているもの、敵を中心として周囲に拡散される攻撃と仮定するならば)

そこまで考えてレーナはハツとなる。結果としてレーナの仮定は正しかった、オルディエンス・イータを中心として放たれたアドラ・フィールドは真・魔王軍幹部のヴォイドの使用する『ドゴス・アドラ』の応用で完成した武器であった。

過去に真・魔王軍が征服した世界の技術を用いたことで完成したこの武器を使用するのはロンゴドルも初めてだったが、うまく動作したことには素直に安堵していた。

シンエイ達が身動きを取れないでいるこの状況を逃すまいとばかりに敵軍の反撃が強くなる。

レーナに各戦隊長からの同調が繋がる。各戦隊から押し寄せる報告はどれも「敵の反撃が激しく、戦線の維持は困難」という内容であった。

レーナが分布図を見る、各戦隊が徐々に後退したことで包囲陣が広がる。

無論、包囲陣は狭い方が隙が少ない。現在の包囲陣は隙間が空いたことで包囲陣としての機能を果たしていない。

このままではどこかの隙間から食い破られてしまう。だが、エルネステイ達はジャイアントガモツサに妨害されてこちらの援護に来ることが出来ない。

無論、アノス達も動けないでいる。いや、「アノス以外」と言うべきであった。

「少々不快だが、動けない程ではないな」

アノスも全くのノーダメージではないが、戦闘続行に支障は無く。フレスで飛び上がり、上空からジオ・グレイズを放つ。

上空にいても振動と音が弱まる気配がないことに、アノスはこの攻撃の射程の広さを理解した。

(ミリーゼ達は動けないか、だが)

アノスが見下ろした先にはオルディエンス・イータがいる。

「揺さぶられただけで、俺を止められると思ったか」

アノスは敵陣の中央、オルディエンス・イータの正面に降り立つ。アノスの姿を視認したオルディエンス・イータは僅かに後ずさる。

『暴虐の魔王、なぜ動ける!?!』

オルディエンス・イータの上半身ユニットが左右のマニピュレーターの先端、人間の手の形をしたそのマニピュレーターの鋭い爪先でアノスに襲い掛かる。

「この程度の振動で、俺が止まるとでも思ったか?」

アノスの両手が漆黒に染まり、オルディエンス・イータのマニピュレーターを受け止めた。

アノスは掴んだ左右のマニピュレーターを外に押し出すと、軋みを上げながらマニピュレーターが左右に開いていく。

押し出す力を強めていく、さながら力比べのつもりだ。

そして、限界は思いのほか早く来た。マニピュレーターから力が抜ける。オーバーロードしたのだ。

「ふんっ!」

アノスがマニピュレーターを振りほどき、軽く跳躍してオルディエンス・イータの眼前に辿り着くと、ジオ・グレイズをゼロ距離で放つた。

漆黒の太陽を全身で受け止めたものの、地面を抉りながら押されている。

ロンゴドルの額には脂汗が浮かんでいる。この振動攻撃に絶対の自信があった身としては、この結果——今、自信が置かれている状況は予想していなかった。

だからこそ、焦っている。自身では敵わない圧倒的な存在が目の前

ににいるこの現状を打開する方法は――

『やむをえねえか！』

――逃げることだった。オルディエンス・イータを跳躍させて距離を置く。無論、ジオ・グレイズは明後日の彼方に飛び去った。

だが、この行動によつて振動攻撃が中断された。となれば――

「逃がさない」

先程まで動けなかった独立機動打撃群が殲滅戦を再開した。

シンエイの『アンダーテイカー』が敵機工隊を掻い潜り、アノスと対峙するオルディエンス・イータの側面に躍り出たのだ。

機体前部の格闘用サブアーム左右に取り付けられた二刀の高周波ブレードを横薙ぎの構えにして飛び掛かる。

斬り抜けるように2機の機動兵器が交差する。

先程アノスに機体上部のマニピュレーターを破壊されたオルディエンス・イータは脚部ユニットで健在の左前脚で斬り結ぶ。

オルディエンス・イータの脚部ユニットは格闘戦を想定して両前足のみだが鋭利な作りをしている。

故に『アンダーテイカー』の高周波ブレードとも斬り結ぶことが出来たのだ。

交錯した両機が機体を急旋回させる。

「ノウゼン、任せて問題無いか？」

『アンダーテイカー』の隣に降り立ったアノスがコックピットハッチを手の甲で叩きながら訊ねる。

シンエイは『アンダーテイカー』の機体重心を落として戦闘の意思を示す。

『問題ありません』

外部スピーカーからの返答を聞いたアノスは「ではここは任せる」と言うので飛び立った。

アノスを見送ったシンエイは長く息を吐き、呼吸を整える。おそろしく長い戦いになるからだ。

シンエイは高周波ブレードを二刀とも左に倒してオルディエンス・イータの左前脚を狙って斬りかかる。

刃同士が火花を散らす。一瞬で斬り抜けると、再び『アンダーテイカー』を旋回させて仕掛ける。

オルディエンス・イータが距離を取るために後方に跳躍するが、「待ってました」とばかりに砲弾が直撃する。

『アンダーテイカー』の後方にて『ガンスリンガー』が狙撃を行ったのだ。

徹甲弾は放物線を描いて跳躍した無防備なオルディエンス・イータに襲い掛かり、脚部ユニットの左後脚を吹き飛ばした。

態勢を崩したオルディエンス・イータは受け身を取ることも出来ずに落下する。

土煙を上げて巨体が地面に激突する。落下の衝撃で他の脚部も損傷したことでオルディエンス・イータは完全に自立が困難となった。

「……ここまでだ」

シンエイが『アンダーテイカー』を跳躍させる。高周波ブレードの剣先を真下に向けて飛び掛かると、落下の勢いのまま高周波ブレードをオルディエンス・イータの上半身ユニットのの腹部に突き立てた。

上半身ユニットが痙攣したように震えると、首がガクガクと持ち上がり、その双眸が『アンダーテイカー』の光学センサーを睨む。

体の大半を包むオルディエンス・イータだが、眼だけは隠していない。眼だけは、ロンゴドルのものが露出している。

「ッ!？」

シンエイは息を飲む。光学センサー越しに見た「ロンゴドルの瞳は、まだ闘志を失っていないからだ。

血が滲み、真っ赤に充血しても、それでも『アンダーテイカー』を、シンエイを睨み続けているのだ。

戦慄した、久しく忘れていた感情であったかもしれないその感情。確かにシンエイは、ロンゴドルに恐怖を抱いていた。

## ギアード連邦防衛戦⑤

シンエイは『アンダーテイカー』の脚部先端に収納されているパイロドライブを全て、オルディエンス・イータに打ち込んだ。

彼等が搭乗するレギンレイヴは四足機動の兵器だ。パイロドライブは合計4発。両前脚の2発が上半身ユニットに、両後脚の2発が脚部ユニットに打ち込まれる。

勢いよく撃ち出された杭は全て、ゼロ距離でオルディエンス・イータを貫通した。

『グウッ！ フー、フー！ ウウアアア！』

ロンゴドルが言葉にもなっていない叫びを上げる。それは最早、叫びとは形容出来なかった。雄叫びだった。

シンエイはパイロドライブを脚部からパージして、オルディエンス・イータから飛び退く。

着地をすくなく光学センサーをオルディエンス・イータに向ける。その場にてのたうち回るオルディエンス・イータと、雄叫びが響く。

『痛え、痛えぞ！ クソつたれがあ！』

体を起こしたロンゴドルはオルディエンス・イータに突き刺さったままのパイロドライブを引き抜く。

オルディエンス・イータの装甲だけではなく、ロンゴドルの体をも貫通したパイロドライブを引き抜くことはロンゴドルにさらなる激痛を与えた。

『殺してやる…。殺してやるぞ！』

先程よりも大きな雄叫びを上げてロンゴドルはオルディエンス・イータを跳躍させる。

パイロドライブを打ち込まれたことで脚部ユニットに不具合が生じたため、思うように動かせないのだ。故にロンゴドルが取った戦法は『跳躍による一撃離脱』だった。先程までの歩行が出来ないとあつては、こうする他なかった。

降下しながら左前脚を突き立てんと振り下ろす。左前脚は鋭利な

剣となって『アンダーテイカー』を翳める。

“当たらなかつた”と認識したら即跳躍して第二撃に移る。それを躲されて第三撃、第四撃と繰り返す。

しかし、シンエイも機体を巧みに操り回避する。

オルディエンス・イータが跳躍したタイミングを狙い、88mm滑空砲の照準を定めるとトリガーを引く。

炸裂した火薬によって打ち出された徹甲弾が真っ直ぐオルディエンス・イータに迫る。

空中にて自由落下中のオルディエンス・イータに回避行動は不可能。万全のタイミングと狙いだ、シンエイも直撃を確信した。

だが、オルディエンス・イータが取った行動はシンエイの予想を裏切った。

『アンダーテイカー』が放った徹甲弾はオルディエンス・イータの脚部に吸い込まれるように飛来した。

だが、ロングドルはオルディエンス・イータの脚部を折り畳んだ。まるで、身を屈めるように。

そして、徹甲弾が脚部ユニットの真下を通過しようとした瞬間だった。

オルディエンス・イータの脚部が突如展開し、飛来した徹甲弾を蹴り返したのだ。

徹甲弾は来た方角に蹴り返される。無論、その先には『アンダーテイカー』がいる。シンエイはハツとして回避行動に映るが、蹴り返された徹甲弾が脇を翳めて大穴を穿つ。

クレーターのように穿たれた穴を一度振り返り、その衝撃で『アンダーテイカー』は僅かだが吹き飛ばされる。

いくらレギンレイヴが軽量とはいえ、フェルドレス一機を吹き飛ばす程の威力で蹴り返された徹甲弾。

その衝撃と、何よりその神技をやったのける敵に対して、シンエイはさらに戦慄した。

「なんじゃあれは!？」

後方にて、『ヴァナディース』の車内でフレデリカが驚愕の声を上げる。

「何があったのですか？」

振り返ったレーナが訊ねる。フレデリカの瞳が「真紅」に染まっていたため、「誰かの現在を見たのだ」と判断した。

「シンエイが戦っておる敵じゃが、少々分が悪いかもしれぬ……」

俯いたままフレデリカが話す。「シンエイが戦っている敵」分が悪い“これらから分かることは「シンエイが苦戦していて、敗れるかもしれない」ということだ。

レーナはもちろんのこと、その場にいるマルセルもフレデリカの言った意味を理解できないでいた。

何を言ったかは分かった。だが「何故」シンエイが敗れるのかが理解できなかった。シンエイの強さはレーナもマルセルもよく知っている。

フェルドレスを扱わせたら、シンエイに勝てる者はいないだろう。それほどまでに強いシンエイが敗れるかもしれない、2人には全く想像できなかった。

「ライデン、シンの援護に向かえますか？」

レーナが同調を繋ぐと、すぐにライデンから応答があった。緊迫した声音で言葉が紡がれる。

『そうしたいんだが、敵の妨害が思いのほか強い。突破するにはもう少しかかるぞ』

「シンが敵幹部と思われる敵機甲兵器と交戦中です。どうやら苦戦しているようです、急いでください」

『やってみるさー!』

ライデン達『スピアヘッド』戦隊から少し離れた位置で、リト達も戦闘を継続している。

包囲陣が中途半端に構築された以上、敵を各個撃破しつつ包囲陣の完成を目指しているのだ。

だが現実には簡単にいかない。徐々に押し込んでいるが、それに比例



するように味方の損失も増している。今のところ戦死者は出ていないが、戦闘不能となった機体も多い。

リトの『ミラン』も、戦闘続行は可能だが、右の『12・7mm重機関銃』の砲身が折れて使い物にならなくなっている。

それに何より、弾薬の補充が追いつかない。

敵を押し留めるためには、攻撃し続ける必要がある。

戦隊を2チームに分けて入れ替わりで攻撃をすることで弾薬の消費を抑えているが、それも長くは続かないだろうとリトは考えていた。

そして、その考えはかなり早い段階で現実のものとなった。

先程まで押し留めていた敵軍が、攻勢に転じたのだ。こちらの攻撃に対して機甲兵器一機を先頭として、後続がその影に隠れるように前進する。

そして先頭が倒れると、二番目が先頭となって前進する。先程まで先頭だった味方を踏みつけながら。

味方を盾にしての攻勢、味方の犠牲を、死をもともせず前進し続ける敵軍に、リト達も恐怖を覚えていた。

だからといって包囲陣を突破されるつもりはリトにも毛頭ないが、現実問題として弾薬も残り少ない。

リトはシンエイのような近接戦闘を行えない。

いや、『シンエイだけ』なのだ。フェルドレスで斬り合いを行うような者は。

だからこそ、リト達は弾薬の消費を抑える戦闘を行う必要を強いられた。ローテーションを組んでの攻撃で敵軍を抑えてはいるものの、敵に徐々に押されている。このままでは包囲陣を破られるだろう。

「弾薬も少ない。破られる……………」

トリガーを引き続けながら、それでも抑えきれない自分に舌打ちして、リトは同調を繋いだ。

『『ミラン』よりヴァナディースHQ。当戦隊の弾薬は残り僅か、敵集団の反撃を遅らせるので精一杯。指示を！』

一拍置いてレーナが答える。

『ヴァナディースHQより』『ミラン』『リュカオン』『サンダーボルト』  
戦隊と合流してください。北のポイントAで合流後、北東に移動して  
ください』

レーナの指示を聞いたリトは息を呑む。そこに別の同調が割って  
入った。

『ちよつと待ってくれ女王陛下、それじゃあ包囲陣に穴が出来ちまう、  
敵を逃がすことになるぞ?』

声の主はシデンだ。シデンの言ったことは、リト達も懸念したこと  
だった。リトの『クレイモア』含む3戦隊が北東に移動すれば。西方  
方面がガラ空きになる。それは、包囲陣を解除することになる。

だが、レーナが発した言葉で、各人は従うしかないと判断した。

『弾薬が残り少ないのは『クレイモア』だけではありません、『サンダー  
ボルト』『リュカオン』も同様です。このまま包囲陣を継続すれば弾薬  
切れの戦隊が出ます、そうなれば被害は小さくありません』

『だがッ!』

それでも反対するシデン、しかしレーナは努めて冷静を心がけて続  
けた。

『このまま続けて包囲陣が破られる可能性があるなら、まだ余力があ  
る内に行動すべきと判断しました。『ブリジンガメン』戦隊はアノス  
陛下達と共に南東から西方に移動してください』

そい言われてシデンは理解した、レーナは作戦の完遂ももちろんだ  
が、何より『誰も死なせない』ことを今回の戦いで優先しているのだ  
と。

『了解だ、女王陛下ッ』

シデンからの同調が切れる。リトも『クレイモア』了解』と答えて  
合流地点に移動開始した。

一方、オルディエンス・イータと戦闘を継続中のシンエイも同調に  
て次にすべき行動を決断した。

『アンダーテイカー』を左右に跳躍させて距離を取ると、回り込むよう  
に後退を開始する。シンエイと『スピアヘッド』『ノルトリヒト』戦隊  
が目指すのは、西方。

レーナの搭乗するヴァナディースのいる地点だ。

『ブリジנגアメン』戦隊がアノス達を伴ってレーナとの合流に向かっている。シンエイ達もそちらとの合流するべく動き出した。

追いついてきたライデン達と合流したシンエイは後方に迫っているであろうオルディエンス・イータに注意を向ける。

だが、シンエイの考えとは反対にオルディエンス・イータの追撃は無かった。しかも、他の機工隊による追撃でもある。

「追撃が無い、なにかあるのか…？」

自機のコックピット内で独り言を漏らしたシンエイに同調が繋がる、相手はライデンだ。

『シンが撤退を開始した時点で俺達に対しての攻撃も弱くなった。追撃する余力が無いのか、他に考えがあるのかは分かんねえけどな』

「だが、こちらとしては好都合だ。このまま合流地点に向かう」

『了解だ』

並走する『アンダーテイカー』と『ヴェアヴォルフ』を先頭に西方のレーナ達との合流を急いだ。

「かなり押されているね」

シン達『ブリジングアメン』戦隊とともに南東を移動中のレイが隣を行くアノスに声を掛ける。

「物量差によるものだな。戦闘を開始したところよりも敵の数が増えてる、その謎が解けねば消耗戦になるだろうな」

アノスの表情は相変わらず余裕を湛えている。アノスの背後を行くシンは周囲を警戒しながら口を開いた。

「ミリーゼ大佐がこの先の戦況を予測していないとは思えません。合流を急ぎませんと」

シンの言葉にアノス達は頷き、レーナ達との合流を急いだ。

## ギアード連邦防衛戦⑥

無数の世界が揺蕩う可能性の奔流。

その中で今まさに世界同士の戦闘が続いている。押し寄せる真・魔王軍を迎撃するアノス達。

そんな様子を世界の外から眺めている存在がいた。

1人は通常の間人サイズだが、もう1人は巨人だった。それも、とてつもなく巨大な。

『さあて、と。どうしたものかな、行ってみるか?』

巨人が首を左右に鳴らしながら訊ねると、もう一人が巨人の肩に降り立った。

『災いの芽は、摘む。議会で決定した』

流暢とは程遠い言葉遣いで答える。仲間の返答を聞いた巨人は歯を剥き出しにして呻きを上げる。

『俺がプチプチ潰して回るからよお、お前はたらふく食べばいい!』

『無論、そうする。武器も集めなくては』

巨人の体が、世界の壁を越えた。

空が揺れた。一瞬の出来事であったが、空が陽炎のように歪み、その直後には轟音が地上へと響いた。

轟音は音だけではなく衝撃となって地上に襲いかかる。敵味方関係なく、その衝撃を受けることとなった。

『今度は何です、敵の攻撃ですか!?!』

ヴァナディースの車内にも衝撃は例外なく襲い掛かった。レーナはアイシヤを庇いながらマルセルに訊ねると、マルセルからは「詳細不明」の返事が返ってきた。続けて

「敵軍の動きにそのような素振りはありませんでした。敵幹部の攻撃とも思えません」

マルセルからの回答を聞いたレーナも敵の攻撃ではないことは薄々感じていた。現在起こっている現象は先のオルディエンス・イー

タのアドラ・フィールドとは若干異なっているからだ。

そして、しばらくすると衝撃は収まった。周囲を見渡しながらレーナは立ち上がる。

「アイシャさん、ケガはありませんか？」

傍らのアイシャに声を掛けると「大丈夫です」という返事が笑顔とともに帰ってきた。

アイシャをゲストシートに座らせると、スクリーンを確認し、絶句した。

解除した包囲陣の中央、敵軍のど真ん中にそれはいた。

エルネスティのイカルガよりも、ジャイアントガモツサよりも巨大な。

「さらに巨大な、巨人……？」

スクリーンには降り立ったであろう巨人が映し出されている。その足元には踏みつぶされ、絶命した真・魔王軍の兵士達。

「魔王軍の増援、でしょうか……？」

その様子を見たマルセルが独り言のように漏らす。レーナもフレデリカも、言葉を発することは出来なかった。

それほどまでに、その存在は圧倒的だった。

突如戦場に降り立った巨人が着地姿勢から起き上がると、その大きさはレーナ達にさらなる絶望を与えた。

エルネスティのイカルガより大きいジャイアントガモツサをも超える巨体。20mはあるであろうその巨体は、自信の足元を見渡す。

巨人の足元には着地の際に踏み潰された真・魔王軍の兵士の亡骸や機甲兵器の残骸が転がっている。

それらを足で払い、周囲の真・魔王軍を一瞥すると、少し離れた位置にいたジャイアントガモツサに視線を向ける。

ジャイアントガモツサは巨人の出現直後、エルネスティ達との戦闘を中断して巨人の動向を見ていた。

そして、巨人の視線が自身に向いたことの「意味」を理解したジャイアントガモツサはエルネスティ達に背を向けて巨人へと駆けだした。

実際のところは、巨人が疾走しているのでかなりの地響きが起こっているのだが。

『何者だ！』

巨人を拳の射程に収めると、ジャイアントガモツサは勢いよく拳を振りかぶると、巨人目掛けて拳を繰り出した。

轟音を伴って拳が空を切り、巨人に迫る。巨人の腹部に強烈なストリートが叩き込まれた。

しかし一発ではない、右拳、左拳と交互に拳が叩き込まれ、その都度、脳を揺さぶるような衝撃が周囲に轟く。

剛腕から放たれる拳の連打を受けても巨人はビクともしない。むしろ鬱陶しそうにジャイアントガモツサを見下ろしている。足に這う虫を見るような目で。

巨人の腕が動いた。右手でジャイアントガモツサの頭を掴み、持ち上げる。

『ぬうおお、バカな!』

驚愕の声を上げながらジャイアントガモツサはジタバタともがくが、巨人の右手を振り払うことは出来ない。

ゆっくりと持ち上げられ、地面から離れていくジャイアントガモツサ。様子はさながら今この場において、この巨人こそが絶対的な強者だと誇示するかのようである。

巨人の右腕が止まる。最早どう足掻いてもジャイアントガモツサは脱出出来そうもないと、この場のほぼ全ての者が感じていた。

その、次の瞬間だった。

巨人の右腕が勢いよく振り下ろされたのだ。無論ジャイアントガモツサを掴んだままで、だ。

着地の時と同程度の轟音が周囲を揺らす、舞い上がった土煙が、巨人を丸ごと覆い隠した。

ジャイアントガモツサを叩きつけた姿勢から立ち上がると、再び叩きつける。

それが何度繰り返されただろう。周囲は土煙によって何も見えなくなっていた。

土煙の中にシルエットが浮かび上がると、しばらくして土煙も収まって来る。

そこには、ピクリともしないジャイアントガモツサを片手で掴んで持ち上げている巨人がいた。

ジャイアントガモツサは腕を力なく垂らし、微動だにしない。何度も地面に叩きつけられたために全身傷だらけの状態だった。

巨人は興味が失せたのか、掴んでいた右手を開く。重力に従いジャイアントガモツサの巨体が落下する。

地響きと轟音、それと土煙を上げて横たわるジャイアントガモツサを踏みつけて巨人は周囲を見渡す。

「各員、新手の巨人の行動を警戒してください！」

レーナが同調で呼びかけると、各員の間にさらなる緊張が走る。

目の前の巨人はエルネスティ達が抑えるので精一杯だったジャイアントガモツサをいとも簡単に撃破した、眼前で起こった出来事からレーナが導き出した結論は。

「まともに戦っては勝てない」だった。

(アノス陛下でも苦戦するでしょうか…)

スクリーンに映る巨人は今のところ真・魔王軍を攻撃している。おそらく「近くにいたから」だとレーナは考えている。そこでレーナは各員に後退を指揮した。

北に移動していたレーナは東に下りつつ後退した他の戦隊との合流を急いだ。

東に向かいつつレーナは巨人の動向を観察していた。

巨人は真・魔王軍の機甲兵器や兵士を踏み潰しながら歩いている。それはまさに「蹂躪」とも「虐殺」とも取れた。

指揮官の1人であるジャイアントガモツサを失った敵軍の統率は完全に崩れた。

シンエイの追撃を中断して巨人に攻撃を仕掛けたオルディエンス・イータも、あつけなく返り討ちにされた。

上半身と脚部ユニットをそれぞれ掴まれ、真つ二つに引きちぎられたのだ。

引きちぎられたオルデイエンス・イータはごみをポイ捨てするように放り捨てられた。

さらに指揮官を失ったことで、敵兵士達はさらに統率を失い撤退を開始した。

統一性も無くバラバラに逃げる様はまさに「敗走」だった。

「…虐殺だね」

レイが巨人による惨劇を横目に見ながら呟く。

現在アノス達は『ブリジンガメン』戦隊に同行してレーナとの合流地点に向かっている。

「敵ながら哀れに思えてくるな」

レイと並ぶアノスも目の前で起こっている光景に嘆息する。

巨人の出現によって真・魔王軍は総崩れとなった。だが、こうも圧倒的な蹂躪となつては不憫に感じずにはいられなかった。

「あの巨人と“もう1人”、一体何者でしようか」

アノスの背後を行くシンが巨人の肩を一瞥して言う。シンという言葉にアノスは「巨人の仲間で間違いないだろうな」と返す。

そう、アノス達は巨人と“もう1人”の存在を認識していた。

今のところ、巨人の肩から動く様子がない為、特に警戒していなかったが。

「とにかく今はミリーゼ大佐との合流を急いだ方が良さそうだね」

レイの言葉に一同は頷き、シデン達と共に合流地点に急いだ。

「そういえば。あの骸骨はあれから見ないわね」

サーシャが周囲を見渡しながら言う。確かに、と一同は思った。

アノスに惨敗し、シンに撃退されたガイコツは今のところ襲撃してこない。巨人の出現による混乱に紛れて撤退したのではと考えたアノスは、すぐにその考えを訂正する。

「どうやら急いだほうが良さそうだな」

アノスは視線を目的地——レーナの搭乗するヴァナディースがいる方角に向けた。



「マルセル少尉、出してください！」

レーナの号令が飛ぶ。マルセルがハンドルを握り、ヴァナディースが戦場を爆走する。

突然の出来事だった。突如、ヴァナディースの搭乗ハッチが空いたと思った次の瞬間だった。ハッチの外の時空が急速に歪み、白骨の死神を思わせる髑髏が顔を覗かせた。

真・魔王軍幹部のガイコツだ。

「ヒッ、あれです！ 私を攫ったの！」

アイシャが身を縮こませながら指さす。レーナは目の前の骸骨が敵だと認識した。

「エエサアは、おとなあしいく、してえいろお！」

ガイコツが白骨の腕をアイシャに伸ばす。

レーナの切り替えは早かった。

「マルセル少尉、出してください！」

マルセルはレーナの指示を瞬時に理解し、行動に移す。ヴァナディースのエンジンが爆音を上げると、勢いよく加速する。

「にいがすかあ！」

ガイコツも逃がすまいと更に腕を伸ばすが、白骨の指先はヴァナディースの搭乗ハッチを僅かに翳めるだけだった。

## ギアード連邦防衛戦⑦

ヴァナディースとガイコツの鬼ごっこは続いている。

レーナは同調にて各員に状況を伝えるが、どの戦隊も合流までに時間がかかる。

直営の『ブリジンガメン』戦隊をアノス達の案内役に出してしまったことが仇となった。

ヴァナディースの進路上の空間が歪み、白骨の腕が伸びる。

「避けて！」

レーナの指示が飛び、マルセルが進路を変更する。だが、再び進路上にガイコツが出現する。

さらに進路を変更して南下する、先程からその繰り返しだ。

「機関銃の準備を、次に敵が出現したタイミングで斉射してください」「了解！」

ヴァナディースには自己防衛用に必要最低限の火器が搭載されている。その1つ、12.7mm機関銃を発射体制でヴァナディースを走らせる。

そして、その時は来る。

ヴァナディースの進路上の空間が歪む。裂けるように開かれた次元の裂け目からガイコツが髑髏顔を覗かせる。

しかし、今回は進路を変えない。さらに加速して前進する。

ガイコツは何かを察して慌てたような素振りを見せる。だが、もう遅い。

「今です！」

レーナの号令で機関銃が前方に斉射される。射線上にいるのは勿論ガイコツ。

無数に放たれた銃弾がガイコツを襲めていく。白骨の腕を眼前で組み、防御態勢を取るが遅かった。

進路がそのまま射線になるとはいえ、揺れながらの射撃では大半が命中しない。だが、ガイコツをその場に留めることには成功した。

「そのまま！」

レーナはスクリーンに映るガイコツを睨む。ヴァナディースは減速するどころかささらに加速する。

そして。

30トン級の装甲車両が白骨の敵を跳ね飛ばした。

土煙でガイコツの様子はよく見えないが、レーナは撃退出来たと判断して合流を急いだ。

レーナはスクリーンに映し出された分布図を確認する。『スピアヘッド』戦隊を中心に独立機動打撃群も追いつきつつある。

「アノス陛下達との合流を急ぎます。進路そのままです。急いでください——」

「——いまあのはあ、おどろおいたぞお！」

レーナが振り返る。フレデリカが振り返る。アイシャが振り返る。その視線の先には。

「だがあ、とおらえたあぞお！」

体中を損傷しながらもヴァナディースの搭乗ハッチに取り付いたガイコツはヴァナディースを放すまいと手刀を装甲に突き刺す。

白骨の髑髏が口を開く、髑髏の顎がカタカタと音を立てて笑い声を奏でる。

レーナは護身用に携帯していた拳銃を抜き、ガイコツに向けて発砲する。

乾いた音がヴァナディースの車内に響く。放たれた銃弾はガイコツの頭部に直撃するも、僅かに傷を付けるだけであった。

「いいきなりい、なあにをおするううう！」

ガイコツは声を荒げると、空いている方の左腕を次元の裂け目に収納する。その行動に異変を感じたレーナはマルセルに蛇行運転を命じた。

ヴァナディースが左右に車体を揺らしながら走行する。ガイコツは舌打ちしつつも次の行動に出た。

「いちいどお、とまあれええ！」

収納された左腕をヴァナディースのタイヤへと伸ばした。狙いは

タイヤのパンクによってヴァナディースを走行不能にすることだ。

しかし蛇行運転によって車体が左右に揺れながらの走行の為、狙いが定まらず、タイヤ付近の装甲に手刀が当たり、なかなかパンクさせられずにいた。

「めえんどうなあー！」

なかなかパンクさせられずにいたガイコツは痺れを切らしてヴァナディースの搭乗ハッチを手刀で切断する。

白骨の手刀が火花を散らして装甲の一部を斬り剥がした。

ガイコツの手刀は僅かに振動しており、接触した装甲から火花が散る。

舞う火花からアイシャを守るように立ち塞がったレーナは拳銃の引き金を連続して引いた。乾いた音に続いて弾丸が軌道を描き、ガイコツに迫る。

だが、先程同様に僅かな傷を付けるだけに終わった。

怯ませることすら出来なかった事実に関心舌打ちしつつレーナはアイシャを車両前方、ガイコツのいる位置の反対側に避難させる。

「マルセル少尉、振り落とせますか？」

ハンドルを握るマルセルを振り返る。訊ねられたマルセルは苦い表情を浮かべる。先程から試みてはいるが、一向に振り落とせそうにないからだ。

だが、上官であるレーナに訊ねられた以上は答えなければならぬ。

「先程までより少々荒っぽくなりますが、よろしいですね？」

額に脂汗を浮かべながら言葉を紡ぐ。レーナからの返答は――

「構いません、やってください」

――即答だった。

マルセルが僅かにハンドルを右に振った、次の瞬間だった。ハンドルを勢いよく反対に振ったのだ。

緩やかな右カーブからの左急カーブ。無論、ヴァナディースは大きく揺さぶられることになり、車体はバランスを崩した。

「このおおおおー！」

ガイコツも例外ではなく、バランスを崩して引き剥がされた。次元の裂け目に逃げようとするも、大きく体勢を崩したことで上手くいかず、地面に激突後に転がることとなった。

ガイコツを引き剥がすことに成功したレーナ達だが、代償としてヴァナディースの態勢を崩すことになった。

マルセルが持ち直そうと試みるが、既に車体は倒れかかっており手遅れの状態だった。

「横転します。何かに掴まってください！」

持ち直すことは不可能だと直感したマルセルが一同に告げる。

フレデリカは近くのシートにしがみつき、レーナはアイシャを庇うように抱きながら搭乗用補助グリップを掴んでいる。

そして、大きく傾いたかと思つた次の瞬間、ヴァナディースの車体が完全に横転して地面を滑る。

土煙を上げながら停車したヴァナディースの車内から出たレーナ達は周囲を見渡す。

ガイコツの追撃を警戒しているのだ。

「周囲を警戒してください。敵の出現には前兆があります、見逃さないでください！」

アイシャを背後に隠してレーナは拳銃を抜く。マルセルも同様だ。

今この場において戦闘可能な人物はレーナとマルセルだけだ。フレデリカとアイシャは数には入らない。

周囲は土煙が舞い、視界も悪い。だが、空間が歪んで出現する敵ならば都合だとレーナは考えている。

横転したヴァナディースに身を隠しながら周囲を警戒する。土煙が上がっている今の状況で襲撃して来れば空間の歪みが顕著に現れる。

出現位置が分かれば対処も可能、そうレーナは判断した。

だがそれは、浅慮であったと後悔した。

背後のヴァナディースが突如バラバラに細断されたのだ。

残骸となり崩れ落ちるヴァナディースの向こうに、“奴”はいた。

「みいつけたあああ！」

はなから見つけていたが、ガイコツは性格悪くレーナ達に笑いかける。

ケタケタと声を上げるガイコツの白骨の髑髏顔はさながら死神を思わせる。レーナ達が知る「死神」とは似ても似つかない目の前の化け物に一同は戦慄する。

レーナはヴァナディースから退避する際に持ち出したアサルトライフルをガイコツへと連射した。

拳銃の比ではない連射速度で打ち出される銃弾はガイコツの白骨の体に弾かれる。

銃弾を受けて僅かに欠けた部分もあったが、決して効いているとは言えないだろう。

それでも、レーナは撃ち続けた。隣のマルセルもアサルトライフルを連射している。

だが、それでも、異世界から来た化け物に有効打を与えることは出来ない。

そして、弾が尽きる。拳銃も撃つが結果は変わらない。隣のマルセルを見る、彼もレーナ同様弾が尽きたようだ。

「…………アイシャさん。時間を稼ぐので逃げてください」

レーナは眼前の骸骨を睨んだまま背後のアイシャに言う。アイシャは戸惑い、躊躇する。

「でも、それでは皆さんは…？」

アイシャがレーナとマルセル、フレデリカを交互に見る。マルセルもフレデリカも覚悟を決めた表情をしている。

「アノス陛下達もこちらに向かっています。そちらと合流してください」

レーナが振り返る、アイシャは頷けずにいる。すると――

「走れ！」

――レーナの檄を受けてアイシャは走り出す。レーナ達に背を向けて、振り返らずに。

そこでアイシヤは気付いた、先程まで土煙でよく見えなかった空が。

「空が、割れてる…?」

レーナはアイシヤが走り出したことを確認すると、ガイコツに向き直る。

「どうやら待っていたらしいガイコツはケタケタと歯を鳴らしてレーナ達を見渡す。

「ええさは逃げえたがあ、おおまえ達いがえさあになるうかあらあ、そおれでえ満足うしよおう」

この状況を楽しんでいることが分かるほど、ガイコツの言い方は軽いものだった。

「ミリーゼ。わらわの身は自分で守る、わらわに構うなよ」

フレデリカも覚悟を決めた表情をしている。マルセルもだ。

「なるべく時間を稼ぎましょう」

レーナも覚悟を決めて迫るガイコツを睨む。

姿を隠しての奇襲ではなく、真つ向から襲撃するようだ。あまりにもな舐めプだが、レーナ達には好都合だ。

「まあずは、お前ええからだあ、女あああ！」

ガイコツが右手を手刀にして襲い掛からんと構える。そして、ピクリと動きを止めた。

「そおらがあ、わあれてえ——」

空を見上げた直後だった。ガイコツの周囲に光が降り注いだ。

いや、光と呼称するには語弊があるだろう。さながらビームのような光の柱が何本もガイコツを囲むように降り注ぐ。

光が降り注ぐことで生じた衝撃波によってガイコツは身動きが取れない。

降り注ぐ光が徐々に速度を増す。それはもはや人間の眼で追うことは出来ない領域に入っている。

やがて光は柱を形成する。その内部にあったのは、退避も出来ず、攻撃も出来ず、ただ衝撃波に晒される髑髏顔の敵の姿だった。

一際大きな光が地上に激突した。雷鳴が轟き、光が炸裂したように周囲を包む。

それはまるで『閃光』が走ったようだった。

光が収束するように収まっていく。先程、閃光が降り注いだ地点にいたガイコツの頭部は粉々に粉碎され、その体は力なく横たわっている。

そしてもう一人。頭部を失った敵のを見下ろすその者は――

「リヒトー上級大将、助かりました」

レーナが頭を下げる。閃光となってガイコツを撃破したのはリヒトーだった。

リヒトーの最強技である『閃撃』の直撃によって頭部を破壊されたガイコツは先程からピクリとも動かない。

「間に合ってよかった」

リヒトーが振り返って笑みを零す。リヒトーがこの場にいることに疑問を抱いたレーナは率直に質問した。

「他の戦線は大丈夫なのですか？」

「ジェイル達に任せてきたんだ、もうすぐ来ると思うよ。それに――」

レーナの問いに笑みを崩さず答えるが、一度言葉を切って考える。

「…なにか、問題が起こったのですか？」

「敵の動きが止まって、一斉に撤退を始めたんだ。その前に強い衝撃がこつちにも届いていたから、それが原因だと思ったんだけど」

「その認識で間違いありません。……アレを」

レーナが巨人を指さすとリヒトーもそれに倣って同じ方向に視線を向ける。

「向こうからも薄っすら見えていたけど、大きいね」

「敵幹部と思われる者が2人倒されました。今のところ敵軍を標的にしています、こちらに仕掛けてくるのも時間の問題でしょう」

「あれほど大きい敵は斬ったことが無いな」

そう言うトリヒトーは自身の得物である太刀を抜刀姿勢で構える。

「ミリーゼ大佐はアノス陛下達との合流を」



「わかりました」

頷いたレーナから視線を巨人に移したりヒトーは一度深呼吸をした後、太刀を抜き放って跳躍した。

## ギアード連邦防衛戦⑧

『揺れが、激しい。どうにかならないのか?』

巨人の肩に掴まっている人物が苦言を漏らす。巨人が大仰に動いている為、肩にて戦況を見下ろしているこの人物にも相当の振動が伝わっているのだ。

『降りればいいだろうが』

『……………そうする、ことにする。珍しい武器を探しに行く』

『この“虫”もじきに殲滅出来る。その後は…』

『“適応者”達が、標的だ』

そう言っつて肩から降り立ったこの人物、名を“グイア”という。

グイアは戦場を見渡しながら歩き、あるモノを探す。この行動はグイアの趣味によるものであり、多くの可能性世界を見てきた中で追及してきたことだ。

『あれは、大きすぎる』

視線の先に横たわるジャイアントガモツサを一瞥して、すぐに視線を別の方向に向けた。歩みを止めて視線を足元に向けると真・魔王軍兵士の亡骸があった。

『どれ…』

膝を追って屈んで手に取ったそれは、真・魔王軍兵士が使用していた“槍”だった。

持ち上げたそれを眼前で円を描くように回した後、穂先をじっくりと観察する。数秒眺めた後、槍の両端を持ってへし折った。

『この程度では、ダメだ。脆い』

興味が失せたグイアは2本になった槍を放り捨てて再び歩き出した。

その時だった、頭上を“ナニか”が通過する気配を感じて頭上を見上げる。だが、すでにそこには何も無い。

『……………、問題、ないか』

視線を戻して、再び歩き出す。

辺り一面を埋め尽くす死体を避けることなく踏みつけて歩き続け

る。

『…腹が減った。食事を、摂らなければ』

腹を摩りながら周囲を見渡すが、戦場のど真ん中に食料があるわけではない。

普通なら諦めるだろう。そう、グイアが「普通なら」ば。

たまたま踏みつけていた死体を持ち上げると、死体の腕に噛みつく。歯が肉に食い込み、血を滲ませながら食いちぎった。

口をモゴモゴさせながら咀嚼し、飲み込む。そして再び肉を食らう。

あらかた食べ終わったところで死体を放り捨て、満腹で僅かに膨らんだお腹をポンポンと叩きながら再び歩き出した。

戦場を進みながら、瀕死の真・魔王軍兵士にトドメを刺していく。

『……………ん？』

視線の先、遙か先から何かが飛来する。それは1本の鉄柱であった。鉄柱は一直線にグイアの顔面に迫り。

バシユツ、という音と共にグイアの首が吹き飛ばした。

残った胴体の首上から鮮血が飛び散り、首から上半身に滴る。だが、倒れない。

普通なら頭を失った生物の体は地面に伏すはずだ、だがグイアの体は直立のまま倒れない。

「気味が悪いぜ。まだ立ってやがる」

グイアの元に3つの影が差す。ジェイル、道安、園原の3人だ。

道安はグイアの周囲を周りながら観察する。ジェイルは右手に新たな鉄柱を出現させ、園原はサブマシンガンの銃口を向けている。

「胴体も潰しておくか？」

ジェイルが眼光鋭くグイアを見る。道安は頷くと両掌に『重撃』を発動させる。

「さあ、潰れ——」

『——油断した。このような状況は、想定外』

声が響く。

3人の動きが止まり、僅かに距離を取る。3人の目の前でグイアの首から頭が生えてきた。

萎んだ風船のように生えてきた首は、プシュツという音と共に元の状態に戻る。

その様子を目の当たりにした3人の内、最初に仕掛けたのは園原だった。サブマシンガンの照準をグイアに向け、引き金を引く。

次々に撃ち出される銃弾は吸い込まれるようにグイアの体に命中する。

園原は『追撃』を『使っていない』

にも関わらず全ての銃弾が命中していく。グイアは防御も回避もすることなく、先程から直立で動いていないのだ。

『受け続けるのも、飽きた。限度がある』

銃弾を受けたことにより空いた無数の穴を見たグイアは一度息を吐き、視線を園原に向ける。

園原は危険を察知して飛翔し、距離を取る。

『逃げて、意味がない。追いかける』

そう言っただけで歩みを止めたグイアの動きがピタリと止まる。首が回り、背後を見ると。

「行かせるかよ、相手してやるぜ」

重撃によって発生した重力でグイアを押さえつける道安がいた。

グイアの歩みを止めることには成功したが、道安の全力をもってして押さえつけるのが精一杯の状況だった。

横からジェイルが跳躍し、鉄獅子を顕現させると殴りかかった。

悪鬼を具現化したような、人間より遥かに巨大な鋼鉄の化身が拳を叩き込んだ。

鋼鉄の拳が直撃し、グイアの体が地面にめり込む。

ジェイルが追い打ちをかけて拳を連続で叩き込む。拳を受ける度にグイアの体が地面に埋まっていく。

そして完全に地面に埋まったグイアを見下ろすジェイルと道安。

「これで倒せたとは思えんな」

鉄獅子を顕現させたままジェイルが漏らす。隣に立つ道安も同様

に『重撃』を解かない。上空では園原が滞空して警戒している。『いきなり仕掛けてきて、酷いものだ。可能性世界の管理を徹底しなければ』

声が聞こえた次の瞬間、グイアが沈んだ穴の中心が盛り上がった。直後、地中から“ナニか”が飛び出した。

人間一人分はあるだろうそれは、槍だった。全体的に藍色のような暗い青色をしており、持ち手付近には薄紫色のような球体が内蔵されている。

飛び出した槍は一直線に園原に迫る。

「園原！」

道安が『重撃』を発動するが、槍は重力の影響を受けない。

園原が身を翻して槍を躲す。槍は園原の脇を翳めると、しばらく直進して旋回し、再び園原に襲い掛かった。

飛翔し距離を取った園原はサブマシンガンの照準を定めて引き金を引く。

撃ち出された銃弾は正面から槍と激突するが、槍の速度を落とすことも軌道を変えることも出来なかった。

急降下して躲し、さらに発砲。旋回してきた槍とは違う方向に銃弾が放たれる。

だが、銃弾は突如軌道を変えて槍に迫る。まるで銃弾が“生きている様に”。

追いついた銃弾は側面から槍に打ち込まれる。これが園原の『追撃』の能力。

側面からの衝撃に槍の軌道が変わった。

先程まで銃弾のように真っ直ぐ飛行していたのは何処へやら、ふらふらと揺れながら園原を追撃している。

だが、先程までの勢いが削がれたことによつて反撃のチャンスが生まれた。

地上のジェイルが放った無数の鉄柱の内の数本が槍に直撃した。完全に勢いを殺された槍は落下、そのまま地面に突き刺さった。

『驚愕、だな。簡単にはいかないようだ』

地中からグイアが飛び出す。音もなく着地したグイアは衣服に付着した土を払うと、ジェイル達を見渡すと、右手を天に翳す。

直後、地面に突き刺さった槍が溶けるように消えたかと思えば、天に翳された右手に握られた。

『これは、ある世界の戦士から貰った。大人しく渡さなかったが、最後には分かってくれた』

槍を眺めながらそう呟くグイアを囲むようにジェイル達は展開し、徐々に距離を詰めていく。

「その世界はどうした？」

ジェイルが訊ねると、グイアは槍から視線を変えて答える。

『武器が手に入った以上、長居は無用。すぐに奔流へと出た』

先程から変わらない無表情で答えるグイアにジェイルは警戒を解くことなく質問を続ける。

「お前の目的はそれぞれの世界の武器を集めることなのか？」

『それが自分の存在する意義だ』

「…どうということだ？」

『可能性世界を滅ぼしても、記録が残る。その記録となるのが――』

「――武器だと、言うのか…？」

グイアは槍を頭上で振り回した後、足元に突き刺すと、両手を天に広げて口を開いた。

『置き場所も問わず、管理も楽。自分達にとって都合がいい』

そう言って右手を園原に向ける。物を欲するように、手で招くように。

『女、それを渡せ。興味深い武器だ』

グイアが言っている武器は園原のサブマシンガンだった。園原は発砲をもって回答とした。

頭上から放たれた銃弾がグイアに降り注ぐが、グイアは後方に飛び退いて躲す。躲され、地面に打ち込まれた銃弾が数秒後、地面から突如飛び出した。

園原の『追撃』によって地中にて軌道変更した銃弾が、グイアに追いつくべく迫る。

槍を一閃、眼前まで迫った銃弾を弾きながら後退するグイアにジェイルの鉄獅子が襲い掛かる。

鋼鉄の拳が真っ直ぐグイアを捉えるが、グイアと拳の間に巨大な盾が出現する。

人一人隠す程ではないが、通常『盾』と呼ばれるものとは一線を隔すほどの巨大な盾だった。

盾は拳からグイアを守るように浮遊し、鉄獅子の鋼鉄の拳の連打を防ぐ。

後退しようとはせずさったグイアの動きが止まる。道安が『重撃』をかけたのだ。

動きが鈍くなったグイアの体に無数の銃弾が命中する。

先程と同じように銃撃を絶やさない園原。直後、その視線の先でありえないことが起こった。

命中し、体内に飲み込まれた銃弾が、グイアの足元に落ちたのだ。絶え間なく落ち続ける銃弾。足のふくらはぎに小さな穴が開き、そこから吐き出される様子はまるで“排出”するかのようだった。

『興味深い武器だが、原理は理解できた。別のモノにしよう』

園原のサブマシンガンから興味を鉄獅子に移したグイアは盾を消滅させる。無防備となったグイアに鉄獅子の拳が迫るが、グイアは左腕に籠手を出現させる。

指先から肘まである深紅の籠手。曲線だけでなく先端は所々鋭利になっており、手の甲にはエメラルドグリーンに輝く半水晶が埋め込まれている。

『受け止める』

自身に掛かる重力に抗い、握られた左拳を振りかぶると繰り出された鉄獅子の拳を受け止めた。

生じた衝撃波が周囲を包む。その中心点では拳の押し合いが続いている。だが、先にグイアの籠手に限界が来る。徐々に亀裂が生じてきたのだ。

『やはりこの武器は、使用者を選ぶのか』

亀裂が広がり、籠手の限界が刻一刻と迫る。

グイアは槍を横薙ぎに振るい、鉄獅子の拳を振り払うと距離を取るべく跳躍した。

放物線を描くように飛び退いた直後であった、突如グイアの頭上から眩い光が降り注いだ。

光の正体は雷だった。

無数の雷撃が収束して降り注ぐ。グイアは完全に奇襲を受ける形となり、落雷の直撃を受けた。

『また、世界を乱す者が……！』

受け身を取れず地面に激突するグイア。立ち上がり顔を上げた先、視線の先に――

「すまないが、その武器は私の大切な者の武器だ」

上空から真っ直ぐに舞い降りる。

「何故お前が持っているのかは、この際どうでもいい」

漆黒の外套を纏い、フードから除く顔はアンデット特有の髑髏顔だ。

「おとなしく、…返してもらおうか！」

怒りに染まった声音でアインズがグイアを睨みつけていた。



## ギアーデ連邦防衛戦⑨

時は少し遡る。

巨人が降り立ち、真・魔王軍に対して攻撃を開始した直後。遅れる形で2隻の飛空城艦も進入していた。

進入ポイントはギアーデ連邦の東部戦線。レーナ達がいる西部戦線とは対極に位置している。

2隻の飛空城艦は上空から戦況を見ていたが、ギアーデ連邦軍からコンタクトを受けた。

来訪した飛空城艦がシンエイ達が搭乗していたものと同形状のものであったことから、新たに来たルーデウス達が味方だとエルンストは判断した。

だが、敵である可能性を捨てきれない参謀達が使者を送りコンタクトを凶ったのだ。結果として、ルーデウス達が味方である証明が出来た。

西部戦線に新たな敵が襲撃してきたという報告を受けていた司令部はルーデウス達に西部戦線へ来援を要請した。

ルーデウス達はそれを受諾し、アインズとアルベド、ターニャ達を移乗させて西に舵をきった。

戦況は、遠くからでも確認できた。

巨人による虐殺を目の当たりにしたルーデウスは飛空城艦を加速させる。

「アノスさん達は無事でしょうか…」

そう零したルーデウスの横で戦況を見ていたオルステッドが口を開いた。

「どうやら、真・魔王軍ではなさそうだな」

「真・魔王軍の幹部と交戦しているようですね」

シャンドルの視線の先ではジャイアントガモツサが巨人によって蹂躪されている。

それを迂回するように移動している独立打撃群を視界にとらえたルーデウスは背後のターニャを振り返る。

「デグレチャフ少佐。あの白い機動兵器が見えますか？」

訊ねられたターニヤは艦橋から戦場を見渡し、レギンレイヴ群を視認する。

「確認した。あれは味方か、敵か？」

「味方です。あれらの移動の支援をお願いしますか？」

そう懇願されたターニヤは「了解した」と頷き、艦橋を後にする。

「ルーデウス。このまま巨人に接近できるか？」

巨人から視線を外すことなくオルステッドが訊ねる。ルーデウスは「可能な限り接近します」と返答し、飛空城艦を前進させた。

「戦友諸君、戦争の時間だ。ここが我らの世界とは異なる世界であっても、軍人たる我らが成すことは一つ！」

閉じた底部ハッチを背にしたターニヤが副官たちに向けて声を上げる。ターニヤの目の前には彼女の部下達が姿勢を正して耳を傾ける。

ターニヤから見て左から副官であるセレブリャコーフ少尉、副長兼第二中隊長ヴァイス中尉、第三中隊長ケーニツヒ中尉、第四中隊長ノイマン中尉と続き、第二中隊所属のグランツ少尉の計5名が完全装備でターニヤの次の言葉を待つ。

「帝国に仇なす敵を粉砕することが我らの使命。上位存在と真・魔王軍、これらを野放しにしておけば我が帝国にとつても脅威となるだろう」

ターニヤの背後の底部ハッチが開き、勢いよく風が吹き込む。各人の髪を跳ね上げさせながら吹き荒れる突風を背に受けても尚、ターニヤは普段の表情のまま悠然としている。

「我等は異世界の戦士達とともに、これらの敵を粉砕し、殲滅する。これより先は、我らの戦いだ！」

言い終えたターニヤは底部ハッチに向くと、発艦態勢をとる。

「各員、続け！」

「了解！了解！」

ターニヤを先頭にして飛び立った203航空魔導大隊の面々は、魚鱗の隊列で戦場に急行した。

「武運を、ターニャ」

飛び去るターニャ達を視界に収めてアインズは漏らす。後ろに控えるアルベドも、ターニャ達を見送る。

「アインズ」

オルステッドが歩み寄って来る。アインズは視線をオルステッドに向けると、髑髏の奥の瞳を煌めかせる。

「なんだ？」

「あの巨人に有効と思える魔法はあるか？」

オルステッドの問いにしばし思考を巡らせるアインズ。結論を言う、有効打になりうる魔法はある。

だが、アインズはオルステッド達を完全に信用していなかった。故に、一歩引いた対応をしていたのだ。

「…どうだろうか。私もあのような敵は初めてなのでな」

故に、ぼかした回答をした。

返答を受けたオルステッドの表情は険しい。普段からそうだと言われればそうなのだが、今は一際険しく見えた。

「…ッ!? アインズ様、アレを!」

ふと戦場に視線を落としたアルベドが焦りの声を上げる。

アインズとオルステッドがアルベドの指す方向を見た。その先では、ジェイル達がグイアと戦闘していた。

「ジェイル達か。敵は1人のようだな」

オルステッドと、隣のアインズとアルベドの反応は対照的だった。冷静なオルステッドと違い、アインズとアルベドは憎悪と怒りの混ざった視線をグイアに向けていた。

「…………アインズ様、この場は私が——」

「——私が行く。アルベド、手を出すなよ」

アルベドの言葉を遮り、アインズは怒気の籠った声を上げる。「すまないが、私は『アノ敵』を相手にする。手出しは無用だ」

アインズの迫力にルーデウスは気圧されるが、オルステッドは静かに「わかった」と頷いた。

「感謝する」

そう言うとアインズは『上位転移―グレーター・テレポーターション―』で甲板に移動すると、魔法を発動する。

『生命の精髓―ライフ・エッセンス―』『魔力の精髓―マナ・エッセンス―』『魔法最強化―マキシマイズマジック―』『魔法抵抗難度強化―ペネトレートマジック―』

バフ魔法を重ね掛けしていき、これから放つ魔法を最大まで高める。

「…真・魔王軍だか上位存在だか知らないが。その「槍」は、お前如きが触れていいモノではない」

低く、唸るように言葉を紡ぐ。視界にとらえた敵を今にも惨殺してやりたい衝動を僅かな理性で抑えてアインズは詠唱する。

『万雷の撃滅―コール・グレーター・サンダー―！』

上空に浮かぶ飛空城艦から放たれた雷撃は真つ直ぐに地上のグイア目掛けて落雷する。

見事雷撃が直撃したことを確認したアインズは飛空城艦から飛び降りた。

「箆手か、殴り合いも出来るようだな。『光輝緑の体―ボディ・オブ・イファルジェントベリル―』

殴打耐性魔法を掛けつつ降下するアインズ。

「すまないが、その武器は私の大切な者の武器だ」

静かに、戦場に、怨敵グイアの目の前に降り立つ

「何故お前が持っているのかは、この際どうでもいい」

怒りを堪えて、言葉を紡ぐ。

「おとなしく、…返してもらおうか！」

そして今に至る。

『何故、返す必要がある？』

グイアの言葉がアインズにあるはずのない脳に響く。

目の前の敵が千束達の世界で交戦した敵と同類であると判断したアインズは一步近づく。

「そのスポイトランスは私の大切な者が所持している武器だ。返還を

要求することは至極当たり前だと思うが？」

冷静に努めて言葉を発するアインズ。

首を傾げるグイア。アインズが言ったことが本当に理解できないのだ。

そんなグイアに対し、アインズが取った行動は。

「では、力づくで返してもらおうか！」

実力行使だった。

『心臓掌握―グラスプ・ハート―』

アインズが眼前のグイアに手を翳し、即死魔法を詠唱する。しかし、結果は不発。

だがこの結果は予想出来ていた。先のスぺピアとの戦闘においても、この魔法は無効だった。これはあくまで情報を得るための行為であつた。

(やはり魔法耐性は同等で間違いないようだ。ならば)

アインズは再び魔法を詠唱する。

『連鎖する龍雷―チェイン・ドラゴン・ライトニング―』

翳した掌から龍のような雷撃が放たれる。

雷撃は対象を焼き尽くさんと巻き付くが、グイアは表情を崩さずその場に佇んでいる。

『動けない、訳ではないな。時期尚早だった、ここは退く』

チェイン・ドラゴン・ライトニングを振りほどき、天高く跳躍していくグイア。その姿はみるみるうちにアインズの視界から消え去つた

「逃がしたか……………」

視線を落としたアインズの隣にアルベドが降り立つ。

「アインズ様……………」

「アルベド、方針は決まった」

振り返ったアインズの声には確かな決意の色が浮かぶ。

「リムル達に全面的に協力し、管理者を名乗る者達を討つ！」

この時、本当の意味でアインズはリムル達の仲間になった。

## ギアード連邦防衛戦⑩

蹂躪を続ける巨人を視界に捉え、リヒトーは斬り抜ける。

だが、巨人の首を狙った斬撃はその強固な皮膚によって弾かれる。態勢を直して再び斬りかかる。今度は肩、しかし弾かれる。次に足、これも弾かれる。

「硬いな……。あの巨体じゃ『閃撃』も使えない、厄介だな……」

一度着地して巨人を観察する。

今のところ巨人はこちらに目もくれない。それ自体は好都合だとリヒトーは感じた。

（おそらく体のどこを狙っても同じだろう。エル達も下手に手を出せないのか）

リヒトーが視線を向けた先にはイカルガとツェンドルグがいた。

巨人から距離を置き、動向を観察している。

だが、真・魔王軍の残存戦力も少ない。敵幹部が倒れたこの現状で統率を保つことは出来るはずもなく、敗走すら出来ずに巨人に虐殺されていく。

リヒトーは真・魔王軍の兵士達に同情はしなかった。彼等は自分達にとって敵、魔王ローズバルトの命令だったとしても、自分達の大切な者達に危害を及ぼす敵なのだから。

（ミリーゼ大佐が言っていたように。真・魔王軍を全滅させたら、次の標的はボク達か）

巨人を躲してイカルガの肩に着地すると、鞘に納めた太刀でイカルガの頭部を小突く。

『リヒトーさん。どうされました？』

「一度ミリーゼ大佐達と合流しよう。真・魔王軍は壊滅状態だ、この隙を逃す手はないからね」

『分かりました』

エルネステイの返事を受けたリヒトーはイカルガの肩を蹴って飛び去る。

残されたイカルガとツェンドルグも巨人を迂回して躲しながら戦

場を後にする。

「無事だったか、ミリーゼ」

合流したアノスがレーナと握手を交わす。

アノス達を先導していた『ブリジンガメン』戦隊も合流すると、シデンが『キユクロプス』から降りてきてレーナに詰め寄った。

「おい、どういうことだ！ 『ヴァナディース』で戦闘するって正気かよ!？」

鬼の剣幕で詰め寄るシデンを両手で制し、レーナは「結果として、大丈夫でした」と答える。

シデンは副長のシヤナに引きずられるように連れて行かれた。

そこに他の戦隊やリヒトー達も合流する。

「随分無茶したもんだ」

「万が一、ってこともあるんだから自重してよね」

ライデンとセオからも諫められ、おまけにシンエイからも「前線に出ないでください」と言われたレーナは完全にしよんぼりとしてしまった。

そこにターニヤ達に護衛された飛空城艦が到着し、ルーデウス達が降りてくる。

「お兄ちゃん!」

ルーデウスの姿を確認したアイシヤは走り出す。突然の再開に驚きを隠せないでいるルーデウスにアイシヤは勢いよく抱き付いた。

「アイシヤ、無事だったんだな…。よかった!」

ルーデウスも抱き返す。2人の瞳には涙が浮かんでいた。

その後、この世界に来た顛末を聞いたルーデウスはリヒトーやレーナ達に礼を告げる。

そして、道安達と共にやって来たアインズを見たフレデリカが「死神じゃ!」と発狂し、シンエイが担いで行ってしまった。

「はじめましての者もいるようなので、挨拶させてもらおう。私はアインズ・ウール・ゴウン、アインズと呼んでくれ」

アノス達を見渡して言う。そこに着地してきたターニャ達も挨拶を済ませる。

「皆さんも、別の世界から来たのですか？」

「その通りだ、ミリーゼ大佐。私やターニャ達は訳あって面識があるが、それぞれ別の世界の出身だ」

「オルステッド達と来たようだが、これまでの経緯は教えてもらえるのだろうか？」

アノスの問いのアイNZは頷くと、今に至る経緯を話し始めた。

事の始まりは、ナザリックに対しての襲撃であった。

アイNZやアルベドの本拠地であるナザリック地下大墳墓を最初に襲撃したのは真・魔王軍幹部のシティックとその部下であった。

この襲撃は不在であったアイNZがすぐに帰還したこともあり、撤退させることができた。

シティックとその部下が次元を超えて姿を消した後、アイNZは自分達に対して敵対行動に出た勢力の掃討の為に自ら出征の決意を示した。

『守護者』や配下達からは反対の声も出たが、統治者としてのデスクワークや面倒事から逃げたいアイNZはお得意の「それっぽいこと」を誇張して演説することで出征できた。

シティックは迎撃された際、焦って次元を超えたため、抜け穴が残ってしまったのだ。

アイNZはアルベドを伴い、世界を渡り、千束達の世界にてリムル達と出会ったのだ。

だが、ナザリックへの襲撃はこれで終わらなかった。

いや、正確に言うならば「真・魔王軍の襲撃は途絶えたが、それ以外の襲撃は終わっていないかった」と言った方がいいだろう。

アイNZ不在の状況で迎えた襲撃、襲撃者の人数は1人、グイアだった。

その時点では正体が不明であったこと。何よりアイNZ自身が不在であったことで明確な対応が遅れたこと、『守護者』の迎撃をものとしなかったこと。これらの要因が重なり、敵の襲撃を許すことと



なってしまうのだ。

最初に迎撃の任に就いた戦闘メイド『プレアデス』を戦闘不能にされたことで、留守中の指揮を任されたデミウルゴスは『守護者』の1人、シャルティア・ブラッドフォールンを迎撃に向かわせた。完全武装したシャルティアをだ。

シャルティアは「最強の守護者」として生を受けた存在。その戦闘力はナザリツクでもトップと言っている。

だが、結果としてシャルティアはグイアに敗れた。

見たこともない武器による攻撃に対応出来ず、戦闘不能となり。武器であるスポイトランスを奪われた。

武器を奪取したグイアは「用が済んだ」と撤退していった。

すぐさまこの事をアインズに知らせたいデミウルゴスであったが、世界を渡ったアインズに知らせる術はない。

『守護者』達は主の無事を祈ることしか出来なかった。

「先程、上位存在が使用していた槍は私の仲間の持ち物だ。アレを所持している以上、あれら上位存在は私の敵だ」

知りうる情報を話し終えて、共に戦う決意表明を示すアインズ。

「共に戦ってくれるということですか？」

レーナの問いに「無論だ」と返したアインズにアノスは握手を求め  
る。

「よろしく頼む」

「こちらこそ」

握り返した白骨の手には、僅かに熱が籠っていた。

「敵の攻勢が止まった…？」

東部戦線に残ったリムル達の目の前で、真・魔王軍の動きに変化が生じた。

先程まで前進し、ギアード連邦軍と戦闘していた前衛集団が突如、後退を開始したのだ。

飛空城艦からその様子を見ていたリムル達は、不可解な敵の行動に

ただ戸惑った。そして、その反応は別の場所でも起こっていた。

「どういうことだい？」

中央司令部でエルンストは前方のスクリーンから目を逸らさず訊ねる。ヴィレムが管制官に訊ねるも、要領を得ない。

皆、エルンスト同様に「何が起こったか分からない」のだ。

いや、分かっていることは1つだけある。

「敵が後退を開始したのは事実、この機を逃す手は無いと思いますが」後に控える中將の進言を聞き入れることにしたエルンストは東部戦線全域に一斉攻勢を命じた。

ロンゴドルとガモツサ、ガイコツという3人の幹部と連絡が取れない現状では撤退するしかない、東部戦線の指揮を執っていたブギョルは考えた。

「俺、戦闘、やめる。撤退、する」

ブギョルの号令に続いて撤退を開始する真・魔王軍。

しかし、ギアーデ連邦軍の猛追撃によつて多くの戦力を失うことになった。

「ガイコツ、ロンゴドル、ガモツサ。俺、心配……」

撤退しつつブギョルは自分達の次元船に向かった。一時撤退し、態勢を立て直すためだ。

「よろしいのですか、ブギョル様？」

隣に控えていた副官に訊ねられたブギョルは足を止めて振り返る。

「ロンゴドル様達はまだ生きておられると思います。救援に向かうべきでは？」

その提案をブギョルは首を横に振って却下すると、再び歩き出した。

「…管理者、俺達、勝てない」

小さく漏れた呟きは、戦場の爆音に掻き消され、誰も聞くことはなかった。

場所は変わって西部戦線。

レーナは指揮下の各戦隊に補給を指示した。ファイドを中心に順調に補給が終わっていく。

「ミリーゼ、ノウゼン達の補給はいつ終わる？」

アノスは地平線の彼方の巨人から目を離さずに訊ねる。

レーナは近くにいたシデンに訊ねる。「あと20分少々」と返って来た返事をそのままアノスに伝える。

「あの巨人、ククミラやエマの遠距離からの砲撃でも崩せまい」

「アノス陛下の魔法では、どうでしょうか？」

訊ねられたアノスは思案する。有効打になりうる魔法はあるが、それを使用することは躊躇われた。

「あるが。使用すれば、この世界が保たぬだろうな」

そう言うときアノスは宙に浮き、右掌を天に翳す。魔法陣が展開され、漆黒の太陽が顕現する。

「まずは小手調べだ」

振りかぶった右手を投擲の動作で振り下ろす。

撃ち出されたジオ・グレイズは一直線に巨人に迫る。真・魔王軍の蹂躞を終了した巨人が振り返る。その視線の先には肉薄する漆黒の太陽。

そして直撃した、顔面にである。獄炎が炸裂し、巨人の頭部を包む。

『驚いたぜ。いきなり仕掛けてくるなんてな』

声が響く。

巨人は手で炎を払い、アノス達を見据える。

明らかな敵対の意思の気配を纏い、真っ直ぐに身体を向ける。その肩にはグイアの姿も確認できる。

『なぜ世界の均衡を乱す？』

再び声が響く。今度は質問だ。

「自己防衛をしているだけだが？」

そう答えたアノスを指さした巨人から声が響く。

『流れに任せていればいいじゃねえか。面倒事を増やしやがって、死にてえのか？』

「生憎、死ぬ気はさらさら無いな」

余裕の笑みを崩さず答えるアノスに巨人は苛立ちを覚えたのか、  
『めんどくせえ!』と雄叫びを上げる。

『イライラするな、お前。何つつたか?』

「管理者を名乗る割には、知らぬ事が多いようだな」

『可能性世界の一つずつなんぞ、一々覚えてられつかよ。…まあ、どうでもいいか』

そう言うと巨人は両腕を背に振りかぶり腰を落とす。

「暴虐の魔王、アノス・ヴォルデイゴードだ。覚えておいて損は無いと思うぞ」

『だから、どうでもいいつつただろおが!』

跳躍した巨人は空中で右拳を振りかぶり、降下しながらアノスに襲い掛かる。

それを目を逸らさず真正面から迎え撃つアノスであった。

## ギアード連邦防衛戦⑪

巨人がみるみる内に迫るのを認識したレーナの行動は早かった。

「各位、衝撃に備えてください！」

周囲の独立機動打撃群に指示を飛ばす。『アンダーテイカー』と『キュクロプス』が盾になるように立ち塞がり、耐衝撃姿勢をとる。

その次の瞬間だった。

ジャイアントガモツサが着地した時の比ではない衝撃と轟音が一帯を包む。

砂埃を伴って巨大な衝撃が襲うが、シンエイ達が盾になった事と、ジェイルが鉄で壁を作り出して防御したことで被害は無かった。

アノス目掛けて繰り出された拳は、標的を仕留めることは出来なかった。それどころか掠りもしなかった。

ガトムで巨人の頭上に転移したアノスはジラウドを巨人の脳天に叩き込んだ。

黒き雷撃を受けた巨人は尚も余裕を見せている。そんな様子を見下ろしながら若干うんざりし始めていたアノスの横にアインズが姿を現す。

『上位転移―グレーター・テレポーション―』にてワープしてきたのだ。

「手伝おう」

短くそう言うと、アインズは第9位階魔法『万雷の撃滅―コール・グレーター・サンダー―』を詠唱する。

重なり合った雷撃が束となって巨人に落雷する。

だが、それでも巨人は平然としている。

「ならば、質量攻撃を試してみるか…」

アインズは再び魔法を詠唱する。

放つ魔法は『隕石落下―メテオフォール―』。巨大な隕石を召喚し、対象にぶつける第10位階魔法である。

それに並んでアノスも魔法陣を展開する。魔法は無数の魔石を降らせる『魔岩墜星弾―ギア・グレアス―』。奇しくも、似た系統の魔法

を同時に放つこととなった。

そんな2人の攻撃に合わせるように来援したターニヤ達203航空魔導大隊の面々が巨人の足元に自動小銃に照準を合わせる。

「各員、爆裂術式展開！」

ターニヤの左右に並ぶヴァイス達も照準を巨人の足元に定める。

「主の導きよ、神の御業を発現し、我らに敵を打ち砕く力を与えたまえ」

「神への祈り」。ターニヤにとってはこれ以上ない屈辱だが、生き残る為、目の前の敵を倒す為には止むをえなかった。

祈りの言葉に連鎖するように胸元の演算宝珠が虹色の輝きを放つ。

「総員、てえー！」

アノス達の魔法に合わせて放たれた爆裂術式が巨人の足元に降り注ぎ、間下の地面を抉った。

いくつものクレーターによって生じた歪みは瞬く間に伝播すると、巨人の重量も合わさったことで崩れた。巨人は崩れた地面に足をとられ、僅かに態勢を崩す。

その頭上に降り注ぐ流星。

無数の魔石のシャワーに続く形で圧倒的質量が迫る。巨人は態勢を崩したことでそれに対応出来ず、直撃を受ける。

巨人が地面に倒れた衝撃と轟音が周囲を包み、遅れて土煙が舞う。

「助かったよ、ターニヤ」

巨人から視線を移してアインズが謝辞を述べる。ターニヤは自動小銃を肩に担ぐと「気にするな」と返す。

「まだ終わりではないようだぞ」

アノスの言葉に2人は身構える。その視線の先には膝を突きつつも立ち上がる巨人の姿があった。

「しぶといな。図体は伊達ではないか」

アインズが再び魔法を発動せんと構えた次の瞬間だった。巨人の右腕を何かが翳めた。遅れて何かの発射音が響く。

巨人の右腕は僅かに抉れており、巨人自身も何が起こったのか理解できないでいる。

アノス達は「何か」が飛来した方角に視線を向ける。

地上のルーデウス達も同様だった。例外としては、シンエイ達であった。

シンエイ達『スピアヘッド』戦隊の面々とフレデリカは皆同様に戦慄に表情で発射地点を見ていた。

「ッ、シンー！」

ライデンがシンエイを振り返る。その表情は焦りを伴っていた。

「戦隊各位、警戒態勢に移行しろ！」

頷いたシンエイが再び『アンダーテイカー』に乗り込み、機体を起動させる。

そのままレーナとフレデリカ、ルーデウス達の盾になるようにレギンレイヴ群が展開する。

「何が起こったんですか!？」

ルーデウスの質問に答えたのはフレデリカだ。

「…敵が、この世界の「怪物」を手に入れてしまったのじや」

幼さを消した声音で答える。敵とはこの際、巨人を攻撃したことから真・魔王軍であろうとルーデウスは判断した。

ならば「怪物」とは何なのか？

その疑問は直後に判明した。

『殺してやる。殺してやるぞ!』

声が。憎悪を纏った雄叫びが響き渡る。そして姿を現す。巨大な影。

白銀に輝くその巨体はカブトガニにも見える。無数の鋭い脚を動かす。その巨体を誇示するかのように佇む。

上部には角を思わせる二対の砲身。先程巨人を狙撃した兵装である。

電磁加速砲へレルガン

この兵装の威力をシンエイやレーナ達はよく知っている。嫌という程に。

「…………フレデリカ」

シンエイが同調で呼びかける。それは確認のためでもあったが、同時にシンエイとフレデリカが納得するための問答でもあった。

『ギリではない、おそらく敵の誰かじやろう…』

返って来た答えはシンエイも予想していたものだった。

だが、腑に落ちないこともある。

『…あれは、真・魔王軍の兵士なのですか!?!』

レーナからの問いにシンエイは「間違いないと思います」と答えた。そこにターニヤが部下を率いて降り立つ。

「あの新手に関してご存じなのですか？」

ターニヤがレーナに訊ねると、レーナは一瞬口籠る。だが、ターニヤの瞳を真っ直ぐ見据えて口を開いた。

「私達の、この世界の兵器です。名称はレギオン電磁加速砲型、通称モルフオ。あの上部の角のような兵装はレールガンです、先程の攻撃もそれによるものでしょう」

「レールガン…。接近戦での撃破は可能ですか？」

「近接迎撃兵装も豊富です。かなりの被害を覚悟しなければなりません」

そう言われ、ターニヤは思案する。

空中から接近を試みても迎撃を受ければ被害は出るだろう。

それならば――

「あのモルフオと巨人が潰し合うのを待った方が得策か……」

独り言のように零れた言葉だったが、レーナ自身もターニヤと同意見だった。

「ならば、高見の見物でいいのか？」

テレポーターションしてきたアインズにターニヤは首肯する。

「アインズ様…」

歩み寄ったアルベドが声をかける。振り向いたアインズが見たのは、悔しさに表情を歪めたアルベドの美貌だった。

「シャルティアのランスの奪還は、もう少し先になりそうだな」

ターニヤが並び立って声をかける。

その視線の先ではレギオン電磁加速砲型に巨人が襲い掛かってい



た。

——憎い。

——部下も、ガモツサもやられてしまった。

——管理者つつたな、話には聞いていたが無茶苦茶な存在だぜ

——だが、このレギオンつつうのはいいモノだ。これなら

——全員、殺せるぜ

時は少し遡る。

巨人によつて戦闘不能にされたオルデイエンス・イータから這い出たロンゴドル。横たわるジャイアントガモツサに視線を向けた後、自身の下半身を見る。

無論、下半身など無い。巨人にオルデイエンス・イータが上下に引き千切られた時、ロンゴドルの身体も上下に分かれたのだ。

「あ、ああ…」

声にならない悲鳴を上げたところで、失った下半身は戻らない。

「おい、ガモツサ…。どうしたよ。返事、しろ…。よ…」

問いかけても、横たわる仲間は答えない。

ピクリとも動かず、そこにいるだけだ。

視線を巨人に移したロンゴドルは絶句する。自分達を倒した巨人は、戦意を喪失して敗走する部下達を蹂躪していたのだ。

「なんでだよ…。どうしてッ…」

こんなつもりではなかった。この世界を征服して、真・魔王軍内での立場を絶対のものとしようとした。

その目的はガモツサと同じであつたし、それ故にロンゴドル自身

の切り札であるオルディエンス・イータを持ち込んだのだ。

だが結果は、散々なものであった。

シンエイの駆る『アンダーテイカー』に敗北し、乱入してきた巨人には歯牙にも掛けられず戦闘不能にされた。

そして仲間を、部下を、目の前で失っている。

その時浮かんだ感情は「絶望」であった、最初は。その感情が「憎悪」に変わるのに、時間はかからなかった。

憎悪の感情はロンゴドルを支配する。腕で這いながら巨人に近づく。当の巨人はロンゴドルに気付いていない。

それはロンゴドルにとって屈辱であったが、同時に好機でもあった。

『リオ・プレア・オルデ』

ロンゴドルの身体が解け始める。自身の身体が朽ちていく様を感じながら、同時に意識に映像のように流れ込む記憶に馳せる。

——殺してやる！

ああ、お前もか？

——たとえ差し違えることになっても、全て殺し尽くす！

誰が憎いんだ？

ああ、そうか。

全てか：

そこでロンゴドルの意識は覚醒する。ふと思い出す、先程まで見ていた記憶。それは間違いなく、この世界に存在していた者の記憶だっただろう。ロンゴドルが発動した魔法は、自信の肉体を放棄して、その時点における発動者の感情に最も近い存在の姿を得るものだ。

ロンゴドルを支配した憎悪の感情に最も近い存在の体を得た今の姿が、生まれ変わったロンゴドルの姿なのだ。

その姿はシンエイ達にとって因縁浅からぬものであったが、ロンゴドルがそのことを知る由はない。

現在のロンゴドルは、再びこみ上げる感情を抑えることが出来ずに、巨人を視界に収める。

浮かぶ感情はただ一つ——

「殺してやる。殺してやるぞー」

——憎悪と、そこから来る殺意であった。

## ギアード連邦防衛戦⑫

〈ノウ・フェイスより広域ネットワーク。突如出現した個体の詳細を報告せよ〉

↑ ↓  
〈ノウ・フェイスより広域ネットワーク。報告せよ〉

↑ ↓  
レギオン間に通信が飛び交う。無論、この事をシンエイ達は知る由もない。

突如出現した個体。モルフオの存在はレギオン間に緊張を走らせた。まず疑問、なぜ？ どこから？ なののために？ 無人戦闘兵器達は何ひとつ答えを出せないでいる。

その答えが導き出される前に、戦端は開かれる。

『殺してやるぞおー！』

ロンゴドルが雄叫びを上げて巨体を駆動させる。

いまやこの巨体はロンゴドルそのものである。だが生身ではないため挙動に遅れが生じないか懸念したが、そんな懸念は何処へやら、一切の遅延なく自身の意思通りに動く巨体でもって、巨人への砲撃を仕掛けた。

本体上部に搭載されたレールガンの砲身から青白く放たれるアーケ放電、次いで放たれた一撃が、今度は巨人の左足に命中する。

音速で放たれた砲弾は一切の弧を描くことなく、一直線に巨人に迫り、その凶太い脚を抉り取った。

完全に態勢を崩された巨人は左手を突いて何とか転倒を回避する。驚愕の表情から一転、モルフオを睨みつける。だが視線の先のモルフオの表情は分からない。

(仕舞だ！)

ロンゴドルは次弾発射の準備に入る。

再びモルフオの砲身が放電する。青白い光が周囲を照らし、まるでカウントダウンが如く、光が強くなる。

「連射?」

かつて戦ったモルフオでは出来なかった芸当を目の当たりにしたシンエイが驚愕の声を漏らす。

シンエイは再び放たれるレールガンの着弾による衝撃からレーナ達を庇うように割って入る。シデンやリト達も同じく、生身の者達の盾になるように前面に展開する。

耐衝撃姿勢をとり、脚部のパイルドライバーを地面に打ち込み、機体を固定する。

「皆さん、衝撃に備えてください!」

レーナが皆を見渡す。ターニャ達は盾となるレギンレイヴにしがみつき、衝撃に備えている。

そして放たれた、次弾。

次、直撃を食らえば巨人とてひとたまりもないだろうことは分かっている。シンエイ達としては強大な敵同士が潰し合ってくれたことは好都合だった。

だが、皆は忘れていた。この戦場には、巨人と共に乱入した者がいたことに。

グイアが巨人の肩から飛び降りる。

落下しながらもグイアの視線は迫る砲弾を捉えていた。左腕に盾を出現させると、真っ直ぐ迫る砲弾へと向ける。

目前まで迫った砲弾が何かに阻まれる。

透明の空気の盾のようなナニかが砲弾を防いでいるのだ。だが、勢いを完全に殺すことは出来ず、突破される。

しかし、砲弾は再び防がれる。先程と同様にである。

今度はかなり勢いを殺すことが出来た。グイアは巨大な剣を出現させ、勢いよく振りかぶり、まるで野球のバッターが如く打ち返した。そんな神技に一同が驚愕の声を漏らしているこよに気付かず、グイアは着地すると、一振りの武器を出現させる。

先端に短い釜のような刀身を持つ武器。殴打も切断も可能に思えるその武器を刀身を背後に、柄を前方に向けて腰だめに構える。

柄を前方のモルフオに向けると、弾道線のように青白い砲塔が出現する。

『超過駆動』

一言グイアが放った次の瞬間。

砲塔から黒紫の手を思わせる無数の何かが重なり、まるで空間を“掻きむしる”ように撃ち出された。

一直線にモルフオに迫るそれは、迎撃のために発射されたレールガンの砲弾をも飲み込み、モルフオの二対の砲塔の片方を抉り取った。

砲塔を破壊されたモルフオは有効な攻撃方法を失い、戦闘続行が困難となった。

武器を収納したグイアは巨人の肩に飛び乗り、巨人の頬を軽く小突く。それに領いた巨人は両手を地面に突くと、肘を曲げる、さながら腕立て伏せのような態勢をとった次の瞬間、勢いよく跳躍し、そのまま姿が見えなくなった。

「行ったか」

アインズが視線を巨人が飛び去った方向から戻す。他の者も同じ行動を取っていた。

「よかったのか、アインズ？」

ターニヤの言葉に「構わないさ、今はな」と答える。勿論、グイアに奪われたスポイトランスのことである。

「巨人が撤退したということは……」

レーナが視線を向けた先、モルフオは静かに佇んでいる。

レールガンを破壊されたことで、こちらに対しての攻撃の意思も失くしたのだろう。

「仕掛けてくる気は無いようだな」

アノスの言葉が届いたのか定かではなかったが、モルフオは踵を返す。

直後、アノス達の頭上を3隻の次元船が通過する。

戦場に倒れる真・魔王軍兵士を回収しつつモルフオの頭上に滞空すると、2隻から放たれた鎖のような魔法によってモルフオが拘束され、吊り下げられる形で運ばれていく。

この世界での戦いは、終わった。

『可能性世界間の物体の移動は想定外なのだ』

純白の玉座に腰を沈めたままピグユティアが言葉を発する。

ここは『議会』。可能性世界を管理する彼等『管理者』が方針を決議するための場所である。

各々の視線の先には無数の球体が浮かぶ。その中心、一際大きな透明の球体に映るのは、モルフオ。巨人の視界を録画のように再生しているのだ。

『あれは我等の傀儡であつたはず。世界を乱す行動を許すのか?』

同じく球体に映るモルフオを凝視していたスペビアが訊ねる。その問いにピグユティアは数秒思案を巡らせる。

『アイラさんの肉体を欠損させる程の代物ですよ、どうするかは決まっているようなものでしょう?』

スペビアでもピグユティアでもない声が響く。2人は声の主を向く。視線の先、彼等と同様に純白の玉座に膝を抱えて座っている茶髪の青年は顔を上げてスペビア達を見渡す。

『過ぎたものです。ローズバルト達は可能性のリソースに過ぎないんですから、貰っちゃいましょうよ?』

言い終えた直後、閃いたとばかりに人差し指を上げて再び言葉を発する。

『それが難しければ、壊しちゃえばいいんですよ。所詮“燃料”なんですから』

『お前はあのモルフオが欲しいだけではないのか?』

スペビアの問いに青年は頷く。

『そりゃ、可能なら欲しいですよ。でもアイラさんの肉体を突破するんですよ? グイアさんでもない限り出来ませんよ、あんな芸当』

そう言って指し示した先、球体にはグイアがレールガンの砲弾を防ぎ反撃する様子が映っていた。

グイアは生身ではスペビアやピグユティアより弱い。だが“武器

があれば” スペビアやピギユティアを超えることも可能だ。

各世界から入手した武器の強さを最大限発揮することが出来るグイアは、一言で言うなら「器用」なのだ。だが、それ故に武器の種類、形状などを考慮せず扱うことが出来る。

それは青年が言った通り、スペビア達が出来ない芸当であった。

『捕獲が困難なら破壊、これでいいんじゃないですか？』

青年の言葉にスペビア達も頷いたことで、モルフォとなったロンゴドルに対する管理者達の意味は固まった。

『そういえば、僕達に加わりたいつて言つてた者がいましたね。どうするんですか？』

『あれの”反発”の力は強力だ。だが管理者となる条件を満たしていない』

『あれの身内の首でも持つて来れば、考えてもいいと思うのだ』

『ほんとに持つてくるかもしれないね。なんせ、あれは——』

そこに、大小の人影が差す。巨人アイラとグイアの2人だ。

2人はそれぞれの玉座に歩いていき。スペビア達と向かい合う形で座る。

『災難でしたねアイラさん、脚の具合はどうですか？』

身を乗り出して声を掛けてくる青年を巨人——アイラは睨みながら口を開く。

『うるせえぞアヴァーティア。もう治った。見てわからねえかよ』

『心配してるのに……』

口を尖らせて拗ねるアヴァーティアから視線をスペビア達に向けたアイラ。他の管理者がいらないことを訊ねると、ピギユティアから『用事があつて外している。じきに帰つて来ると思うのだ』と返された。

『で、世界を乱す連中が徒党を組んでいることについてはどうする。

”選別”するか？』

アイラからの提案に各人は頷かない。ただ一人、アヴァーティアを除いて。

『お前達の好戦的な性格は改めるべきだと思うのだ』



ため息交じりに漏らした。ピギユティアを2人は睨む。

『世界を乱してる！ 本来世界同士は交わってはいけないはずだ。それだけで理由になるだろうが！』

アイラがピギユティアを指さして声を荒げる。アヴァーティアも同意見なのか『そうですよ！』と同調している。

だが、それでもピギユティアは頷かない。その様子に溜め息を吐くと、アイラは議会后にする。

『どこに行く気なのだ？』

背に声を受けたアイラの歩みが止まる。

『暴虐の魔王に借りを返してくるのさ』

振り返らずに答えると、そのまま議会后にした。

## 敗走

未踏大陸。

真・魔王城。魔王の間。

ローズバルトは玉座に深く腰を下ろし、眼前に跪く者達を見下ろしていた。

「カシユロント、シティック、エンリクス、ブギョル。油断したようだな」

肘を突き、ため息交じりに零すと、ローズバルトは残りの魔王軍幹部を見渡す。

いや、ロマールとミニツサは背後に控えているため、残りではなく“出征から帰還した幹部達”と言うのが正しいだろう。

「目的を果たすことも出来ず、おめおめと帰還することになりましたのは、我等の実力不足によるもの。このうえは、名誉回復の機会を賜りたく存じ——」

「——もとより、期待などしておらん。下がれ」

ローズバルトに発言を遮られたグワツツエが勢いよく顔を上げる。その視線の先、ローズバルトの顔に浮かぶのは“諦め”であった。

「……………は？」

その一言だけが、声となって響いた。静寂が魔王の間を包む。

一秒、また一秒と静寂が流れる。

「聞こえなかったのか。下がれと言ったのだ」

再び発せられた言葉にグワツツエが勢いよく立ち上がる。その瞳は真っ直ぐローズバルトを睨みつける。

「なんですかグワツツエ。無礼でしょう？」

ミニツサが一步前に出てグワツツエを見下ろす。だがグワツツエはミニツサを意に介さず、ローズバルトを睨み続ける。

「何か、言いたいことがあるようだな。グワツツエ」

ローズバルトが玉座から立ち上がり、グワツツエ達がいる下段に降りてゆく。

一歩ずつ、踏みしめるようにゆっくりと降りてゆくローズバルトに

グワツツエは恐怖心を抱いていた。

グワツツエ達にとつてローズバルトは絶対的な存在。管理者をもつてしても尚、揺らぐことはない。

だが、それでも退くことはできない。仲間を捉えられ、魔王ローズバルトはそれを気にも留めない。これには怒りも沸くというものだ。

そして、ローズバルトとグワツツエはお互いに息の届く距離で視線を交わす。ローズバルトが目を細め、鋭い視線でグワツツエを見下ろしている。

数秒の沈黙の後、ローズバルトは息を吐き、踵を返して玉座に座り直した。

「奪還したいのならば、自分達で勝手にすればいい」

その言葉を聞いたグワツツエは緊張が解けたことで一度尻餅をついたが、すぐ立ち上がり、魔王の間を後にした。

それに他の幹部達も続く。唯一、ヴォイドのみが残った。

「行かぬのか、ヴォイド?」

「少し話が、お聞きしたいことがありますね」

ローズバルトの問いに笑顔で返すと、ヴォイドは玉座まで階段を上がる。

「ロマール、ミニッサ。お前達も下がれ」

玉座に座したまま、背後の2人に命じて下がらせると、ローズバルトは立ち上がる。

「何が聞きたい?」

「この世界の行く末について、詳しく」

ローズバルトは玉座に手を突き、語りだした。

「知つての通り、この世界は多くの可能性世界を存続させるためのリソースでしかない。ロンゴドルやロマール、ミニッサ達の故郷もそのために消滅していった」

「知っていますよ。それを助けたのはあなたでしよう?」

「そうだ。その後は大陸を転々とし、この未踏大陸に辿り着いた。ウロナ大陸に本拠地を築いていた頃から、未踏大陸には目を付けていた」

「未踏大陸の統治と、真・魔王城の建設を担ったのがロマールとミニツサですね？」

「2人は優秀だ。常に期待に応えてきた、これからもそうであろう」「これから先、どうなりますか？」

「適応者の世界のいずれかに拠点を移す。その為に、適応者達の戦力を削っておく」

「管理者は動かないのでしょうか？」

「管理者か……。意味がないことだ、そんなことは。あの者達は我等を可能性世界存続の“餌”としか考えておらぬ」

「では、管理者と戦う気はあるのですか？」

「何度も言わせるな。意味がないことだ、管理者に干渉すること自体がな。第一、アレ等は——」

そこまで言ったところで、ローズバルトの言葉が途切れる。

そして視線を落とす。落とした視線の先には、自身の腹部から籠手と、それを装着した手が生えていたのだ。

籠手には鮮血が滴り、玉座の周囲を赤く染める。

「やはり、あなたは小者ですよ」

声と同時に籠手が引き抜かれる。

ローズバルトは苦痛に顔を歪めて膝を突く。そして、声の主であり籠手の持ち主。先刻、自身の腹を貫いた張本人を睨む。

「苦しいですよね？ 貫通と同時に籠手の周囲360°を反発させました。あなたの内臓はグチャグチャですよ」

声の主——ヴォイドはケタケタと笑いながら見下ろす。

「貴様ツ！」

ローズバルトが拳を振るう、だが、拳は虚しく空を切るのみである。「あなたの首を持参すれば、私は管理者になれる。おとなしく、死んでください」

「愚かなことだな……」

ローズバルトは遂に力尽き、玉座に背を預けるように力尽きた。

「どの口が言うのですか、父上」

力無く玉座に座すローズバルトの頭を掴むと、ヴォイドは一度瞳を

閉じて、その首を引き千切った。

リムル達は可能性の奔流を進む。シンエイ達の世界での戦いの後、食料などの補給を受けて出航した。

艦橋にはリムル、シオン、ハルト、クリス、アインズ、ターニヤがいる。他の者は各人待機中である。

「武器を使う上位存在。シャルティアのスポイトランス以外の武器も使用していたな」

艦橋の外を眺めながらターニヤがアインズに声を掛ける。

「私達と同じく、自身の世界に干渉された者達が、まだいるという事だろうか」

「カズマ達の世界ではなさそうだったが」

「何故そう思うのだ、ターニヤ？」

訊ねられたターニヤはしばし考えると、隣の友を見上げる。

「カズマ達……。特にめぐみんが使用していた爆裂魔法と、あの武器から放たれた砲撃は技術体系が異なるように思えたのでな」

そう言われるとそうだとアインズは考える。だが、ターニヤの仮設が正解ならば、厄介なことがある。

「我々の知らない超兵器が出て来てもおかしくない、か……」

「今回は仲間も多い、頼らせてもらうとしようじゃないか？」

そう言うとターニヤは背を向け、艦橋を後にする。入れ違うように艦橋に上がってきたアルベドがアインズに歩み寄る。

「アインズ様。一度、ナザリックに戻られては？」

「そうだな。状況の確認は必要だからな」

アインズはリムルの元に行くと、自分達の世界への一時的な帰還を願った。

リムルは快諾し、アノス達と別れて行動することにした。

アインズ達の世界、ターニヤ達の世界、レンヤ達の世界と順番に巡り、各々の世界の現状確認と増援を伴って、再び合流した。

本拠地であるナザリックに一時帰還したアインズは犠牲者が出て

いないことに安堵すると、スポイトランス奪還を強く決意した。  
ナザリックからの追加増援はなく、引き続きアインズとアルベドが参加することとなる。

続いてのターニャ達の世界においては、意外な結果となった。  
自分達が軍人である以上、ターニャ達は上官に指示を仰ぐこととなる。シンエイ達の世界ではないが、軍人の作戦外での運用を断られるとリムルは考えていた。

だが話し合いはトントン拍子に進み、引き続きターニャ達が参加することとなった。

レンヤに関しては、一時間で終わった。

冒険者の仲間達に報告をした後、エミルと名乗る女性を伴って乗艦してきた。

リムルが「もういいのか？」と聞くと、「まあ、問題無いだろう」と短く返してきた。

そして現在。

可能性の奔流を3隻の飛空城艦が進む。

目的地は、異世界。魔王ローズバルトが本拠地に行っている世界だ。  
「同時に乗り込むか？」

リムルの問いにアノスとオルステッドが同意する。

この通信手段は、アノス達の世界の念話魔法を智慧之王が解析し、再構築したものだ。それによって飛空城艦3隻がリアルタイムで連携することが出来るようになった。

まだ目視では小さいが、すでに異世界へ向けての進路上にいる一行。このまま加速し、世界の壁を越えて異世界の未踏大陸、真・魔王城に乗り込む算段だ。

「ハルト、あれ…」

周辺警戒をしていたトーカーがハルトを呼ぶ。駆け寄ったハルトは双眼鏡を受け取り、指し示された方向に視線をやる。

「あれはッ、なんだ…?」

ハルトの視線の先をリムル達も見る。リムルの脳内に智慧之王の声が響く。

《告。目的地の陰に謎の空間があります》

『リムル、見えているか?』

隣を進む飛空城艦よりアノスの声が届く。リムルは「ああ、でかいな」と返す。

目的地である異世界、球体状の世界の奥に、もう一つ、一回り大きな球体が姿を現す。それは、透き通る銀の輝きを放ち。液体金属のように表面が波打っている。

「何かいるな?」

リムルは何かを感じていた。

それは、異世界の奥の球体ではない。もっと別の何かであり、その答えはすぐに分かることとなった。

「悪寒のような感覚が走る。」

肌の表面を指先でなぞられたような、ゾクリとする感覚だ。それが攻撃であったことを、一行は直後知ることとなる。

「ミーシャ。どういうことか分かるか?」

自身の乗艦する飛空城艦の玉座に座したまま、アノスは艦橋の外に視線をやっていたミーシャに訊ねる。

その意図は、現在飛空城艦にて起こっている現象によるところだ。

「分からない、こんなことは初めて」

ミーシャが天井を、壁を、床を見る。

飛空城艦が、溶けているのだ。氷が温風を受けて融けるように、形が曲線を帯び、消失しているのだ。

「…我が君」

アノスの傍らでシンが声をかける。

「どうした?」

「外に通じる扉が融解したように変形しておりました。切断して脱出口を確保しましたが…」

そこでシンが言い淀む。アノスが「構わん、何があったのだ?」と問うと、シンは再び口を開く。

「外に出ようとしたところ、何者かによる攻撃で“反発”されました」  
「リムルが言っていた敵で間違いないだろう。ミーシャ、飛空城艦を作り直せるか？」

問われたミーシャは首を横に振る。

「さつきから試してるけど、出来ない。何かに邪魔される」

「先程の悪寒はそれか…？」

止めどなく融解を始める飛空城艦。脱出は不可能、ならば――

――前進あるのみ。

「このまま進む。飛空城艦が崩壊する前に異世界に辿り着けばよい」

アノスの号令を受け、ミサが飛空城艦を加速させると、それに続くように他の2隻も続く。

「スピアヘッド戦隊各位、レギンレイヴに搭乗しておいてください。エルネスティさん達にも、自身の機体へ搭乗するよう伝えてください」

レーナが格納庫にて待機するシンエイ達に知覚同調にて指示を出す。

「ミリーゼ。異世界に突入後、ノウゼン達に偵察を任せたいが、問題は無いかな？」

レーナは玉座に座するアノスに振り返ると、「問題ありません」と返した。

「このまま進むと、敵に激突することになるけど大丈夫なのかい？」

レイが艦前方から視線をアノスに向けて訊ねる。

「問題あるまい。この質量だ、激突はするだろうが、そのまま突入する」

思った通りの回答だったのだろう。レイは笑顔で頷くと、操艦席にいるミサに歩み寄る。

「ミサ、大丈夫かい？」

「大丈夫です、レイさん。このまま突入しますよー！」

ミサがさらに飛空城艦を加速させた。

直後であった。



巨大な衝撃波が艦を揺らしたのだ。

続いてもう一発、さらにもう一発と畳み掛けるように衝撃が襲う。無論、艦内にも衝撃は届く。周囲が軋み、誘拐と同時に崩壊していく。アノスでさえ、玉座の肘置きを掴んで堪えている。

ミサが操艦席から転がり落ちると、レイがそれを受け止める。フレデリカはマルセルに掴まっており、レーナは軍帽を抑えながら立ち上がる。

「この衝撃は、リムルさんの話にあった…管理者ツ!?」

レーナが艦橋から外を見る。そこには衝撃波の直撃を受けて完全崩壊を始めた飛空城艦——ルーデウス達の乗艦があった。

既に底部ハッチは原形を留めておらず、溶けて消えていく。そこに追い打ちをかけるように、衝撃が3連続で襲い掛かった。

そして、2撃目を受けた直後、アノス達の乗艦も航行不能に陥った。「詰み、ですか…」

ガクリと項垂れるレーナの背後のアノスからも、笑みが消えていた。

『あつけないのだ』

異世界を背に、ピギユティアは崩れゆく3隻の飛空城艦を見下ろしていた。

最大出力の衝撃波を数発放つこととなったのは想定外であったが、隣の同士の能力によって満足のいく結果となった。

『チツ、出番無しかよ。つまらねえ!』

『アイラ、落ち着くのだ。もし次の機会があれば譲るのだ』

ピギユティアの言葉にアイラは渋々ながらも頷く。

『あつけない』

隣の同士は沈みゆく飛空城艦を指さしてゲラゲラと笑う。

『下品なのだ。ルグジュイア』

ルグジュイアと呼ばれた女性は、いわゆる女海賊を思わせる出で立ちをしている。

『まあ、ワタシの前では、魔法は消滅するだけだから、この結果も必然かな』

ルグジュイアは任意の魔法を崩壊させることが出来る。それは魔法で創造されたものにも及ぶ。

彼女は魔法で創造された飛空城艦に対して、有効打となる存在である。

そしてもう一人。

『初仕事の感想はあるのだ。ヴォイド？』

訊ねられたヴォイドは口元を歪めて笑い出す。

「気分がいい。自分自身の力の底が見えない、最高の気分ですよ！」

僧を思わせる純白の衣装に身を包んだヴォイドの下卑た笑い声が、奔流に遠く木霊した。

「本艦上空より所属不明の艦船が進入。左舷二番艦 村山 付近に不時着予定です」

黒髪の女性が、降下してくる3隻の飛空城艦を見上げて艦内放送で呼びかける。

「全自動人形、警戒態勢に移行しなさい。 以上」